

福井県埋蔵文化財調査報告 第120集

舟寄福島通遺跡

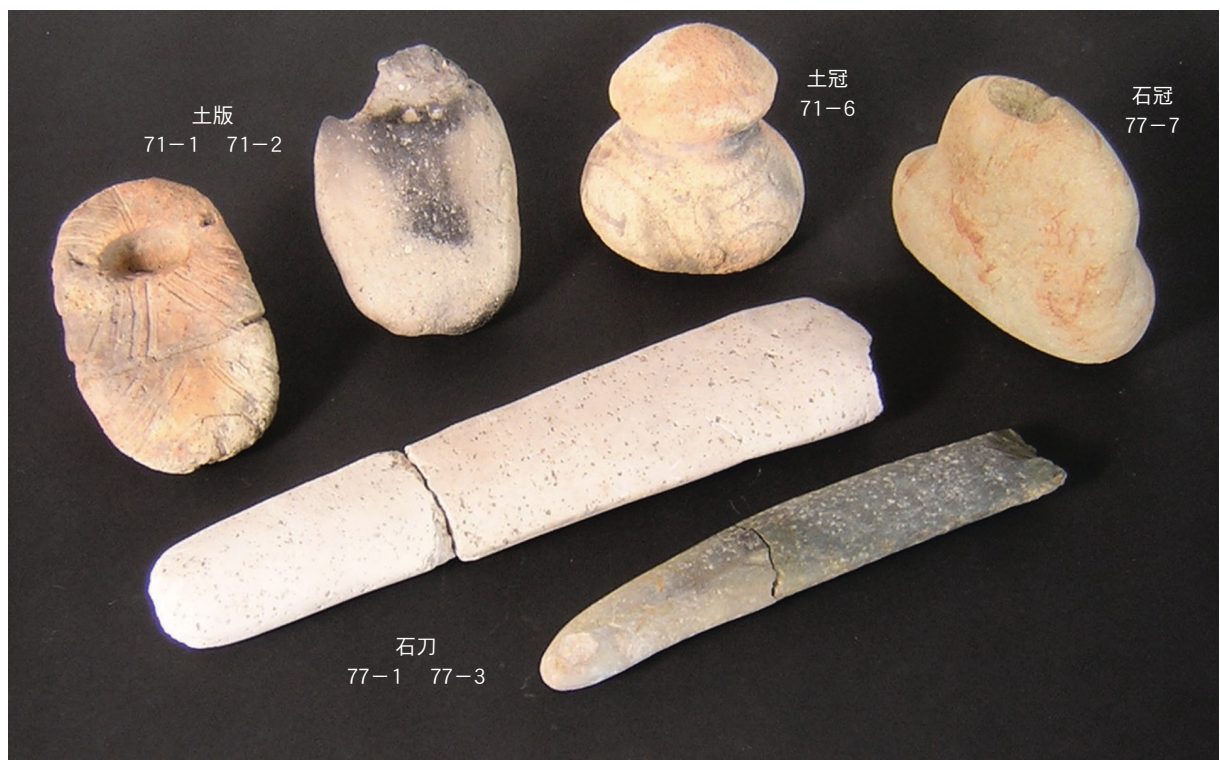
— 国営九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査 —

2011

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



(1) 遺跡周辺の現況（北西から）



(2) 縄文時代の特殊遺物

序 文

本書は、農林水産省北陸農政局の九頭竜川下流農業水利事業に伴い、平成17・18年度の2ヵ年にわたって実施した、福井県坂井市丸岡町に所在する舟寄福島通遺跡の発掘調査の成果を取りまとめたものです。

昨年度に報告した高柳・下安田遺跡に引き続き、全国でも有数の穀倉地帯をささえる基幹水路である十郷用水のパイプライン化を原因とする発掘調査です。舟寄福島通遺跡は古墳時代とともに、福井平野に水稻耕作が定着したと考えられる前後の縄文時代から弥生時代の遺構と遺物も確認されています。また、その当時の植生などの自然科学の分析成果も多数収めることができました。その意味でも福井平野の沖積地研究に欠くことのできない成果であるものと考えます。

この度の発掘の調査成果が、今後考古学はもちろん、考古学以外の各方面でも広く活用され、文化財に対する理解をより一層深めるとともに、郷土の歴史を見直す機会となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ多くの皆様から多大なご支援とご協力を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

平成23年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 南 洋 一 郎

例 言

- 1 本書は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが国営九頭竜川下流土地改良事業に伴い、平成17・18年度に実施した舟寄福島通遺跡（福井県坂井市丸岡町舟寄所在）の発掘調査報告書である。
- 2 舟寄福島通遺跡の調査は農林水産省北陸農政局九頭竜川下流農業水利事業所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、主任赤澤徳明、嘱託職員入江剛弘が担当した。
- 3 発掘調査期間は、平成17年4月5日から平成18年3月25日までと平成18年4月4日から同年11月25日までの2ヵ年に実施した。出土遺物の整理作業は、平成19年4月1日から平成23年3月25日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は嘱託職員中村嘉之の協力を得て赤澤があたり、主査山本孝一、田中勝之が分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下の通りである。また第7章は、分析を依頼した株式会社パレオ・ラボの担当者からの成果報告の一部に赤澤が加筆し、編集した。
赤澤 第1・2・3・4章、第5章第1・2節、第7章第1節、第8章、山本 第5章第3・4節、田中 第6章、第7章第2節から8節 パレオ・ラボ分析グループ（藤根久・伊藤茂・黒澤一男・小林紘一・瀬谷薫・鈴木茂・中村賢太郎・丹生越子・新山雅広・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani）
- 5 出土遺物のうち、石器・玉作関連資料の図化は、嘱託職員畠山真証、枡家豊の協力を得て、田中の指示のもと、株式会社アルカに委託して作成し、そのほかについては、赤澤・山本の指示のもと、当センター整理事業員が作成した。写真撮影は嘱託職員岩田直樹、同西端博紀の協力を得て、赤澤と嘱託職員中村嘉之が行った。
- 6 遺構の写真撮影は赤澤が行い、上空からの写真は、航空測量時に株式会社平和 ITC が撮影したものである。遺構図などは株式会社 ITC が作成したものを、株式会社日本海航測に委託して編集したものを使用した。
- 7 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。
- 8 本書における水平レベルの表示は、海拔高(m)を示し、方位は、座標北を用いて、図中にも明記した。また X・Y 座標値は国土方眼座標系第VI系に基づく。
- 9 第3・4表の胎土の項目は次の4つに分類してある。①微砂粒（径1mm以下）を少量含む、②微砂粒を多量に含む、③砂粒（径1～2mm）を含む、④小石（径2mm以上）を含む。
- 10 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管している。
- 11 遺構・遺物の時期などに関しては、研究が進んでいる石川県の成果を参考にして赤澤が判断した。その型式名については、その示す意味を明確にすべきではあるが、現在その内容は大きく変更しつつあるため、暫定的なものである。その責任はすべて赤澤が負うものである。
- 12 発掘調査に際しては、次の機関のご協力を得た。
北陸農政局九頭竜川下流農業水利事業所、坂井市（旧丸岡町）教育委員会
- 13 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご教示を頂いた（五十音順・敬称略）。
伊藤正人・瀬藤茂（名古屋市教育委員会） 大野薫（大阪府教育委員会） 岡田憲一・福西貴彦（奈良県立橿原考古学研究所） 大野淳也（小矢部市教育委員会） 寒川旭（産業技術総合研究所） 堤徹也（坂井市教育委員会） 馬場伸一郎（下呂市教育委員会） 久田正弘（石川県教育委員会） 広瀬時習（大阪府立近つ飛鳥博物館） 豆谷和之（田原本町）
- 14 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理事業員があたった。

目 次

第1章	調査の経緯	1
第2章	遺跡の地理的・歴史的環境	2
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第3章	調査区の概要	4
第4章	上層の遺構と遺物	8
第1節	掘立柱建物	8
第2節	平地式住居	13
第3節	弥生時代の井戸とそのほかの遺構と遺物	21
第4節	古墳時代の井戸とそのほかの遺構と遺物	27
第5章	下層の遺構と遺物	51
第1節	弥生時代中期の遺構と遺物	51
第2節	縄文時代の遺構	55
第3節	縄文時代の土器	58
第4節	縄文時代の土製品	83
第6章	石器・玉作関連遺物	86
第1節	石器	86
第2節	玉作関連遺物	96
第7章	自然科学分析	100
第1節	自然科学分析の概要	100
第2節	放射性炭素年代測定	100
第3節	珪藻化石群集	101
第4節	花粉化石群集	106
第5節	プラント・オパール	110
第6節	ボーリング調査および堆積物記載と放射性炭素年代測定	113
第7節	ボーリング堆積物中の珪藻化石群集	115
第8節	No.2 地点ボーリングの花粉化石	118
第8章	調査のまとめ	122

写真図版目次

巻首図版	(1) 遺跡周辺の現況	(3) SE012 完掘状況
	(2) 縄文時代の特殊遺物	(4) SE012 下層上部遺物出土状況
図版第 1 遺跡	(1) 南調査区	(5) SE012 下層水差し形土器出土状況
	(2) 南調査区下層	(6) SE012 下層中部土器出土状況
図版第 2 遺跡	(1) 南調査区下層	図版第 9 遺構
	(2) 南調査区下層	(1) SE013 土層断面
図版第 3 遺構	(1) SB004	(2) SE013 遺物出土状況
	(2) SB005 ～ 007	(3) SE014 土層断面
	(3) SB008	(4) SE014 遺物出土状況
	(4) SB006-SP 4 遺物出土状況	(5) SD028・029 遺物出土状況
	(5) SB010	(6) SD028・029 遺物出土状況
	(6) SB011	図版第 10 遺構
	(7) 北調査区農道部分完掘状況	(1) SD015 遺物出土状況
図版第 4 遺構	(1) 北調査区全景	(2) SK034 遺物出土状況
	(2) 北調査区全景	(3) SK043 遺物出土状況
	(3) SI001	(4) SX036 遺物出土状況
	(4) SK035	(5) SX040 遺物出土状況
	(5) SK035 土層断面	(6) SX041 遺物出土状況
図版第 5 遺構	(1) SI001 全景	図版第 11 遺構
	(2) SK032 遺物出土状況	(1) SK064 遺物出土状況
	(3) SI001-SD 1 ～ 3 遺物出土状況	(2) SK051 遺物出土状況
	(4) SI001-SD 4 遺物出土状況	(3) SK064 遺物出土状況
	(5) SI001-SD10 遺物出土状況	(4) SX052 遺物出土状況
	(6) SI001-SD 6 ～ 8 遺物出土状況	(5) SX053 遺物出土状況
図版第 6 遺構	(1) SI001-SD11 遺物出土状況	(6) SX055 遺物出土状況
	(2) SI001-SD11 遺物出土状況	図版第 12 遺構
	(3) SI001-SD11 遺物出土状況	(1) ST124
	(4) SI001-SD11 遺物出土状況	(2) ST125
	(5) SI001-SD11 遺物出土状況	(3) ST124-SD 2 遺物出土状況
	(6) SI001-SD11 遺物出土状況	(4) ST125-SD 3 遺物出土状況
図版第 7 遺構	(1) SI002 全景	図版第 13 遺構
	(2) SI002-SD 3 遺物出土状況	(1) SX089・090 遺物出土状況
	(3) SI002-SD 3 遺物出土状況	(2) SX093 遺物出土状況
	(4) SI002-SD 3 遺物出土状況	(3) SX111 遺物出土状況
	(5) SI002-SD 3 遺物出土状況	(4) SX085 遺物出土状況
	(6) SI002-SD 3 遺物出土状況	(5) SX094 遺物出土状況
図版第 8 遺構	(1) SE012 中層	(6) SX081 遺物出土状況
	(2) SE012 上層炭化物出土状況	(7) SX103 遺物出土状況
		(8) SX123 遺物出土状況
		図版第 14 遺構
		(1) 南側落ち込み下層遺物出土状況
		(2) SK082 遺物出土状況
		(3) SK082 遺物出土状況

(4)土製品(土冠)出土状況	図版第 21 遺物 縄文土器
(5)B15 グリッド深鉢出土状況	図版第 22 遺物 縄文土器・土製品
(6)SP099 遺物出土状況	図版第 23 遺物 石鏃
図版第 15 遺物 弥生土器(後期)	図版第 24 遺物 石鏃
図版第 16 遺物 弥生土器(後期)	図版第 25 遺物 石器
図版第 17 遺物 古墳時代井戸出土土師器	図版第 26 遺物 石斧・磨石
図版第 18 遺物 古墳時代古式土師器	図版第 27 遺物 磨石・石棒・石冠
図版第 19 遺物 古墳時代古式土師器・弥生土器(中期・後期)	図版第 28 遺物 玉作関連遺物
図版第 20 遺物 古墳時代古式土師器	

挿 図 目 次

第 1 図 舟寄福島通遺跡調査区位置図	第 24 図 弥生土器実測図(1)	1	24
第 2 図 遺跡の位置と周辺の地形概要図	第 25 図 弥生土器実測図(2)	2	25
第 3 図 遺跡周辺の関連する遺跡分布図	第 26 図 SX054 遺構実測図、遺物出土状況	3	26
第 4 図 調査区全体図	第 27 図 SX054 出土弥生土器実測図	5・6	26
第 5 図 SB003 遺構実測図	第 28 図 SE013・014 遺構実測図	8	27
第 6 図 SB004・005 遺構実測図	第 29 図 古墳時代井戸出土土器実測図(1)	9	28
第 7 図 SB006・007 遺構実測図、 SB006-SP4 遺物出土状況図、遺構配置図	第 30 図 古墳時代井戸出土土器実測図(2)	10	29
第 8 図 SB010 遺構実測図	第 31 図 古墳時代井戸出土土器実測図(3)	11	30
第 9 図 SI008・011 遺構実測図	第 32 図 SK064 遺構実測図	12	31
第 10 図 SI001 遺構平面図 SI001-SD11 遺物出土状況図	第 33 図 SK064 付近出土の羽口	13	31
第 11 図 SI001 遺構断面図	第 34 図 SK056 遺構実測図	14	32
第 12 図 SI001 溝出土スタンプ文・壺(左)・脚部(右)	第 35 図 SP073 遺物出土状況図 遺物出土状況図(東より)	14	32
第 13 図 SI001-SD4・SD10 遺物出土状況図	第 36 図 古式土師器実測図(1)	15	33
第 14 図 SI001 出土弥生土器実測図(1)	第 37 図 古式土師器実測図(2)	16	34
第 15 図 SI001 出土弥生土器実測図(2)	第 38 図 古式土師器実測図(3)	17	35
第 16 図 SI002 遺構実測図	第 39 図 古式土師器実測図(4)	18	36
第 17 図 SI002-SD3 遺物出土状況図	第 40 図 古式土師器実測図(5)	19	37
第 18 図 SI002 出土弥生土器実測図(1)	第 41 図 古式土師器実測図(6)	19	38
第 19 図 SI002 出土弥生土器実測図(2)	第 42 図 古式土師器実測図(7)	20	39
第 20 図 SE012 遺物出土状況図(1)	第 43 図 古式土師器実測図(8)	21	40
第 21 図 SE012 遺物出土状況図(2)	第 44 図 古式土師器実測図(9)	22	41
第 22 図 SE012 出土弥生土器実測図	第 45 図 古式土師器実測図(10)	23	42
第 23 図 SK032 遺物出土状況図 SK035 遺構実測図	第 46 図 古式土師器実測図(11)	24	43
	第 47 図 ST124 遺構実測図 ST124-SD 2 遺物出土状況図	24	51

第48図	ST125 遺構実測図 ST125-SD3 遺物出土状況図	52	第70図	縄文土器実測図(15)	80
第49図	下層出土弥生土器(中期)実測図(1)	52	第71図	縄文時代土製品実測図	84
第50図	下層出土弥生土器(中期)実測図(2)	53	第72図	石器(石鏃)実測図(1)	87
第51図	SX081・103・111・123埋設土器出土状況図	55	第73図	石器(石鏃)実測図(2)	88
第52図	SX085・089・090・091・093・094埋設土器出土状況図	56	第74図	石器実測図(3)	89
第53図	SP097・118 遺物出土状況図	57	第75図	石器実測図(4)	90
第54図	埋設土器実測図(1)	61	第76図	石器実測図(5)	91
第55図	埋設土器実測図(2)	62	第77図	石器(祭祀具)実測図(6)	92
第56図	縄文土器実測図(1)	63	第78図	玉作関連遺物実測図(1)	97
第57図	縄文土器実測図(2)	66	第79図	玉作関連遺物実測図(2)	98
第58図	縄文土器実測図(3)	67	第80図	暦年較正結果	101
第59図	縄文土器実測図(4)	68	第81図	B12グリッドにおける珪藻化石分布図	104
第60図	縄文土器実測図(5)	69	第82図	井戸(SE013・014)最下層における珪藻化石分布図	104
第61図	縄文土器実測図(6)	70	第83図	堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真	105
第62図	縄文土器実測図(7)	71	第84図	井戸(SE013・014)最下層の花粉化石分布図	108
第63図	縄文土器実測図(8)	72	第85図	産出した花粉化石	109
第64図	縄文土器実測図(9)	73	第86図	プラント・オパール分布図	111
第65図	縄文土器実測図(10)	74	第87図	B12グリッドのプラント・オパール	112
第66図	縄文土器実測図(11)	75	第88図	暦年較正図(左図)、ボーリング柱状図(右図)	115
第67図	縄文土器実測図(12)	76	第89図	No. 2 地点ボーリング試料の珪藻化石分布図	116
第68図	縄文土器実測図(13)	77	第90図	No. 2 地点ボーリング試料中の珪藻化石	118
第69図	縄文土器実測図(14)	78	第91図	No. 2 地点ボーリングの主要花粉化石分布図	119
			第92図	No. 2 地点ボーリング試料中の花粉化石	121

表 目 次

第1表	主要遺構一覧表	7	第11表	玉作関連遺物観察表	99
第2表	掘立柱建物一覧表	8	第12表	測定資料及び処理	100
第3表	弥生土器(後期)・古式土師器・土師器 須恵器観察表	44	第13表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	100
第4表	弥生土器(中期)観察表	54	第14表	珪藻化石産出表	103
第5表	縄文時代埋設土器一覧表	57	第15表	花粉化石産出一覧表	108
第6表	縄文土器一覧表	81	第16表	試料1g当たりのプラント・オパール個数	111
第7表	土製品観察一覧表	85	第17表	測定試料及び処理	113
第8表	石器組成表	86	第18表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	114
第9表	石器観察表	94	第19表	No. 2 地点ボーリング試料の珪藻化石産出表	117
第10表	玉作関連遺物組成表	96	第20表	No. 2 地点ボーリング試料の産出花粉化石一覧表	120

第1章 調査の経緯

坂井市を中心とする福井平野の沖積地の遺跡は、過去の開発で削平を受けているとともに、埋没していて不明なものが多い。その中で、農林水産省北陸農政局の九頭竜川下流土地改良事業に伴うものとして、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターでは平成16年度に上安田向田遺跡と高柳・下安田遺跡の発掘調査を行い、それぞれについての報告書はすでに刊行している。舟寄福島通遺跡はこれらの遺跡に続いて平成17・18年度に発掘調査を行った。17年度は農道の南側の2,400㎡（上層1,400㎡、下層1,000㎡）、18年度は農道とその北側の1,600㎡について実施した（第1図）。17年度には本遺跡の南で舟寄遺跡、18・19年度には北で若宮遺跡の調査を行い、この周辺での調査は終了している。

平成17（2005）年度調査日誌抄録

4月 器材搬入。調査対象の南北農道両側の水田の表土掘削開始。

5月 農道路体の上部構造物と排水溝基礎の撤去。

6月 表土の除去を終了。包含層掘削において、試掘調査で確認できなかった縄文時代の遺構面が下層にあることと、遺構・遺物の広がり調査区南端まで広がらないことを確認し、事業計画変更の協議を農政局と行う。

9月 上層（古墳時代）の空中写真撮影。

10月 C11グリッドを中心に地層の乱れ方が顕著で、時期は特定できないが、地震による影響が大きいものと考えられる。

12月 通産省地質研究所の寒川旭氏来跡。このあとすぐに降雪のため年内の作業を休止。

2月 現場作業の開始。

3月 現地説明会開催（12日）。下層（縄文時代）の空中写真撮影を終了し、当該年度の予定を終了。

平成18（2006）年度調査日誌抄録

4月 北側の造成地へプレハブの建替え、器材の移動。農道下の上水道管を保護しつつ、表土の掘削を開始。

6月 遺構の検出を終了するとともに、順次遺構の掘削にかかるが、前年度とは大きく時代が異なり、ほぼ弥生時代後期の遺構であると想定される。

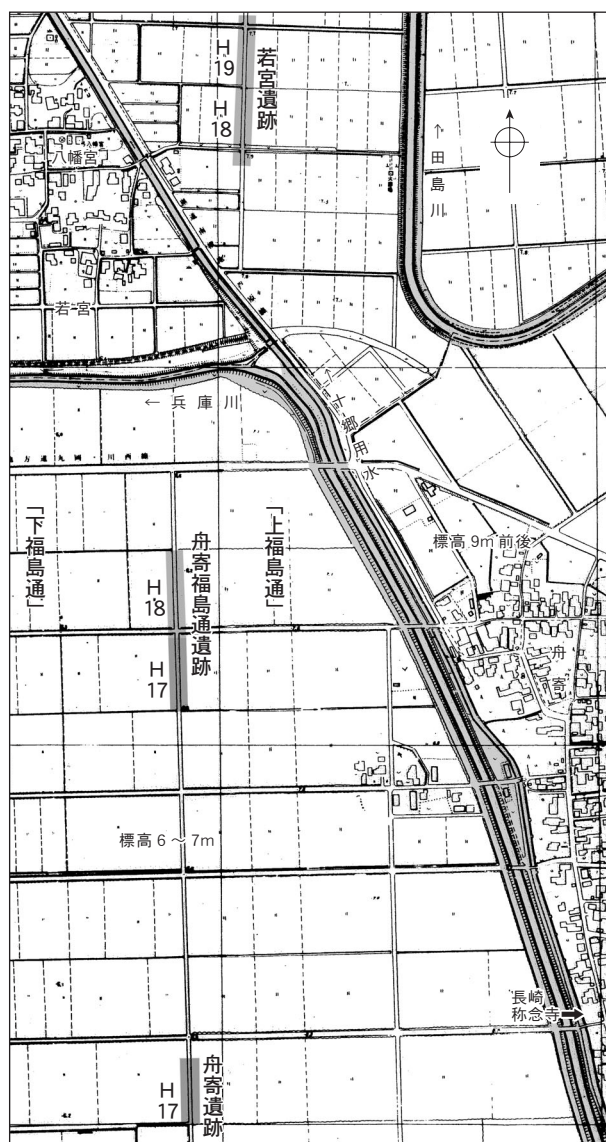
7月 上層（弥生時代後期）の空中写真撮影。玉作関連資料が出土した遺構覆土の一部を洗浄する。

9月 下層（縄文・弥生時代）の空中写真撮影。

10月 前年度の調査区との境となっていた農道部分

についての調査を行い、順次、図化を行う。

11月 掘削・図化の補足などを行い、器材の撤収を行う。現地での全ての作業終了。



第1図 舟寄福島通遺跡調査区位置図（縮尺 1/10,000）

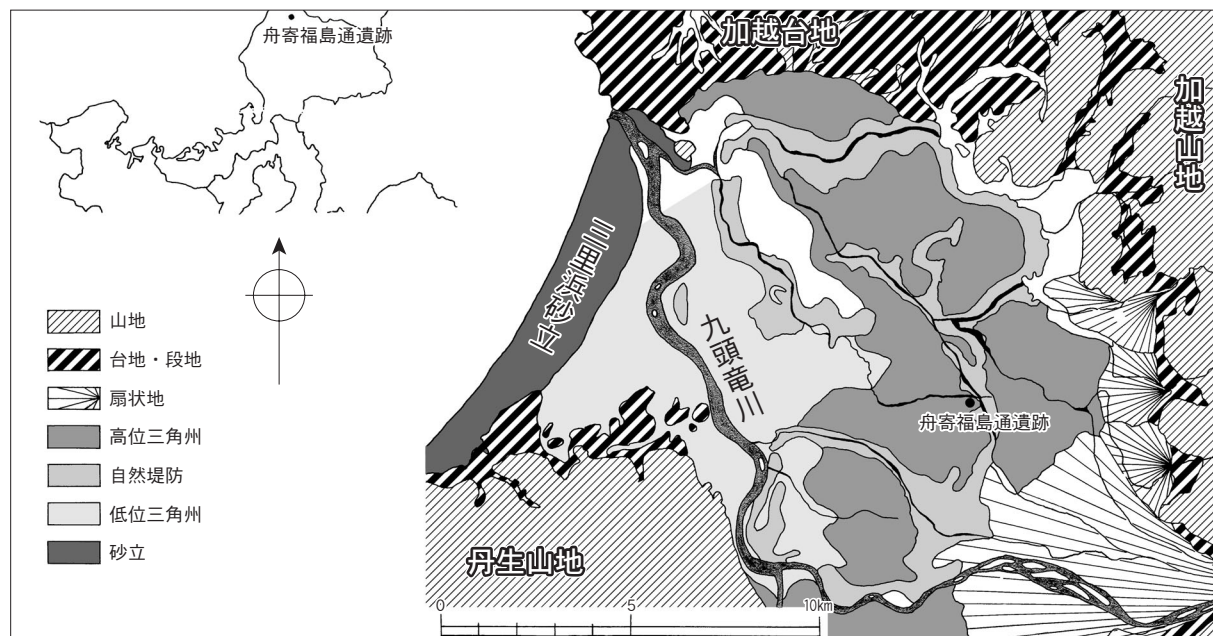
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境(第1・2図)

舟寄福島通遺跡は坂井市丸岡町舟寄地区の北北西に並行して流れる十郷用水・兵庫川の西、標高6m前後の水田地帯に位置する。丸岡町東部は福井平野でも山間部から流れ出た九頭竜川による標高10m前後を中心とする扇状地が中心であるが、当遺跡付近から西には同市春江町、北西には同市坂井町を中心とする標高6m以下の沖積地が広がる(第2図)。本遺跡と直線距離で2.7km離れた高柳・下安田遺跡と、同じく直線距離で3.5km離れた上安田向田遺跡はともに扇状地に立地する。本遺跡の直後の時期となる高柳・下安田遺跡は竪穴住居が主体となるが、本遺跡では竪穴住居は検出できず、平地式住居であるのは単に時期の差ではなく、遺跡の立地する条件によるものと考えられる。高柳・下安田遺跡では遺構検出面の標高が10m前後を測り、近接する上安田向田遺跡では標高12m付近にて湧水地が確認されている。これらの遺跡は井戸が必要ではない湧水地点が近辺にあり、本遺跡は湿潤な沖積地であるがゆえに、湧水は井戸を掘削しないと得ることができない。兵庫川を挟んだ東側の現在の舟寄集落付近は標高が9m前後を測り、隣接する調査地とは3m前後も標高が高い(第1図)。兵庫川は調査地の北東付近で流れを真西に変え、これに沿って地元で「クロ」と呼ばれる高まりが、西の坂井町福島へ延びていたとのことである。現在の地形区分では舟寄集落は自然堤防上に立地し、調査地はこれから外れていることになっている。しかし現状から確認できないものの、本遺跡は兵庫川の東西に伸びる自然堤防上に立地するものと考えられる。

第2節 歴史的環境(第3図)

これまでは標高10mにも満たない沖積地での縄文時代の遺跡は石器などの表採資料のみであったが、近年は地表面からより深い位置にある縄文時代の遺跡の調査が目立つようになってきた。本遺跡①はもちろん、南で同時期に調査した舟寄遺跡⑩・沖布目北遺跡⑨など現水田面からやや深くなった地中に縄文時代中後期の遺跡が存在することが明らかとなりつつある。縄文時代でも晩期は弥生時代の中期と同



第2図 遺跡の位置と周辺の地形概要図(縮尺 1/200,000)

じか隣接して見つかることが多い。上蔵垣内遺跡④や坂井兵庫地区遺跡群（上兵庫巻地遺跡②・上兵庫東遺跡③）でも、多くはないが両時期の土器が確認されている。弥生時代になると、若宮遺跡⑧では本遺跡と同じように中期後半と考えられる方形周溝墓が、沖布目北遺跡でも縄文土器に混じって少量の中期の土器と施溝分割の痕跡のある緑色凝灰岩の玉材が確認され、長屋遺跡⑤・河和田遺跡⑥でも中期中葉の土器が多く表採されている。弥生時代中期には大規模ではなく小規模な遺跡が沖積地の各地に出現している。しかし弥生時代後期になると高柳・下安田遺跡⑪や上安田向田遺跡⑫・女形谷長畝遺跡⑬のように扇状地や、長屋遺跡・河和田遺跡のように自然堤防上など、平野の各所に集落が展開するようになる。古墳時代前期も後半以降、さらに中期から後期になると、集落の確認例は少なくなる一方で、山手には横穴式石室を持つ丸岡古墳群⑭が現れ、さらに継体大王に関連する横山古墳群⑮なども大きく展開する。この時期の集落遺跡は長屋遺跡に竖穴があるが、江留下遺跡⑯のように土器が少量出土するのみか、若宮遺跡⑧・宮領遺跡（福井県遺跡地図では河和田向田遺跡）⑦のように流路などから遺物が多く出土するのみで、集落の具体的な状況はわからない場合が多い。古代に入ると、乗兼・坪江遺跡⑬に代表されるように建物群が並び、坂井平野の各地には古代の集落が展開するが、本遺跡では古代以降の遺構・遺物が全くなく、周辺にも目ぼしい遺跡は見当たらない。南北朝の争乱において戦死した新田義貞を葬った長崎称念寺（長崎城跡）⑯、朝倉氏家臣黒坂備中守の館とされる舟寄館跡⑰など、中世の遺跡は兵庫川の東側に目立つようになる。若宮遺跡では中世全般にわたっての井戸が確認されるなど、中世の人々の生活痕跡が各発掘調査で確認されている。最近の調査事例から、坂井平野の古代から中世、特に中世の集落は現在の集落域と重複しているものが多いように思われる。そして中世末の織豊期に柴田勝家の甥である柴田勝豊が、平野東部の小丘陵に丸岡城⑱を築城して近世を迎える。



第3図 遺跡周辺の関連する遺跡分布図(縮尺 1/50,000)

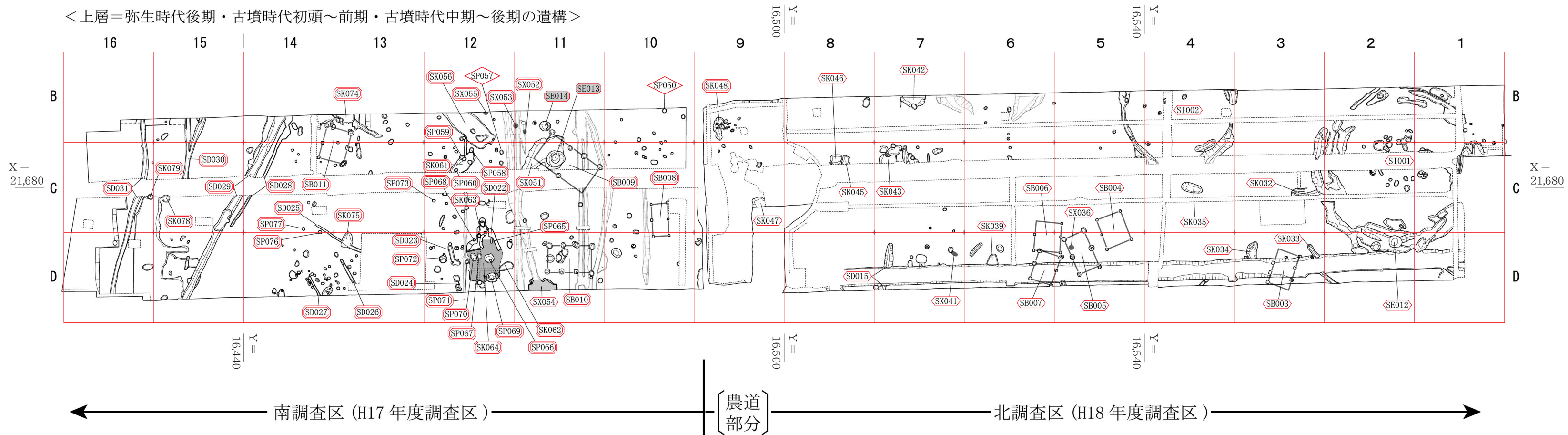
第3章 調査区の概要

調査地は、坂井市丸岡町の西端、現在の舟寄集落と十郷用水を挟んだ西側の坂井市春江町・同坂井町の集落との間に広がる水田地帯に位置する。遺跡の推定範囲は南北約400m、東西約700mである。今回の調査対象範囲は、そのほぼ中央を南北に横切るパイプライン敷設予定地の延長約180m、幅約20mを対象とした。試掘調査では、調査範囲の南側は軟質の粘質土で遺物は全く確認されない。北側は北に向けて盛土が厚くなるとともに、遺構検出面である暗灰色粘質土の地山が次第に低くなり、遺構・遺物ともに確認されていない。調査地の北には東西の県道に併行して兵庫川が流れており、確認された地山もこれへ向かい落ち込んでいると考えられる。弥生時代から古墳時代の集落に多い、集落縁辺部落ち込みへの土器の廃棄などは南側でのみ確認され、北側では確認されなかった。南北に伸びた調査区は、そのほぼ中央が東西の農道で分断され、調査も農道より南を17年度(南調査区)、農道を含む北を18年度(北調査区)に実施した。南では上下に遺構面があるのは明確であったが、北に寄るにしたがい下層が不明瞭になってなくなる。上層の遺構は弥生時代後期から古墳時代に属し、下層は縄文時代晩期から弥生時代中期の遺構がみられるが、下層の遺構が上層の調査中に確認されることは当然あることとして、下層の調査で上層の遺構(掘立柱に復元できる柱穴)や土師器を伴う遺構が検出された。前者は上層と下層の遺構面の差が大きくないことを示し、後者は本遺跡で確認された地震の影響によるものと考えられる。明確に地震の噴砂などで切られた遺構はないが、B10から11グリッドにかけての西壁で確認された砂脈など、C11・12グリッドを中心として明確である(この状況は地震考古学の提唱者である寒川旭氏が現地を確認している)。このように、地震による地山への大きな影響があることが想定され、C10～12グリッドでは通常でもわかりにくい縄文時代の遺構面の確認が困難となり、不意に出土した縄文土器の周辺にサブトレンチなどを設定して遺構の見逃しがないようにした。その結果、SK096などその周辺の遺構は、平面形がアメーバー状に不整形となっているとともに、付近の遺構覆土の堆積状況(SK096・SP097など)にいくつか不整合な点が認められた。

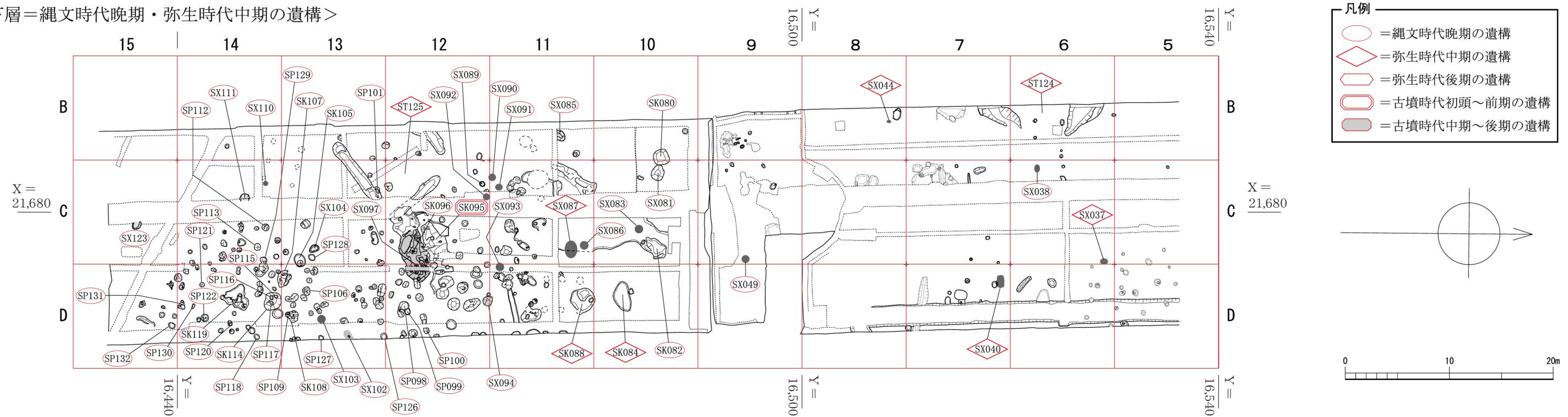
一見して平坦に見える調査区も遺構検出面は南調査区の北側(東西の農道に近い部分)が標高5.8～5.9mであるのに対し、北調査区は標高5.5～5.7m前後とやや低い。つまり耕地整理などでいくらか削平を受けたとしても、上層の地山は本来、調査区の中央付近がやや高かったものと考えられる。この部分で、調査区を横切る溝が5条ほど検出されている(SD024～028)。これらの溝からも縄文土器や古式土師器が出土しているが、それらとともに磨滅した須恵器や中世陶磁器の小片も若干含まれる。溝は、以前舟寄と福島の間集落を結んでいた道があったとされる位置にあって、この道の側溝と考えられ、まさしく遺跡名の元になった小字の状況を物語る。

上層の遺構は掘立柱建物9棟、平地式住居2棟を主に、井戸や土坑・溝など一般的な集落を構成するものであるが、その広がり大きく偏る。平地式住居がある北調査区では、掘立柱建物の柱穴からも弥生時代後期の土器が出土し(第7図)、その周辺の土坑や溝からも同様な時期の土器が出土する。南調査区ではこの時期の土坑は北寄りに位置するSK054の1基のみである。次の古墳時代初頭から前期の遺構は北調査区南端の東西農道下のSK048を北端として、南調査区全体に展開する。つまり北調査区は弥生時代後期の集落であるのに対して、南調査区は古墳時代の集落であり、両者の範囲は僅かしか重ならない。掘立柱建物も北調査区のSB003～007の周辺では弥生時代後期の土器が出土し、SB006の柱穴でもこの時期の鉢が出土している。南調査区では弥生時代後期の土器2片(第36図13・14)が柱穴

＜上層＝弥生時代後期・古墳時代初頭～前期・古墳時代中期～後期の遺構＞



＜下層＝縄文時代晩期・弥生時代中期の遺構＞



第4図 調査区全体図 (縮尺 1/400)

第3章 調査区の概要

から出土したSB010を除くSB008・009・011の3棟は、調査区に緩慢に展開し、明確に時期を示す土器は確認されていないが、周辺の遺構と同じ古墳時代初頭から前期のものと判断した。ちなみにこの時期の遺構は調査区南端の地山が落ち込む縁に沿って位置するSD031がその南端となり、包含層出土とした土器の多くがこの周辺の落ち込みから出土している。下層は、縄文時代晩期と弥生時代中期の遺構・遺物が確認されている。縄文時代晩期はほぼ南調査区にあるのに対して、弥生時代中期は方形周溝墓が南北両調査区に離れて1基ずつ、土坑なども数は少ないがその間にのみ確認されている。また、弥生時代中期の遺構は、南調査区では縄文時代の遺構面掘削中に、北調査区では弥生時代後期遺構面である上層の掘削中に確認されている。つまり弥生時代中期は、現在へつながる弥生時代後期以降の地山の形成過程の途中にあったと考えられる。

第1表 主要遺構一覧表

井戸一覧

遺構番号	遺構旧番号	時代	規模(m)			出土遺物	写真図版番号
			最大長	最大幅	深さ		
SE012	608	弥生後期	1.45	1.30	1.41	第22図1～15	図版第8
SE013	9	古墳中期	2.06	1.79	—	第29図1～11、第30図1～13 第31図1～3、第49図3	図版第9
SE014	10	古墳中期	1.22	1.06	0.93	第31図4～6	図版第9
溝一覧							
遺構番号	遺構旧番号	時代	規模(m)			出土遺物	写真図版番号
			最大長	最大幅	深さ		
SD015	577	弥生後期	(5.2)	0.93	0.23	第24図2・3・9・10	図版第10
SD016	11・12	古代以降	(10.7)	0.68	0.26	—	—
SD017	23	古代以降	(20.0)	1.07	0.20	—	—
SD018	5	古代以降	(19.9)	1.70	0.10	第49図6・8、第59図3、第63図48	—
SD019	7・18	古代以降	(20.0)	0.90	0.26	第57図6、第69図52	—
SD020	17・24	古代以降	(18.5)	0.96	0.44	第36図18、第44図10～13 第50図17	—
SD021	8	古代以降	(11.1)	0.38	0.15	—	—
SD022	109	古墳初頭～前期	2.65	0.68	0.28	—	—
SD023	91	古墳初頭～前期	2.70	0.57	0.19	第36図9	—
SD024	88	古墳初頭～前期	1.78	0.48	0.54	—	—
SD025	35	古墳初頭～前期	(5.89)	0.38	0.13	第69図7	—
SD026	34	古墳初頭～前期	(3.00)	0.32	0.17	—	—
SD027	36	古墳初頭～前期	(2.39)	0.29	0.13	—	—
SD028	4	古墳初頭～前期	(14.0)	0.76	0.23	第40図14・25 第41図1・5・12・15～17 第42図4・6・17・21・27・29・35・37 第44図14・第49図1・5 第60図4、第61図17	図版第1・9
SD029	1	古墳初頭～前期	(22.8)	1.45	0.52	第40図11～13・15～24、第41図2～4・6～11・13・14、第42図1～3・5・7～16・18～20・22～26・28・30～34・36・38、第43図13・15 第61図3・17、第62図48、第69図35	図版第1・9
SD030	123 124 125	古墳初頭～前期	(6.70)	0.77	0.31	—	—
SD031	2	古墳初頭～前期	(19.8)	0.67	0.37	第40図1	—

その他の遺構一覧1

遺構番号	遺構旧番号	時代	規模(m)			出土遺物	写真図版番号
			最大長	最大幅	深さ		
SK032	543	弥生後期	(2.98)	(0.80)	0.11	第25図1～4	図版第5
SK033	552	弥生後期	(1.74)	(0.54)	0.16	—	—
SK034	503	弥生後期	(1.92)	(1.08)	0.15	第25図13～17・20・21	図版第4
SK035	542	弥生後期	2.37	1.00	0.49	第25図7～10・12	図版第4
SX036	624	弥生後期	—	—	—	—	図版第10
SX037	626	弥生中期	—	—	—	第70図25	—
SX038	544	縄文?	—	—	—	—	—
SK039	585	弥生後期	(1.16)	(1.21)	0.16	第25図5	—
SX040	623	弥生中期	—	—	—	第50図3・15・16	図版第10
SX041	582	弥生後期	—	—	—	第24図4～8	図版第10
SK042	516	弥生後期	2.75	(1.03)	0.31	第25図18・19	—
SK043	508	弥生後期	(3.07)	(1.16)	0.24	第24図1、第25図22～24	図版第10
SX044	514	弥生中期	—	—	—	第50図4	—
SK045	506	弥生後期	(0.96)	0.83	0.11	—	—
SK046	505	弥生後期	1.34	(1.07)	0.16	—	—
SK047	637	弥生後期?	(1.65)	(1.23)	0.15	—	—
SK048	636	古墳初頭～前期	2.51	1.24	0.17	第24図11～15	—
SX049	646	縄文	—	—	—	第60図1	—
SP050	176	弥生中期	0.47	0.44	0.52	—	—
SK051	20	古墳初頭～前期	(5.27)	(2.14)	0.36	第37図1～21	図版第11
SX052	16	古墳初頭～前期	—	—	—	第36図4	図版第11
SX053	15	古墳初頭～前期	—	—	—	第36図1～3	図版第11
SX054	6	弥生後期	3.18	(1.37)	0.20	第27図1～11、第64図21	—
SX055	14	古墳初頭～前期	—	—	—	第36図5～8	図版第11
SK056	13	古墳初頭～前期	(5.05)	2.56	0.43	第36図10～12・19～31	—
SP057	156	弥生中期?	0.48	0.41	0.36	—	—
SP058	26	古墳初頭～前期	0.55	0.43	0.44	—	—
SP059	27	古墳初頭～前期	0.79	0.49	0.38	—	—

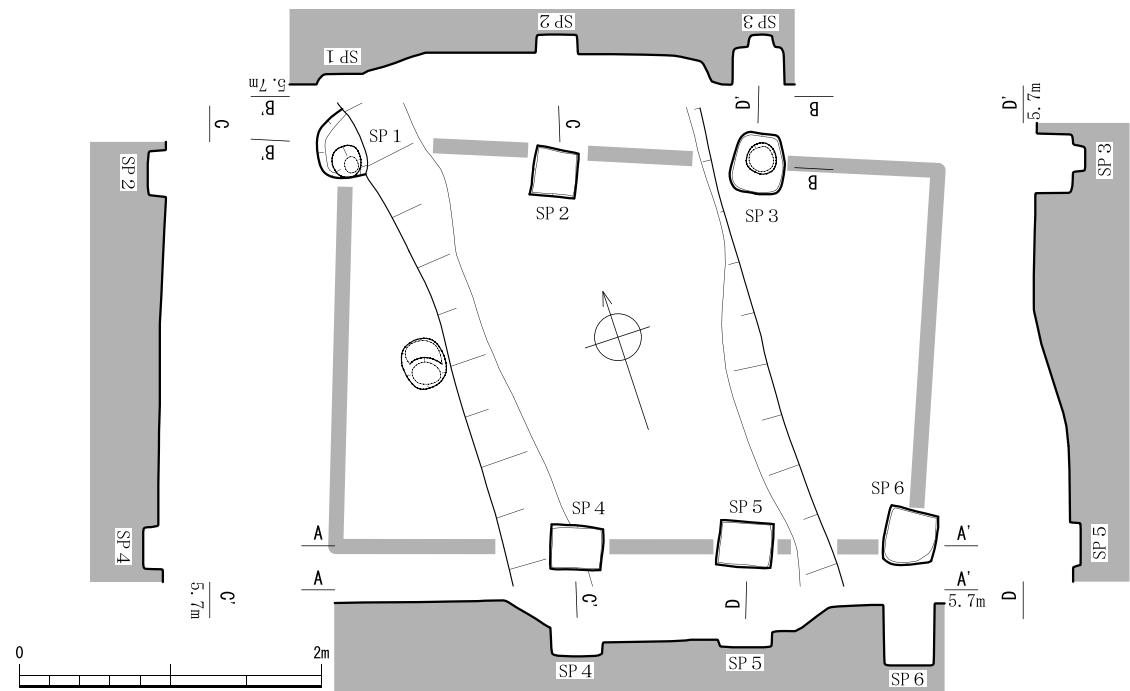
その他の遺構一覧2

遺構番号	遺構旧番号	時代	規模(m)			出土遺物	写真図版番号
			最大長	最大幅	深さ		
SP060	28	古墳初頭～前期	0.42	0.33	0.36	—	図版第11
SK061	19	古墳初頭～前期	(3.49)	1.52	0.15	—	—
SK062	30	古墳初頭～前期	1.81	0.87	0.14	第39図10～13	—
SK063	31	古墳初頭～前期	4.13	1.55	0.29	—	—
SK064	25	古墳初頭～前期	4.77	3.61	0.22	第38図1～18・20、第39図1～8	—
SP065	108	古墳初頭～前期	0.62	0.24	0.12	—	—
SP066	103	古墳初頭～前期	1.10	1.04	0.31	第39図9	—
SP067	110	古墳初頭～前期	0.65	0.61	0.20	—	—
SP068	111	古墳初頭～前期	0.27	0.24	0.24	—	—
SP069	218	古墳初頭～前期	1.22	1.07	0.44	第38図19、第70図13	—
SP070	102	古墳初頭～前期	0.89	0.61	0.25	—	—
SP071	113	古墳初頭～前期	0.47	0.36	0.22	—	—
SP072	101	古墳初頭～前期	1.01	0.84	0.27	第36図17	—
SP073	219	古墳初頭～前期	0.35	0.30	0.31	第36図15・16	—
SK074	29	古墳初頭～前期	2.04	1.05	0.16	第40図2～9	—
SK075	37	古墳初頭～前期	1.80	1.19	0.15	第36図33	—
SP076	68	古墳初頭～前期	0.41	0.39	0.40	—	—
SP077	69	古墳初頭～前期	0.35	0.32	0.26	—	—
SP078	3	古墳初頭～前期	0.88	0.81	0.27	第40図10	—
SK079	33	古墳初頭～前期	0.62	0.57	0.36	第37図22～24	—
SK080	231	縄文	1.61	1.57	0.31	—	—
SK082	396・401	縄文	2.65	1.61	0.36	第56図7、第58図3、第62図42・43 58・59、第62図35、第67図20、 第68図16、第71図12	図版第14
SX083	201	縄文	—	—	—	第60図8	—
SK084	211	弥生中期	2.89	1.56	0.23	第50図7、第61図23、第64図25	—
SX086	209	縄文	—	—	—	第59図1	—
SK087	212	弥生中期	—	—	—	第50図14	—
SK088	213	弥生中期	(2.41)	2.32	0.33	第63図29、第64図14、第68図37	—
SX092	21	縄文	—	—	—	第70図21	—
SK095	215	古墳初頭～前期	(2.81)	2.67	0.67	第40図26 その他縄文土器多数出土	—
SK096	349	縄文	(5.09)	2.61	0.47	第69図22	—
SP097	398	縄文	0.65	0.57	0.19	第56図17	—
SP098	217	縄文	0.87	(0.86)	0.39	—	—
SP099	355	縄文	(0.53)	0.53	0.10	第61図1	図版第14
SP100	241	縄文	0.60	0.51	0.57	—	—
SP101	392	縄文	0.32	0.31	0.46	—	—
SK102	243	縄文	—	—	—	第57図2	—
SX104	228	縄文	1.00	0.68	0.15	第61図12・18	—
SK105	324	縄文	1.29	1.01	0.11	—	—
SP106	318	縄文	0.82	0.72	0.27	第62図64、第71図11	—
SK107	274	縄文	1.78	1.11	0.24	—	—
SK108	312	縄文	1.17	(0.78)	0.29	—	図版第13
SP109	311	縄文	(0.52)	0.55	0.32	—	—
SX110	51	縄文	—	—	—	第59図2、第64図17、第66図9	—
SP112	290	縄文	0.69	0.66	0.58	第67図15	—
SP113	288	縄文	0.67	0.58	0.43	第69図23	—
SK114	273	縄文	1.87	1.67	0.40	—	—
SP115	308	縄文	0.41	0.29	0.35	—	—
SP116	307	縄文	0.43	0.30	0.40	—	—
SP117	306	縄文	0.35	0.31	0.48	—	—
SP118	238	縄文	0.57	0.46	0.29	—	—
SK119	298	縄文	2.74	2.27	0.23	—	—
SP120	402	縄文	0.52	0.45	0.14	—	—
SP121	267	縄文	0.47	0.44	0.14	第56図14	—
SP122	265	縄文	0.73	0.71	0.20	—	—
SP126	329	縄文	0.61	0.58	—	—	—
SP127	236	縄文	0.47	0.40	—	—	—
SP128	325	縄文	0.71	0.59	0.21	—	—
SP129	300	縄文	1.93	0.93	0.60	—	—
SP130	263	縄文	0.50	0.22	0.08	第65図21	—
SP131	261	縄文	0.89	0.59	0.31	第63図37	—
SP132	256	縄文	0.68	0.54	0.14	第63図43	—

第4章 上層の遺構と遺物

第1節 掘立柱建物（第5～9図）

掘立柱建物は9棟確認されたが、先にも述べた状況から南調査区のものには根拠がやや弱い古墳時代のものと判断した。SB004～007の4棟は同時に存在したとは考えられないほど近接しているが、SB003はやや離れているとともに、確認された6本の柱穴のうち5本の平面は、ほぼ真四角でやや特異

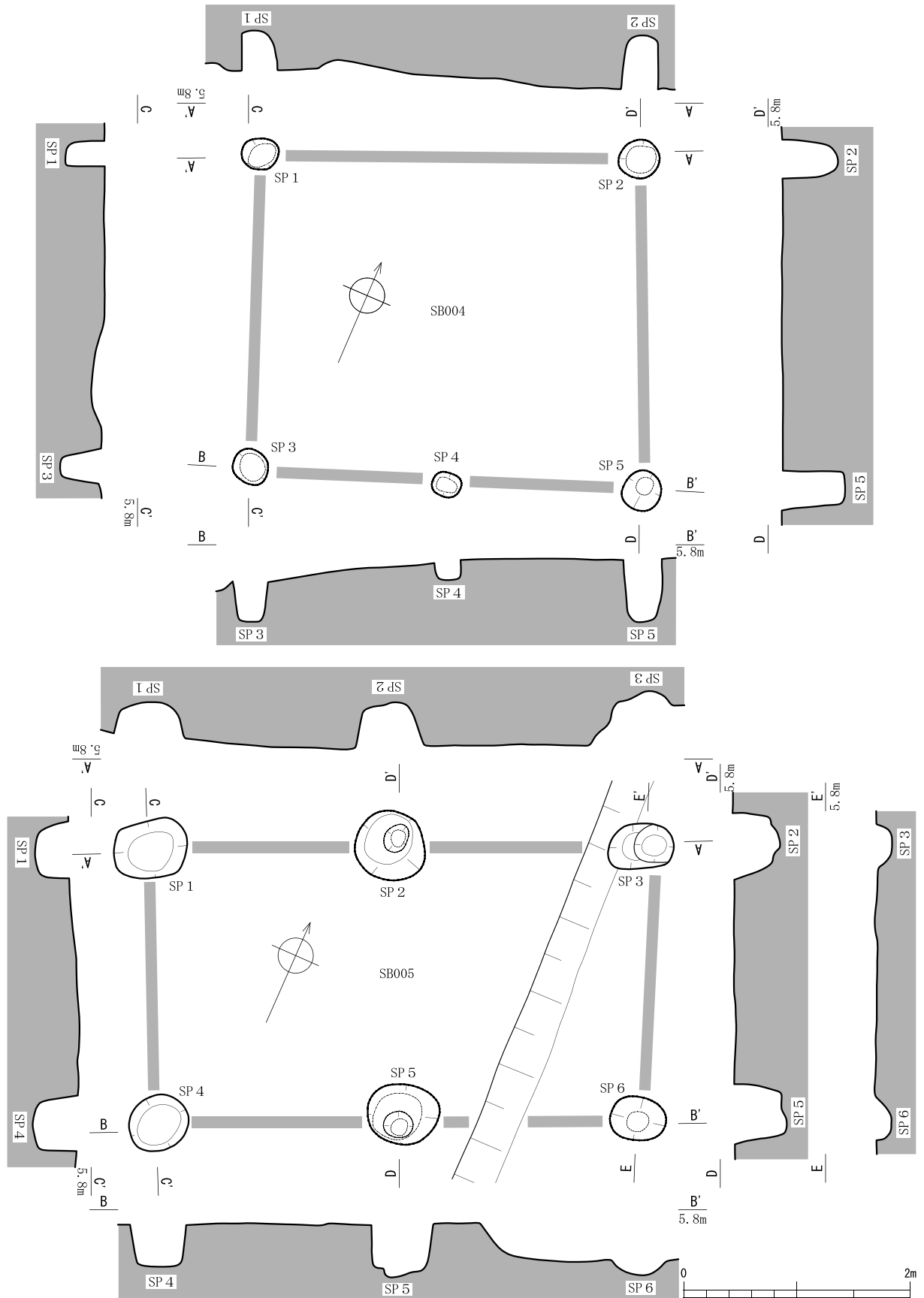


第5図 SB003 遺構実測図（縮尺 1/50）

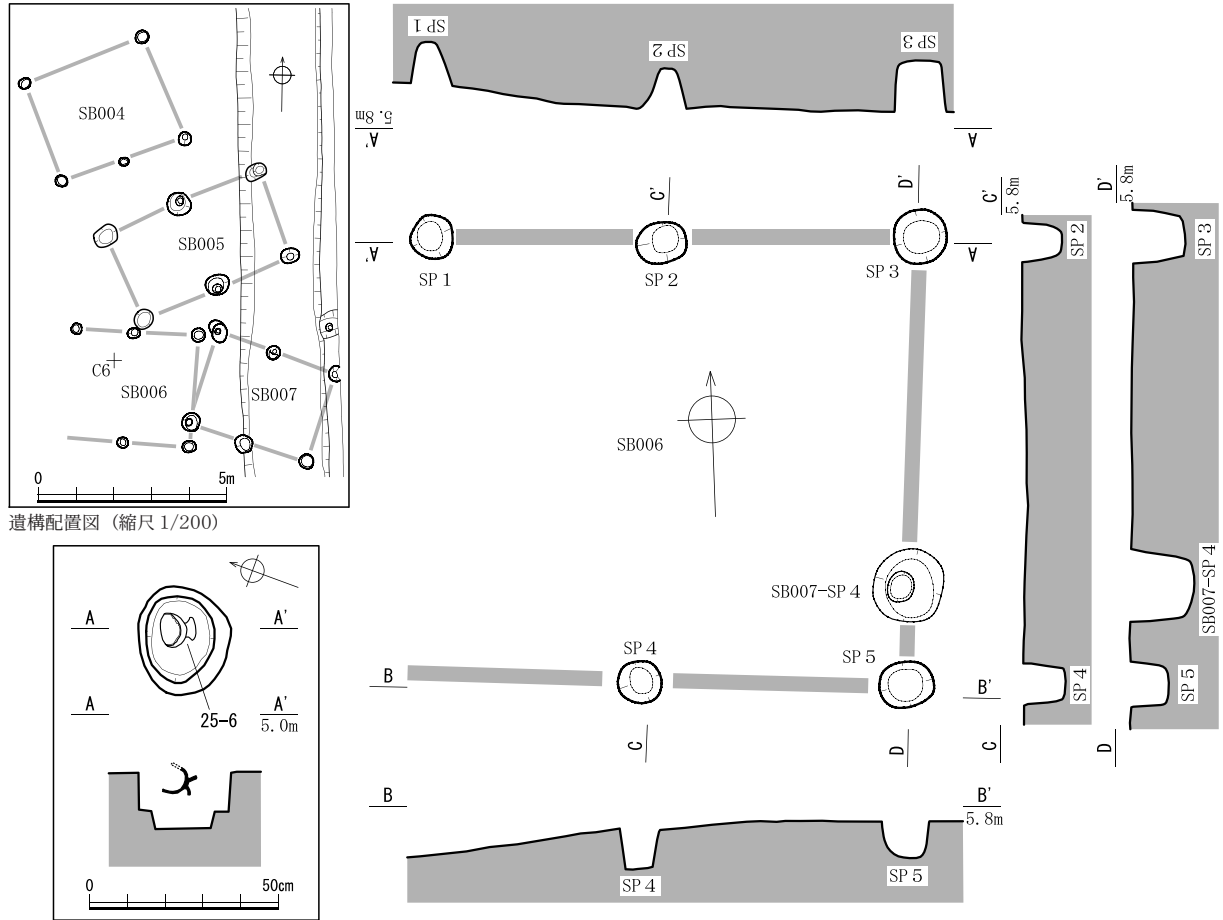
第2表 掘立柱建物一覧表

遺構番号	時期	柱穴番号	柱穴の計測値(m) (長軸×短軸×深さ)	柱穴底面の 標高値(m)	柱穴の 平面形状	備考	遺構番号	時期	柱穴番号	柱穴の計測値(m) (長軸×短軸×深さ)	柱穴底面の 標高値(m)	柱穴の 平面形状	備考
SB003 第5図	?	SP 1	0.46 × (0.31) × 0.11	5.29	円形		SB008 第9図 図版第3	古墳初頭～前期	SP 1	0.44 × (0.29) × 0.30	5.67	円形	
		SP 2	0.31 × 0.30 × 0.12	5.29	方形				SP 2	0.28 × 0.25 × 0.29	5.71	円形	
		SP 3	0.40 × 0.34 × 0.33	5.29	隅丸方形				SP 3	0.25 × 0.24 × 0.18	5.69	円形	
		SP 4	0.36 × 0.30 × 0.13	5.26	方形				SP 4	0.31 × 0.24 × 0.15	5.69	円形	
		SP 5	0.37 × 0.32 × 0.07	5.30	方形				SP 5	0.36 × 0.32 × 0.19	5.70	円形	
		SP 6	0.36 × 0.36 × 0.42	5.20	方形				SP 6	0.30 × 0.24 × 0.22	5.67	隅丸方形	
SB004 第6図 図版第3	弥生後期	SP 1	0.33 × 0.28 × 0.36	5.16	円形	(第25図で裏口緑部出土)	SB009 第8図 図版第3	古墳初頭～前期	SP 1	0.65 × 0.56 × 0.32	5.08	円形	
		SP 2	0.36 × 0.34 × 0.48	5.18	円形				SP 2	0.54 × 0.45 × 0.37	5.04	円形	
		SP 3	0.34 × 0.30 × 0.36	5.12	円形				SP 3	0.61 × 0.58 × 0.32	5.03	円形	
		SP 4	0.26 × 0.22 × 0.18	5.50	円形				SP 4	0.65 × 0.52 × 0.28	5.12	円形	
		SP 5	0.36 × 0.32 × 0.54	5.13	円形				SP 5	0.60 × 0.49 × 0.31	5.01	円形	
		SP 1	0.67 × 0.50 × 0.30	5.30	隅丸方形								
SB005 第6図 図版第3	弥生後期	SP 2	0.64 × 0.61 × 0.42	5.29	円形		SB010 第8図 図版第3	弥生後期	SP 1	0.71 × 0.61 × 0.53	5.36	円形	(第36図で裏口緑部・鉢出土)
		SP 3	0.59 × 0.37 × 0.15	5.21	円形				SP 2	0.70 × 0.54 × 0.61	5.30	円形	
		SP 4	0.54 × 0.48 × 0.37	5.33	円形				SP 3	0.57 × 0.45 × 0.62	5.30	円形	
		SP 5	0.63 × 0.52 × 0.47	5.24	円形				SP 4	(0.64) × 0.60 × 0.65	5.31	円形	
		SP 6	0.49 × 0.38 × 0.15	5.21	円形				SP 5	0.55 × 0.51 × 0.45	5.36	円形	
									SP 6	0.56 × 0.49 × 0.49	5.40	円形	
SB006 第7図 図版第3	弥生後期	SP 1	0.32 × 0.29 × 0.31	5.22	円形	(第25図で鉢出土)	SB011 第9図 図版第3	古墳初頭～前期	SP 1	0.56 × 0.55 × 0.19	5.39	円形	
		SP 2	0.34 × 0.28 × 0.27	5.40	円形				SP 2	0.49 × 0.39 × 0.23	5.33	隅丸方形	
		SP 3	0.36 × 0.34 × 0.34	5.34	円形				SP 3	0.39 × 0.32 × 0.08	5.50	円形	
		SP 4	0.30 × 0.28 × 0.25	5.39	円形				SP 4	0.50 × 0.42 × 0.21	5.39	円形	
		SP 5	0.36 × 0.30 × 0.20	5.29	円形				SP 5	0.40 × 0.36 × 0.23	5.40	隅丸方形	
									SP 6	0.40 × 0.32 × 0.16	5.47	円形	
SB007 第7図 図版第3	弥生後期	SP 1	0.48 × 0.37 × 0.49	5.18	円形								
		SP 2	0.37 × 0.34 × 0.24	5.16	円形								
		SP 3	0.41 × (0.23) × 0.40	5.29	円形								
		SP 4	0.50 × 0.45 × 0.43	5.27	円形								
		SP 5	0.46 × 0.44 × 0.52	5.19	円形								
		SP 6	0.40 × 0.37 × 0.19	5.26	円形								

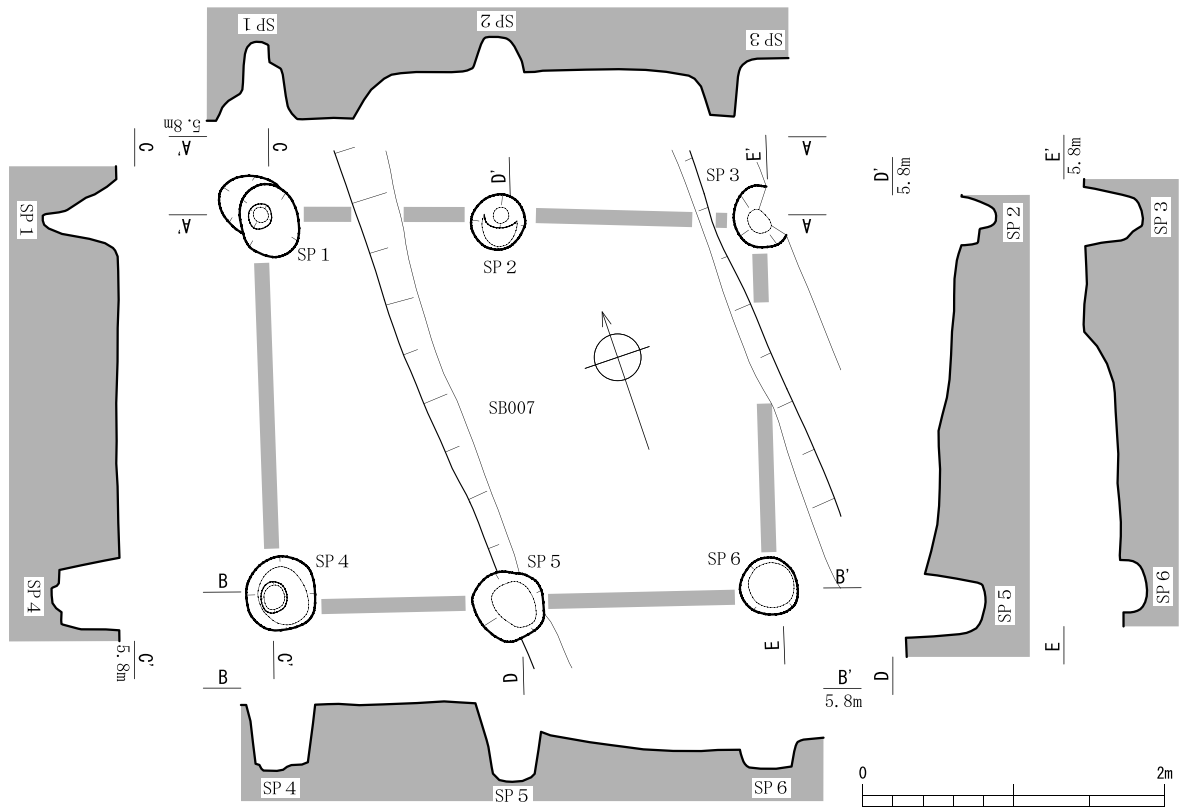
() 内の数値は残存値



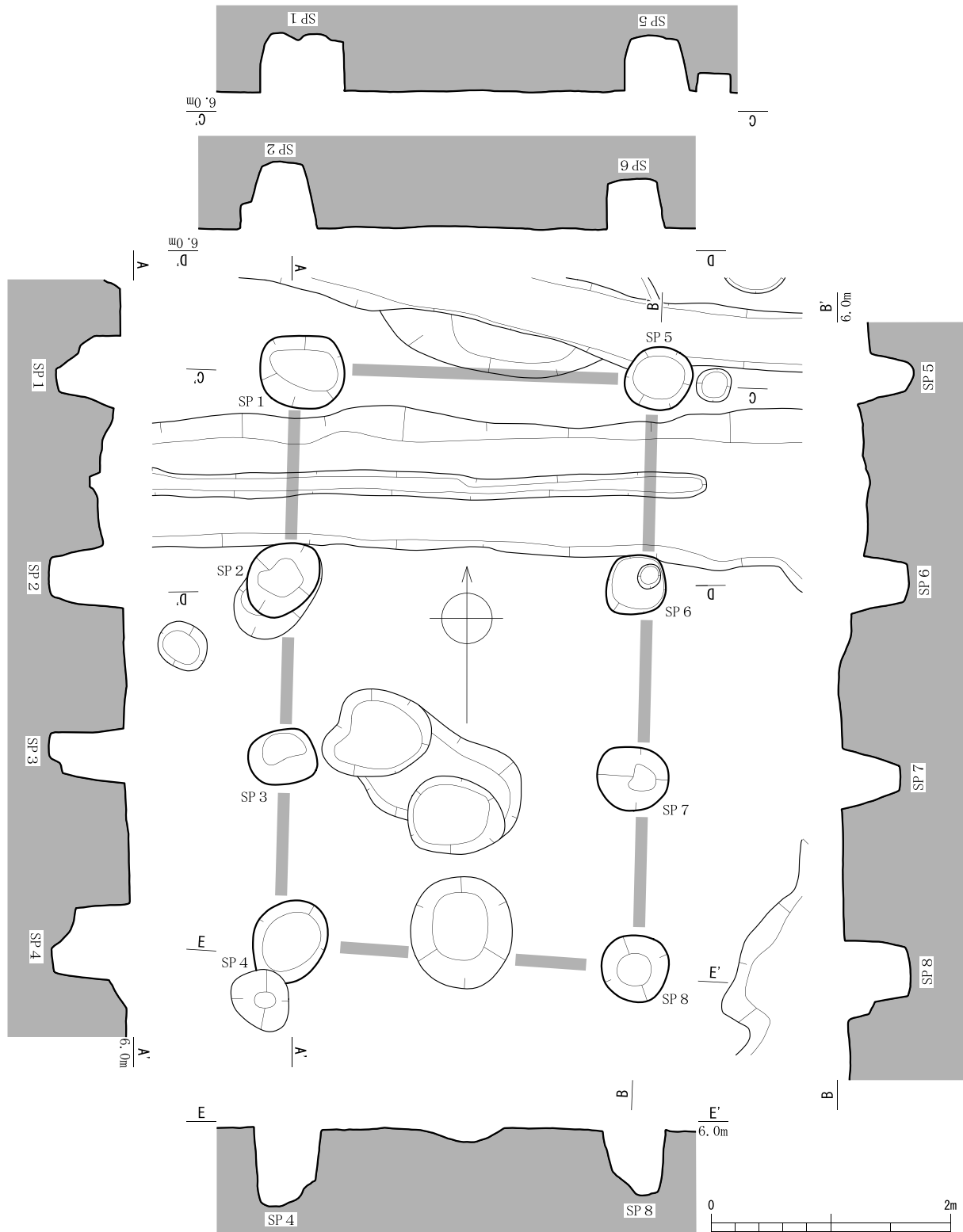
第 6 図 SB004・005 遺構実測図 (縮尺 1/50)



SB006-SP 4 遺物出土状況図 (縮尺 1/20)

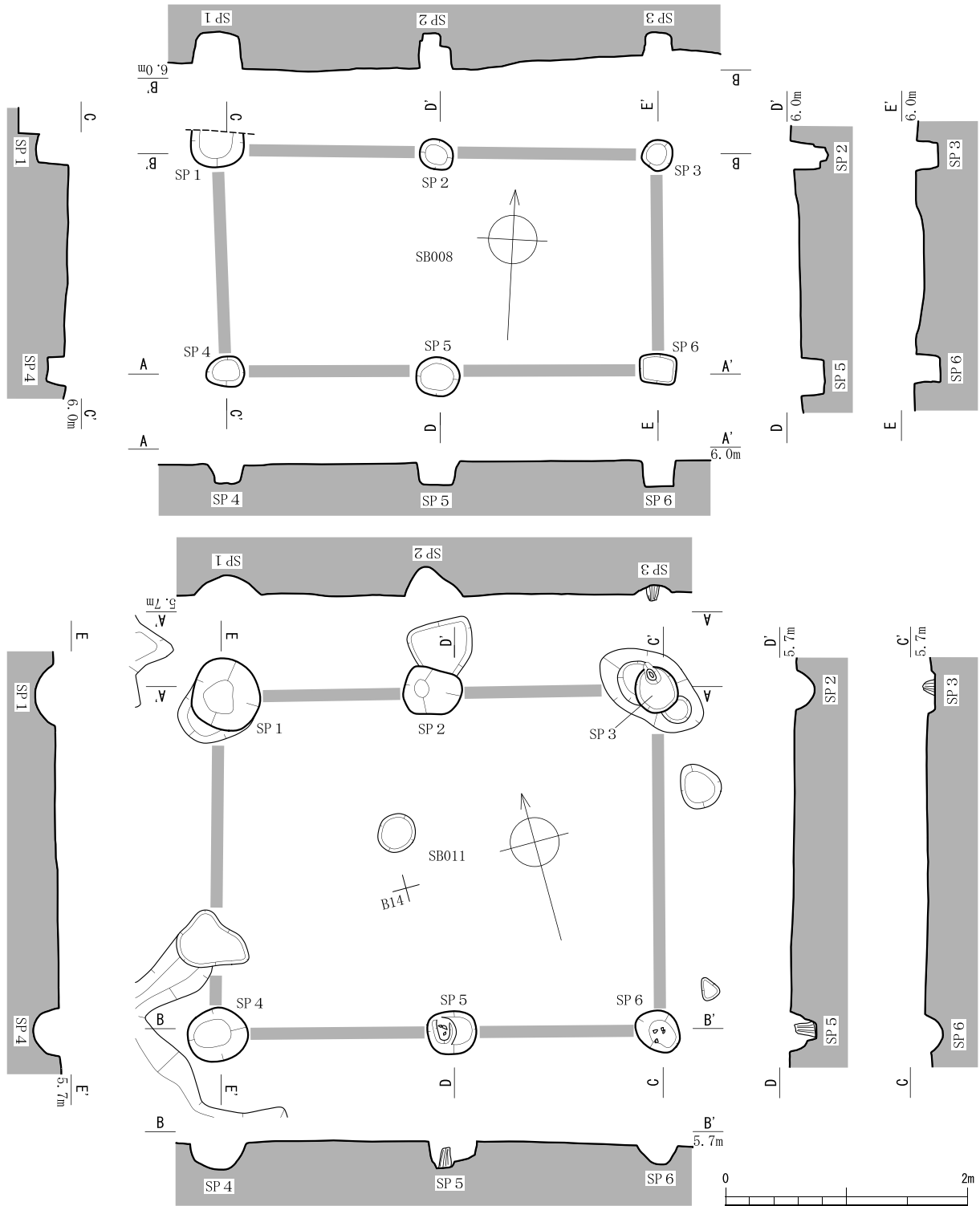


第7図 SB006・007 遺構実測図 (縮尺 1/50)、SB006-SP 4 遺物出土状況図 (縮尺 1/20)、遺構配置図 (縮尺 1/200)



第8図 SB010 遺構実測図 (縮尺 1/50)

なものである。このSB003は1間×3間の8本柱で、ほかの4棟SB004～007は1間×2間の6本柱と想定される。南調査区も側溝などの攪乱で不明確なSB009とSB010の2棟が1間×3間の8本柱で、SB008とSB011の2棟は1間×2間の6本柱と想定される。SB004のSP 2で甕の口縁部片(第25図11)が、SB006のSP 4で小型の脚付鉢(第25図6)が出土している。この土器の時期と周辺の遺構が全て弥生時代後期のものであることから、北調査区の掘立柱建物も同時期と判断した。南調査区ではSB010

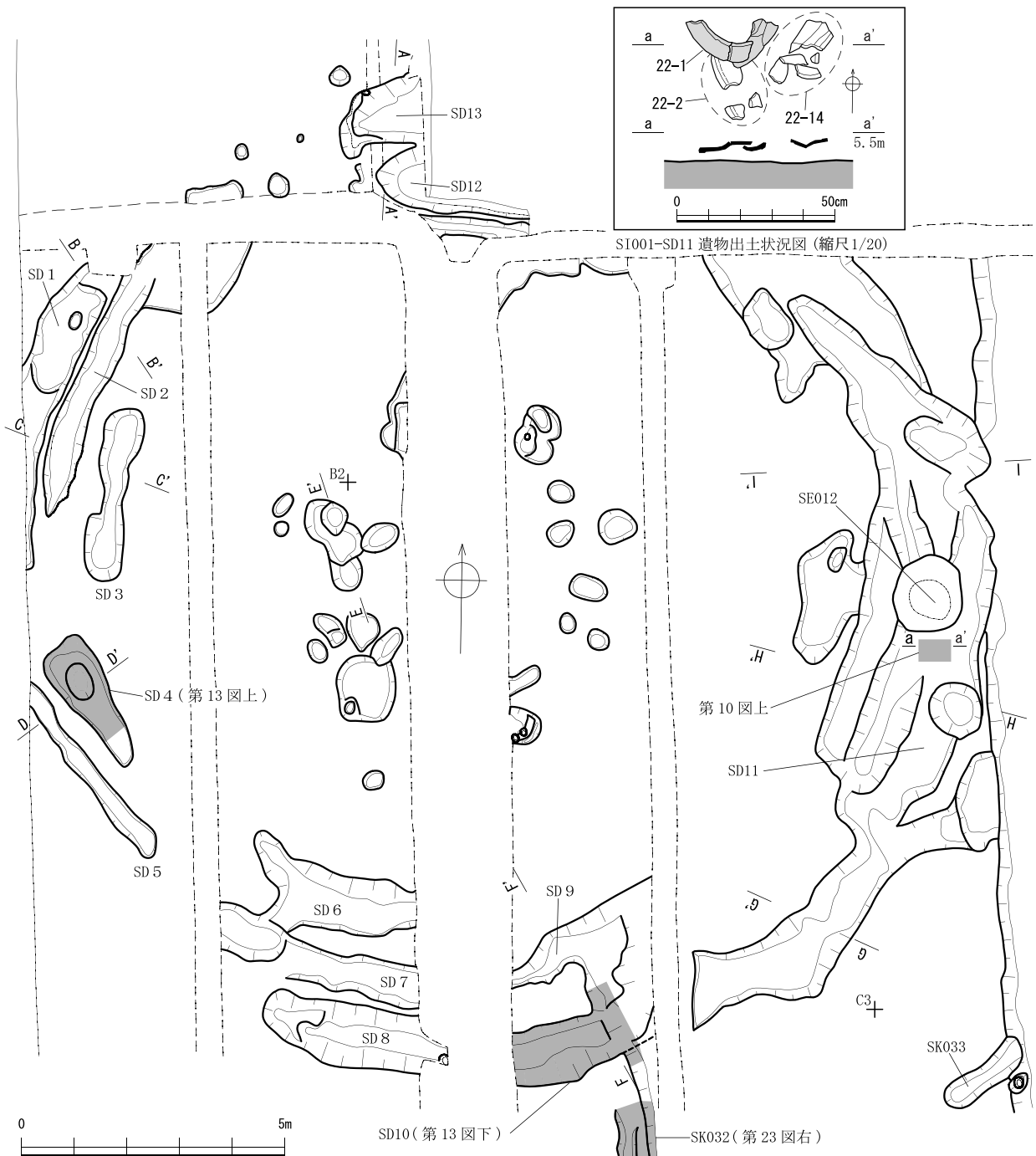


第9図 SB008・011 遺構実測図 (縮尺 1/50)

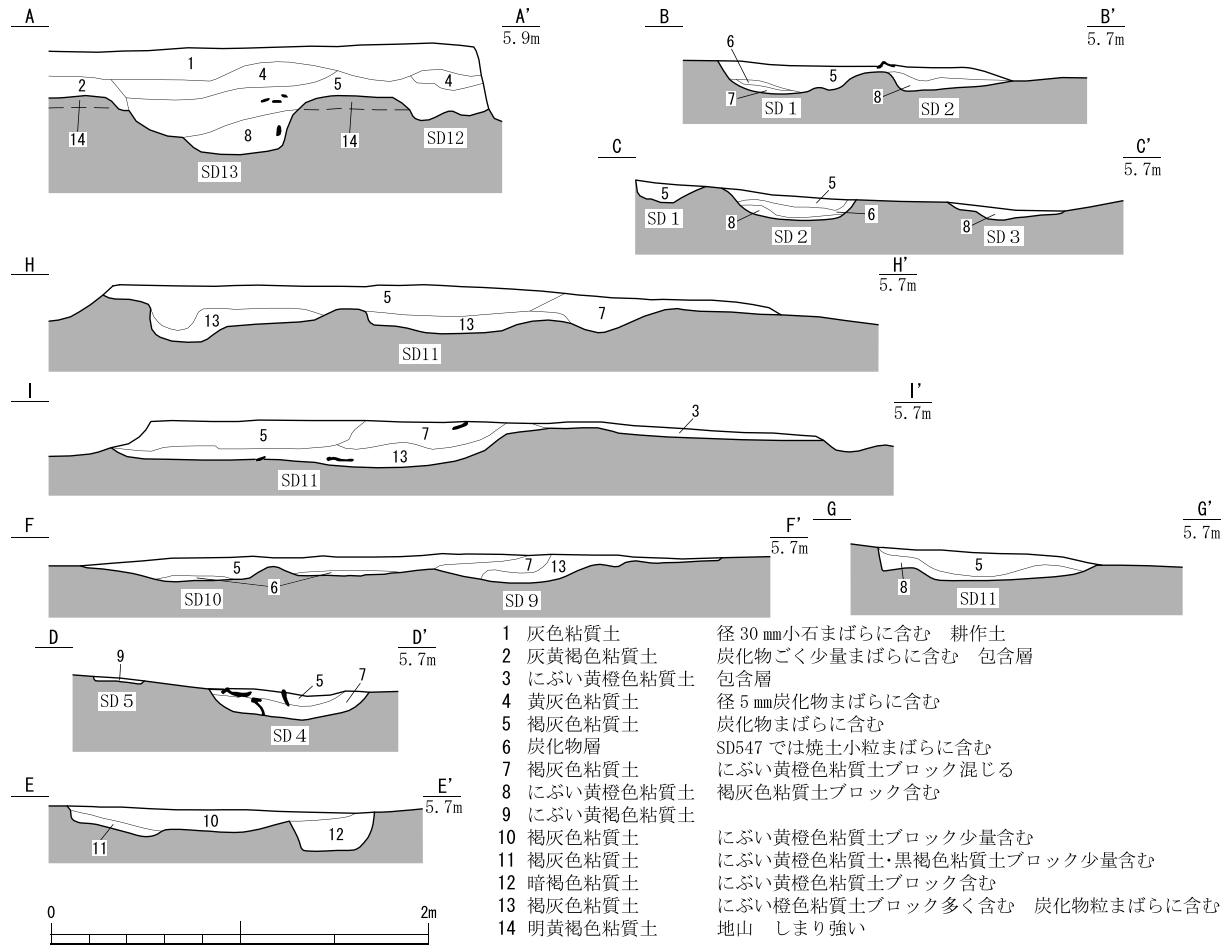
のSP 4で出土した土器2点が図化できたものの(第36図13・14)、これらはいずれも弥生時代後期のものである。この建物の東に隣接するように同時期の土器を出土するSX054があることから、この時期の建物と考えられる。そのほかの建物からは図化できるような土器は確認されていないが、いずれも古式土師器の細片で、その周辺の遺構も古墳時代のものである。よって南調査区の掘立柱建物はSB010以外の3棟は古墳時代のもものと判断した。

第2節 平地式住居

平地式住居は調査区の北端 SI001 とその南の SI002 の2棟ある。SI001 は周溝の北端が調査区外に伸びていたが、農道の側溝と上水道とが重なりすでに破壊されていると判断したため、西側の水田のみ拡張した(第10図)。また西側の周溝西端は調査対象区外へ広がるため確認できなかった。周溝は居住範囲の外に設けられたものと考えられ、いずれも全周しない。南北の最大径 18.96 m 以上、東西の最大径 18.36 m 以上を測る。東側は最終的に一条の溝に見えるが、西側は3条の溝として確認される。これら溝の切り合い(第11図)は不明であるため同時期か、もしくは前後関係は不明である。いずれの溝の平面も不整形で、幅や長さも一定ではなく、凹凸が大きい。溝に囲まれた内部中央の約 8 m 四方に大き



第10図 SI001 遺構平面図 (縮尺1/120)、SI001-SD11 遺物出土状況図 (縮尺1/20)

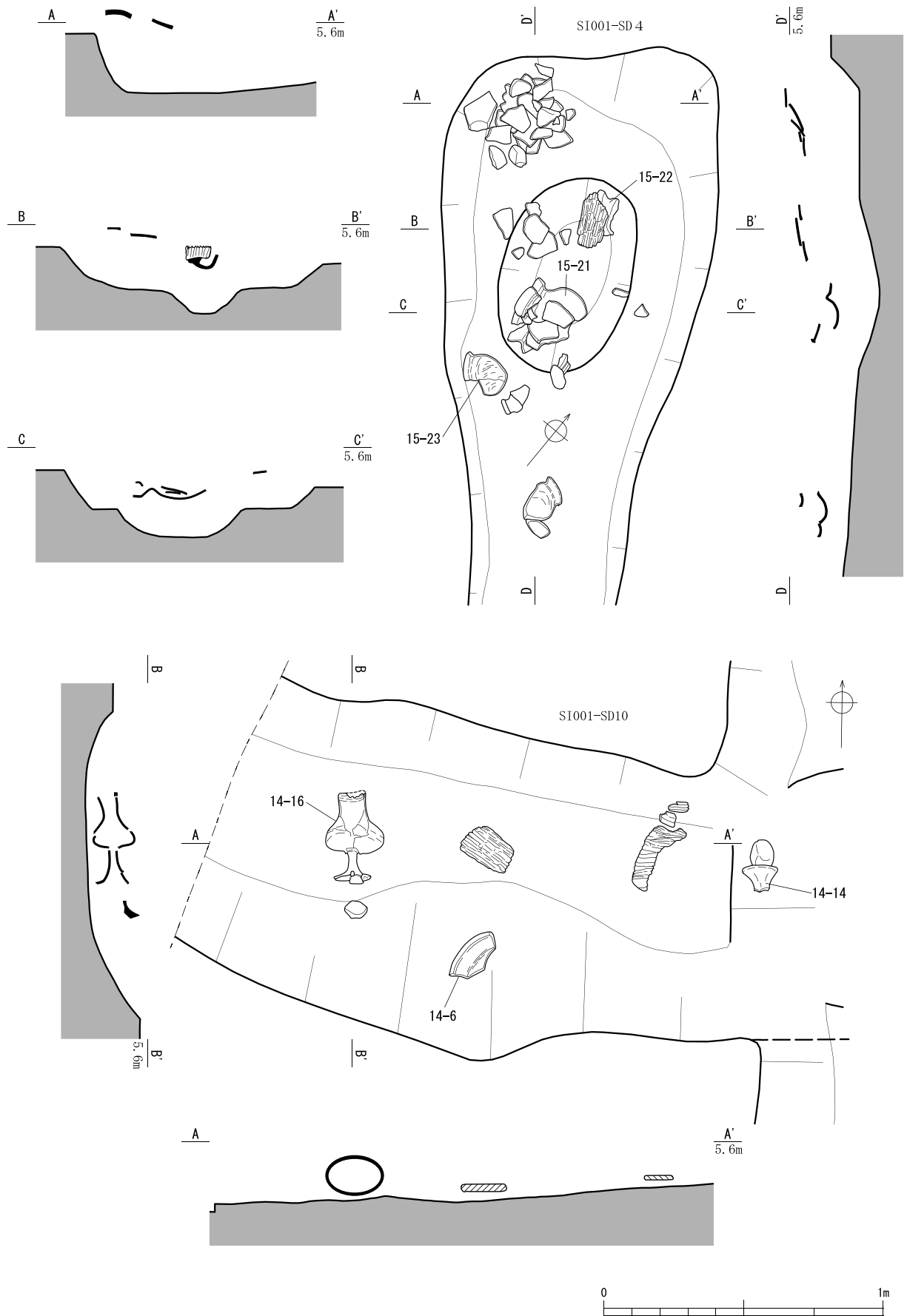


第 11 図 SI001 遺構断面図 (縮尺 1/40)

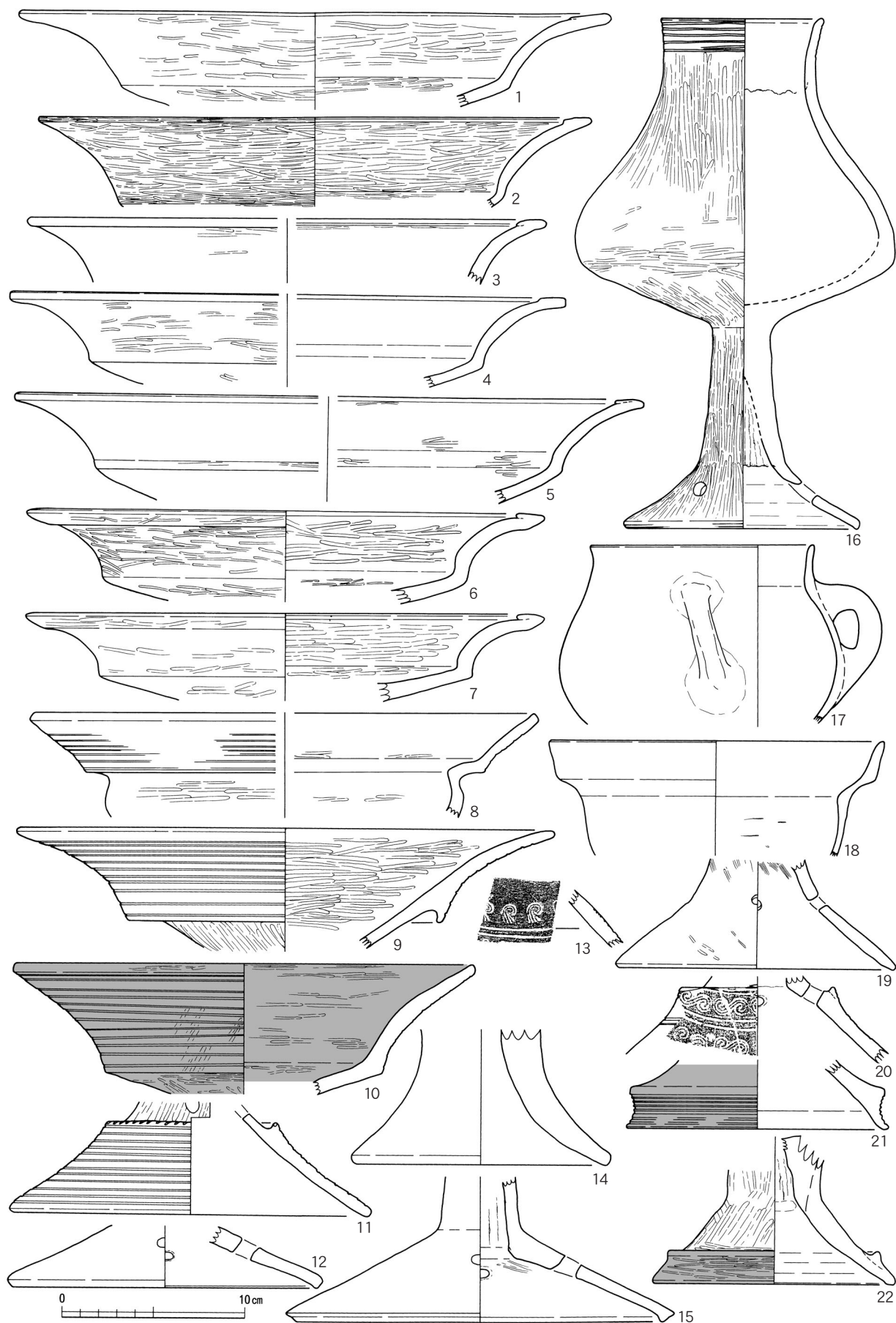
さ・深さが不揃いのピットが円形に約 20 基前後集中する。これらがこの住居の柱穴であると考えられるが、配置にも規則性がなく柱穴であることを特定できない。溝はSD 1 からSD13の 13 条を検出し、SD 1 やSD13には炭化物が集中する部分もあった。遺物は溝の各所から土器が出土し、甕・高坏や弥生時代後期を代表する台付壺など 20 点を図化した。SD 1 では甕口縁 3 点(第 15 図 7・10・11)、SD 2 では甕口縁や高坏など 4 点(第 14 図 4・15・20、第 15 図 6)、SD 4 では甕・壺・鉢など各 1 点(第 15 図 21・22・23)がまともに出土している(第 13 図上)。SD 5 では高坏(第 14 図 5)など 2 点、SD 6 では高坏 1 点(第 14 図 1)、SD 7 では高坏・器台・把手付鉢など(第 14 図 3・9・11・17) 4 点、SD 8 では甕口縁や台付壺など(第 14 図 12、第 15 図 9・19・12) 4 点、SD10からは高坏など(第 14 図 6・14)や、この時期を代表する台付壺



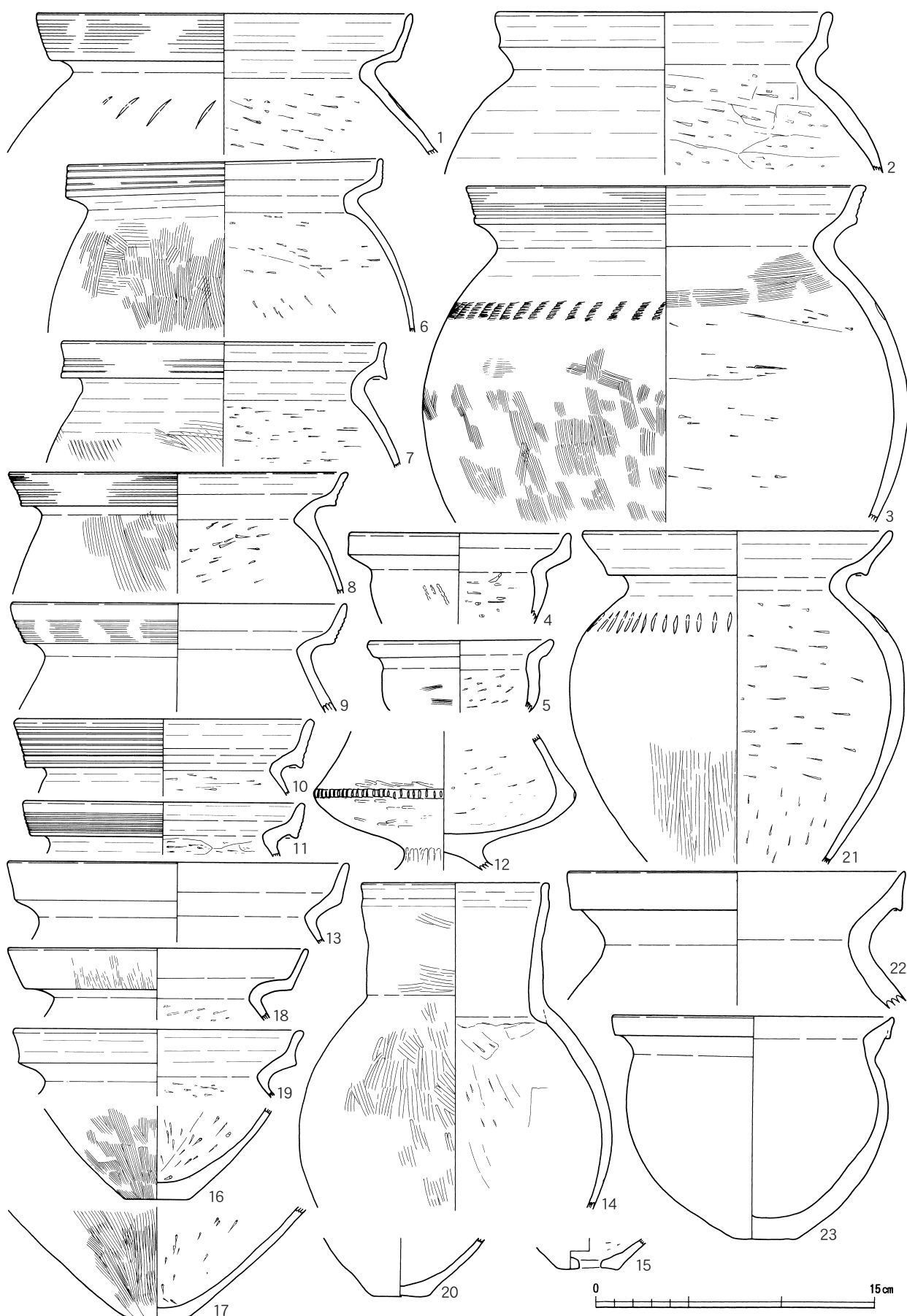
第 12 図 SI001 溝出土スタンプ文・壺 (左)・脚部 (右)



第13図 SI001-SD4・SD10 遺物出土状況図(縮尺1/20)



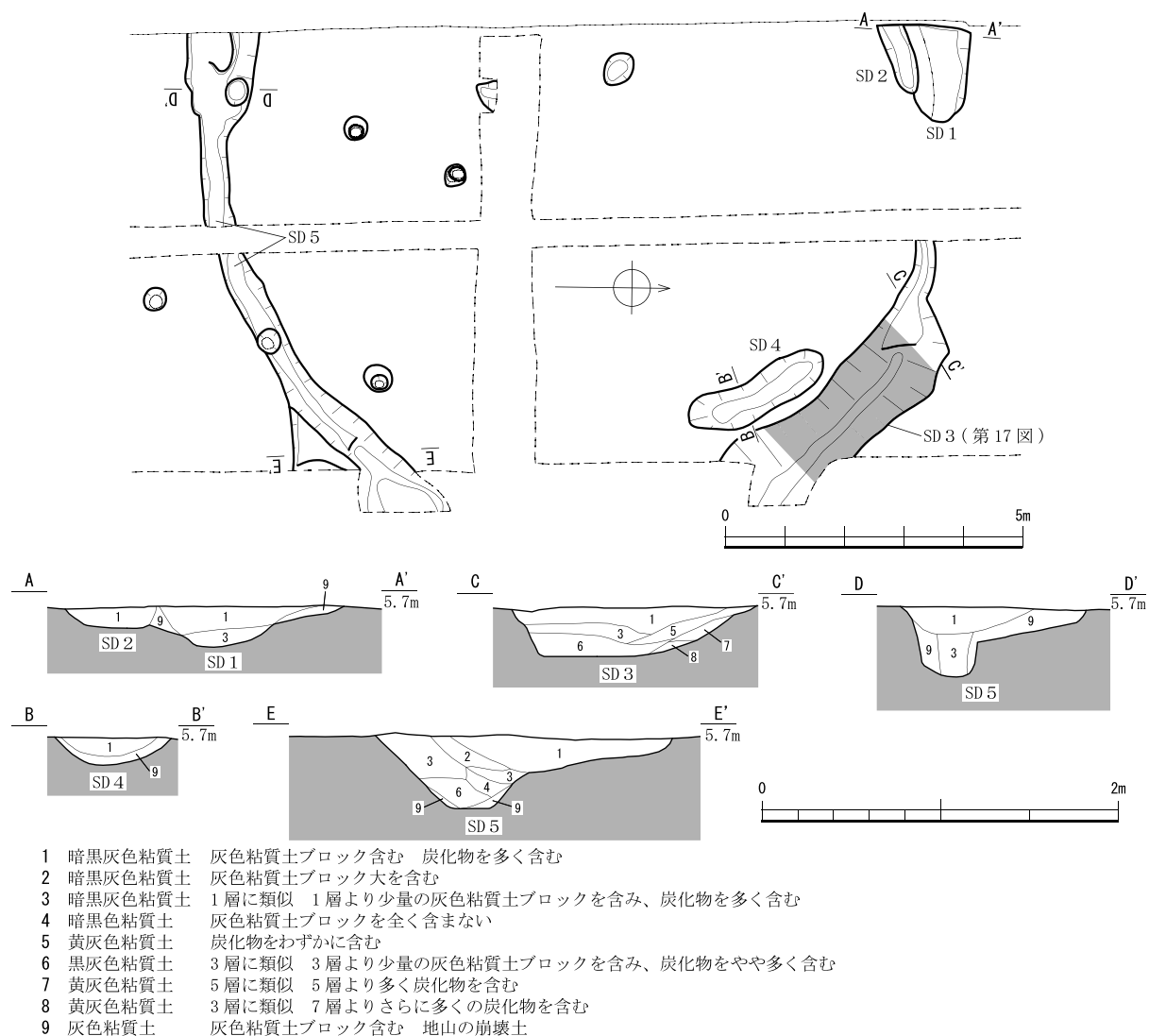
第14図 SI001 出土弥生土器実測図(1)(縮尺1/3)



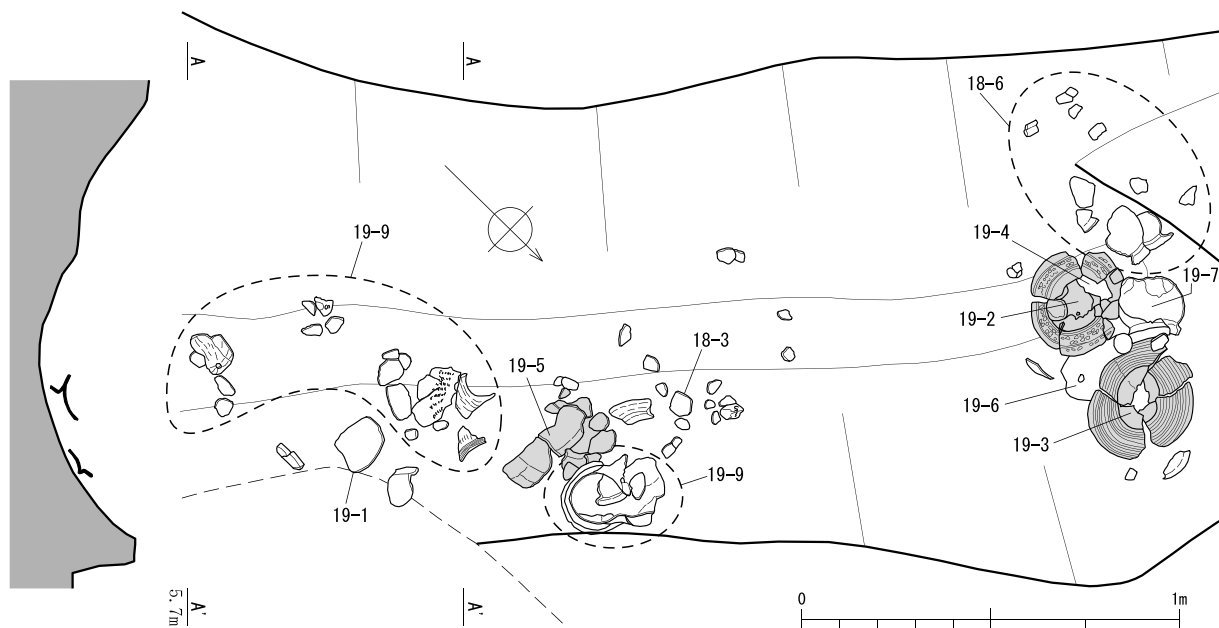
第15図 SI001出土弥生土器実測図(2)(縮尺1/3)

(第14図16)がほぼ完形で出土している(第13図下)。SD11はいくつかの溝がまとまったもので、甕や高坏など20点を図化した(第14図2・7・8・10・13・18・19・21・22、第15図1～5・8・13～17)。SD11でも井戸付近(第10図上)で出土したもの(第22図1・2・14)は、SE012の井戸内部から出土した土器(第22図3～13・15)と比較しても大きな違いは見られない。スタンプ文のある土器もこの時期の特徴で、その多くはS字が横に並ぶもの(第12図右・第14図20)で、ほかに同心円文などが若干ある。ここで注目されるのは、胴部と考えられる壺の小片(第12図左・第14図13)である。この小片には2条の沈線の上に、円形の渦文から鳥の尾が開くように「J」字状に伸びるスタンプ文が並ぶ。単体の渦文に三角形の鋸歯文を組合せた「逆さJ字状」とも呼ぶべきもので、ほかに類例が確認できていない。また沈線の下にも何らかのスタンプらしき施文が行われているが、その種類は不明である。あえて既存の分類に従うと、名越・甲斐分類、栃木分類のA類、または高尾分類、岩橋分類のJ字状文などに近く分類できる。拡張したSD13でも同様の時期の甕口縁(第15図18)が出土している。またこの住居南側の溝を中心に玉作関連の資料が出土しており、この住居が玉作関連であったと想定される。

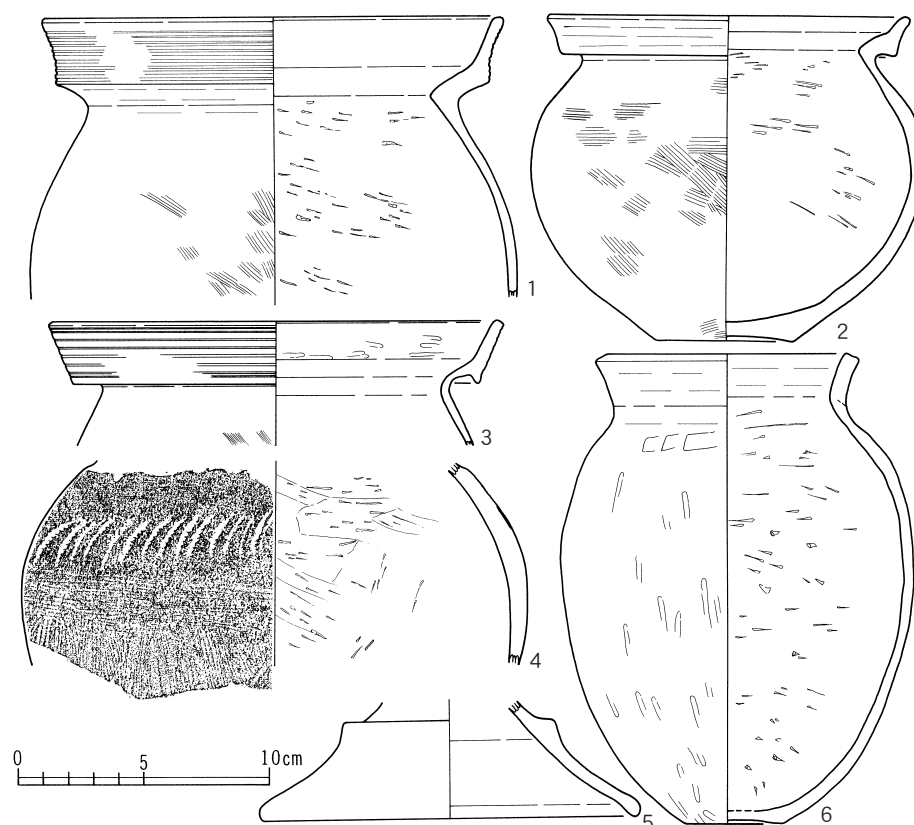
さらにこの南に一回り小さな平地式住居SI002がある(第16図)。こちらは溝が一重で北側は明ら



第16図 SI002遺構実測図(平面図 縮尺 1/120、断面図 縮尺 1/40)



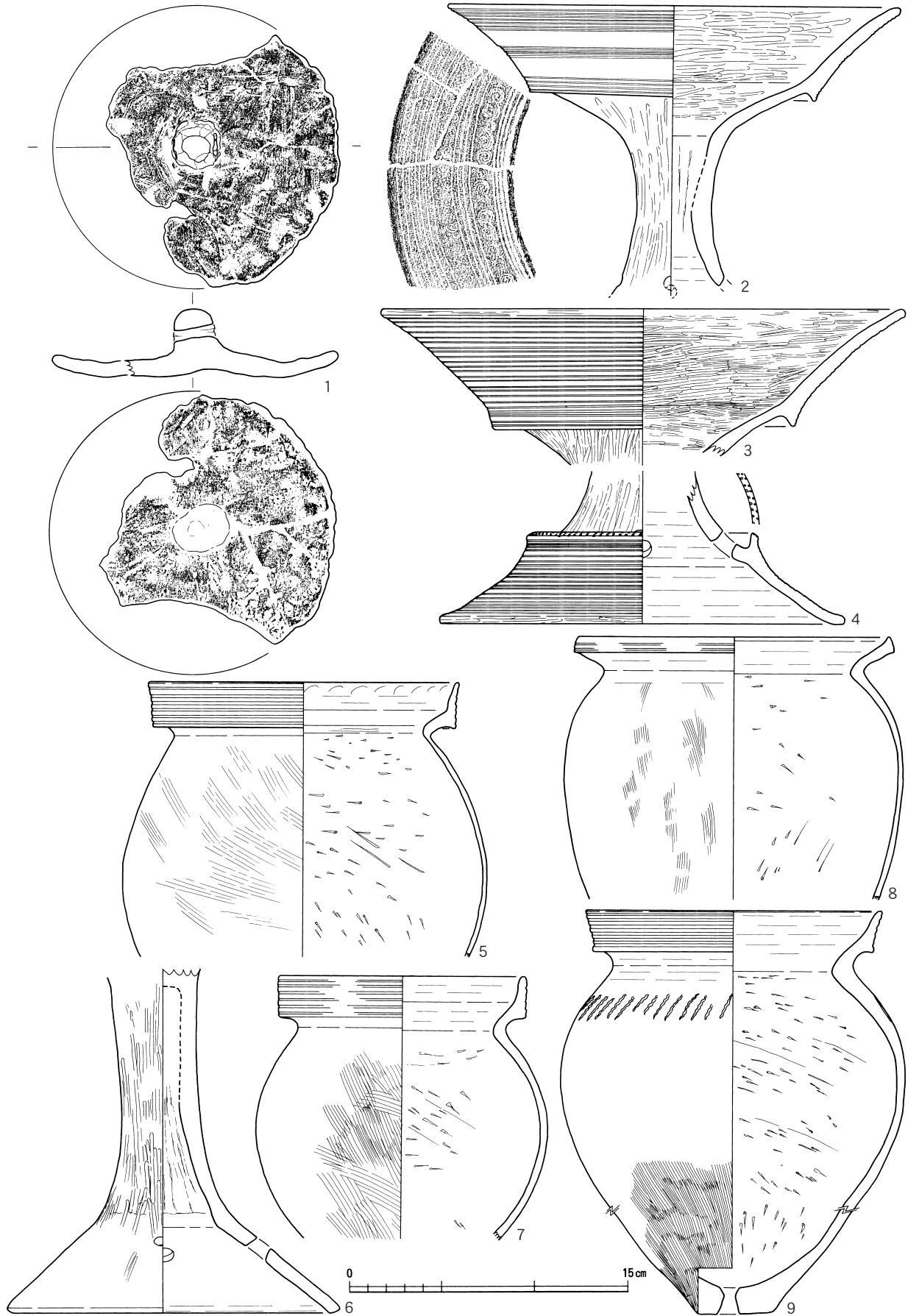
第17図 SI002-SD3 遺物出土状況図(縮尺1/20)



第18図 SI002 出土弥生土器実測図(1)(縮尺1/3)

かに溝が途切れる。西は調査区の外へ伸びて、東は水道管によって破壊されて不明である。溝の幅や深さは一定せず、形も不整形である。南北の最大径 13.2 m、東西の最大径 8.76 m 以上を測る。溝の内部にピットが数基確認されるが、この住居の柱穴と考えられるものではなく、柱穴と想定されるピットが検出されていない。円形周溝墓である可能性も考え

たが、周辺ではそのような事例がないので住居の周溝としておく。溝の覆土には炭が大量に含まれ、遺物は北側の周溝を中心に出土し(第17図)、甕や器台など15点を図化した(第18・19図)。土器の組成や時期はSI001と大きな違いはないが、注目されるのは手捏の円盤に摘みが付く土製品の蓋(第19図1)である。上面・下面とも指押さえて円形にする、いわゆる手捏で、鏡の土製模造品と考えられないこともないが、鏡とするには雑すぎる作りで、本県周辺の弥生時代のものとしては類例もない。しかし、

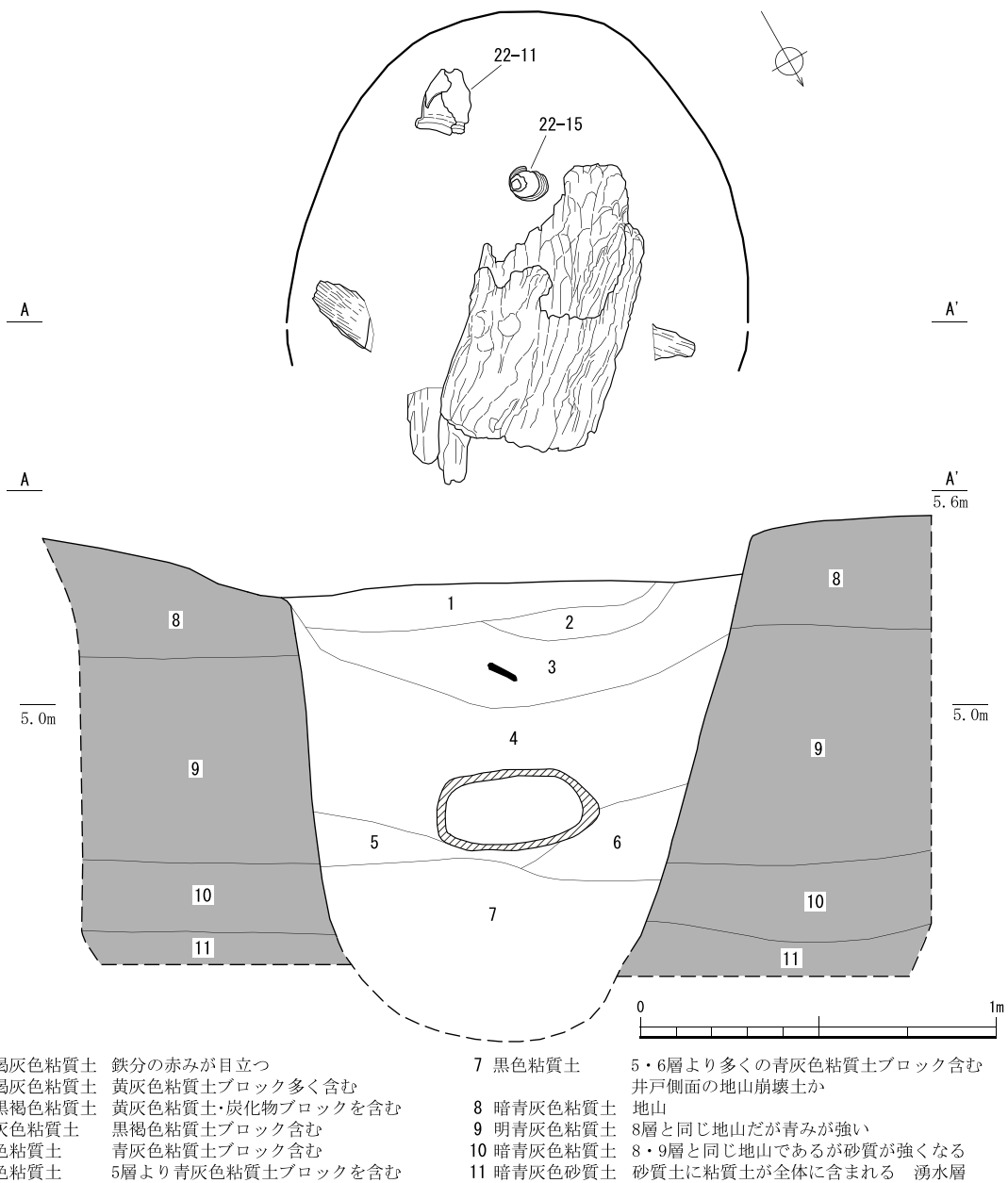


第19図 SI002 出土弥生土器実測図(2)(縮尺1/3)

この時期の蓋は陣笠のような器形に限られるため、ここでは土製の鏡とも、蓋のいずれとも判断がつかない。SI001とは異なりSI002の溝からは玉作関連の遺物は出土していない。平地式住居の溝から出土した土器はいずれも弥生時代後期（北陸では法仏式とされる時期）であるが、甕や器台などを比較するとSI001よりSI002出土の土器がやや新しいと考えられ、一部の土器は併行することも考えられる。

第3節 弥生時代の井戸とそのほかの遺構と遺物

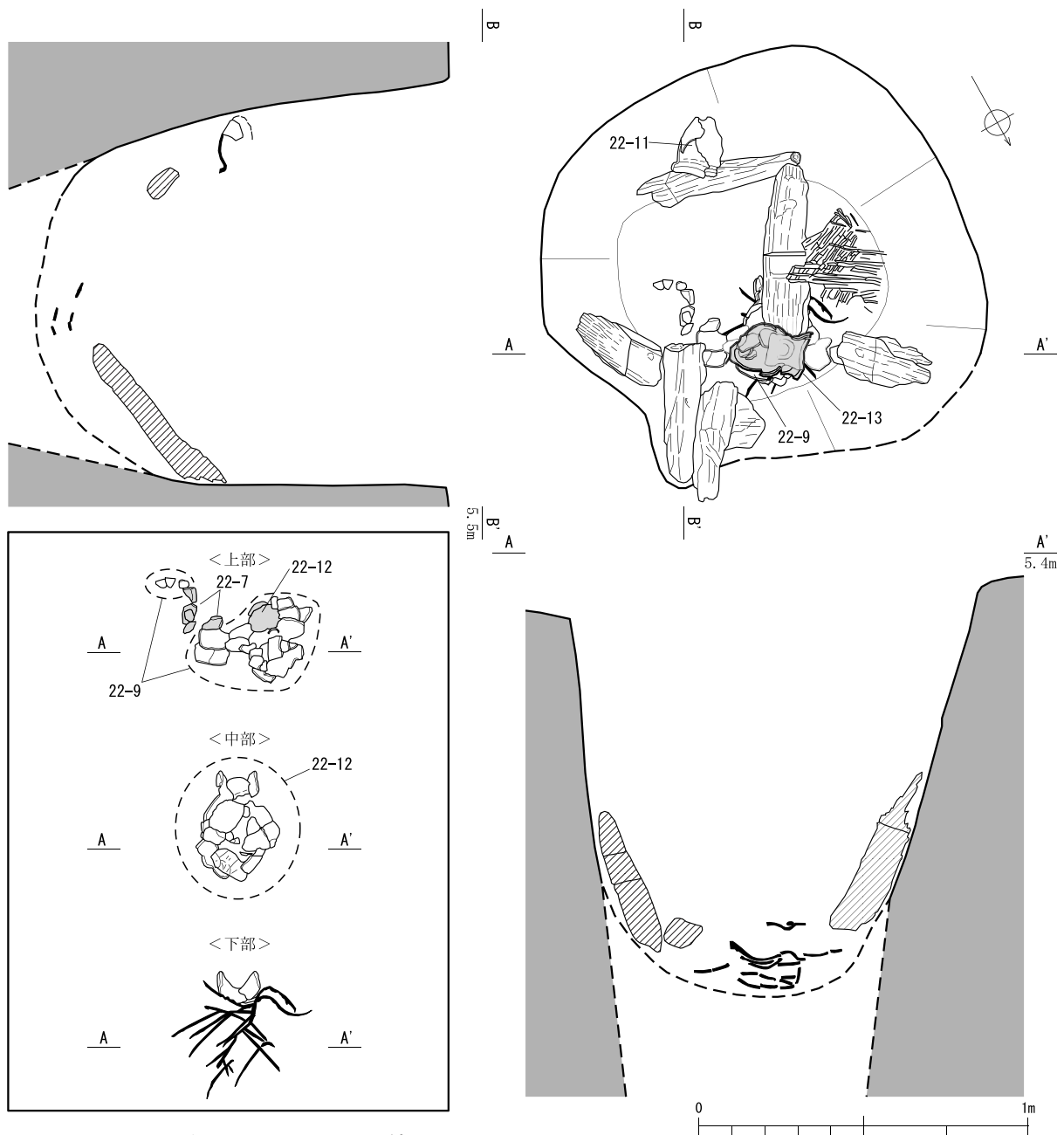
弥生時代後期の井戸SE012が平地式住居SI001の溝SD11の底から検出されている。溝底まで覆土を掘削してから確認されたため、少なくとも同時期かやや先行する時期のものであろう。井戸の直径は約1.2mで、人が入るには狭いため、井戸そのものの北側の一部を断ち割り、堆積状況を確認しながら掘り下げた（第20図）。次第に砂質が強くなり、1.1mほど青灰色粘質土を掘り込み、水が湧き出す付近を底としている。その標高は4.3m前後である。上層では甕（第22図11）と壺脚台（第22図15）が、中層では



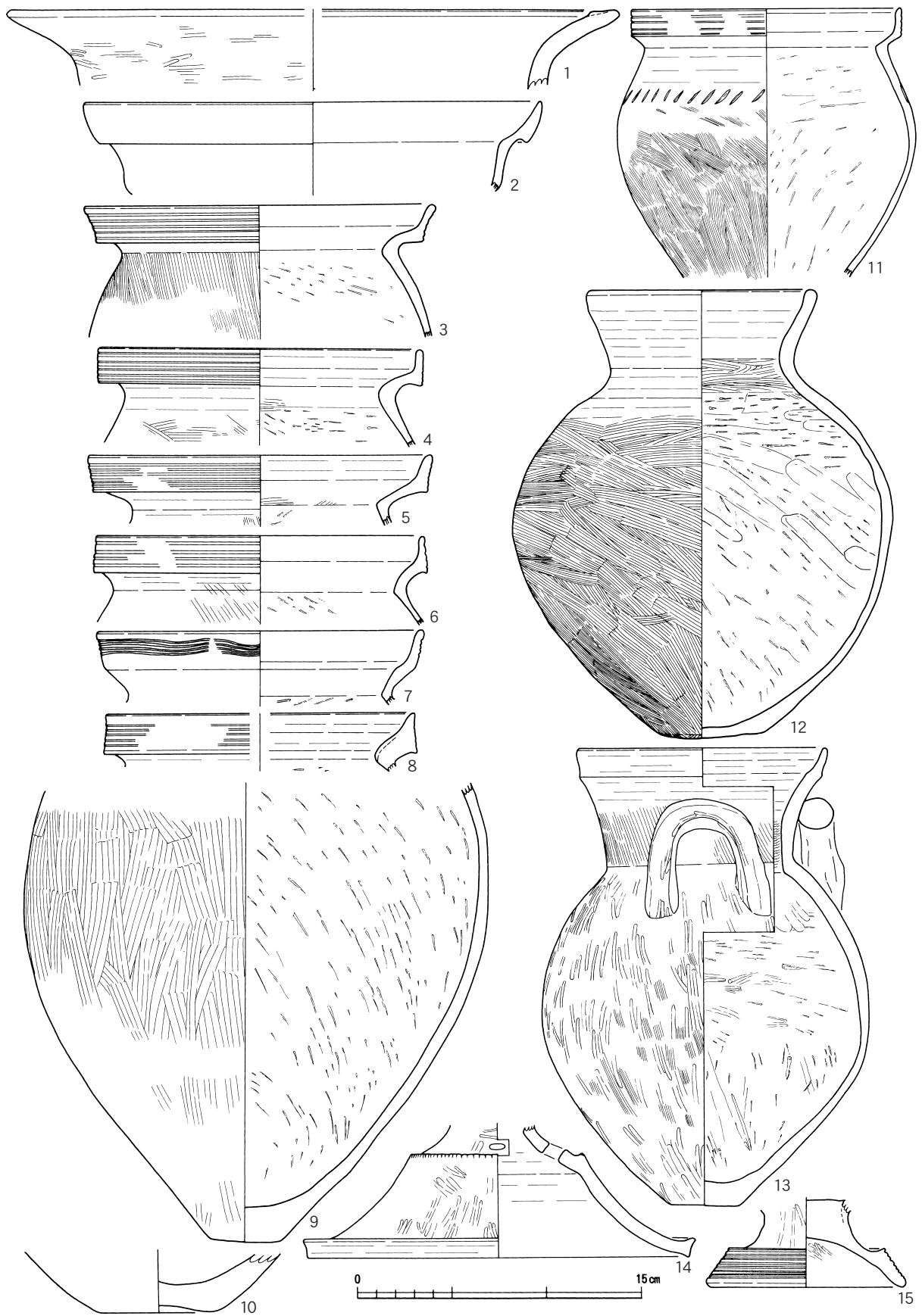
第20図 SE012 遺物出土状況図（1）（縮尺1/20）

割り貫かれた丸太材が横たわって出土している(第20図)。さらにその下では、板材が四方に井戸の側面に立てかけるような状態で検出され、その板材の間に網代のようなものも検出された。遺存状態も良くない残された部材から、どのような構造が復元できるかは明確に出来ないが、単純なものではないように考えられる。出土状況から、上層に割り貫きの丸太材が、その下に縦に置かれた四本の板材と箆状の籠のようなものがあることが確認された。木材や箆状の籠の下から略完形に復元できた壺2点と甕の胴部片が折り重なるように出土した(第21図)。一番上に把手を横位につける水差しの壺(第22図13)、その下に接して甕の胴部下半(第22図9)が、さらにその下に完形に復元された壺(第22図12)と、3個体が重なるように出土した。最下層の壺は頸部から口縁部をヨコナデ調整とし、それ以下をヨコハケ調整とする、特に器形に特徴のないものである。このほかに図化できた土器は、甕の口縁部など小片(第22図3～8)である。

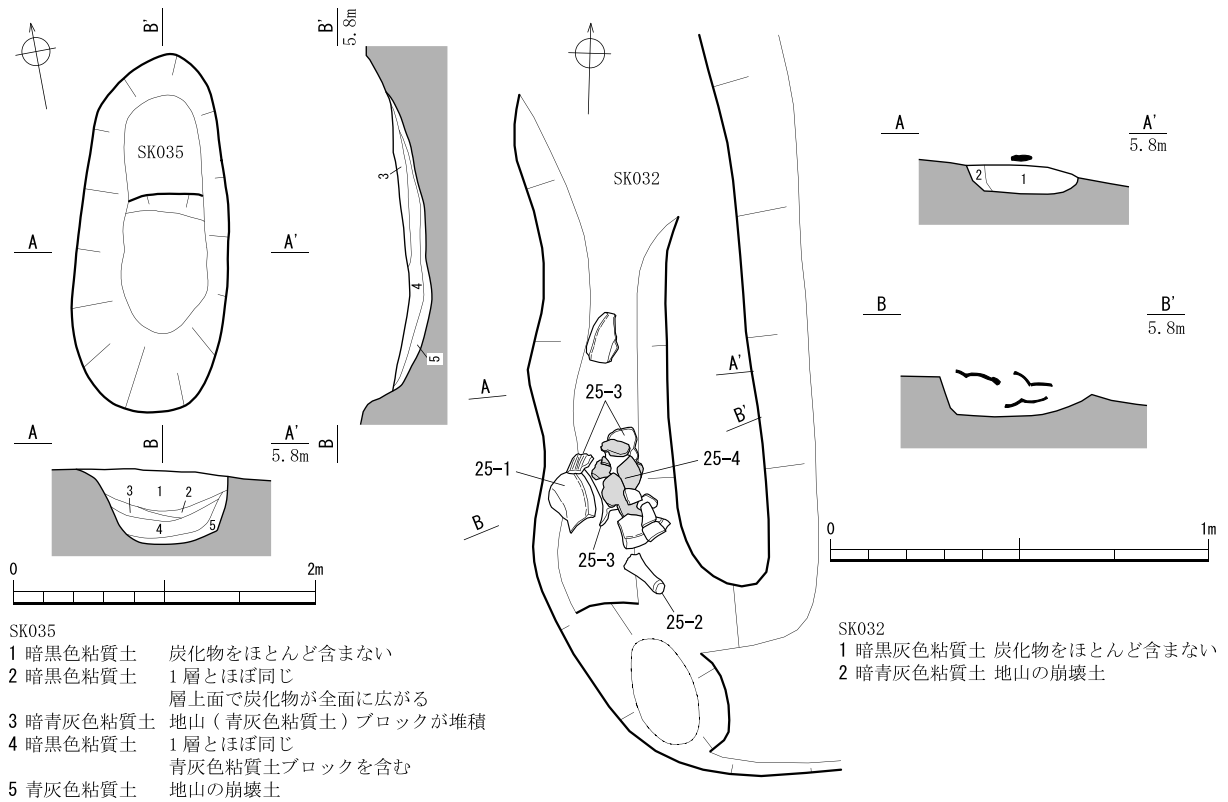
弥生時代の遺構は、このほかに土坑や溝が北調査区全体に点在する。SK032はSI001のSD10から南に



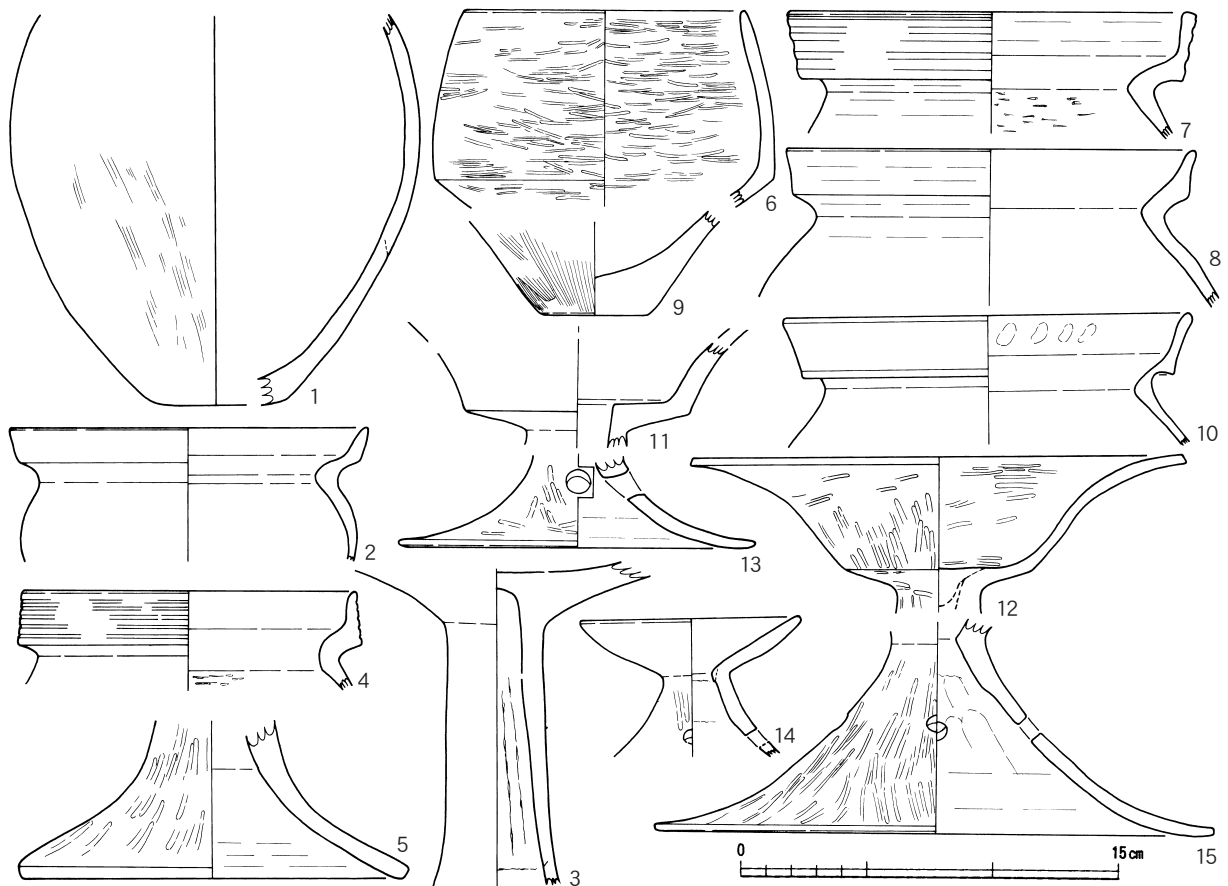
第21図 SE012 遺物出土状況図(2)(縮尺 1/20)



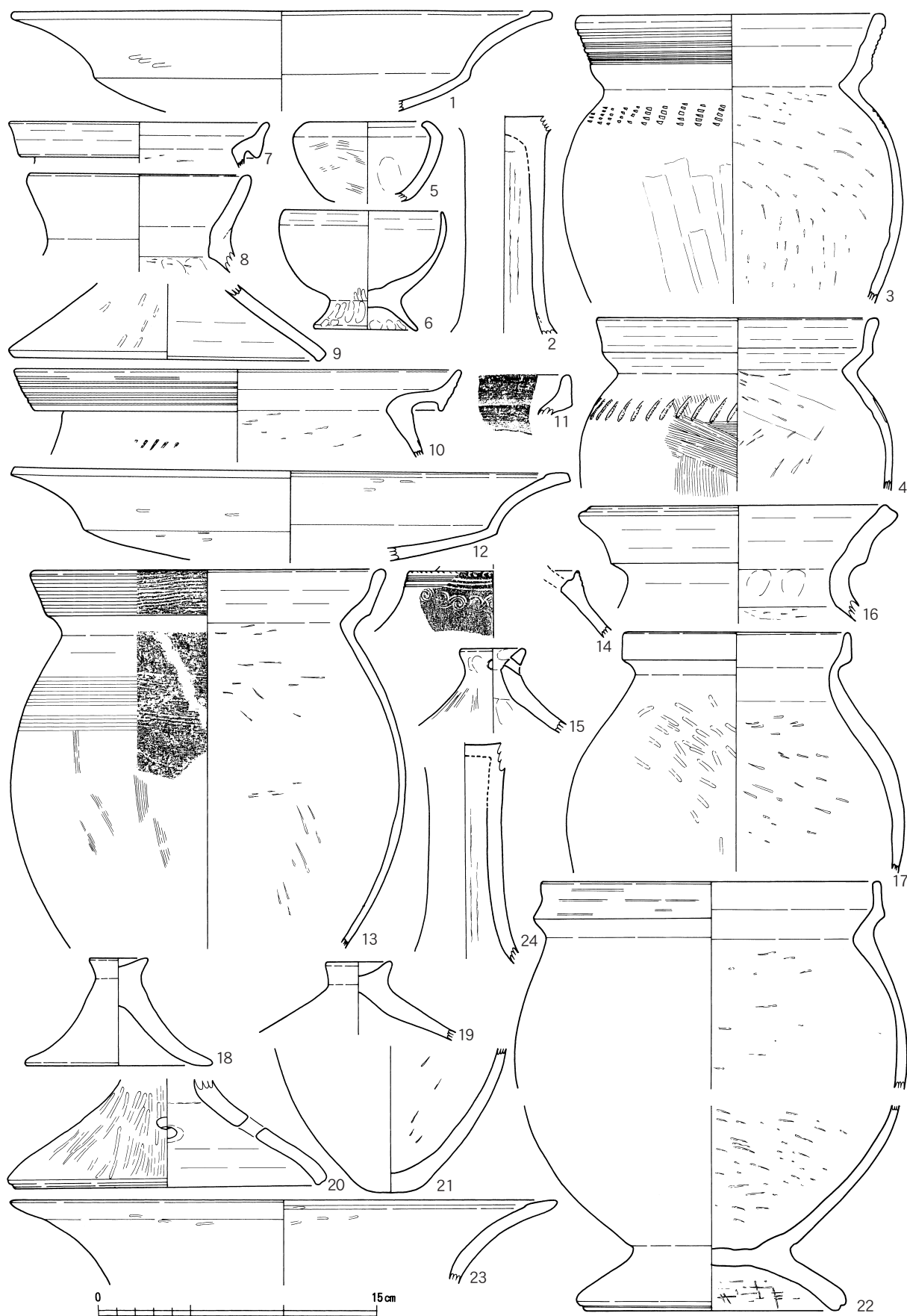
第22図 SE012出土弥生土器実測図(縮尺1/3)



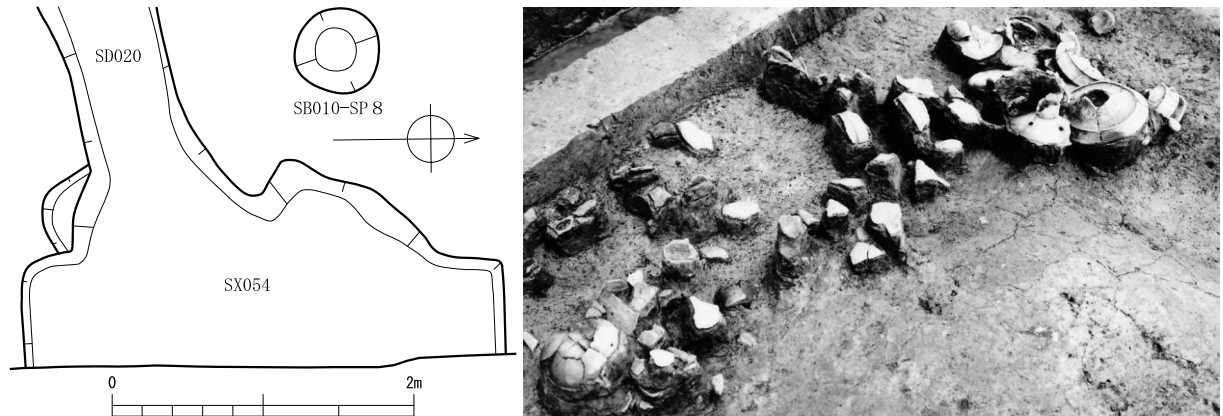
第23図 SK032 遺物出土状況図（縮尺 1/20）、SK035 遺構実測図（縮尺 1/50）



第24図 弥生土器実測図（1）（縮尺 1/3）

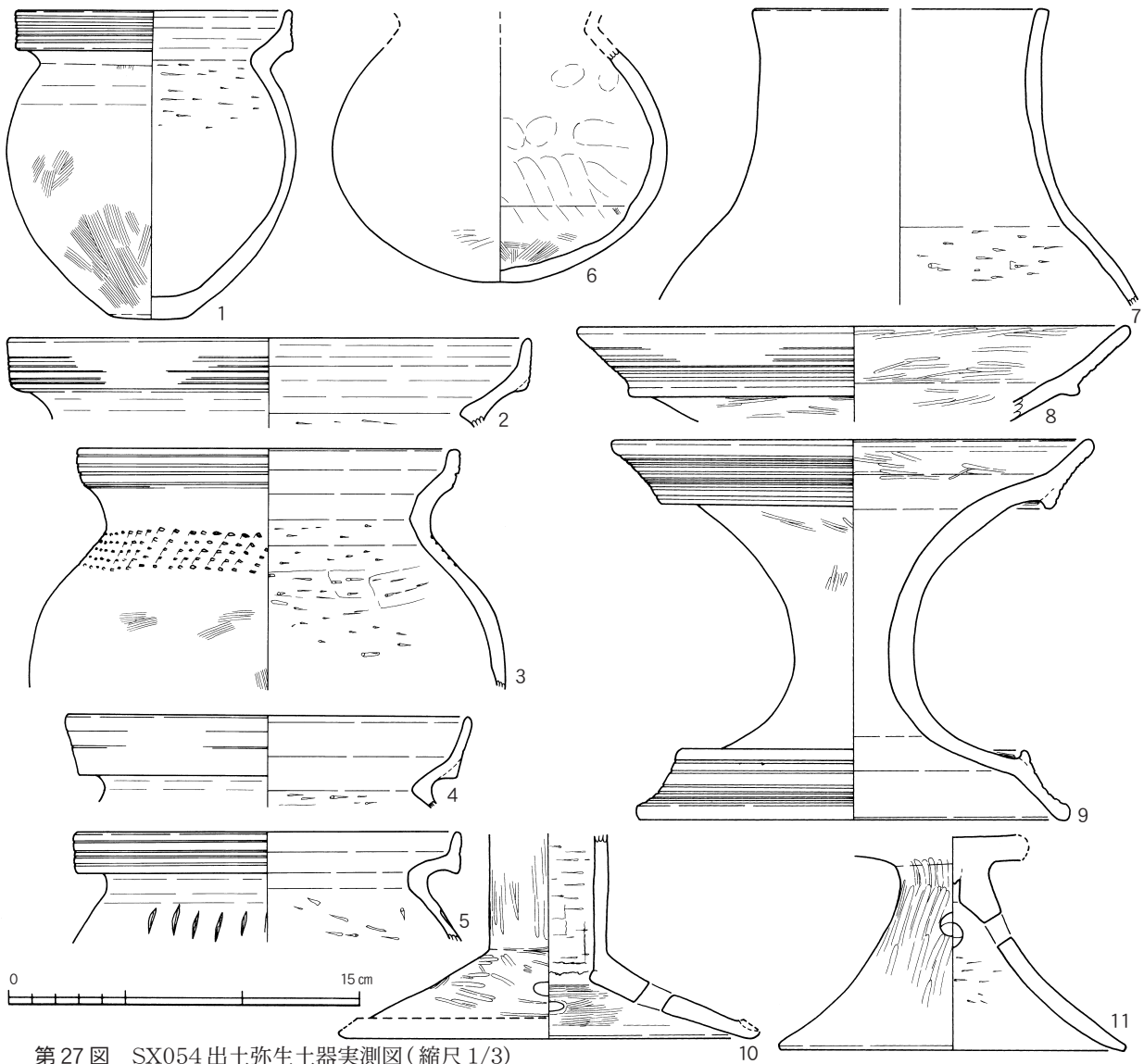


第25図 弥生土器実測図(2)(縮尺1/3)



第26図 SX054 遺構実測図(縮尺1/50)、遺物出土状況(北西より)

伸びる溝、もしくは細長い土坑である(第23図)。その切りあいは確認することはできなかったが、SI001の溝に先行する状況がうかがえ、土器もSI001よりやや古いようである。土器は南側でまとまって出土し(第23図右)、4点を図化した、甕の2点はこの調査区の後期の土器としては比較的古いものである。

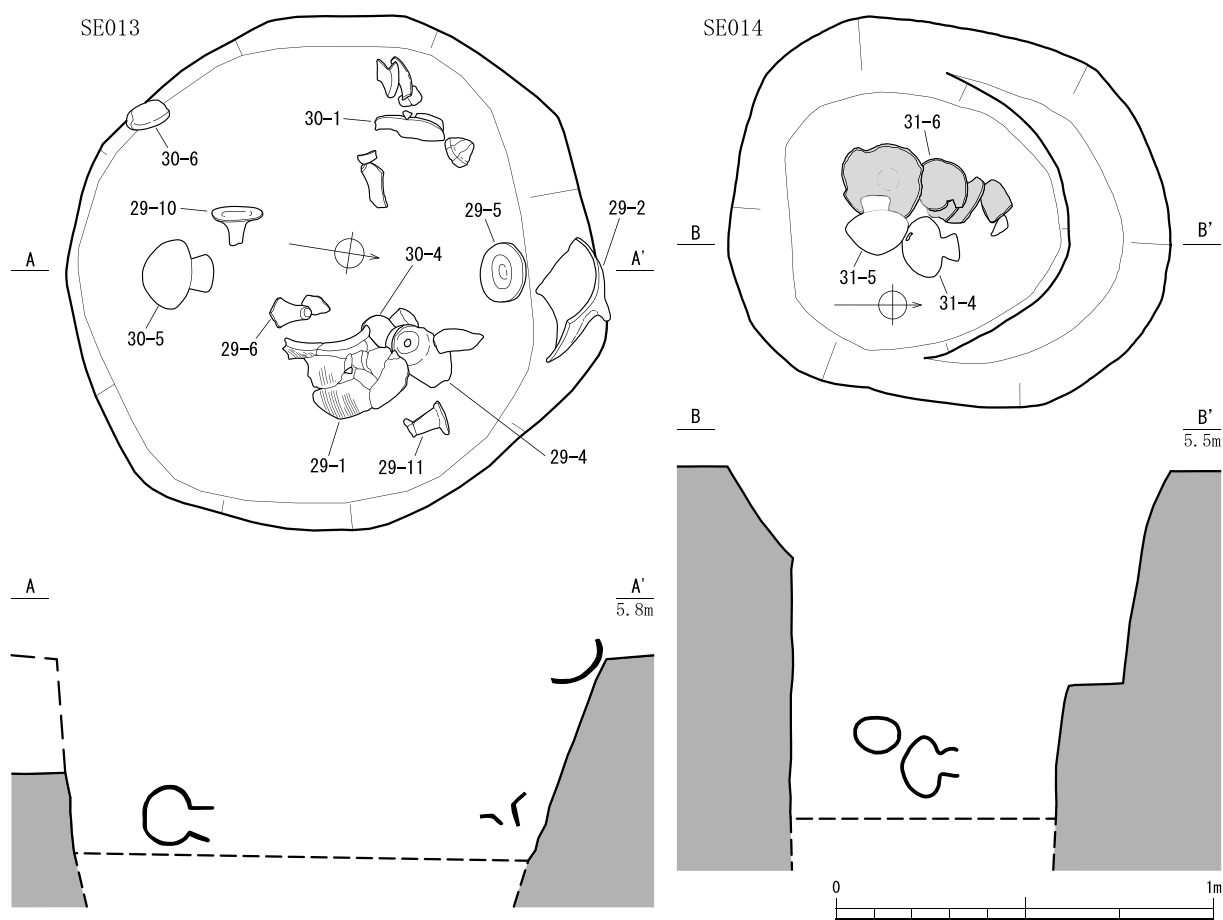


第27図 SX054 出土弥生土器実測図(縮尺1/3)

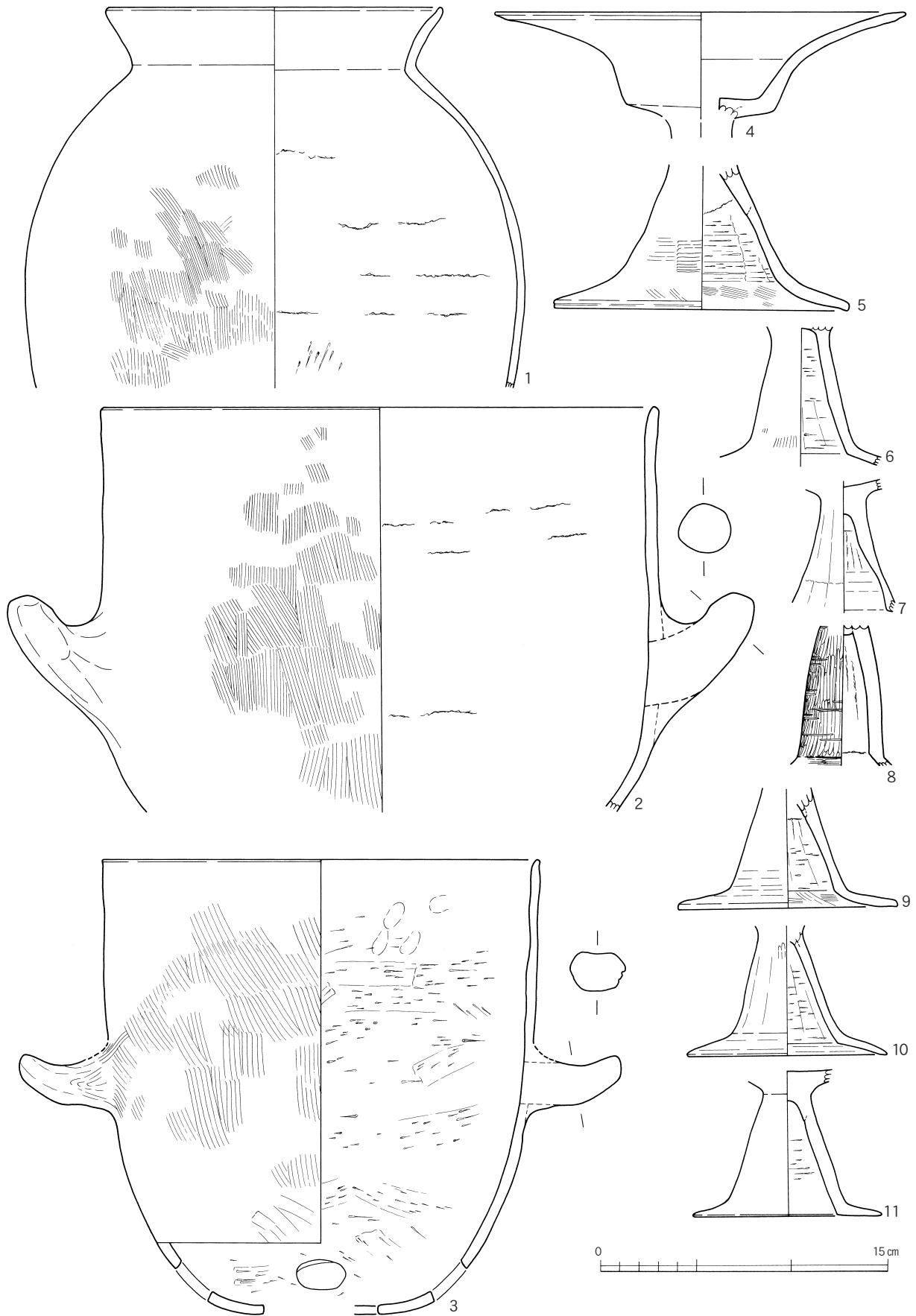
SK034は東西に伸びているが、その東側を攪乱の溝で切られている（第4図）。深さも10cmほど浅い。甕2点や壺、スタンプ施文のある高坏脚など合計7点の土器を図化した（第25図13～17、20・21）。SK035はSI002の東に位置し、南北に細長い土坑である（第23図）。この中層で非常に大量の炭化物が面的に広がる。いずれも破片は小さいが、甕や高坏の口縁など5点を図化した（第25図7～10・12）。これまで説明してきた弥生時代後期の遺構は北調査区であるが、南調査区でこの時期の土器を出土したSX054は農道に近い調査区の北寄り（C11グリッド）の調査区の東壁にかかって検出された（第26図）。そのほかの遺構のようにプランが明瞭ではないが、南調査区では包含層からもその出土が確認されなかった後期土器が出土した。北調査区のSK032などの土器と同じく、後期でも平地式住居などの溝から出土している土器よりもやや古い時期のもので、甕（第27図3）や器台（第27図8・9）などがまとまっていた。北調査区の平地式住居などの溝から出土している土器とほぼ同じ時期、もしくはやや古くSK032と同じような時期である。ただしSX054出土の土器にはSK064などと同じような明らかに時代が下る可能性のある土器（第27図6・11）が紛れ込んでおり、掘り込みなども確認されず、遺構としての性格は不明である。一方、北調査区のほとんどの遺構には古墳時代まで下るものがないが、唯一SK048では古墳時代初頭の土器を出土した。高坏1点（第24図12）・器台4点（第24図11・13～15）の5点を図化した。

第4節 古墳時代の井戸とそのほかの遺構と遺物

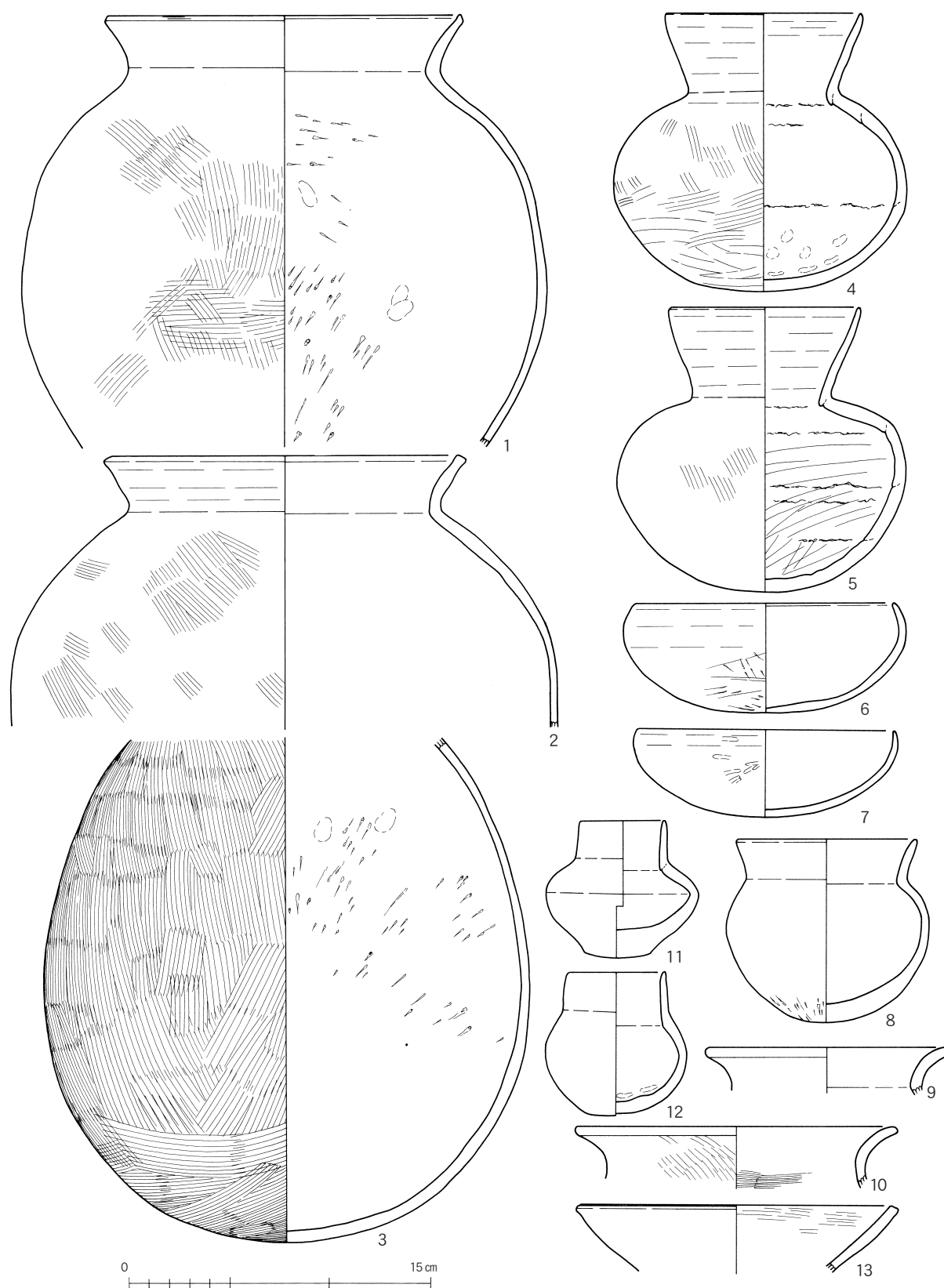
井戸は古墳時代でも前期のものは確認されず、南調査区において中期の範疇に納まる土器を出土する



第28図 SE013・014 遺構実測図（縮尺1/20）



第29図 古墳時代井戸出土土器実測図 (1) (縮尺 1/3)

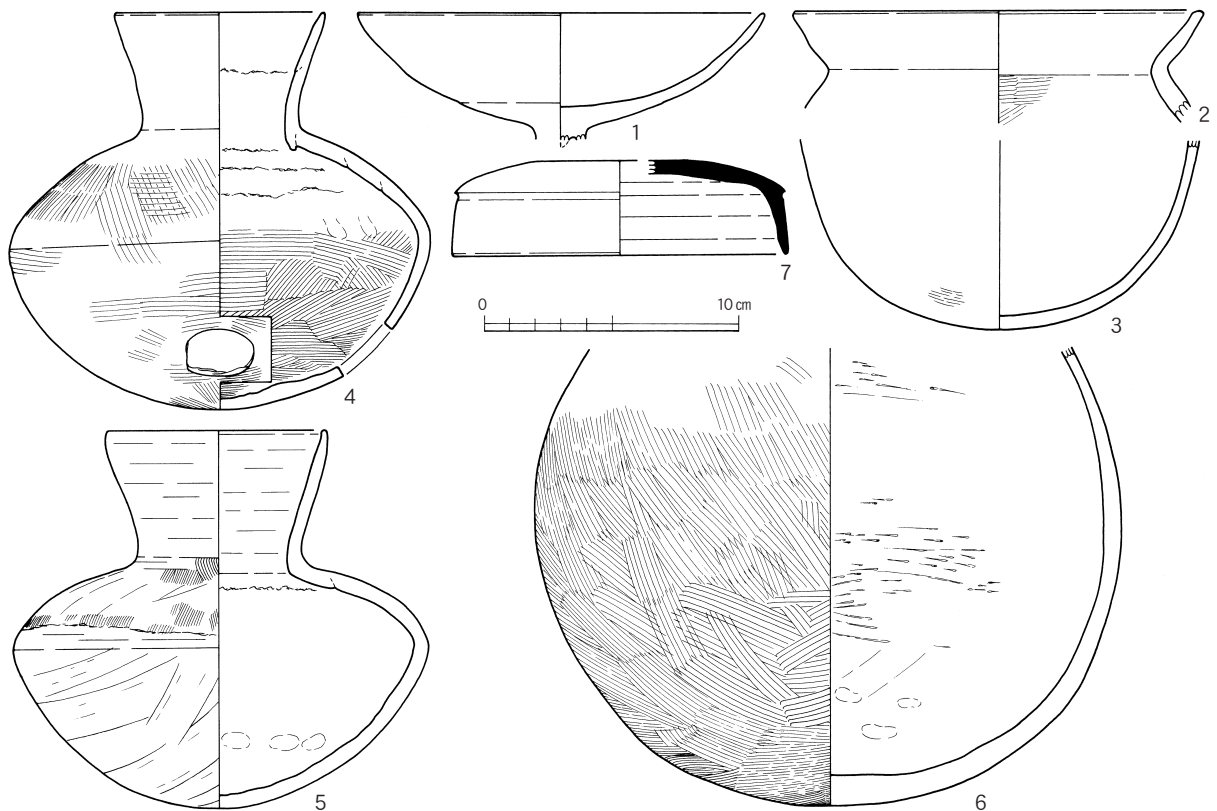


第30図 古墳時代井戸出土土器実測図 (2) (縮尺 1/3)

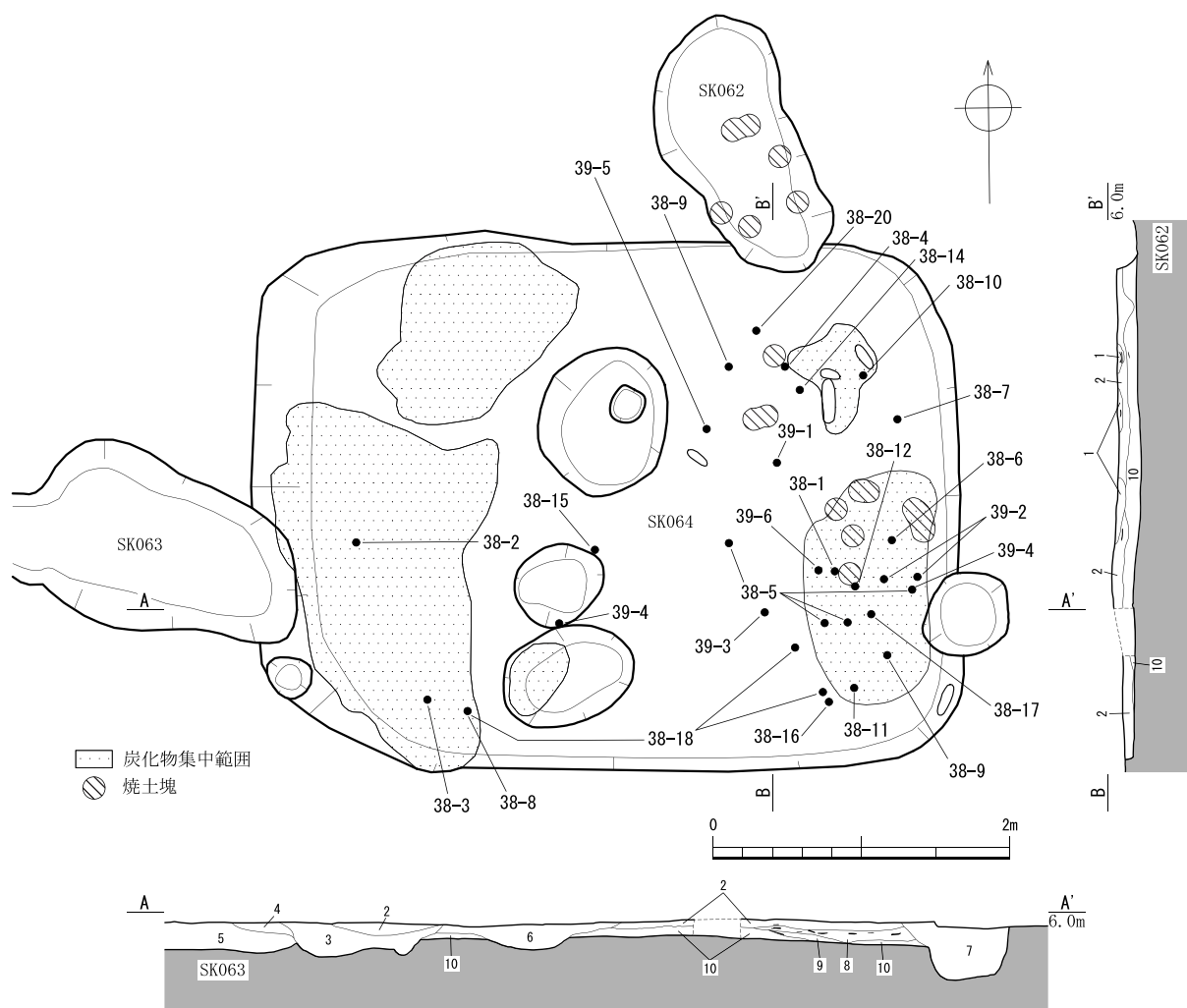
SE013とSE014の2基が確認された(第28図)。2基は4mほど離れて隣接しており(B・C11グリッド)、この時期の土器が出土した遺構は、このほかに確認されていない。もっとも越前の他の遺跡においてもこの時期の遺構そのものが検出されることが少なく、集落の事例も非常に少ない。井戸はいずれも素掘り

である。径はSE013が1.42m×1.36m、SE014が1.18m×0.99mを測り、いずれも底は砂質の湧水となっており不確実であるが、標高4.5m付近にあるものと考えられる。SE013では、想定される底からやや浮いた井戸の中ほどで土器がまとまって出土し(第28図左)、図化できたのは甕4点(第29図1、第30図1～3)、把手がつく甕2点(第29図2・3)、壺5点(第30図4・5・8・11・12)、土師器の坏2点(第30図6・7)、高坏7点(第29図5～11)などである。甕は穴を開けた胴部に把手を差込み、外側の上下周辺を粘土で補強し、内面はナデなどで接合痕を消す作りで、甕が広く普及した古代の把手とは異なる。甕の口縁部2点(第30図9・10)、高坏・器台の坏部の2点(第29図4、第30図13)は、この井戸によって切られたSK051からの混入品と考えられ、この井戸の時期の高坏は脚部のみしか確認できなかった。壺は中型が2点(第30図4・5)と小型が3点(第30図8・11・12)であるが、小型の2点(第30図11・12)は手捏である。SE014では、底と考えられる位置から中型の壺2点(第31図4・5)と甕の胴部下半(第31図6)がまとまって出土した(第28図右)。壺は胴部下半に直径2cmほどの穴が焼成後に開けられている(第31図4)。2基の井戸の時期は近接しているが、両者から出土した壺で比較するとSE013よりもSE014のほうが古いと考えられる。SE013で出土した坏が2点とも本県の事例ではTK47の須恵器と相伴しており、甕の胴部もSE014のものが丸底で球形の胴部であるのに対し、SE013のものが長胴化していることから先の時期の推定は問題がないものと考えられる。直接この井戸から出土したものではなく付近の包含層出土であるが、古墳時代の須恵器の坏蓋がある(第31図7)。陶邑産特有の胎土ではない。この時期の須恵器の出土例は本県において本遺跡周辺では珍しく、不確実ではあるが陶邑形式ON46の5世紀のものと考えられる。

SE013・014の井戸2基以外の古墳時代の遺構は、古墳時代初頭から前期の土坑や溝などである。この時期の遺構・遺物が確認された北端はSK048(B9グリッド)であり、これより北では目ぼしい古式



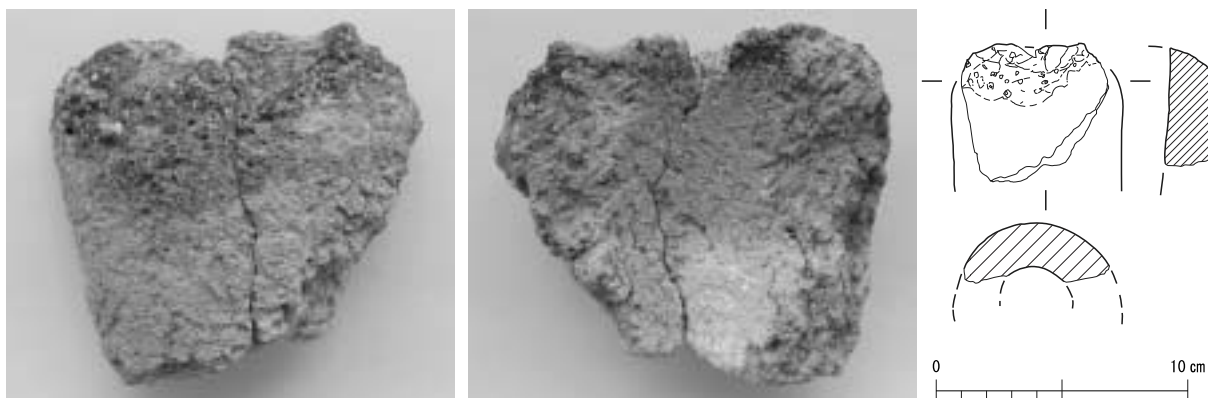
第31図 古墳時代井戸出土土器実測図(3)(縮尺1/3)



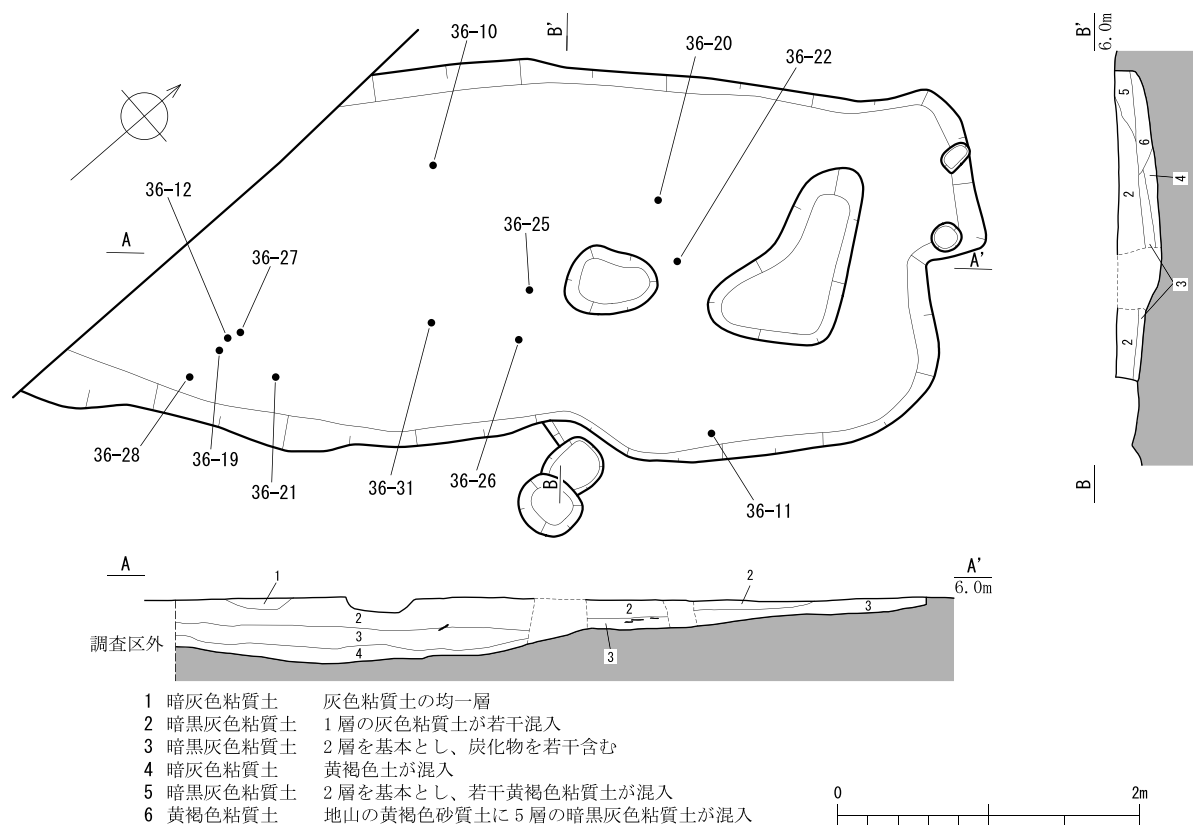
- | | |
|-----------------------------------|-----------------------------------------|
| 1 暗褐色粘質土 炭化物・焼土多く含む | 6 暗褐色粘質土 径1cm前後の炭化物まばらに含む 焼土少量含む |
| 2 暗褐色粘質土 径5mm前後の炭化物まばらに含む SK064覆土 | 7 暗褐色粘質土 径5mmの炭化物少量含む |
| 3 暗褐色粘質土 しまり弱い 炭化物多く含む 焼土含む | 8 暗褐色土 しまり弱い 土器片多く含む 1cm厚の炭化物層含む |
| 4 淡黄色粘質土 暗褐色土ブロック含む | 9 淡黄色粘質土 しまり弱い 10層より多量の暗灰色粘質土ブロックまばらに含む |
| 5 暗褐色粘質土 混入物少ない SK063 | 10 淡黄色粘質土 暗灰色粘質土ブロックまばらに含む 地山もしくは地山崩壊土 |

第32図 SX064 遺構実測図 (縮尺 1/50)

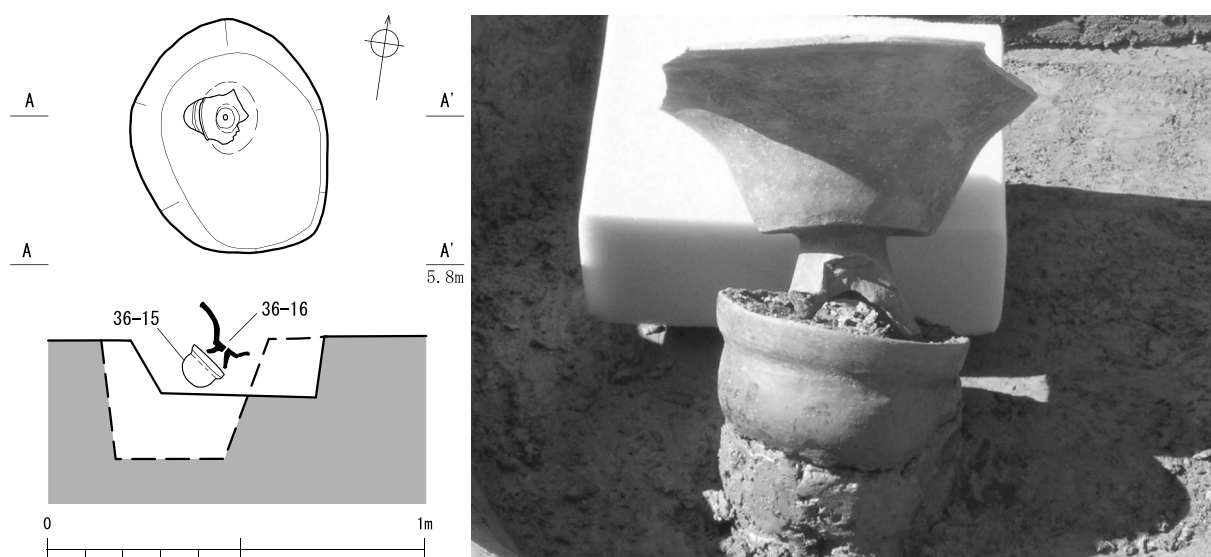
土師器の出土は確認されていない。南端は調査区を横切るSD031であるが、この溝の付近では遺跡全体の地山そのものが落ち込み、上層では古式土師器、下層になると縄文土器を含むようになる。SD031からは壺が1点略完形に図化できたが、そのほかは土師器の小片が少量出土するのみである。



第33図 SX064 付近出土の羽口 (実測図 縮尺 1/3)

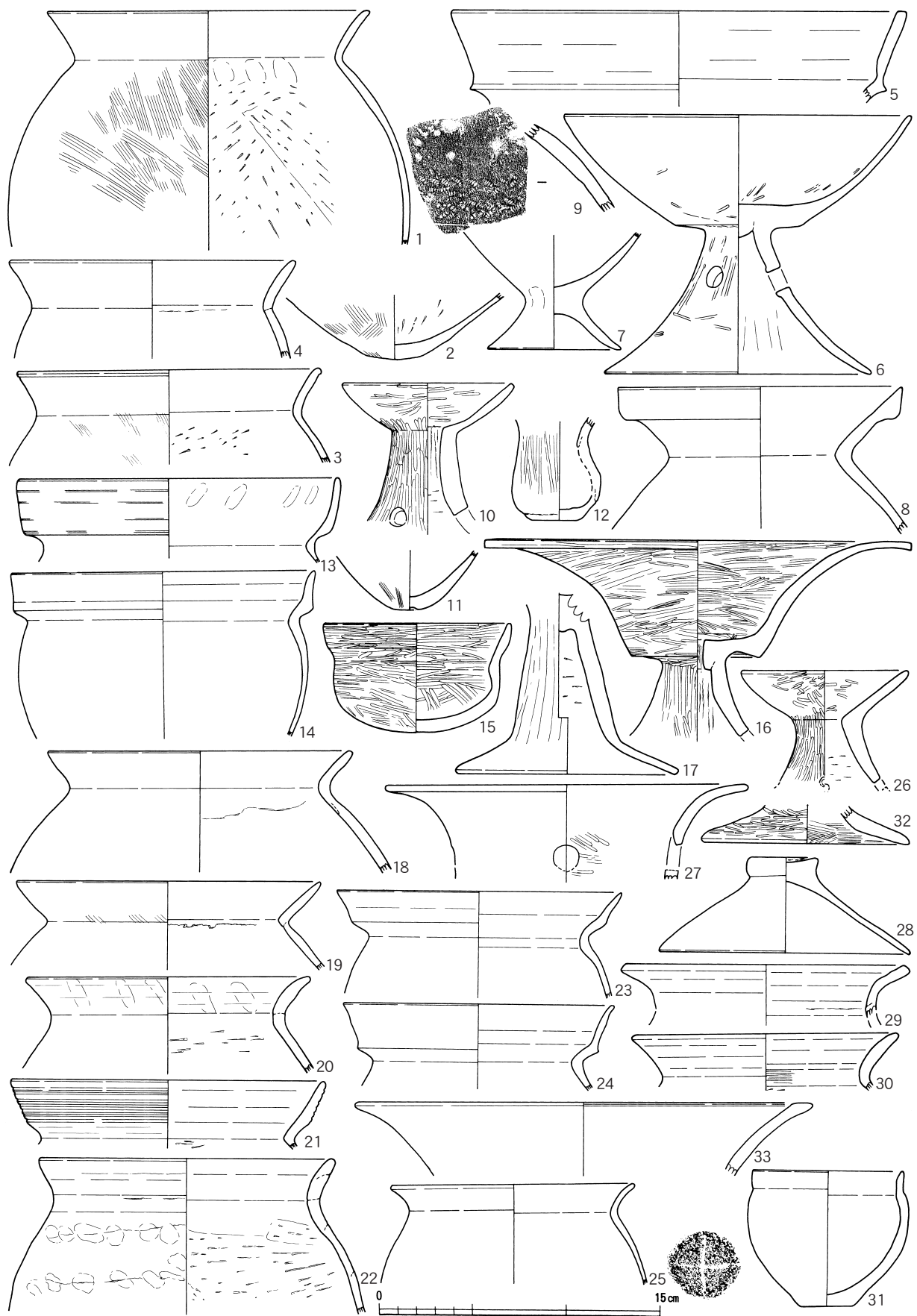


第34図 SK056 遺構実測図（縮尺1/50）

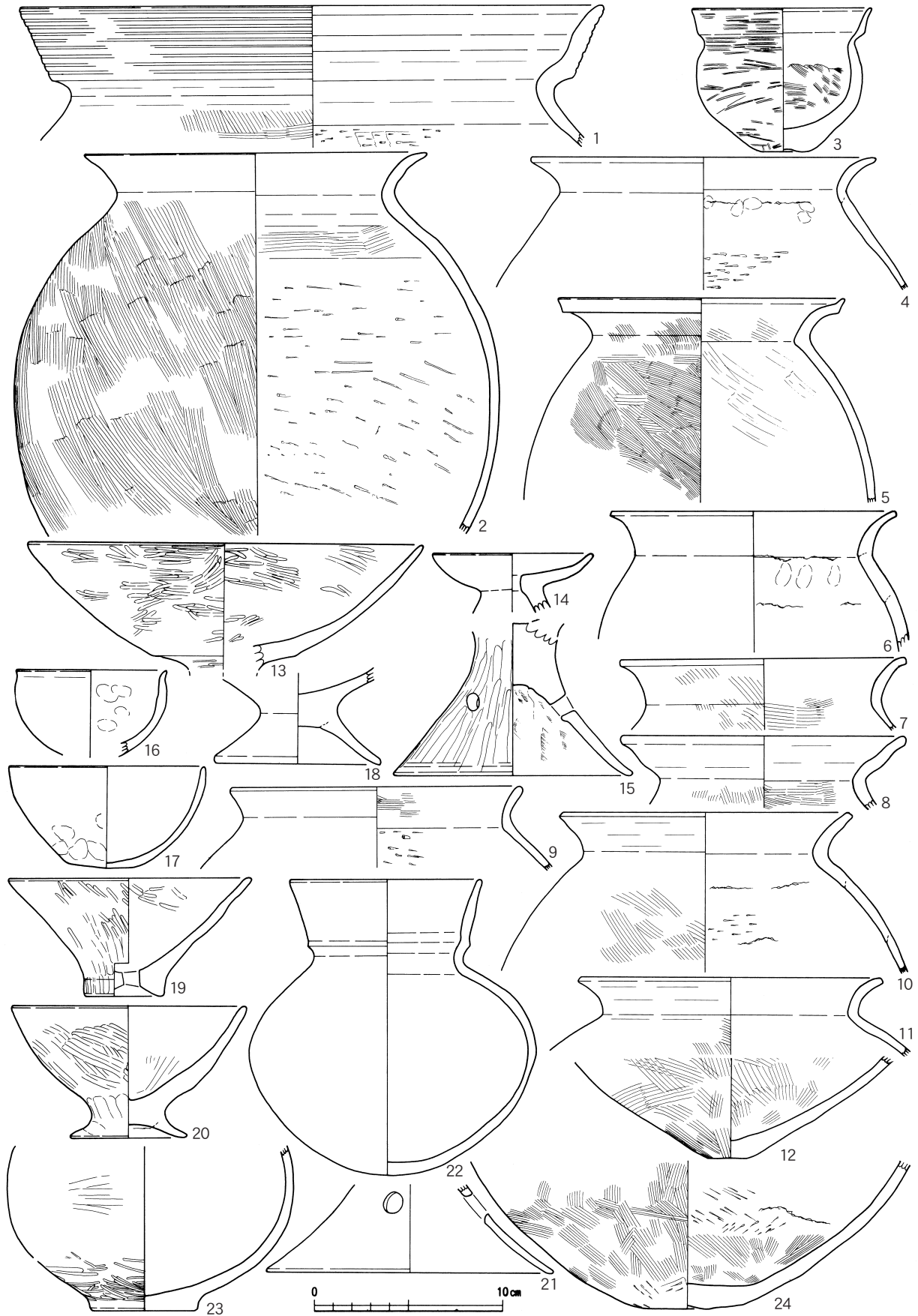


第35図 SP073 遺物出土状況図（縮尺1/20）、遺物出土状況（東より）

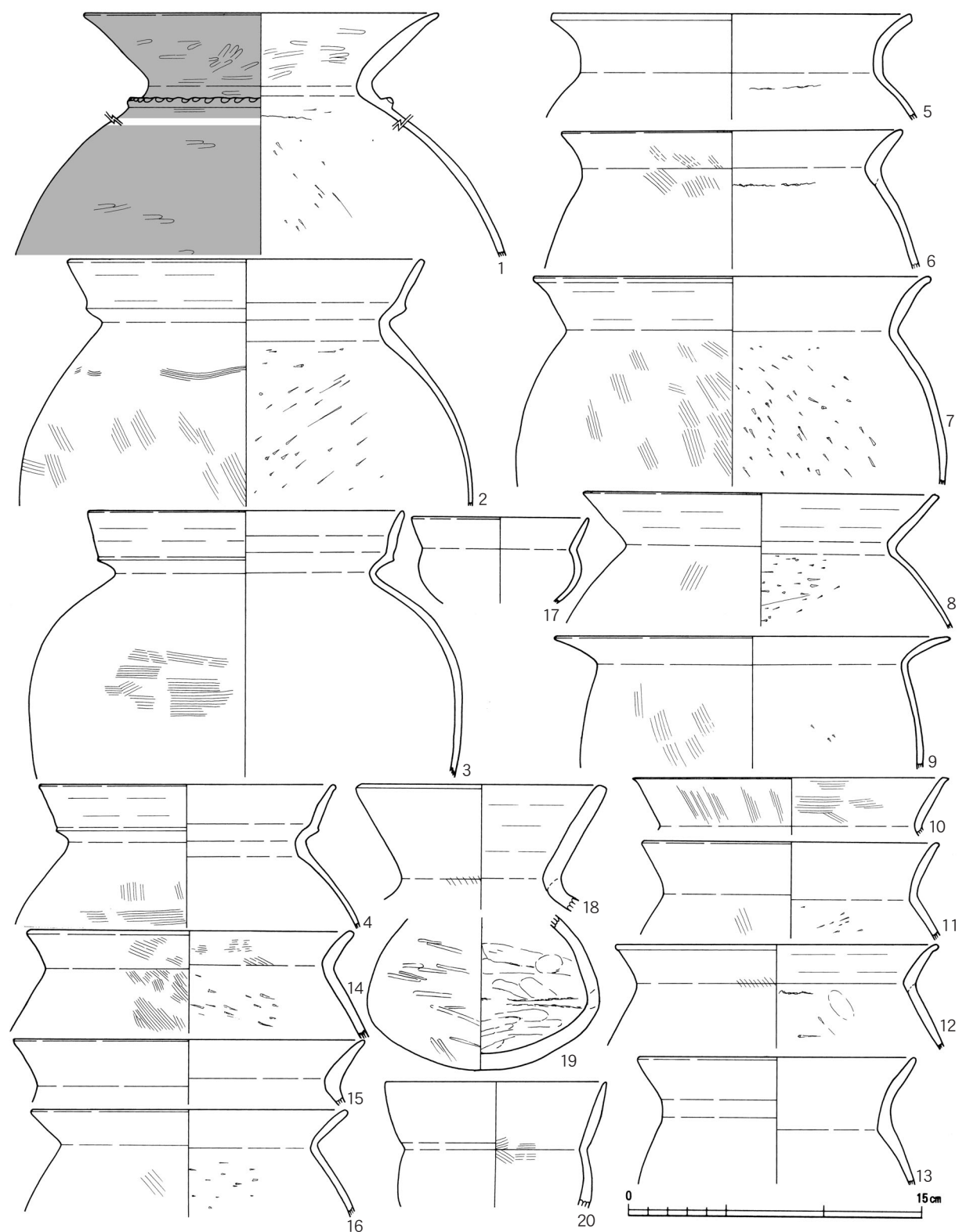
この溝に併行するSD028・029では多数の古式土師器が出土した（図版第12①②）。これらの溝は集落の南端に位置することもあり、明確に遺構として確認されるより上層から土器が出土し、包含層出土とした土師器の多くがこの付近での出土である。SD029とSD031の間のSK078・079から土師器が出土し、前者では甕口縁1点（第40図10）、後者からは壺など3点（第37図22・23・24）が出土した。また溝の覆土出土の縄文土器も多い。古墳時代初頭から前期の遺構で最も注目されるのがSK064である（第32図）。東西4.77m、南北3.61mの長方形の平面形を呈する。深さは10～20cm前後と浅いが、覆土には多くの土器とともに焼土・炭化物が含まれていた（第32図・図版第11）。土器は20点を図化することが出来て、この中



第36図 古式土師器実測図(1)(縮尺1/3)

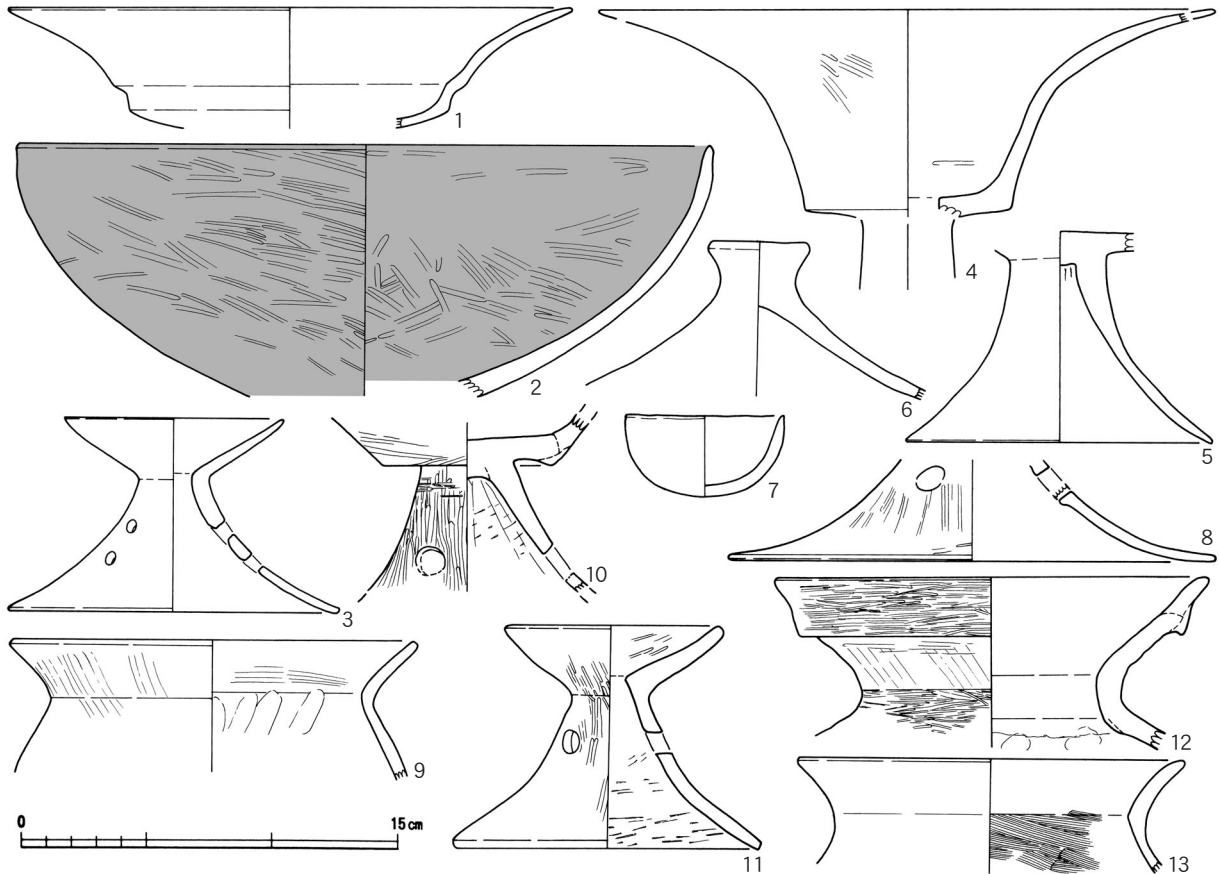


第37図 古式土師器実測図(2)(縮尺1/3)



第38図 古式土師器実測図(3)(縮尺1/3)

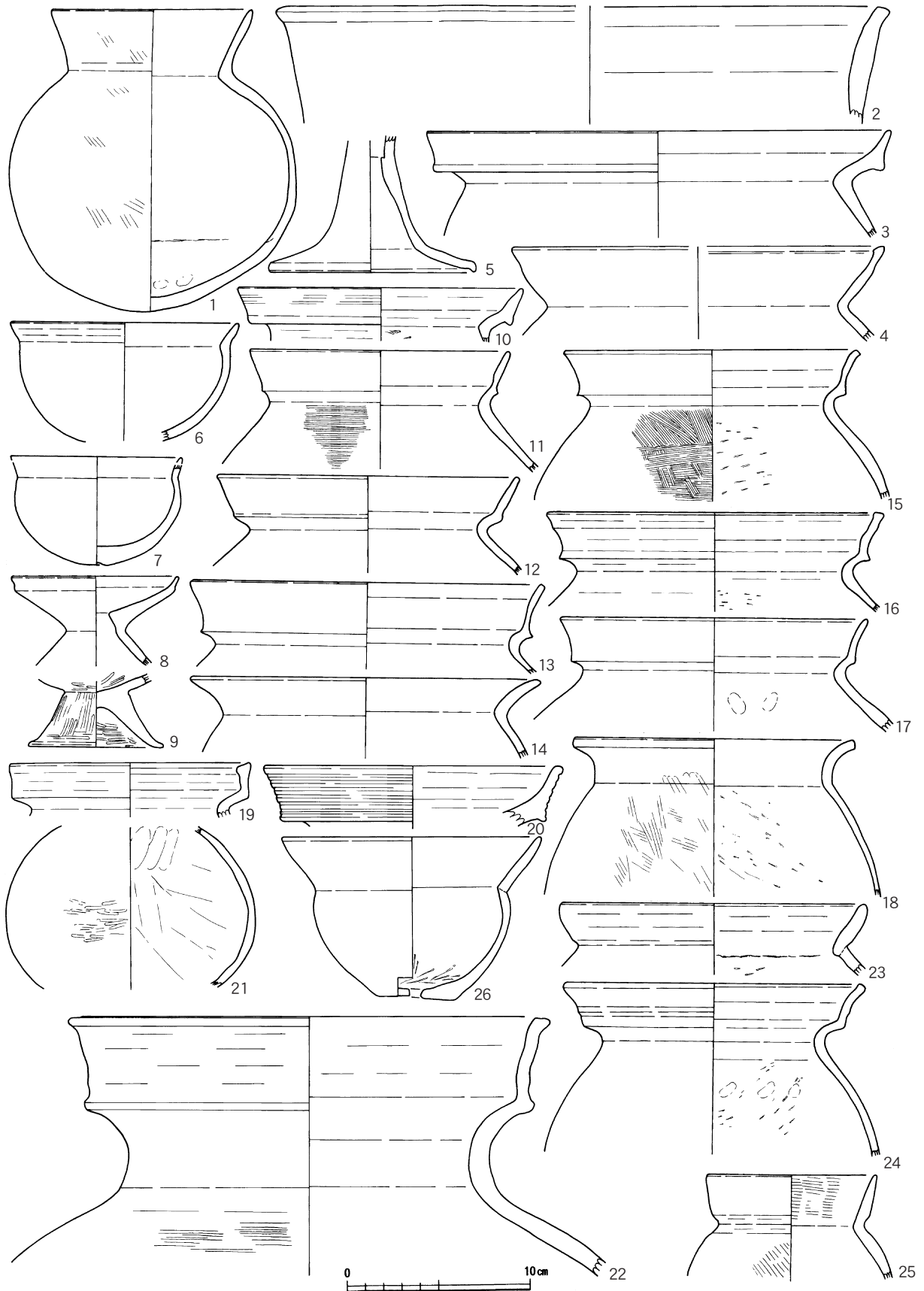
には赤彩された大型の壺(第38図1)と鉢(第39図2)、高杯の坏部(第39図1)などがある。SK064の出土ではないが、その北へ2mほど離れた包含層から羽口の先端部の破片(第33図)が出土している。今回の調査で古代の須恵器は中世以降の攪乱や溝などからのものであることから、少なくとも古代にまで下るものではなく、SK064の古墳時代前期の焼土に伴う可能性が高いと考えられる。中期の井戸SE013と



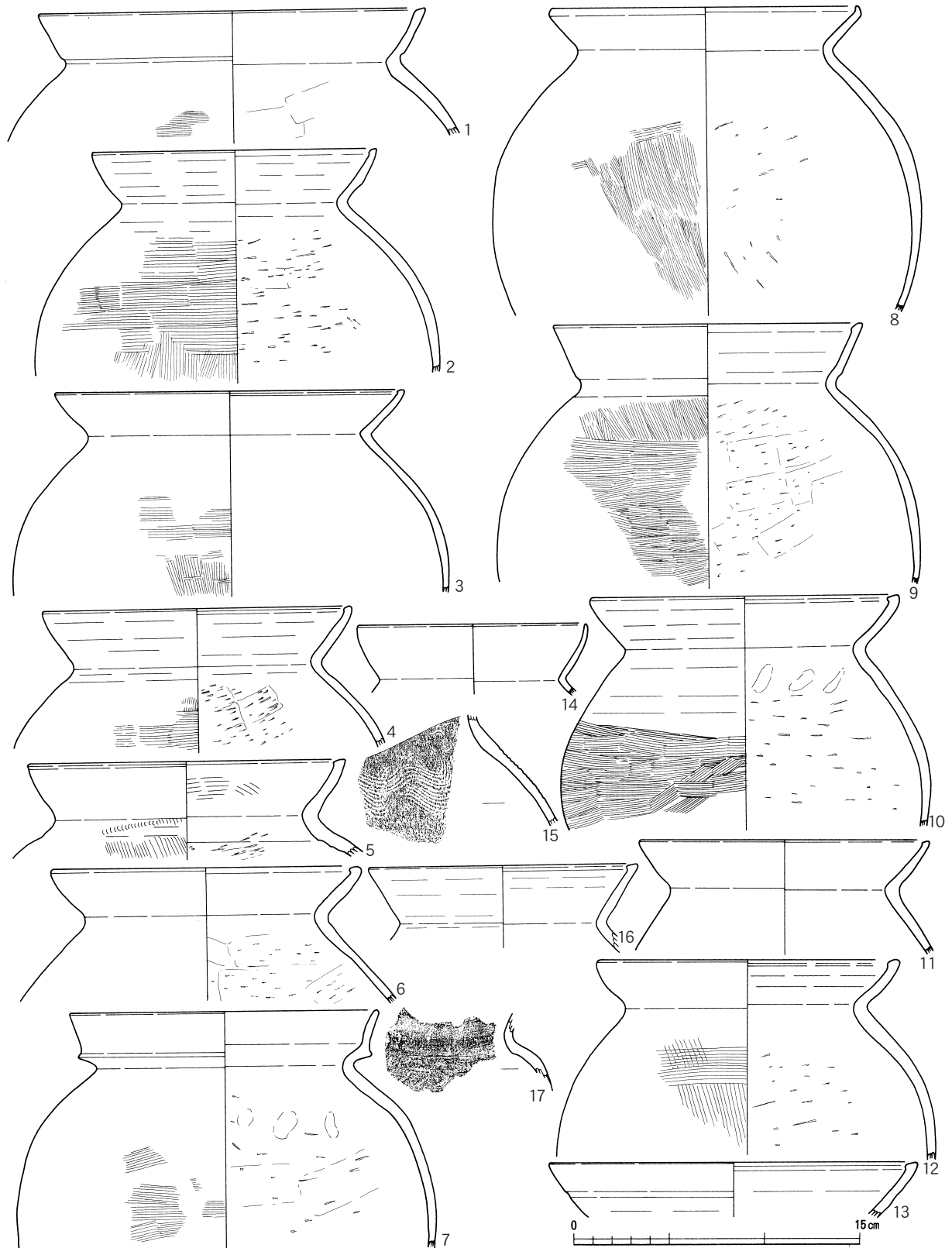
第39図 古式土師器実測図(4) (縮尺1/3)

重複するSK051は不整形な楕円で、底も凹凸があり不明瞭である。土器はまばらに出土したが、21点を図化することができた(第37図1～21)。特に図化した甕10点のうち8点が「く」の字甕である。SK056はSK051の南西の調査区西側にかかる長方形の土坑である(第34図)。先の土坑と同様にまばらに出土した土器から16点を図化することができた(第36図10～12、19～31)。ここでも甕10点のうち7点が「く」の字甕である。SK074もSK056の南に位置し、調査区の西側にかかる不整形の土坑である。甕や器台・鉢など8点を図化した(第40図2～9)。SK064に隣接または重複する溝やピットでは、出土した土器のいくつかを図化できた。SD023で壺胴部片(第36図9)、SP072では布留式の屈曲高坏の脚部(第36図17)、SK062で壺と甕口縁に高坏、器台が1点ずつ(第39図10～13)、SP066で甕口縁が1点(第39図9)である。SP073では、完形の鉢に器台の坏部が乗っているという、特異な出土状態を確認した(第35図)。このピット付近は地震の影響が大きく、結果的に中央落ち込み(SK096など)と仮称していたほどに遺構の平面がわかりにくいところで、当初は上層の遺構面である青灰色の粘質土が広がり、土器の出土がなければピットの存在は不明であった。つまりピット覆土の上に地山の土層がずれ込んでいたことが判明した。器台(第36図16)は坏部がほぼ完形となるが、脚は下半を欠き、その先端を完形の鉢(第36図15)に差し込み、この2点が据え置かれたように直立して出土した。土器はともに全面に丁寧なミガキ調整が残されている。この遺構は地震の影響が最も顕著なもの、または地震に対する祭祀とも考えられる。

掘り込みが全く確認されず検出時に土器のみがまとまって出土したのがSX052・053・055(図版第11)の3箇所である。現地ではいずれもほぼ完形に復元される同一個体と考えていたが、完形には復元されず、一部の復元に留まった。SX052では甕口縁1点(第36図4)、SX053では甕口縁(第36図1・3)と

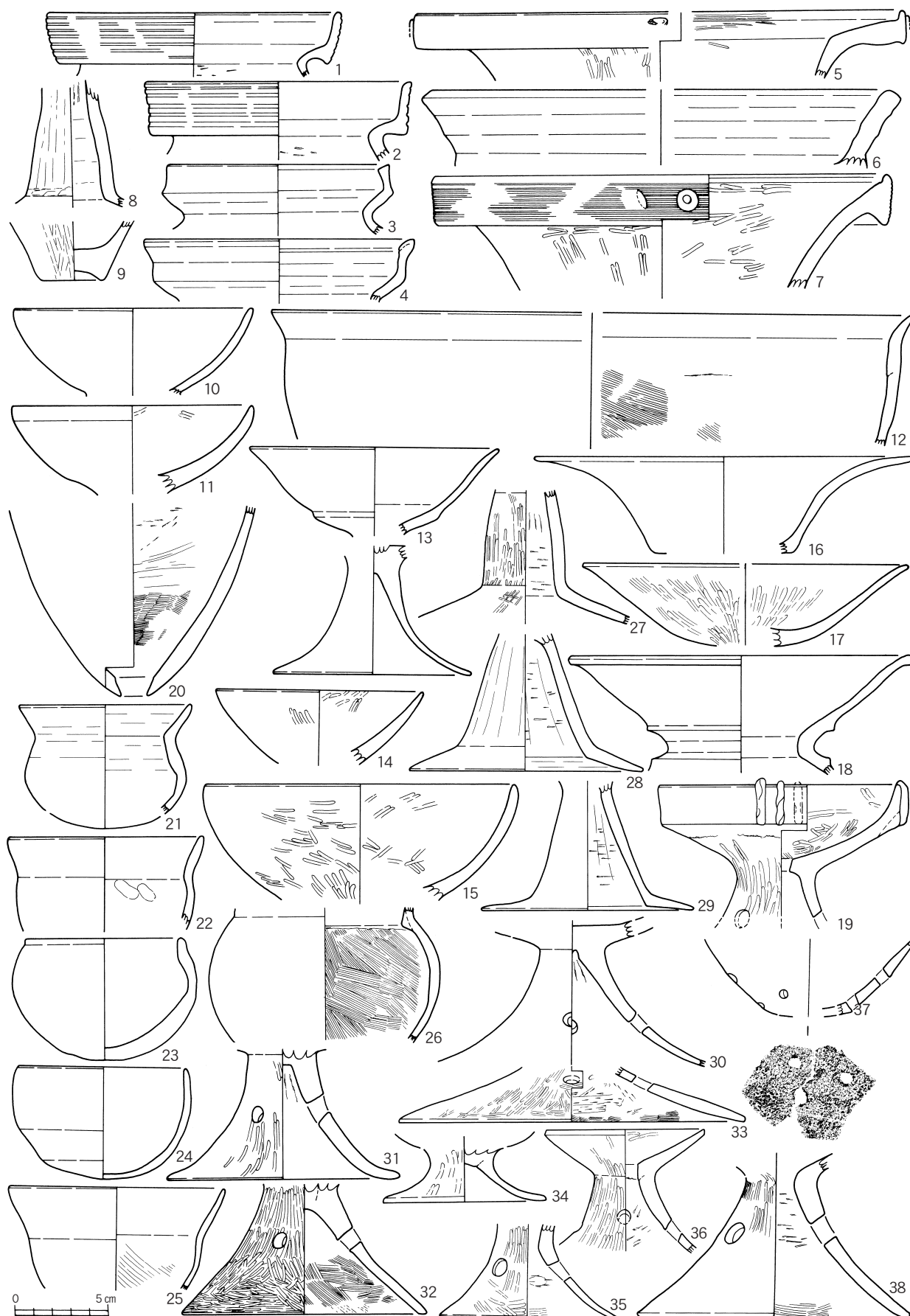


第40図 古式土師器実測図(5)(縮尺1/3)

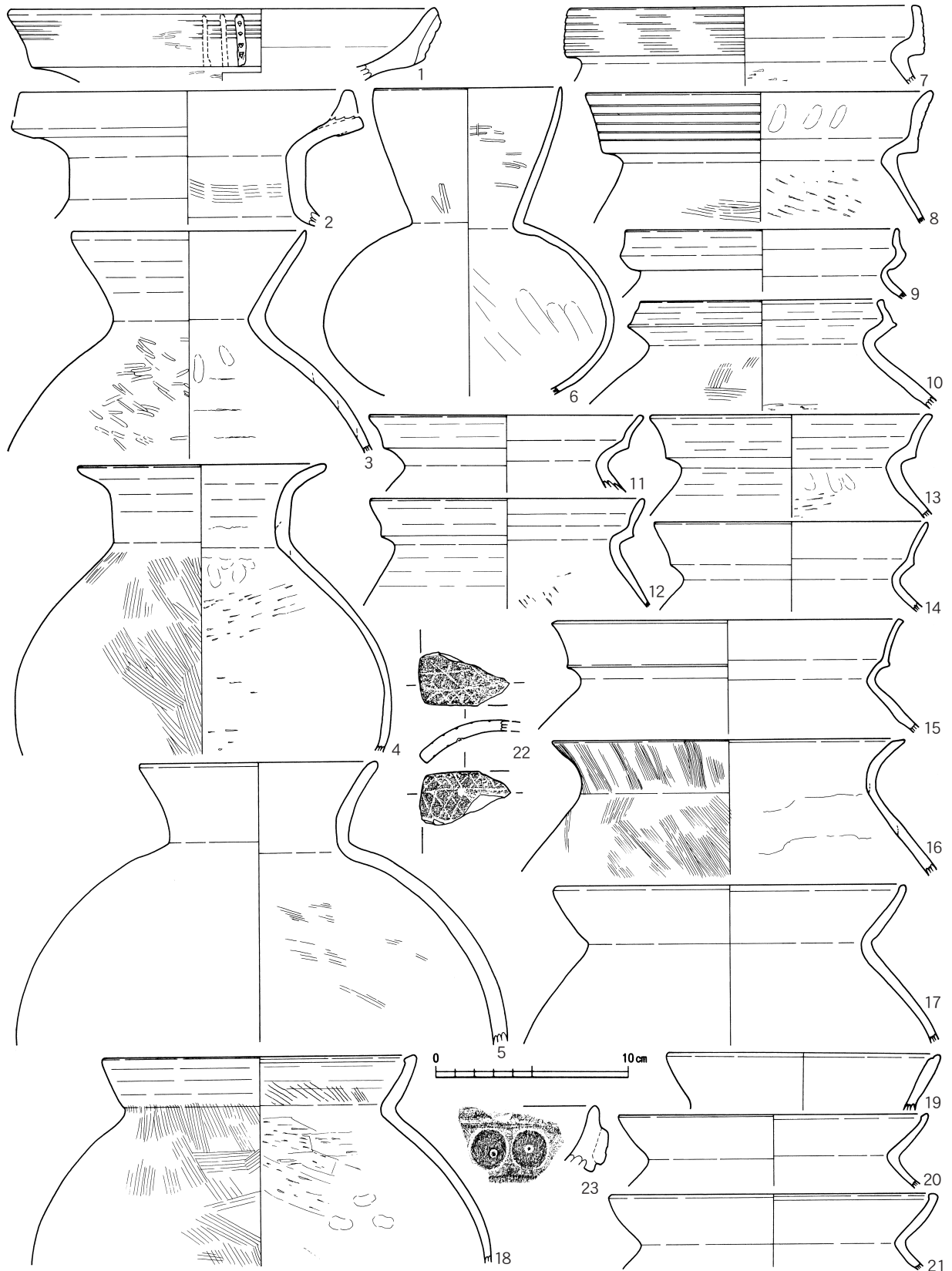


第41図 古式土師器実測図(6)(縮尺1/3)

同時期かと考えられる底部1点(第36図2)、SX055では甕(第36図5)と壺(第36図8)の口縁部に完形に復元できた高坏(第36図6)と鉢の脚部(第36図7)の4点が図化された。周辺の柱穴も浅く古墳時代の遺構はかなり削平されていると推定されることから、地山に置かれたように出土しているこれらの土



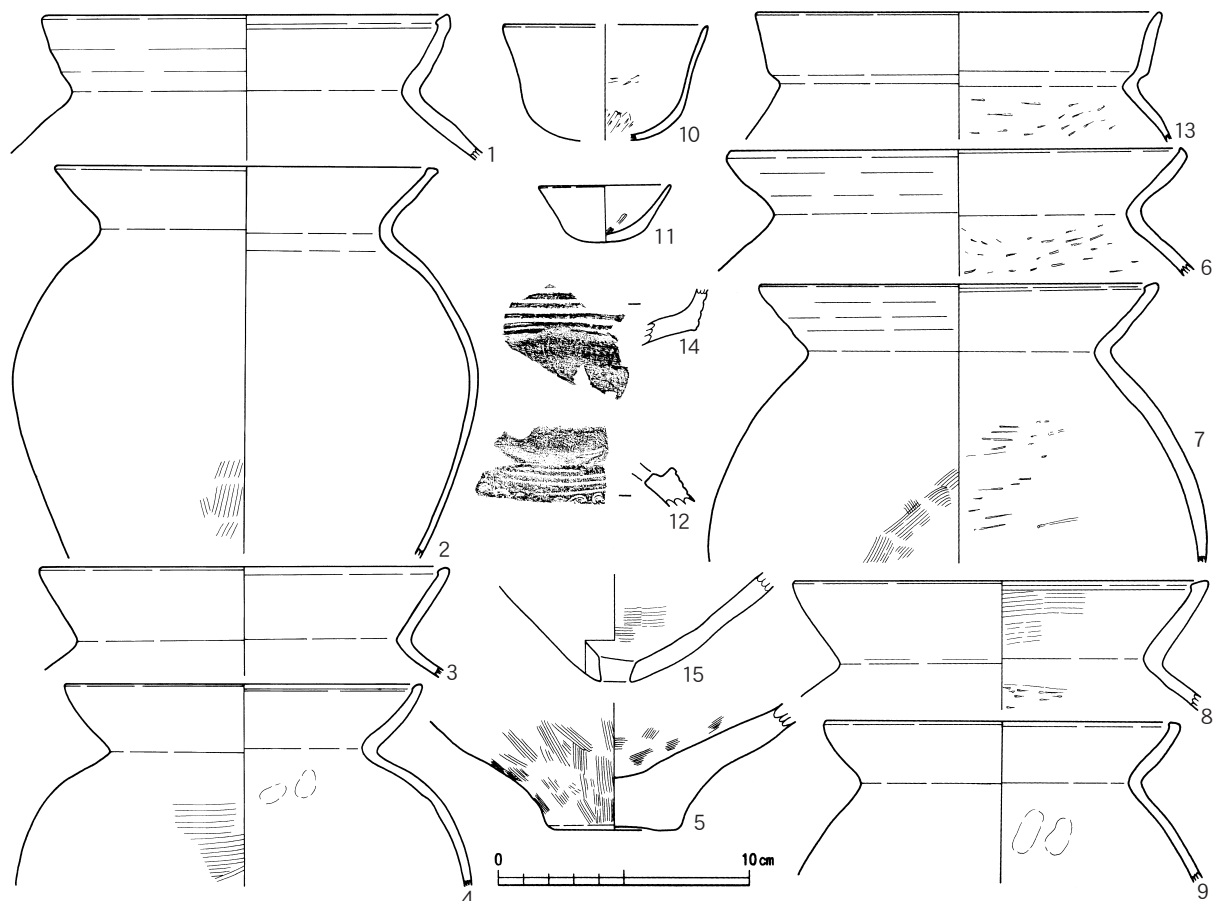
第42図 古式土師器実測図（7）（縮尺1/3）



第43図 古式土師器実測図（8）（縮尺1/3）

器も、何らかの遺構の底にあった可能性があると考えられる。

溝以外の土坑などに伴う土器の甕のほとんどは「く」の字口縁である。SD028・029の溝では、口縁



第44図 古式土師器実測図(9)(縮尺1/3)

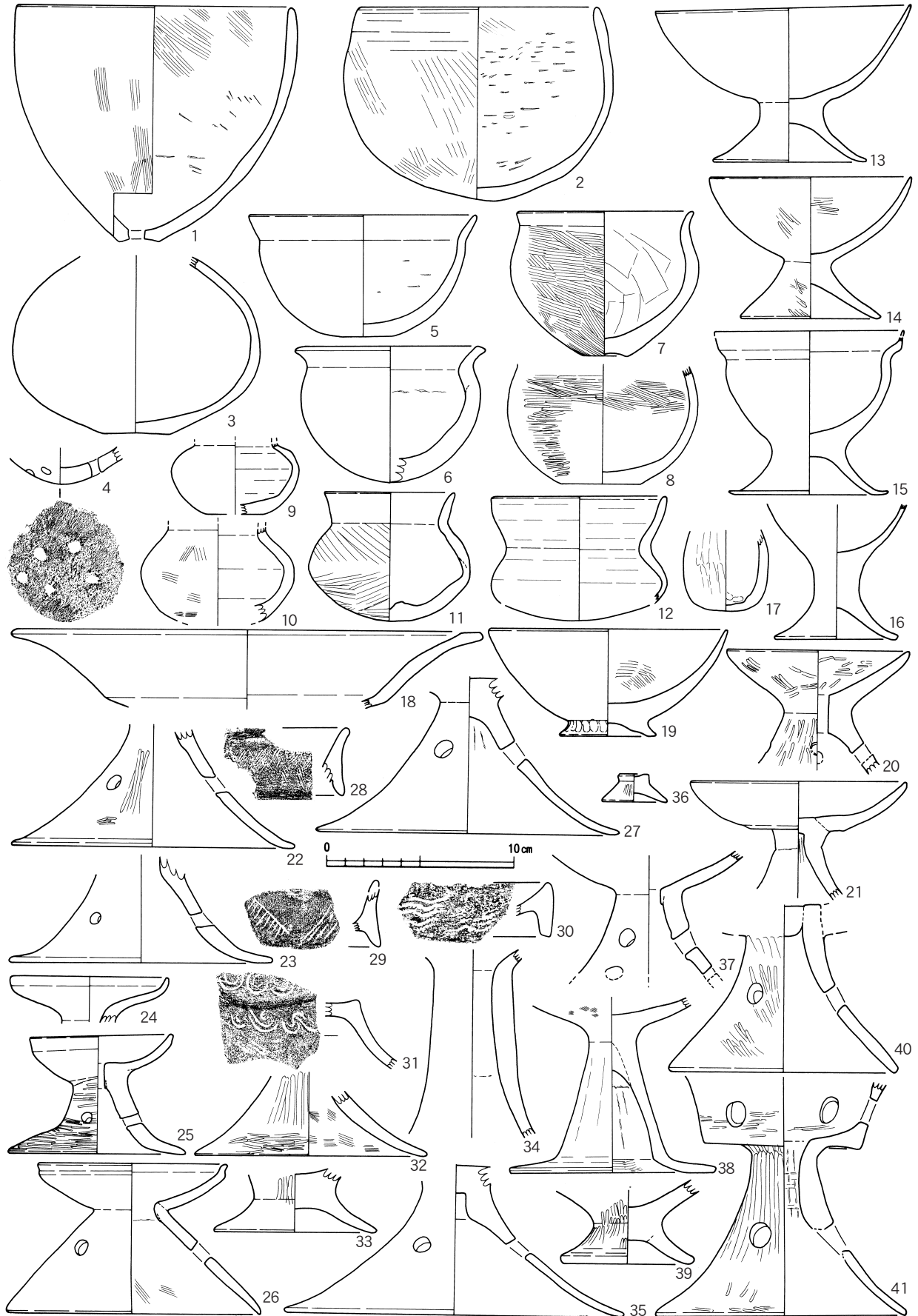
の内面が肥厚する「布留式」の甕が目立つ。古式土師器の土器全体を見渡しても甕は「く」の字口縁が「布留式」で、擬凹線の有段口縁の甕は立ち上がりが直線に近い法仏式の時期である。つまり弥生時代終末である月影式とされる時期のものはない。また高坏や器台なども甕と同じような時期で、壺についてもこのいずれかの時期で問題がない。北調査区の法仏式の集落から一定の間を置いて、古墳時代に入って再度集落が形成されるのは、場所を南にずらした南調査区となること、土器の時期などからいえる。

ここで特殊な土器について簡単に触れておく。南調査区を中心として出土した古式土師器に混じって弥生時代後期の法仏式の甕をいくつか図化している(第42図1～4など)。これに関して甕以外にこの時期と考えられるのが壺、もしくは器台の口縁で、前者と考えられるものには円形浮文が貼り付くもの(第42図7・第43図23)があり、垂下や貼り付く外面に櫛描波状文(第46図28・30)や、鋸歯文をへら描するもの(第46図29)などである。S字がやや大きいスタンプ文(第46図31)は高坏の脚であろう。また多孔土器と呼ばれている用途が全く謎の土器も2点(第42図37・第46図4)出土している。本県では確認例が極端に少ない山陰の鼓形器台の可能性のある土器(第42図18)もあるが、壺の口縁部であることも否定できない。土器とするには部位が不明であるが、瓦のように板状に丸くなり、両面に斜格子のへら描文のあるもの(第43図22)は土製品であろうか。

弥生時代後期は終末の月影式の土器が確認されず、甕では「く」の字が中心となるSX054の時期の土器が目立ち、集落縁辺部では「布留式」の甕も多数確認された。遺構においてはSE013などの井戸までの間の時期(古墳時代前期から中期の前半)について明確ではない。しかし布留式甕でもやや新しいものもあり、高坏についても屈曲する新しいタイプのものも多くみられ、土器の数は少ないが細々と集落は継続しているものと考えられる。



第45図 古式土師器実測図 (10) (縮尺 1/3)



第46図 古式土師器実測図 (11) (縮尺 1/3)

第3表 弥生土器(後期)・古式土師器・土師器・須恵器観察表

押図番号	図版番号	出土遺構	器種	部位	調整・技法・文様など	口径・底径(cm)	残存高(cm)	胎土	色調	焼成	備考
第14図1	—	SI001-SD 6	高坏	坏部	内外面ともにヨコミガキ	(32.0)	(5.1)	②	橙色	良	
第14図2	図版第16	SI001-SD11	高坏	坏部	内外面ともにヨコミガキ	29.8	(4.8)	②	にぶい橙色	良	ガラス質含む
第14図3	—	SI001-SD 7	高坏	坏部	内外ともに摩滅不明	(27.6)	(3.5)	①	にぶい橙色	良	
第14図4	—	SI001-SD 2	高坏	坏部	外)坏部:ヨコミガキ 内)摩滅不明	(29.8) 前後	(4.8)	①	浅黄色	良	外面煤付着(口縁)
第14図5	—	SI001-SD 5	高坏	坏部	内外面ともに摩滅しているがヨコミガキの残る	(33.2) 前後	(5.6)	②③	灰黄色	良	
第14図6	—	SI001-SD10	高坏	坏部	内外面ともにヨコミガキ	(27.8)	(4.9)	②	にぶい橙色	良	
第14図7	—	SI001-SD11	高坏	坏部	内外面ともにヨコミガキ	(28.0)	(4.7)	②	にぶい橙色	良	
第14図8	—	SI001-SD11	高坏	坏部	外)口縁:擬凹線文7条 体部:ヨコミガキ 内)口縁~体部:ヨコミガキ	(27.0) 前後	(5.6)	①	にぶい橙色	良	
第14図9	—	SI001-SD 7	器台	受部	外)受部:擬凹線文11条 脚部:タデミガキ 内)ヨコミガキ	(28.8)	(6.5)	②	浅黄褐色	良	
第14図10	—	SI001-SD11	器台	受部	外)口縁端部:ヨコミガキ 坏部:タデミガキのち 擬凹線 12条 坏部下半:多方向のミガキ 内)ヨコミガキ	(24.6)	(7.0)	②	明赤褐色	良	内外面赤彩
第14図11	—	SI001-SD 7	器台	脚部	外)脚部:タデミガキ 脚部:擬凹線文12条 脚部突出:刻み目 内)ヨコナデ	(19.0)	(6.0)	②	浅黄褐色	良	小孔1残る
第14図12	—	SI001-SD 8	高坏	脚部	内外面ともに磨滅不明	(16.4)	(3.3)	②	にぶい橙色	良	小孔4
第14図13	—	SI001-SD11	壺	胴部片	外)J状渦巻文の下に沈線2条の下に竹管文か? 内)磨滅不明	—	(3.0)	①	にぶい橙色	良	
第14図14	図版第16	SI001-SD10	?	脚部	内外面ともに摩滅不明	(13.6)	(7.2)	③	橙色	良	
第14図15	—	SI001-SD 2	高坏	脚部	外)脚部:摩滅不明 内)脚部上半:ヨコハケ 脚部:摩滅不明	(21.0)	(7.8)	①	浅黄褐色	良	小孔4
第14図16	図版第16	SI001-SD10	台付壺	略完形	外)口縁:ヘラ描沈線5条 体部上半:タデミガキ 体部突出:ヨコミガキ 体部下半~脚部:タデミガキ 脚部端部:沈線2条 内)口縁~脚部:磨滅不明 脚部:ヨコナデ	8.6	27.6	②	にぶい橙色	良	脚部小孔3
第14図17	図版第16	SI001-SD 7	把手付鉢	口縁~体部	内外面ともに磨滅不明	(11.8)	(9.7)	③	橙色	良	
第14図18	—	SI001-SD11	鉢	口縁~体部	外)口縁:ナデ 内)口縁:ナデ 体部:ケズリ	(18.0)	(6.7)	②	にぶい黄褐色	良	外面煤付着(口縁~体部)
第14図19	—	SI001-SD11	高坏	脚部	外)脚部上半:ハケ 脚部:ミガキ? 内)脚部上半:ハケ 脚部:ナデ	14.6	(6.6)	③	にぶい黄褐色	良	小孔4
第14図20	—	SI001-SD 2	高坏	脚部	外)沈線2条の下にS字スタンプ×2段 内)摩滅不明	—	(4.8)	①	にぶい橙色	良	小孔4
第14図21	—	SI001-SD11	壺	脚部	外)脚部:ナデ 脚部:擬凹線文5~6条 内)脚部:ナデ	(13.8)	(3.8)	②	明赤褐色	良	外面赤彩
第14図22	—	SI001-SD11	?	脚部	外)脚部:タテ・ナナメミガキ 脚部:ヨコミガキ 内)脚部:ナデ	(12.8)	(8.1)	②	橙色	良	赤彩
第15図1	—	SI001-SD11	甕	口縁~体部	外)擬凹線文10条 頸部~体部:ナデ 体部上半:ヘラ先列点文 内)口縁~頸部:ナデ 体部:ケズリ	19.8	(7.5)	③	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁~体部)
第15図2	—	SI001-SD11	甕	口縁~体部	外)口縁~体部:ナデ 内)口縁~頸部:ナデ 体部:ケズリ	(17.8)	(8.6)	③	浅黄褐色	良	
第15図3	図版第15	SI001-SD11	甕	口縁~体部	外)擬凹線文5条 頸部~体部上半:ヨコナデ 櫛描列点文 体部下半:多方向ハケ 内)口縁:ヨコナデ 頸部上半:摩滅不明 頸部上半:ヨコハケ 体部:ケズリ	(21.0)	(18.1)	③④	にぶい橙色	良	外面煤・炭化物付着(体部)
第15図4	—	SI001-SD11	鉢	口縁~体部	外)口縁~頸部:ナデ 体部:櫛描列点文 内)口縁~頸部:ナデ 体部:ケズリ	(11.8)	(4.8)	③	明赤褐色	良	
第15図5	—	SI001-SD11	鉢	口縁~体部	外)口縁~頸部:ナデ 体部:ヨコハケ 内)口縁~頸部:ナデ 体部:ケズリ	9.8	(3.8)	③	灰黄褐色	良	外面煤付着(口縁~体部)
第15図6	図版第15	SI001-SD 2	甕	口縁~体部	外)擬凹線文3~4条 頸部:ヨコナデ 体部:多方向のハケ 内)口縁~頸部:摩滅不明 体部:ケズリ	16.6	(9.1)	③	にぶい橙色	良	
第15図7	—	SI001-SD 1	甕	口縁	外)擬凹線文3条 頸部:ヨコナデ 体部:ナナメハケ 内)口縁~頸部:ヨコナデ 体部:ケズリ	(17.0)	(6.7)	②	浅黄褐色	良	外面煤付着(口縁~体部)
第15図8	—	SI001-SD11	甕	口縁	外)擬凹線文6条 頸部~体部:タテハケ 内)口縁~頸部:ヨコナデ 体部:ケズリ	(17.9)	(6.5)	③④	橙色	良	外面煤付着(口縁~体部)
第15図9	—	SI001-SD 8	甕	口縁~体部	外)擬凹線文6条 頸部~体部:摩滅不明 内)口縁~体部:磨滅不明	(17.6)	(6.9)	③④	橙色	良	外面煤付着(口縁~体部)
第15図10	—	SI001-SD 1	甕	口縁	外)擬凹線文7条 頸部:ヨコナデ 内)口縁~頸部:ヨコナデ 体部:ケズリ	(15.8)	(8.1)	②	にぶい黄褐色	良	外面煤付着(口縁~頸部)
第15図11	—	SI001-SD 1	甕	口縁	外)擬凹線文6条 頸部:ヨコナデ 内)口縁~頸部:ヨコナデ 体部:ケズリ	(14.8)	(2.8)	②	浅黄褐色	良	外面煤付着(頸部)
第15図12	図版第16	SI001-SD 8	台付壺	体部	外)体部上半:タデミガキ ヘラ先列点文 体部下半:ヨコミガキ 頸部:タデミガキ 内)ケズリ	—	(7.8)	③	灰白色	良	
第15図13	—	—	甕	口縁	内外面ともに磨滅不明	(18.0)	(4.3)	③④	橙色	良	
第15図14	—	SI001-SD11	壺	口縁~体部	外)口縁~頸部:雑なヨコミガキ 体部:タテ・ナナメミガキ 内)口縁~頸部:ヨコナデ 体部:板ナデ	(9.9)	(17.4)	③	にぶい褐色	良	
第15図15	—	SI001-SD11	甕	底部	外)ナデ 内)ケズリ	3.0	(2.2)	③	にぶい黄褐色	良	
第15図16	—	SI001-SD11	甕	底部	外)体部:タテハケ 底:ナデ 内)ケズリ	3.4	(5.0)	②③	灰黄褐色	良	外面煤付着(底部)
第15図17	—	SI001-SD11	甕	底部	外)体部:タテハケ 内)ケズリ	(3.4)	(5.9)	①③	灰黄褐色	良	外面煤付着(底部)
第15図18	—	SI001-SD13	甕	口縁~体部	外)口縁:粗いタテハケ 頸部~体部:ヨコナデ 内)口縁:ナデ 頸部~体部:ケズリ	(15.8)	(4.8)	③	にぶい黄褐色	良	外面煤付着(口縁~頸部)
第15図19	—	SI001-SD 8	甕	口縁~体部	外)口縁~頸部:ナデ 内)口縁:ナデ 頸部:ケズリ	16.2	(3.6)	③	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁~頸部)
第15図20	—	SI001-SD 5	甕	底部	内外面ともに磨滅不明	2.8	(3.2)	③	浅黄褐色	良	
第15図21	図版第15	SI001-SD 4	甕	口縁~体部	外)口縁~頸部:ナデ 体部上半:ヘラ先列点文 体部下半:イタナデ 内)口縁~頸部:ナデ 体部:ケズリ	16.4	(17.8)	③	橙色	良	外面煤付着(口縁~体部)
第15図22	—	SI001-SD 4	壺	口縁	内外面ともに磨滅不明	(17.8)	(7.4)	③	にぶい黄褐色	良	
第15図23	図版第16	SI001-SD 4	鉢	口縁~底部	内外面ともに磨滅不明	(14.8)	(12.0)	③	にぶい黄褐色	良	外面煤付着か?
第18図1	—	SI002-SD 5	甕	口縁~体部	外)擬凹線文9条 頸部:ヨコナデ 体部:摩滅しているが微かにハケ残る 内)口縁:摩滅不明 頸部~体部:ケズリ	(18.0)	(11.2)	②④	にぶい黄褐色	良	ガラス質含む
第18図2	図版第16	SI002-SD 5	鉢	口縁~体部	外)口縁~頸部:ヨコナデ 体部:摩滅しているがハケ残る 内)口縁~頸部:摩滅不明 体部:ケズリ	(14.0)	13.0	③④	明赤褐色	良	外面煤付着(口縁~体部)
第18図3	—	SI002-SD 3	甕	口縁~体部	外)擬凹線文8条 頸部:ナデ 体部:ハケ 内)口縁~体部:ミガキ	(17.6)	(5.0)	①	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁~体部)
第18図4	図版第16	SI002-SD 5	甕	体部上半	外)体部上半:ヨコナデの外貝殻刺突文 体部下半:ヨコハケ+タテハケ 内)体部:ケズリ	—	(8.1)	③④	橙色	良	外面煤付着(体部)
第18図5	—	SI002-SD 5	高坏	脚部	内外ともに磨滅不明	(14.7)	(4.7)	②③	浅黄褐色	良	ガラス質含む
第18図6	図版第15	SI002-SD 3	壺	略完形	外)口縁~頸部:ナデ 体部:タデミガキ 内)口縁:ナデ 頸部~体部:ケズリ	9.3	(18.8)	①④	にぶい橙	良	外面煤付着(体部)

第4節 古墳時代の井戸とそのほかの遺構と遺物

押図番号	図版番号	出土遺構	器種	部位	調整・技法・文様など	口径・底径 (cm)	残存高 (cm)	胎土	色調	焼成	備考
第19図1	図版第16	SI002-SD 3	土製品	2/3 残	上)工具ナデ(ハケ状) 端部:成形 紐)紐通し不揃い2孔 下)不定方向ナデ	(15.0)	3.6	③	暗灰色	良	
第19図2	図版第16	SI002-SD 3	器台	受部～脚部	外)受部:擬凹線文7条の下にS字スタンプ+擬凹線文4条×2段 脚部:タテミガキ 内)受部:ヨコミガキ 脚部下半:ナデ	23.8	(15.5)	②	にぶい橙色	良	小孔4
第19図3	図版第15	SI002-SD 3	器台	受け部	外)口縁:ヘラ描沈線23条 坯部下半:タテミガキ 内)ヨコミガキ	27.4	(7.9)	①	灰白色	良	内面煤付着(口縁端部) 雲母片含む
第19図4	図版第15	SI002-SD 3	器台	脚部	外)脚部:タテミガキ 脚裾:ヘラ描沈線20条 脚部突出:刺突文2列 内)ヨコナデ	(21.6)	(8.2)	①	灰白色	良	内外面煤付着(脚裾) 雲母片含む 小孔4
第19図5	図版第15	SI002-SD 3	甕	口縁～体部	外)擬凹線文6条 頸部:ナデ 体部:ハケ 内)口縁:指圧痕+ナデ 頸部:ヨコハケ 体部:ケズリ	16.3	(14.8)	①④	にぶい黄橙色	良	内面煤付着(口縁～体部)
第19図6	—	SI002-SD 3	高坏	脚部	外)脚部:タテミガキ 内)脚部から脚裾:磨滅不明 脚裾:ヨコナデ	(16.9)	(18.4)	②	橙色	良	内面煤付着(脚部下半) 小孔4
第19図7	図版第15	SI002-SD 3	甕	口縁～体部	外)擬凹線文6条 体部:ハケ 内)口縁～頸部:ナデ 体部:ケズリ	(12.8)	(14.1)	③④	にぶい黄橙色	良	
第19図8	—	SI002-SD 3	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ナデ 体部:ハケ 内)口縁:ナデ 体部:ケズリ	(16.5)	(14.1)	①④	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第19図9	図版第15	SI002-SD 3	甕	略完形	外)擬凹線文6条 頸部～体部:ヨコナデ 体部上半:貝殻刺突文 底部:タテハケ 内)口縁～頸部:ヨコナデ 体部～底部:ケズリ	(15.5)	21.7	②③	にぶい黄橙色	良	ガラス質含む 外面煤付着(口縁～底部)
第22図1	—	SE012	高坏	坏部	外)口縁:ヨコミガキ 内)口縁:磨滅不明	(31.6)	(4.2)	③	灰黄色	やや不良	
第22図2	—	SE012	鉢	口縁	内外面ともに磨滅不明	(23.8)	(4.7)	②	橙色	良	
第22図3	—	SE012	甕	口縁～体部	外)擬凹線文5条 頸部～体部:タテハケ 内)口縁:ナデ 体部:ケズリ	(18.2)	(6.8)	③	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第22図4	—	SE012 覆土	甕	口縁～体部	外)擬凹線文7条 頸部:ヨコナデ 体部:ヨコハケ+ナナメハケ 内)口縁:ナデ 頸部:ヨコハケ 体部:ケズリ	(16.6)	(5.0)	③	にぶい黄橙色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第22図5	—	SE012 覆土	甕	口縁～体部	外)擬凹線文6条 頸部:ヨコナデ 体部:タテハケ 内)口縁:ナデ 頸部:ハケ 体部:ケズリ	(17.8)	(3.6)	②③	灰白色	良	外面煤付着(口縁～頸部)
第22図6	—	SE012 覆土	甕	口縁～体部	外)擬凹線文4条 頸部:ヨコナデ 体部:ナナメハケ 内)口縁:ヨコナデ 頸部～体部:ケズリ	(17.0)	(4.6)	③	にぶい黄橙色	良	外面煤付着(口縁～頸部)
第22図7	—	SE012	甕	口縁	外)擬凹線文4条 頸部:ナデ 内)口縁:ナデ 頸部:ケズリ	(16.8)	(3.8)	③	黒褐色	良	外面煤付着(口縁～頸部)
第22図8	—	SE012 覆土	甕	口縁	外)擬凹線文5条 頸部:ヨコナデ 内)口縁:ナデ 頸部:ケズリ	(15.8)	(3.0)	③	浅黄橙色	良	外面煤付着(口縁～頸部)
第22図9	—	SE012	甕	体部～底部	外)体部～底部:タテハケ 内)体部～底部:ケズリ	3.7	(24.0)	③	灰白色	良	外面煤付着(体部) 炭化し付着激しい(底部) 内面煤付着(底部)
第22図10	—	SE012	壺	底部	内外面ともにナデ	(6.0)	(3.0)	③	黒褐色	良	
第22図11	図版第15	SE012	甕	口縁～体部	外)擬凹線文4条 頸部:ヨコナデ 体部上半:ヘラ先列点文 ナナメハケ 体部下半:タテハケ 内)口縁～頸部:ナデ 体部:ケズリ	(13.8)	(14.0)	②	にぶい黄橙色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第22図12	図版第15	SE012	壺	完形	外)口縁～頸部:ヨコナデ 体部上半:ヨコハケ 体部下半～底部:ナナメハケ 内)口縁:ヨコナデ 頸部:ナナメ・ヨコハケ 体部上半:ヨコケズリ 体部:ナナメケズリのち深い指ナデ 体部下半～底部:ナナメケズリ	11.4	23.4	②③④	にぶい黄橙色	良	外面煤付着(口縁～底部) 内面煤付着(体部下部)
第22図13	図版第15	SE012	壺 (水差し)	完形	外)口縁:ヨコナデ 頸部:ナナメハケ 体部～底部:一次調整のハケ残るタテミガキ 内)口縁:ヨコナデ 頸部上半:ヨコハケ 頸部下半:ケズリのち指頭圧痕 体部:ヨコケズリ 底部:ナナメケズリ	12.8	23.6	②③	にぶい黄橙色	良	ガラス質含む 外面に黒底あり
第22図14	—	SE012	高坏	脚部	外)脚部:タテミガキ 脚部突出:キザミ目 内)脚部上半:ヨコナデ 脚部下半:磨滅不明	(19.8)	(6.8)	②	にぶい橙色	良	ガラス質含む 小孔1残る
第22図15	図版第16	SE012	壺脚台	脚部	外)脚部:タテミガキ 脚裾:擬凹線文8条+ナデ 内)微かにミガキ	(10.0)	(4.5)	②	にぶい褐色	良	
第24図1	—	SK043	甕	体部～底部	外)磨滅しているがタテハケ 内)磨滅不明	5.6	(15.4)	②④	にぶい橙色	良	外面煤付着(体部～底部)
第24図2	—	SD015	鉢	口縁	内外ともに磨滅不明	(14.0)	(5.3)	③	浅黄橙色	良	
第24図3	—	SD015	高坏	脚部	内外ともに磨滅不明	—	(13.1)	②	浅黄橙色	良	ガラス質含む
第24図4	—	SK041	甕	口縁	外)擬凹線文5条 内)磨滅不明	(13.0)	(3.9)	②③	浅黄橙色	やや不良	ガラス質含む
第24図5	図版第16	SK041	?	脚部	外)タテミガキ 内)磨滅不明	(15.0)	(6.3)	②	浅黄橙色	良	ガラス質含む
第24図6	—	SK041	鉢	口縁～体部	内外面ともにヨコミガキ	(10.8)	(7.8)	③	にぶい黄橙色	良	
第24図7	—	SK041	甕	口縁～体部	外)擬凹線文4条 体部:ヨコナデ 内)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ケズリ	(15.2)	(5.0)	③	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第24図8	—	SK041	甕	口縁～体部	外)口縁～体部:ナデ 内)口縁～体部:磨滅不明	(15.9)	(6.1)	③	浅黄橙色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第24図9	—	SD015	甕	底部	外)体部:タテハケ 底:ナデ 内)磨滅不明	4.0	(4.2)	③④	にぶい褐色	良	外面煤付着
第24図10	—	SD015	甕	口縁	内外ともに磨滅不明 内)口縁:指頭圧痕のみ残る	(15.8)	(5.2)	③	浅黄橙色	やや不良	
第24図11	—	SK048	器台	受部	外)磨滅不明 内)受部:磨滅不明 受部下部:ナデ	—	(4.3)	①	にぶい褐色	良	
第24図12	—	SK048	高坏	坏部	内外面ともにミガキ	(19.2)	(6.2)	①	にぶい黄橙色	良	
第24図13	—	SK048	器台	脚部	外)ミガキ 内)ナデ	(12.5)	(3.6)	①	褐色	良	小孔1数残る
第24図14	図版第19	SK048	小型器台	受部～脚部	外)受部:磨滅不明 脚部:タテミガキ 内)受部:磨滅不明 脚部:ナデ	8.6	(5.5)	①	褐色	良	小孔1残る
第24図15	—	SK048	器台	脚部	外)タテミガキ 内)脚部上半:ナデ+指ナデ 脚裾:ナデ	(20.9)	(8.5)	①③	褐色	良	小孔4
第25図1	—	SK032	高坏	坏部	内外面ともに磨滅不明	(28.5)	(5.3)	①	にぶい褐色	良	
第25図2	—	SK032	高坏	脚部	内外面ともに磨滅不明	—	(11.6)	①	にぶい褐色	良	
第25図3	図版第16	SK032	甕	口縁～体部	外)擬凹線文8条 頸部:ナデ 体部上半:刺突文 体部下半:イタナデ 内)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ケズリ	(16.0)	(15.5)	②	明黄橙色	良	外面煤付着(体部)
第25図4	—	SK032	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ハケ 体部上半:ヘラ先列点文 内)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ケズリ	(14.8)	(9.2)	①③	にぶい黄橙色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第25図5	—	SK039	小型鉢	口縁～体部	外)ハケ 内)口縁～底部:ナデ 底部:指押え	(6.3)	(5.2)	①③	にぶい褐色	良	
第25図6	図版第16	SB006-SP 4	鉢	略完形	外)口縁:ヨコナデ 頸部:タテミガキ 脚部:指押え 内)口縁:ヨコナデ 体部:ナデ 底部:ナデ	(8.5)	6.3	③④	にぶい褐色	良	
第25図7	—	SK035	甕	口縁	外)ナデ 内)口縁:ナデ 頸部:ケズリ	(13.7)	(2.4)	①②	にぶい褐色	良	外面煤付着(口縁)
第25図8	—	SK035	壺	口縁	外)ナデ 内)口縁:ナデ 頸部:ケズリ+指押え	(11.6)	(5.2)	①③	にぶい褐色	良	
第25図9	—	SK035	高坏	脚部	外)磨滅しているがミガキ 内)ナデ	(16.0)	(4.1)	①	にぶい褐色	良	
第25図10	—	SK035	甕	口縁	外)擬凹線文6条 頸部～体部:ナデ+刻み目 内)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ケズリ	(23.7)	(4.6)	①③	にぶい褐色	良	
第25図11	—	SB004-SP 2	甕	口縁	内外面ともにヨコナデ	—	(2.2)	②	にぶい褐色	良	外面煤付着(口縁～頸部)
第25図12	—	SK035	高坏	坏部	内外面ともに磨滅しているがミガキ	(29.6)	(4.8)	①	にぶい褐色	良	
第25図13	—	SK034	甕	口縁～体部	外)櫛描直線文11条 頸部:ヨコナデ 体部上半:櫛描直線文5条×3段 体部下半:タテハケ 内)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ケズリ	(18.5)	(20.4)	①③	にぶい褐色	良	外面煤付着(体部)
第25図14	—	SK034	高坏	脚部	外)脚部突出:刻み目 脚部上半:沈線3条+S字スタンプ文+ミガキ 内)ナデ	—	(3.6)	①	にぶい褐色	良	

第4章 上層の遺構と遺物

押図番号	図版番号	出土遺構	器種	部位	調整・技法・文様など	口径・ 底径 (cm)	残存高 (cm)	胎土	色調	焼成	備考
第25図15	—	SK034	蓋	摘み	外)紐:指押え 体部:タテハケ 内)紐~体部:指押え	3.6	(4.5)	①③	にぶい橙色	良	紐に紐通し孔2
第25図16	図版第16	SK034	壺	口縁	外)口縁~頸部:ナデ 内)口縁:ナデ 頸部:指押え 体部:ケズリ	(15.6)	(6.3)	①④	にぶい黄褐色	良	
第25図17	—	SK034	壺	口縁~体部	外)口縁~頸部:ナデ 体部:ミガキ 内)口縁~頸部:ナデ 体部:ケズリ	(11.8)	(12.9)	①④	にぶい橙色	良	
第25図18	—	SK042	蓋	略完形	内外ともに摩滅不明	9.8	6.8	③	橙色	良	
第25図19	—	SK042	蓋	摘み	外)紐:ナデ 体部:摩滅不明 内)磨滅不明	(3.4)	(3.8)	③	にぶい黄褐色	良	
第25図20	—	SK034	高坏	脚部	外)タテミガキ 内)ナデ	(16.1)	(5.8)	①	にぶい橙色	良	小孔4
第25図21	—	SK034	甕	底部	外)摩滅不明 内)ケズリ	(3.0)	(7.8)	①③	灰黄褐色	良	
第25図22	図版第16 図版第19	SK043	台付甕	略完形	外)磨滅不明 底部端部:沈線1条 内)口縁:ナデ 体部~底部:ケズリ	(17.8)	(22.2)	③	橙色	良	
第25図23	—	SK043	高坏	坏部	内外面ともに摩滅しているがミガキ	(28.6)	(4.5)	①	浅黄褐色	良	
第25図24	—	SK043	高坏	脚部	内外面ともに摩滅不明	—	(11.8)	①	にぶい黄褐色	良	
第27図1	図版第15	SX054	甕	口縁~底部	外)擬凹線文5条 頸部:ナデ 体部~底部:タテハケ 内)口縁:ヨコナデ 頸~体部上半:ケズリ 下半~底部:ナデか	11.4	13.1	②	灰黄褐色	良	外面煤付着(体部下半)
第27図2	—	SX054	甕	口縁~頸部	外)擬凹線文6条か 頸部:ナデ 内)口縁:ヨコナデ 頸部:ケズリ	(21.6)	(3.8)	③	にぶい黄褐色	良	外面煤付着(頸部)
第27図3	図版第16	SX054	甕	口縁~体部	外)擬凹線文4~5条 頸部:ナデか 体部上半:櫛刺突列点文 下半:ハケのちナデか 内)口縁:ナデ 頸部:摩滅不明 体部:ケズリ	(15.6)	(10.2)	③	にぶい黄褐色	良	外面煤付着(体部)
第27図4	—	SX054	甕	口縁~頸部	外)擬凹線文2条以上か 頸部:ナデ 内)口縁:摩滅不明 頸部:ケズリ	(16.6)	(3.9)	③	にぶい橙色	良	外面煤付着(頸部)
第27図5	—	SX054	甕	口縁~体部	外)擬凹線文4条 頸部:ナデ 体部:ヘラ刺突列点文 内)口縁~頸部:ナデ 体部:ケズリ	(15.8)	(4.7)	③	にぶい橙色	良	
第27図6	—	SX054	壺	体部~底部	外)体部~底部:ミガキか 内)体部上半:指押え 下半:ユビナデ 底部:ハケのちナデ	1.6	(10.0)	①	橙色	良	
第27図7	—	SX054	壺	口縁~体部	外)摩滅不明 内)口縁:摩滅不明 体部:ケズリ	(13.4) 前後	(12.6)	③④	灰白色	やや 不良	
第27図8	—	SX054	器台	受部	外)擬凹線文6条 受部:ヨコミガキ 内)受部:ヨコミガキ	(22.8)	(4.0)	③④	灰白色	良	
第27図9	図版第16	SX054	器台	受部~脚部	外)擬凹線文8条 脚部:ミガキ 脚部:擬凹線文6条 内)受部:ナデのちヨコミガキ 脚部:摩滅不明 脚部:ナデ	19.8	16.1	③	浅黄褐色	良	
第27図10	—	SX054	器台	脚部	外)脚部:タテミガキ 脚部:ミガキ 内)脚部:ヨコケズリ 脚部:ハケのちナデ	17.8	(8.6)	②	灰白色	良	小孔4
第27図11	—	SX054	高坏	脚部	外)脚部:タテミガキ 内)坏底部:ナデ 脚部上半:ナデ 下半:ケズリのちナデ	(14.5)	(9.1)	②	淡赤褐色	良	小孔4
第29図1	図版第17	SE013	甕	口縁~体部	外)口縁~体部上半:摩滅不明 下半:ハケ 内)口縁~体部上半:摩滅不明 下半:ケズリ	(17.5)	(19.9)	②③	にぶい橙色	良	外面煤付着(体部)
第29図2	図版第17	SE013	甕	口縁~体部	外)口縁~体部:タテハケ 把手部:ナデ 内)摩滅不明	(29.0)	(21.2)	②③	橙色	良	
第29図3	図版第17	SE013	甕	口縁~底部	外)口縁~体部:タテハケ 把手部:ナデ+ハケ 内)体部上半:ケズリのち指押え 下半:ケズリ	(23.8)	(23.5)	③	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁~体部)
第29図4	—	SE013	器台	受部	内外面ともに摩滅不明	(21.3)	(5.6)	①	淡黄褐色	良	
第29図5	図版第17	SE013	高坏	脚部	外)脚部:ハケ 脚部:ナデ 内)脚部:ケズリ 脚部:ハケ	15.2	(7.6)	②	橙色	良	
第29図6	—	SE013	高坏	脚部	外)脚部:ハケか 内)ケズリ	—	(7.3)	①	にぶい黄褐色	良	
第29図7	—	SE013	高坏	脚部	外)脚部:タテ方向のナデ 内)坏底部:ナデ 脚部:ナデ	—	(7.0)	②	橙色	良	
第29図8	—	SE013	高坏	脚部	外)脚部:タテミガキのちヨコミガキ 内)ナデか	—	(7.4)	②	橙色	良	
第29図9	図版第17	SE013	高坏	脚部	外)脚部:ナデ 内)脚部:ケズリ 脚部:ハケ	11.3	(6.4)	②	橙色	良	
第29図10	図版第17	SE013	高坏	脚部	外)脚部:板ナデのちミガキ 脚部:ヨコナデ 内)脚部:ケズリ 脚部:ヨコナデ	10.3	(6.8)	③	淡灰白色	良	脚部部の内外面に黒斑あり
第29図11	—	SE013	高坏	脚部	外)摩滅不明 内)坏底部:摩滅不明 脚部:ヨコナデ+ケズリ	(9.6)	(7.7)	②	浅黄褐色	良	
第30図1	図版第17	SE013	甕	口縁~体部	外)口縁~頸部:摩滅不明 体部:ハケ 内)口縁~頸部:摩滅不明 体部:ケズリ	(17.4)	(21.6)	③④	浅黄褐色	良	内外面煤付着(体部)
第30図2	—	SE013	甕	口縁~体部	外)口縁~頸部:ナデ 体部:ハケ 内)口縁:摩滅不明 体部:摩滅不明であるが指押えあり	(18.0)	(13.6)	③	橙色	良	
第30図3	—	SE013	甕	体部~底部	外)体部~底部:ハケ 内)体部上半:ナデ+ケズリ 下半~底部:摩滅不明	0.9	(25.3)	②③	黄灰色	良	外面煤付着(体部~底部) 内面炭化物付着(体部下半~底部)
第30図4	図版第17	SE013	壺	口縁~底部	外)口縁~頸部:ヨコナデ 体部:ハケのち板ナデ 底部:板ナデ 内)口縁~体部上半:ナデ 下半~底部:指押え	9.7	14.0	③	橙色	良	外面煤付着(体部) 外面に黒斑あり
第30図5	図版第17	SE013	壺	口縁~底部	外)口縁~頸部:ヨコナデ 体部:ハケ 底部:摩滅不明 内)口縁~頸部:ナデ 体部~底部:板ナデ	9.3	14.3	③	浅黄褐色	良	
第30図6	図版第17	SE013	坏	口縁~底部	外)口縁:ヨコナデ 体部~底部:ケズリか 内)口縁:ヨコナデ 体部~底部:摩滅不明	(12.8)	5.5	②	橙色	良	
第30図7	図版第17	SE013	坏	口縁~底部	外)口縁~底部:ミガキか 内)摩滅不明	(12.8)	4.4	①	橙色	良	
第30図8	図版第17	SE013	壺	口縁~底部	外)口縁~頸部:ヨコナデ 体部:摩滅不明 底部:ケズリ 内)口縁:ヨコナデか 頸部~底部:摩滅不明	(8.8)	9.2	②	にぶい黄褐色	良	
第30図9	—	SE013	甕?	口縁	外)口縁:ヨコナデか 内)口縁:摩滅不明	(11.5)	(2.4)	③	にぶい橙色	良	
第30図10	—	SE013	甕	口縁	外)口縁:タテハケのちヨコナデ 内)口縁:ヨコナデ+ヨコハケ	(15.8)	(3.1)	②	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁)
第30図11	図版第17	SE013	壺	口縁~底部	内外面ともに摩滅不明	3.3	7.0	③	にぶい黄褐色	良	外面に黒斑あり
第30図12	図版第17	SE013	壺	口縁~底部	外)口縁~頸部:ヨコナデ 体部:摩滅不明 内)口縁:ヨコナデ 頸~体部:摩滅不明 底部:指押え	4.7	7.2	②	にぶい黄褐色	良	外面に黒斑あり
第30図13	—	SE013	器台	受部	外)口縁:ヨコナデ 内)口縁:ヨコハケのちヨコナデ	(15.3)	(3.3)	②	にぶい黄褐色	良	
第31図1	—	SE013	高坏	坏部	外)坏部:ヨコナデ 内)坏部:摩滅不明	(16.0)	(5.0)	①	にぶい橙色	良	
第31図2	—	SE013	甕	口縁~体部	外)口縁~体部:ヨコナデか 内)口縁:ヨコナデ 頸~体部:ハケ	(16.0)	(3.9)	③	橙色	良	外面煤付着(口縁~体部)
第31図3	—	SE013	壺	体部~底部	内外面ともに摩滅不明	1.5	(7.5)	②	にぶい橙色	良	
第31図4	図版第17	SE014	壺	口縁~底部	外)口縁~頸部:摩滅不明 体部~底部:ハケ 内)口縁~頸部:摩滅不明 体部上半:ナデ+指押え 下半~底部:ハケ	8.1	14.7	②	にぶい橙色	良	焼成後、体部下半に穿孔1
第31図5	図版第17	SE014	壺	口縁~底部	外)口縁~頸部:ヨコナデ 体部上半:ハケのちナデ+ヨコナデ 下半~底部:ナデ 内)口縁~頸部:ナデ 体部:ナデ 底部:ユビナデ	8.4	15.0	②	浅黄褐色	良	
第31図6	図版第17	SE014	甕	体部~底部	外)体部~底部:ハケ 内)体部:ケズリのちナデ 底部:指押え	2.5	(18.1)	②③	灰白色	良	外面に黒斑あり 内面体部に炭化物付着 天井部に自然釉付着
第31図7	—	C11 包含層	坏蓋	口縁~天井部	外)天井部・端部:回転ナデ 内)天井部・端部:回転ナデ	(13.0)	(3.7)	④	灰色	良	
第36図1	図版第19	SX053	甕	口縁~体部	外)口縁:ナデ 頸~体部:ハケ 内)口縁:ナデ 頸部:指押え 体部:ケズリ	(16.8)	(12.5)	②	にぶい黄褐色	良	
第36図2	—	SX053	甕	底部	外)底部:ハケ 内)底部:ケズリ	3.0	(3.4)	③	黒色	良	
第36図3	図版第19	SX053	甕	口縁~体部	外)口縁:ナデ 頸~体部:ハケ 内)口縁~頸部:ナデ 体部:ケズリ	(15.7)	(5.0)	①④	橙色	良	外面煤付着(口縁~体部)
第36図4	—	SX052	甕	口縁~体部	内外面ともに摩滅不明	(14.7)	(5.2)	②④	橙色	やや 不良	
第36図5	—	SX055	甕	口縁	外)口縁~頸部:ナデ 内)口縁~頸部:ナデ	(23.6)	(4.9)	①	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁~頸部)
第36図6	図版第19	SX055	高坏	坏部~脚部	外)坏部:ミガキ 脚部:ミガキ 内)坏部:ミガキ 脚部:ナデ	(18.1)	13.7	①	橙色	良	小孔3
第36図7	—	SX055	鉢	体部~脚部	内外面ともに摩滅不明	(6.9)	(6.2)	①②	にぶい橙色	良	
第36図8	—	SX055	壺	口縁~体部	内外面ともに摩滅不明	(14.8)	(7.8)	④	橙色	良	
第36図9	—	SD023	壺	体部	外)体部:ミガキのち2段の羽状櫛刺突列点文の下に沈線1条 内)体部:摩滅著しいがハケ	—	(4.7)	②	にぶい橙色	良	
第36図10	図版第19	SK056	器台	受部~脚部	外)受部:ヨコミガキ 脚部:タテミガキ 内)受部:ヨコミガキ 脚部:ケズリ	(8.8)	(8.0)	③	にぶい橙色	良	小孔3

第4節 古墳時代の井戸とそのほかの遺構と遺物

押図番号	図版番号	出土遺構	器種	部位	調整・技法・文様など	口径・底径 (cm)	残存高 (cm)	胎土	色調	焼成	備考
第36図11	—	SK056	甕	底部	外) 体部: タテハケ 底部: 摩滅不明 内) 胴・底部: 摩滅不明	1.6	(3.2)	③	にぶい橙色	良	
第36図12	図版第19	SK056	小型土器	頸部～底部	外) 頸・体部上半: 粗いハケ 下半・底部: ナデ 内) 頸～底部: 指押え?	1.4	(6.5)	③	橙色	良	
第36図13	—	SB010-SP 4	甕	口縁～頸部	外) 不明瞭な擬凹線文 頸部: 摩滅不明 内) 口縁: 連続指頭圧痕 頸部: 摩滅不明	(17.6)	(4.6)	③	灰白色	良	
第36図14	—	SB010-SP 4	鉢	口縁部	内外面ともに摩滅不明	(16.0)	(8.8)	③④	浅黄橙色	良	
第36図15	図版第19	SP073	鉢	口縁～底部	外) 口縁～頸部: ヨコミガキ 体部・底部: ランダムなミガキ 内) 口縁～頸部: ヨコミガキ 体部・底部: ランダムなミガキ	9.8	5.8	①	橙色	良	外面煤付着(口縁～底部) 精製土器
第36図16	図版第19	SP073	器台	受部～頸部	外) 受部: ヨコミガキ 脚部: タテミガキ 内) 受部: ランダムなミガキ 脚部: 弱いナデ	22.6	(10.7)	①	橙色	良	小孔1以上か 精製土器
第36図17	図版第19	SP072	高坏	脚部	外) 脚部: 板ナデか 脚部: 摩滅不明 内) 脚部: ケズリ 脚部: ナデか	11.6	(9.5)	③	橙色	良	
第36図18	—	SD020	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(15.8)	(6.5)	③	橙色	良	
第36図19	—	SK056	甕	口縁～体部	外) 口縁: 摩滅不明 頸部: ハケ 体部: 摩滅不明 内) 口縁～体部: 摩滅不明	(16.0)	(4.7)	③	灰白色	良	
第36図20	—	SK056	甕	口縁～体部	外) 口縁: 指押えのちヨコナデ 頸・体部: ヨコナデ 内) 口縁: 指押えのちヨコナデ 頸部: ナデ 体部: ヨコケズリ	(14.8)	(5.2)	②④	にぶい赤褐色	良	
第36図21	—	SK056	甕	口縁部	外) 擬凹線文7条 内) 口縁: ヨコナデ 頸部: ケズリ	(16.4)	(3.6)	③	黒色	良	外面煤付着(口縁)
第36図22	図版第19	SK056	甕	口縁～体部	外) 口縁～頸部: ヨコナデ 体部: 指押えのちヨコナデ 内) 口縁～頸部: ヨコナデ 体部: ヨコケズリ	(15.2)	(8.2)	③④	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第36図23	—	SK056	甕	口縁部	内外面ともに摩滅不明	(15.0)	(5.6)	③④	にぶい黄褐色	不良	
第36図24	—	SK056	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(14.2)	(4.5)	①	にぶい黄褐色	良	外面煤付着(体部)
第36図25	—	SK056	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(12.7)	(5.3)	③	淡橙褐色	良	
第36図26	図版第19	SK056	器台	受部～頸部	外) 受部: ミガキ 脚部: タテミガキ 内) 受部: ミガキ 脚部: ケズリ	8.6	(6.0)	③	淡黄褐色	良	小孔2以上か
第36図27	—	SK056	器台	受部	内外面ともにヨコミガキ	(18.6)	(5.0)	③	淡橙褐色	良	小孔4か
第36図28	図版第19	SK056	蓋	略完形	外) 天井部: ケズリ 胴～口縁: 摩滅不明 内) 天井～口縁: 摩滅不明	13.2	5.1	③	淡橙褐色	良	
第36図29	—	SK056	甕	口縁～頸部	外) 口縁～頸部: ヨコナデ 内) 口縁: ヨコナデ 頸・体部: ヨコケズリ	(14.6)	(2.8)	②④	明赤褐色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第36図30	—	SK056	甕	口縁～頸部	外) 口縁～頸部: ヨコナデ 内) 口縁: ヨコナデ 頸部: ヨココハケ 体部: ヨコケズリ	(13.6)	(3.1)	②④	にぶい橙色	良	外面煤付着(頸部)
第36図31	図版第19	SK056	鉢	口縁～底部	内外面ともに摩滅不明	6.8	7.2	④	浅黄褐色	良	
第36図32	—	包含層	?	脚部	外) 脚部: ヨコミガキ 内) 脚部: ハケ	(10.6)	(2.0)	②	橙色	良	
第36図33	—	SK075	高坏	坏部	内外面ともに摩滅不明	(23.8)	(3.9)	②	浅黄褐色	良	
第37図1	図版第18	SK051	甕	口縁～体部	外) 擬凹線文9条 頸部: ヨコナデ 体部: ハケ 内) 口縁～頸部: ヨコナデ 体部: ケズリ	(30.8)	(7.5)	③④	橙色	良	
第37図2	図版第20	SK051	甕	口縁～体部	外) 口縁: 摩滅不明 頸～体部: タテハケ 内) 口縁: 摩滅不明 頸部: ヨコハケのちナデ 体部: ケズリ	(18.0)	(20.0)	③	褐色	やや不良	内外面煤付着(体部)
第37図3	図版第18	SK051	鉢	口縁～底部	外) 口縁～底部: ヨコミガキ 内) 口縁～頸部: ヨコナデ 体部: ハケのちナデ	9.5	7.6	②	橙色	良	精製土器
第37図4	—	SK051	甕	口縁～体部	外) 口縁～体部: ナデ 内) 口縁～頸部: ナデ 体部上半: ナデのち指押え 下半: ケズリ	(17.7)	(7.0)	③④	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁)
第37図5	図版第18	SK051	甕	口縁～体部	外) 口縁: ヨコナデ 頸部: タテハケ 体部: ハケ 内) 口縁: ハケのちヨコナデ 頸～体部: ケズリか	(14.8)	(10.8)	③④	にぶい橙色	良	
第37図6	—	SK051	甕	口縁～体部	外) 口縁～頸部: ヨコナデ 体部: ナデ 内) 口縁: ヨコナデ 頸部: 指押え 体部: ナデ	(14.9)	(7.5)	③④	灰黄褐色	良	内面に黒斑あり
第37図7	—	SK051	甕	口縁～体部	外) 口縁: ヨコナデ 頸～体部: ハケ 内) 口縁: ヨコナデ 頸～体部: ヨコハケ	(15.0)	(3.9)	③	橙色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第37図8	—	SK051	甕	口縁～体部	外) 口縁～頸部: ヨコナデ 体部: ハケ 内) 口縁: ヨコナデ 頸～体部: ヨコハケ	(14.7)	(3.8)	③	橙色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第37図9	—	SK051	甕	口縁～体部	外) 口縁～体部: ナデ 内) 口縁: ヨコハケ 頸～体部: ケズリ	(15.0)	(4.5)	③④	にぶい橙色	良	
第37図10	図版第18	SK051	甕	口縁～体部	外) 口縁～頸部: ヨコナデ 体部: ハケ 内) 口縁～頸部: 摩滅不明 体部: ケズリ	(14.9)	(8.6)	②	灰白色	不良	
第37図11	—	SK051	甕	口縁～体部	外) 口縁: ヨコナデ 頸～体部: ハケ 内) 口縁～体部: ヨコナデか	(15.7)	(4.2)	②	にぶい褐色	良	
第37図12	—	SK051	甕	底部	内外面ともにハケ	2.0	(6.1)	③④	赤褐色	良	内外面煤付着(体部～底部)
第37図13	—	SK051	高坏	坏部	内外面ともにミガキ	(20.7)	(6.7)	③	にぶい橙色	良	
第37図14	図版第18	SK051	器台	受部	内外面ともに摩滅不明	(8.4)	(3.2)	①	にぶい橙色	良	
第37図15	図版第18	SK051	高坏	脚部	外) 脚部: ケズリのち太いたテミガキ 端部: ヨコナデのち太いたテミガキ 内) ヘラ工具のちナデ	12.6	(8.1)	①	にぶい褐色	良	小孔3
第37図16	—	SK051	鉢	口縁～体部	外) 摩滅不明 内) 口縁～体部: 指押え	(8.0)	(4.6)	③④	灰白色	良	
第37図17	図版第18	SK051	鉢	口縁～底部	外) 口縁: 摩滅不明 体部: 指押え 底部: 摩滅不明 内) 摩滅不明	10.3	5.4	③	明赤褐色	良	外面煤付着(体部～底部)
第37図18	図版第18	SK051	?	脚部	内外面ともに摩滅不明	8.4	(5.1)	③	灰白色	良	
第37図19	図版第18	SK051	有孔鉢	略完形	外) 口縁～体部: 指押えのちタテミガキ 底部: ナデ 内) 口縁～体部: ミガキ 底部: ナデか	12.7	6.3	③	淡橙褐色	良	
第37図20	図版第18	SK051	鉢	口縁～脚部	外) 口縁: ナデ 体部: 粗いハケのち弱いナデ 脚部: ユビナデ 内) 口縁: ナデか 体部: ハケのちナデ 脚部: ナデ	12.2	7.0	③④	浅黄褐色	良	
第37図21	—	SK051	?	脚部	内外面ともに摩滅不明	15.0	(4.7)	③	浅黄褐色	良	小孔1以上か
第37図22	図版第18	SK079	壺	口縁～底部	内外面ともに摩滅不明	9.9	15.7	②④	橙色	やや不良	
第37図23	—	SK079	壺	体部～底部	外) 体部: タテハケ 底部: 摩滅不明 内) 胴・底部: 摩滅不明	5.4	(8.8)	②④	浅黄褐色	良	
第37図24	—	SK079	壺?	体部～底部	外) 体部: ランダムなハケ 底部: ケズリ 内) 体部: ケズリ 底部: ハケ	6.0	(8.0)	②	にぶい黄褐色	良	外面煤付着(体部～底部)
第38図1	図版第20	SK064	壺	口縁～体部	外) 口縁: ミガキ 頸部: ミガキのち貼付刻み突帯 体部: ハケのちミガキ 内) 口縁: ヨコミガキ 頸部: ナデ 体部: ナデなケズリ	(17.7)	(12.4)	①②	にぶい橙色	良	内面体部以外に赤彩
第38図2	図版第20	SK064	甕	口縁～体部	外) 口縁～頸部: ナデ 体部上半: ナデのち櫛描波状文 下半: ハケ 内) 口縁～頸部: ナデか 体部: ケズリ	(17.5)	(12.6)	②④	にぶい褐色	良	外面煤付着(頸部～体部)
第38図3	図版第20	SK064	甕	口縁～体部	外) 口縁～頸部: ナデ 体部: ヨコハケ 内) 摩滅不明	(15.7)	(13.7)	②③	にぶい褐色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第38図4	—	SK064	甕	口縁～体部	外) 口縁～頸部: ナデ 体部: ハケ 内) 摩滅不明	(14.8)	(7.3)	②	にぶい黄褐色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第38図5	図版第19	SK064	甕	口縁～体部	外) 口縁～体部: ヨコナデ 内) 口縁～体部: 摩滅不明	(18.0)	(5.4)	②④	褐色	良	
第38図6	—	SK064	甕	口縁～体部	外) 口縁～体部: ハケ 内) 口縁～体部: ヨコナデ	(17.2)	(7.1)	③	淡橙褐色	良	
第38図7	図版第20	SK064	甕	口縁～体部	外) 口縁～頸部: ナデ 体部: ハケ 内) 口縁: ナデ 頸～体部: ケズリ	(19.8)	(10.7)	④	にぶい褐色	良	
第38図8	—	SK064	甕	口縁～体部	外) 口縁～頸部: ヨコナデ 体部: ハケか 内) 口縁～頸部: ヨコナデ 体部: ケズリ	(17.4)	(6.8)	③	にぶい褐色	良	外面煤付(口縁)
第38図9	—	SK064	甕	口縁～体部	外) 口縁～頸部: ヨコナデ 体部: ハケ 内) 口縁～体部: 摩滅不明	(19.7)	(6.7)	①④	褐色	良	外面煤付着(体部)
第38図10	—	SK064	甕	口縁	外) 口縁端部: ナデによる揃み 口縁: タテハケ 内) 口縁: ヨコハケ	(15.2)	(3.0)	①④	にぶい赤褐色	良	
第38図11	—	SK064	甕	口縁～体部	外) 口縁～頸部: ヨコナデ 体部: ハケか 内) 口縁: ナデ 頸～体部: ケズリ	(14.8)	(5.0)	①③	褐色	良	
第38図12	—	SK064	甕	口縁～体部	外) 口縁: ナデ 頸部: ハケのちヨコナデ 体部: ナデ 内) 口縁: ヨコナデ 頸部: ナデのち指押え 体部: ケズリ	(16.0)	(5.4)	①	淡橙褐色	良	
第38図13	—	SK064	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(13.7)	(6.5)	①④	浅黄褐色	良	
第38図14	—	SK064	甕	口縁～体部	外) 口縁～体部: ハケ 内) 口縁: ハケ 頸～体部: ケズリ	(16.0)	(5.4)	③	にぶい褐色	良	
第38図15	—	SK064	甕	口縁部	内外面ともに摩滅不明	(17.8)	(3.3)	④	淡橙褐色	良	

第4章 上層の遺構と遺物

押図番号	図版番号	出土遺構	器種	部位	調整・技法・文様など	口径・底径 (cm)	残存高 (cm)	胎土	色調	焼成	備考
第38図16	—	SK064	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ハケか 内)口縁:摩滅不明 頸～体部:ケズリ	(15.7)	(5.5)	②④	褐灰色	良	
第38図17	—	SK064	鉢	口縁～体部	外)摩滅不明 内)口縁～体部:ナデ	(8.8)	(4.4)	①	橙色	良	
第38図18	—	SK064	壺	口縁～頸部	外)口縁ヨコナデ 頸部:ハケのちヨコナデ 内)口縁～頸部:ヨコナデ	(12.0)	(6.4)	③	淡橙褐色	良	
第38図19	—	SP069	壺	体部～底部	外)体部～底部:ミガキか 内)体部～底部:ユビナデ	5.5	(8.0)	③④	灰白色	良	
第38図20	—	SK064	鉢	口縁～体部	外)口縁～体部:摩滅不明 内)口縁～体部:摩滅著しいがハケ	(11.2)	(6.4)	①	淡黄褐色	良	外面に黒斑あり
第39図1	—	SK064	高坏	坏部	内外面ともに摩滅不明	(21.7)	(4.8)	①②	橙色	良	
第39図2	図版第18	SK064	鉢	口縁～体部	外)内外面ともにミガキ	(26.9)	(9.9)	①	にぶい橙色	良	内外面に赤彩
第39図3	図版第18	SK064	器台	受部～脚部	内外面ともに摩滅不明	8.5	7.6	①	にぶい橙色	良	小孔2対3
第39図4	—	SK064	器台	受部 (端部欠損)	外)受部:ミガキ 内)受部:ミガキか	—	(8.0)	①④	橙色	良	
第39図5	—	SK064	高坏	脚部	外)摩滅不明 内)坏底部:ナデ 脚部:摩滅不明	(11.9)	(11.9)	①	にぶい橙色	良	
第39図6	—	SK064	蓋	摘み	内外面ともにナデ	—	(6.1)	④	淡橙褐色	良	
第39図7	—	SK064	鉢	略完形	内外面ともに摩滅不明	(6.1)	3.3	①	にぶい橙色	やや不良	
第39図8	—	SK064	?	脚部	外)脚部:ミガキ 内)脚部:ナデ	(18.2)	(3.1)	①	にぶい黄褐色	良	
第39図9	—	SP066	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:粗いハケ 体部:摩滅不明 内)口縁:ヨコハケ 頸部:ユビナデ 体部:摩滅不明	(15.8)	(5.4)	③	褐色	良	
第39図10	—	SK062	高坏	坏部～脚部	外)坏部:ヨコミガキ 脚部上半:密なヨコミガキ 脚部下半:タテミガキ 内)坏部:摩滅不明 脚部:ケズリ	—	(7.0)	①	褐色	良	小孔3か
第39図11	図版第18	SK062	器台	受部～脚部	外)受部:タテミガキ 脚部:タテミガキ 内)受部:ミガキ 脚部上半:ユビナデ 脚部下半:ケズリのちナデ	8.6	8.8	④	褐色	良	小孔3
第39図12	—	SK062	壺	口縁～肩部	外)口縁:ヨコミガキ 頸部:弱いハケのちナデ 体部:ミガキ 内)口縁～頸部:摩滅不明 体部:ナデ+指押え	(16.6)	(6.8)	①	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁)
第39図13	—	SK062	甕	口縁～体部	外)口縁～体部:ヨコナデ 内)口縁:ヨコナデ 頸～体部:ヨコハケ	(14.9)	(4.4)	③④	にぶい黄褐色	良	
第40図1	図版第20	SD031	壺	口縁～底部	外)口縁:ハケ 頸部:ヨコナデ 体部:ハケ 内)口縁～体部:摩滅不明 底部:指押え	10.6	16.3	③④	浅黄褐色	良	
第40図2	—	SK074	鉢?	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(34.0) 前後	(6.3)	③	淡橙褐色	良	
第40図3	図版第20	SK074	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(24.9)	(5.8)	③	淡橙褐色	良	
第40図4	—	SK074	甕	口縁～頸部	外)口縁:ヨコナデ 頸部:摩滅不明 内)口縁～頸部:ナデ	(20.0)	(5.0)	③④	にぶい黄褐色	良	
第40図5	—	SK074	高坏	脚部	外)脚部:摩滅不明 内)脚部:ナデ+ハケ	(11.0)	(7.2)	②	にぶい黄褐色	良	
第40図6	図版第18	SK074	鉢	口縁～体部	外)口縁:ナデ 頸・体部:ケズリ 内)口縁～体部:ナデ	(12.0)	(6.4)	②	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第40図7	—	SK074	鉢	頸部～底部	外)頸～底部:ナデ 内)頸・体部:ナデ 底部:工具によるオサエ	1.2	(5.5)	②	にぶい黄褐色	良	
第40図8	—	SK074	器台	受部～脚部	内外面ともに摩滅不明	8.8	(4.8)	②	にぶい橙色	良	
第40図9	図版第18	SK074	鉢脚台	脚部	外)底部:ヨコミガキ 脚部:ミガキ 内)底部:ミガキ 脚部:ヨコミガキ	7.2	(3.7)	④	淡橙褐色	良	
第40図10	—	SK078	甕	口縁～頸部	外)口縁:擬凹線文3条+ヨコナデ 頸部:ヨコナデ 内)口縁:ヨコナデ 頸部:ケズリ	(15.2)	(2.9)	③	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁～頸部)
第40図11	図版第20	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ヨコハケ 内)摩滅不明	(13.8)	(6.5)	③	褐色	良	外面煤付着(頸部～体部)
第40図12	—	SD029	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(16.2)	(5.3)	③	灰褐色	良	外面煤付着(頸部)
第40図13	—	SD029	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(17.6)	(4.8)	②	にぶい褐色	良	外面炭化物付着(口縁) 外面煤付着(頸部)
第40図14	—	SD028	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(18.5)	(4.1)	③	淡黄褐色	良	
第40図15	—	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ナデ 体部:タテハケのち1部ヨコハケ 内)口縁～頸部:ナデ 体部:ケズリ	(15.6)	(8.0)	③	にぶい黄褐色	良	
第40図16	—	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁～体部:ヨコナデ 内)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ケズリ	(17.2)	(5.6)	①	暗黄褐色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第40図17	—	SD029	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(16.4)	(6.0)	③	淡橙褐色	良	
第40図18	図版第20	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁:ナデ 頸～体部:粗いハケ 内)口縁:ナデ 頸～体部:ケズリ	(14.7)	(8.5)	①④	にぶい褐色	良	
第40図19	—	SD029	壺	口縁部	内外面ともにヨコナデ	(12.8)	(3.0)	②	にぶい褐色	良	外面に黒斑あり
第40図20	—	SD029	壺	口縁部	外)擬凹線文7条 頸部:ヨコナデ 内)口縁:ヨコナデ	(15.8)	(3.2)	④	淡橙褐色	良	
第40図21	—	SD029	壺	体部	外)体部:ヨコミガキ 内)体部上半:ユビナデ 下半:ナデ	—	(8.6)	②	褐色	良	内面に黒斑あり
第40図22	図版第20	SD029	壺	口縁～体部	外)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ヨコハケ 内)口縁～頸部:ナデ 体部:摩滅不明	(24.5)	(13.8)	①④	にぶい褐色	良	
第40図23	—	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁～体部:ヨコナデ 内)口縁:ヨコナデ 頸～体部:ケズリ	(16.2)	(4.0)	④	淡橙褐色	良	
第40図24	—	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁～体部:摩滅不明 内)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ケズリのち指押え	(16.2)	(9.2)	③	淡黄褐色	良	
第40図25	—	SD028	壺	口縁～体部	外)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ヨコハケ 内)口縁:ヨコハケ 頸～体部:ナデ	(9.0)	(5.6)	③	暗橙褐色	良	
第40図26	図版第18	SK095	有孔鉢	口縁～底部	外)口縁～底部:摩滅不明 内)口縁～体部:摩滅不明 底部:工具によるオサエ痕	13.8	8.7	①	褐色	良	外面煤付着(口縁～底部)
第41図1	—	SD028	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ヨコハケ 内)口縁～頸部:ナデ 体部:ケズリか	(19.8)	(6.7)	②	にぶい黄褐色	良	内面に黒斑あり
第41図2	図版第20	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ヨコナデ 体部上半:タテハケのちヨコハケ 下半:タテハケ 内)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ケズリ	(14.6)	(11.7)	③	にぶい黄褐色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第41図3	図版第20	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:摩滅不明 体部上半:ヨコハケ 下半:タテハケ 内)摩滅不明	(18.0)	(10.6)	②	褐色	良	
第41図4	図版第20	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ハケ 内)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ヨコケズリ	(16.0)	(7.3)	①	暗黄褐色	良	
第41図5	—	SD028	甕	口縁～体部	外)口縁:ヨコナデ 頸部:タテハケのちナデ 体部:タテハケ 内)口縁:ヨコナデのちハケ 頸部:ナデ 体部:ケズリ	(16.4)	(5.1)	③	暗黄褐色	良	外面煤付着(口縁～頸部)
第41図6	図版第20	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁～体部:ヨコナデ 内)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ケズリ	(15.6)	(7.3)	③	にぶい黄褐色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第41図7	図版第20	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁～体部上半:ナデ 下半:ヨコハケ 内)口縁～頸部:摩滅不明 体部上半:ヨコケズリ+指押え 下半:ケズリ	16.0	(12.5)	②	明赤褐色	良	
第41図8	図版第20	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:摩滅不明 体部:ハケ 内)口縁～頸部:ヨコハケのちヨコナデ 体部:ケズリ	(16.0)	(16.0)	③	にぶい褐色	良	
第41図9	図版第20	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ナデ 体部上半:タテハケ 下半:ヨコハケ 内)口縁～頸部:ナデ 体部:ケズリ	(15.8)	(13.7)	③	褐色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第41図10	図版第20	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁～体部上半:ヨコナデ 下半:ヨコハケ 内)口縁～頸部:ナデ 体部上半:ナデのち指押え 下半:ケズリ	(15.8)	(12.1)	③	褐色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第41図11	—	SD029	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(15.0)	(6.0)	③	褐色	良	
第41図12	図版第20	SD028	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ナデ 体部上半:タテハケのちヨコハケ 下半:タテハケ 内)口縁～体部上半:ナデ 体部下半:ケズリ	(15.6)	(10.5)	③	灰黄褐色	良	外面煤付着(口縁)
第41図13	—	SD029	甕	口縁部	内外面ともにヨコナデ	(19.0)	(2.9)	①	暗黄灰色	良	
第41図14	—	SD029	甕	口縁部	内外面ともに摩滅不明	(11.9)	(3.7)	①	淡橙褐色	良	
第41図15	—	SD028	甕	体部上半	外)頸部:ヨコナデ 体部:ヨコハケのち2条の櫛状波状文 内)頸部:ヨコナデ 体部:ケズリ	—	(5.0)	③	灰白色	良	外面煤付着(頸部～体部)

第4節 古墳時代の井戸とそのほかの遺構と遺物

押図番号	図版番号	出土遺構	器種	部位	調整・技法・文様など	口径・底径 (cm)	残存高 (cm)	胎土	色調	焼成	備考
第41 図16	—	SD028	甕	口縁部	外)口縁～体部:ヨコナデ 内)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:摩滅不明	(13.8)	(4.5)	②	橙色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第41 図17	—	SD028	甕	頸部	外)頸～体部:ヨコナデのちヘラ刺突列点文	—	(4.0)	③	黄灰色	良	
第42 図1	—	SD029	甕	口縁～頸部	外)擬凹線文7条 頸部:ヨコナデ 内)口縁:ヨコナデ 頸～体部:ケズリ	(15.2)	(3.4)	③	暗黄褐色	良	
第42 図2	—	SD029	甕	口縁部	外)擬凹線文5条 頸部:ヨコナデ 内)口縁:摩滅不明 頸～体部:ケズリ	(14.0)	(4.1)	③	淡橙褐色	良	外面煤付着(口縁～頸部)
第42 図3	—	SD029	甕	口縁～頸部	内外面ともにナデ	(11.6)	(3.8)	②	暗灰褐色	良	外面煤付着(口縁～頸部)
第42 図4	—	SD028	甕	口縁部	内外面ともにヨコナデ	(14.2)	(3.3)	②	にぶい黄褐色	良	
第42 図5	—	SD029	壺	口縁部	外)口縁:摩滅不明 頸部:タデミガキ 内)口縁:ヨコナデ 頸部:ヨコミガキ	(25.6)	(3.6)	③	淡橙褐色	良	
第42 図6	—	SD028	壺	口縁部	内外面ともに摩滅不明	(24.0)	(3.9)	①	暗黄褐色	良	
第42 図7	図版第19	SD029	壺	口縁～頸部	外)擬凹線文10条+円形浮文 頸部:ミガキ 内)口縁～頸部:ミガキ	(24.0)	(5.9)	②	淡黄褐色	良	
第42 図8	—	SD029	脚	脚部	外)脚部:板ナデか 内)脚部:板ナデ 脚部:ハケ	—	(6.8)	②	にぶい橙色	良	
第42 図9	—	SD029	鉢?	底部	外)体部:ミガキ 底部:ナデ 内)体～底部:ナデ	3.2	(3.1)	①	黄褐色	良	
第42 図10	—	SD029	鉢	口縁～体部	外)口縁～体部:ヨコナデ 内)口縁～体部:摩滅不明	(12.6)	(4.6)	①	淡橙褐色	良	
第42 図11	—	SD029	鉢?	口縁～体部	外)口縁～体部:ナデ 内)口縁:ヨコナデ 頸～体部:ナデ	(12.6)	(4.7)	③	淡橙褐色	良	
第42 図12	—	SD029	鉢	口縁～体部	外)摩滅不明 内)口縁～頸部:ナデ 体部:ハケ	(35.0)	(6.8)	③	淡橙褐色	良	
第42 図13	図版第18	SD029	高坏	坏部～頸部	内外面ともに摩滅不明	前後 (13.0)	(11.5)	①	淡橙褐色	良	
第42 図14	—	SD029	鉢	口縁～体部	外)口縁～体部:ミガキ 内)ミガキ	(10.8)	(3.9)	①	淡赤褐色	良	
第42 図15	—	SD029	鉢	口縁～体部	内外面ともにミガキ	(16.2)	(6.1)	①	淡黄褐色	良	
第42 図16	—	SD029	器台	受部	内外面ともにミガキ	(19.8)	(5.1)	③	にぶい褐色	良	
第42 図17	—	SD028	高坏	坏部	外)坏部:ハケのちミガキ 内)坏部:ミガキ	(17.0)	(4.4)	②	にぶい黄褐色	良	
第42 図18	—	SD029	器台	受部	外)受部:摩滅不明 内)受部:ナデ+ハケのちナデ	(17.5)	(6.3)	①④	にぶい橙色	良	
第42 図19	—	SD029	器台	受部～脚部	外)受部:ナデか+棒状浮文 脚部:タデミガキ 内)受部:ミガキ 脚部:ナデ	12.5	(7.0)	①	橙色	良	小孔1以上か
第42 図20	—	SD029	有孔鉢	体部～底部	外)摩滅不明 内)体部上半:ケズリ 下半:ハケのち板ナデ	(1.4)	(10.0)	①	黒色	良	
第42 図21	—	SD028	鉢	口縁～体部	外)口縁～体部:ヨコナデ 内)口縁:ヨコナデ 頸～体部:ナデ	(9.0)	(5.9)	①	にぶい黄褐色	良	
第42 図22	—	SD029	鉢	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(10.2)	(4.9)	③	淡橙褐色	良	
第42 図23	—	SD029	鉢	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(8.2)	6.3	④	褐色	良	内面煤付着(体部～底部)
第42 図24	—	SD029	鉢	口縁～体部	外)口縁:摩滅不明 体部～底部:ナデ 内)摩滅不明	(8.8)	5.7	②	にぶい褐色	良	内面煤付着(体部～底部)
第42 図25	—	SD029	鉢	口縁～体部	外)口縁～体部:ナデ 内)口縁:摩滅不明 頸～体部:ハケ	(11.3)	(5.4)	③	淡橙褐色	良	
第42 図26	—	SD029	壺	体部	外)体部:ナデか 内)頸部:ナデ 体部:ハケ	—	(7.0)	②	灰褐色	良	
第42 図27	—	SD028	高坏	脚部	外)脚部:タデミガキ 内)脚部:ケズリ	—	(7.1)	③	橙褐色	良	
第42 図28	—	SD029	高坏	脚部	外)脚部:タデナデ 脚部:ヨコナデ 内)脚部:ケズリ 脚部:ヨコナデ	(12.2)	(7.3)	②	にぶい褐色	良	
第42 図29	—	SD028	高坏	脚部	外)脚部:摩滅不明 内)脚部:ケズリ 脚部:摩滅不明	(11.0)	(6.9)	②	にぶい褐色	良	裾端部内外面に黒斑あり
第42 図30	—	SD029	高坏	脚部	内外面ともに調整不明	—	(7.7)	③	淡橙褐色	良	小孔4か
第42 図31	図版第18	SD029	高坏	脚部	外)脚部:タデミガキ 内)脚部:摩滅不明	(12.0)	(6.9)	①	淡橙褐色	良	小孔3
第42 図32	図版第18	SD029	高坏	脚部	外)脚部:ミガキ 内)脚部上半:ナデ 下半:ハケ	(12.7)	(6.9)	①	淡橙褐色	良	小孔3
第42 図33	—	SD029	?	脚部	外)脚部:ミガキ 内)脚部:ケズリ 脚部:ハケ	(18.0)	(3.9)	②③	にぶい褐色	良	小孔1以上か
第42 図34	—	SD029	?	脚部	外)脚部:タデミガキ 内)脚部:ナデ	8.6	(2.8)	①	淡灰白色	良	
第42 図35	—	SD028	?	脚部	外)脚部:ミガキ 内)ハケのちナデか	(9.3)	(5.0)	①④	褐色	良	小孔3
第42 図36	図版第18	SD029	器台	受部～脚部	外)受～脚部:ミガキ 内)受部:ミガキ 脚部:ケズリ	(8.2)	(6.5)	②	褐色	良	小孔4
第42 図37	—	SD028	多孔土器	体部	内外面ともに摩滅不明	—	(3.6)	③	にぶい黄褐色	良	小孔3以上か
第42 図38	—	SD029	器台	脚部	外)脚部:タデミガキ 内)脚部上半:ケズリ 下半:ハケのちナデ	(14.1)	(8.7)	③	淡橙褐色	良	小孔3
第43 図1	—	C13 包含層	壺	口縁部	外)口縁:ミガキのち擬凹線文5条と3本1対の刻み棒状浮文 頸部:ナデのちミガキ 内)摩滅不明	(21.7)	(3.7)	②③	にぶい黄褐色	良	
第43 図2	—	B16 包含層	壺	頸部	外)口縁～頸部:ナデ 内)口縁:ナデ 頸部:ハケのちナデ	—	(5.7)	②	にぶい黄褐色	良	
第43 図3	—	C11 包含層	壺	口縁～体部	外)口縁:ヨコナデ 頸～体部:ミガキ 内)口縁～頸部:摩滅不明 体部:指押え+ナデ	(11.9)	(11.6)	②	褐色	良	
第43 図4	—	C11・12 包含層	壺	口縁～体部	外)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ハケ 内)口縁～頸部:ヨコナデ 体部上半:指押え 下半:ケズリ	(12.5)	(15.0)	②	褐色	良	外面煤付着(口縁～体部) 内面煤付着(口縁)
第43 図5	—	B16 包含層	壺	口縁～体部	外)口縁～頸部:摩滅不明 体部:ハケか 内)口縁:摩滅不明 頸～体部:ハケ	(11.9)	(14.5)	①④	にぶい褐色	良	
第43 図6	—	C11 C・D15 包含層	壺	口縁～体部	外)口縁:ミガキか 頸～体部:摩滅不明 内)口縁:ヨコミガキ 頸～体部:ユビナデ	(9.5)	(15.9)	①③	褐色	良	
第43 図7	—	B16 包含層	甕	口縁部	外)擬凹線文6条 頸部:摩滅不明 内)口縁:摩滅不明 頸～体部:ケズリ	(17.8)	(4.1)	②③	にぶい褐色	良	
第43 図8	—	C10 包含層	甕	口縁～体部	外)擬凹線文6条 頸部:ナデ 体部:ハケ 内)口縁:ヨコナデ+連続指頭圧痕 頸部:ナデ 体部:ケズリ	(17.4)	(6.8)	②	にぶい黄褐色	良	
第43 図9	—	C16 包含層	甕	口縁～体部	内外面ともにナデ	(13.8)	(3.5)	②	にぶい黄褐色	良	
第43 図10	—	包含層	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ハケ 内)口縁～体部上半:ヨコナデ 下半:ケズリ	(12.4)	(5.7)	③	淡橙褐色	良	
第43 図11	—	B16 包含層	甕	口縁～体部	内外面ともにナデ	(14.0)	(4.0)	②	黒色	良	外面に黒斑あり
第43 図12	—	B16 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁～体部:ヨコナデ 内)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ケズリ	(14.0)	(5.7)	③	淡黄褐色	良	外面煤付着(体部)
第43 図13	—	SD029	甕	口縁～体部	外)口縁～体部:ヨコナデ 内)口縁:ヨコナデ 頸部:指押え 体部:ケズリ	(14.0)	(5.4)	①	暗橙褐色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第43 図14	—	—	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	14.6	(4.7)	③	にぶい黄褐色	良	
第43 図15	—	B12 包含層	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(17.5)	(5.9)	②③	にぶい褐色	良	
第43 図16	—	C16 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:タテハケ 体部:ハケ 内)口縁～体部:摩滅不明	(18.0)	(7.2)	③	にぶい黄褐色	良	
第43 図17	—	B16 包含層	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(17.6)	(8.3)	③	にぶい褐色	良	
第43 図18	—	B11・C11 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁:ヨコナデ 頸～体部:ハケ 内)口縁:ハケのちヨコナデ 頸部:ナデ 体部:ケズリのち指押え	(16.0)	(10.8)	③	にぶい褐色	良	外面煤付着(口縁)
第43 図19	—	C11 包含層	壺?	口縁	内外面ともにナデ	(13.8)	(3.2)	②	灰黄褐色	良	内面煤付着(口縁)
第43 図20	—	B14 包含層	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(15.8)	(3.9)	③	にぶい褐色	良	
第43 図21	—	B16 包含層	甕	口縁部	内外面ともに摩滅不明	(16.5)	(3.8)	②③	褐色	良	
第43 図22	—	D11 包含層	土製品	—	内外面ともに格子状と直線の沈線	—	(4.7)	②	褐色	良	
第43 図23	—	C13 包含層	壺	口縁部	外)口縁:ヨコナデのち2個1対の円形浮文 内)ヨコナデ	—	(3.4)	②	灰黄色	良	
第44 図1	—	C・D15 包含層	甕	口縁部	内外面ともに摩滅不明	(15.8)	(5.7)	②③	にぶい黄褐色	良	
第44 図2	—	D12 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁～体部上半:摩滅不明 下半:ハケ 内)摩滅不明	(14.9)	(15.5)	②	にぶい黄褐色	良	外面煤付着(体部) 内面煤付着(口縁～体部)
第44 図3	—	C11 包含層	甕	口縁～体部	内外面ともにナデ	(15.8)	(4.3)	③	にぶい黄褐色	良	
第44 図4	—	B・C16 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:摩滅不明 体部:ヨコハケ 内)口縁～頸部:摩滅不明 体部上半:指押え 下半:摩滅不明	(14.0)	(8.0)	②③	にぶい黄褐色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第44 図5	—	C11 包含層	壺	底部	外)体部:指押えのちタテハケ 底部:ケズリ 内)体部～底部:ハケ	4.8	(5.0)	③	淡橙褐色	良	
第44 図6	—	B16 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁～体部:ナデ 内)口縁:ナデ 頸～体部:ケズリ	(17.4)	(5.0)	③	にぶい黄褐色	良	外面に黒斑あり
第44 図7	—	C16 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁:ヨコナデ 頸部:摩滅不明 体部:ハケ 内)口縁:ヨコナデ 頸部:摩滅不明 体部:ケズリ	(15.6)	(10.0)	③	淡橙褐色	良	口縁の内外面に黒斑あり
第44 図8	—	B16 包含層	甕	口縁部	外)口縁:摩滅不明 頸部:ヨコナデ 体部:摩滅不明 内)口縁:ハケのちナデ 頸部:ナデ 体部:ケズリ	(16.2)	(5.1)	②	灰黄色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第44 図9	—	C11 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁～体部:摩滅不明 体部:指押え 内)口縁～頸部:摩滅不明 体部:指押え	(13.7)	(6.3)	③	淡橙褐色	良	

第4章 上層の遺構と遺物

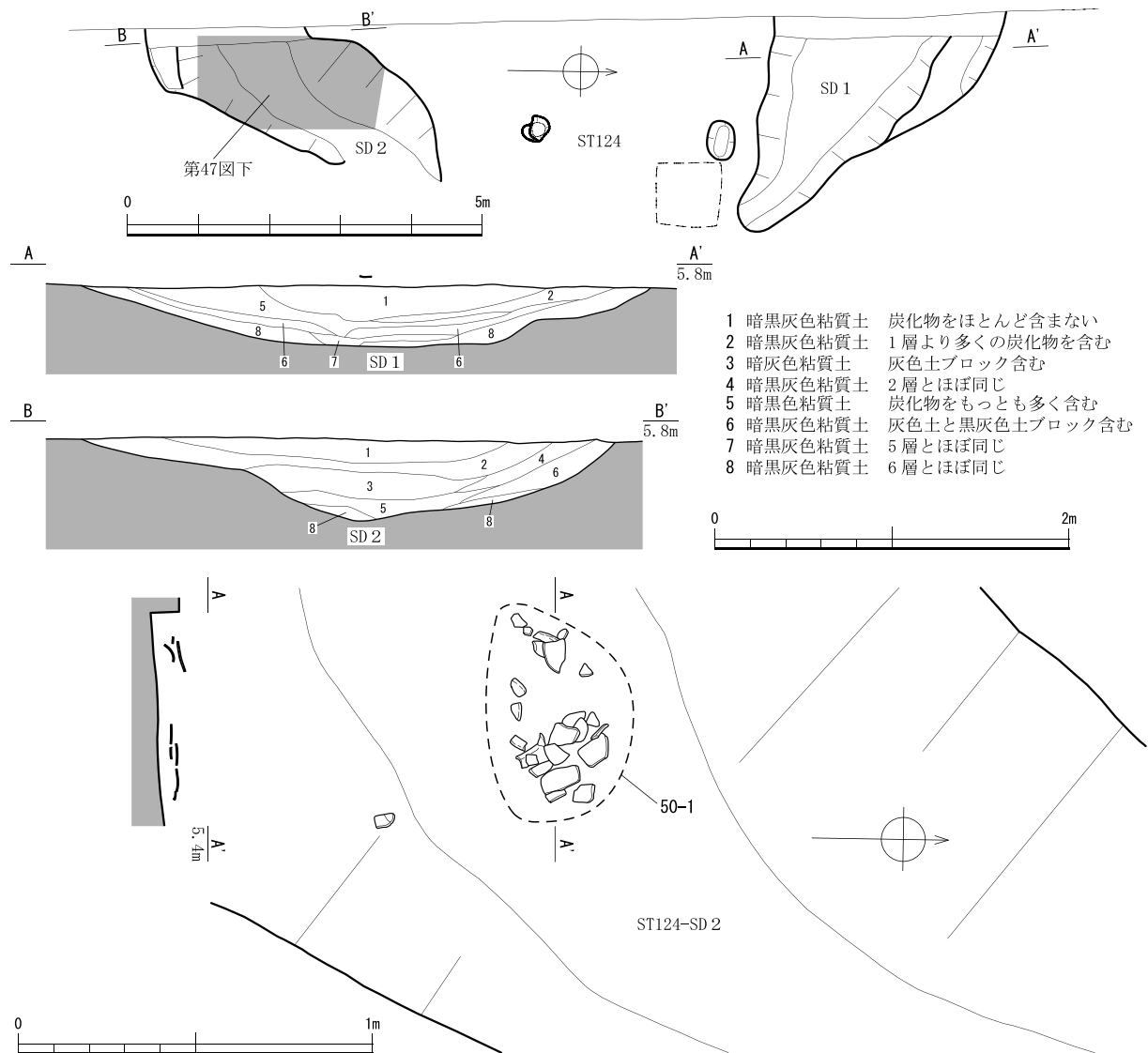
押図番号	図版番号	出土遺構	器種	部位	調整・技法・文様など	口径・底径 (cm)	残存高 (cm)	胎土	色調	焼成	備考
第44図10	—	SD020	鉢	口縁～体部	外)摩滅不明 内)口縁:摩滅不明 体部:ケズリか	(7.9)	(4.6)	②	にぶい黄橙色	やや不良	
第44図11	—	SD020	鉢	略完形	内外面ともに摩滅不明	(5.1)	2.3	①	にぶい黄橙色	やや不良	
第44図12	—	SD020	脚	脚部	外)脚部:4条の擬凹線文の下にS字状スタンプ文 内)摩滅不明	—	(2.0)	②	にぶい黄橙色	良	小孔1以上か
第44図13	—	SD020	甕	口縁～体部	外)口縁～体部:摩滅不明 内)口縁:摩滅不明 頸～体部:ケズリ	(15.8)	(5.0)	③	にぶい橙色	良	
第44図14	—	SD028	壺	口縁部	外)擬凹線文5条以上 頸部:ヨコナデ 内)ヨコナデ	—	(2.2)	③	灰白色	やや不良	
第44図15	—	SD029	有孔鉢	底部	外)体部～底部:摩滅不明 内)体部～底部:ハケ	1.2	(4.3)	②	にぶい黄橙色	良	
第45図1	—	B16 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ヨコナデ 体部:ハケ 内)口縁:ヨコナデ 頸部:指押え 体部:ケズリ	(15.8)	(17.9)	②④	にぶい黄橙色	良	
第45図2	—	C16 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁:ヨコナデ 頸～体部:タテハケ 内)口縁:摩滅不明 頸～体部:タテケズリ	(16.3)	(8.0)	④	淡橙褐色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第45図3	—	B16・C16 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ナデ 体部上半:粗いタタキのちハケ? 下半:ハケ 内)口縁～頸部:ナデ 体部:ヨコケズリ	(16.2)	(9.5)	③	明赤褐色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第45図4	—	C16 包含層	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(16.0)	(6.4)	③	橙色	良	
第45図5	—	包含層	甕	口縁～体部	外)口縁摩滅不明 頸～体部:ハケ 内)口縁～体部上半:ナデ 下半:ケズリ	(14.5)	(5.6)	③	淡黄灰白色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第45図6	—	B16 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁～体部:摩滅著しいがハケ 内)口縁～頸部:摩滅不明 体部:ケズリ	(17.8)	(5.9)	③	淡橙褐色	良	
第45図7	—	B16 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁:ナデか 頸～体部:ハケか 内)口縁:ナデか 頸～体部:摩滅不明	(14.8)	(4.6)	④	橙色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第45図8	—	C11 包含層	甕	口縁～体部	内外面ともに摩滅不明	(14.4)	(5.6)	④	淡橙褐色	良	
第45図9	—	C16 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ヨコナデ 体部上半:摩滅著しいがヨコハケ 下半:摩滅不明 内)口縁:ナデ 頸～体部:摩滅不明	(15.9)	(14.6)	③	褐灰色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第45図10	—	C16 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ヨコナデ 体部上半:ヨコハケ 下半:ランダムなハケ 内)口縁～頸部:摩滅不明 体部上半:ナデのち指押え 下半:ケズリ	(19.0)	(19.0)	③	にぶい橙色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第45図11	—	B16 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁～頸部:ナデ 体部:タテハケのち一部ヨコハケ 内)摩滅不明	(25.2)	(13.5)	③	明黄褐色	良	外面煤付着(口縁～体部)
第45図12	—	B11 包含層	甕	口縁～体部	外)口縁～体部上半:ヨコナデ 下半:板ナデ 内)口縁:ナデ 頸部:ナデのち指押え 体部:ケズリ	(19.4)	(19.0)	③	橙色	良	外面煤付着(体部)
第46図1	—	C11 包含層	有孔鉢	口縁～底部	外)口縁:ナデ 体部:ハケ 底部:ケズリ 内)口縁:ハケ 体部～底部:ケズリ	(14.5)	12.6	③	にぶい橙色	良	内外面に黒斑あり
第46図2	—	B16・C16 包含層	鉢	口縁～底部	外)口縁:ハケのちヨコナデ 体部～底部:粗いハケ 内)口縁:ハケ 体部～底部:ケズリ	12.5	10.3	③④	にぶい黄褐色	良	
第46図3	—	C16 包含層	壺	体部～底部	内外面ともに摩滅不明	3.5	(9.4)	①③	明赤褐色	良	
第46図4	—	D16 包含層	多孔土器	底部	内外面ともに摩滅不明	1.1	(2.0)	③	にぶい橙色	良	小孔5以上か
第46図5	—	C16 包含層	鉢	口縁～底部	内外面ともにケズリのちナデ	(11.8)	7.5	②	にぶい橙色	良	
第46図6	—	C10・11 包含層	鉢	口縁～底部	内外面ともに摩滅不明	(9.0)	7.2	③④	灰白色	良	
第46図7	—	B10 包含層	鉢	口縁～底部	外)口縁:ナデ 頸～体部上半:ヨコハケ 下半～底部:タテハケ 内)口縁～底部:ナデ	(9.4)	7.7	③	にぶい黄褐色	良	外面に黒斑あり
第46図8	—	C12 包含層	壺	体部～底部	外)体部:ヨコミガキ 底部:摩滅不明 内)体部:ハケ 底部:摩滅不明	4.0	(6.3)	②	橙色	良	
第46図9	—	C15 包含層	壺	体部～底部	外)体～底部:丁寧なナデか 内)体～底部:ナデか	(3.0)	(3.7)	①	橙色	良	
第46図10	—	CD15 包含層	壺	体部	外)体部上半:タテハケ 下半:ヨコハケ 内)体部:ユビナデ	—	(5.1)	①	橙色	良	
第46図11	—	C15 包含層	壺	口縁～底部	外)口縁:ナデ 頸～体部上半:粗いハケ 下半～底部:ランダムな粗いハケ 内)口縁:ナデ 頸部～底部:乱雑なナデ	(6.8)	7.9	②	灰黄褐色	良	外面に黒斑あり
第46図12	—	CD15 包含層	小型土器	口縁～体部	外)口縁～体部:ヨコナデのちヨコミガキ 内)口縁～体部:ナデか	(9.1)	(5.7)	②	にぶい黄褐色	良	
第46図13	—	C13 包含層	台付鉢	口縁～脚部	内外面ともに摩滅不明	(13.6)	8.2	②	橙色	良	
第46図14	—	B11 包含層	台付鉢	台付鉢	外)口縁～脚部:ミガキ 内)口縁～体部:ミガキ 脚部:摩滅不明	(10.7)	7.5	③	淡黄褐色	良	
第46図15	—	C11 包含層	台付鉢	口縁～脚部 (口縁端部欠損)	外)内外面ともに摩滅不明	(8.4)	(8.4)	③	橙色	良	
第46図16	—	C11 包含層	台付鉢	体部～脚部	内外面ともに摩滅不明	(6.2)	(7.2)	②④	橙色	良	
第46図17	—	C11 包含層	小型土器	体部～底部	内外面ともにナデ	1.5	(4.3)	②	にぶい橙色	良	
第46図18	—	表土	高坏	坏部	内外面ともに摩滅不明	(24.6)	(4.1)	①	にぶい橙色	良	
第46図19	—	C11 包含層	台付鉢	略完形	外)口縁～体部:板ナデ 脚部:指押え 内)口縁～体部:ハケ 脚部:摩滅不明	(12.4)	5.7	③	淡橙褐色	良	
第46図20	—	C11 包含層	器台	受部～脚部	外)受部:ミガキ 脚部:タテミガキ 内)受部:ミガキ 脚部:ナデ	9.6	(6.5)	③	淡橙褐色	良	小孔4
第46図21	—	C16 包含層	高坏	坏部～脚部	内外面ともに摩滅不明	11.4	(6.3)	③	橙色	良	
第46図22	—	C16 包含層	高坏	脚部	外)脚部:ミガキか 内)摩滅不明	15.0	(6.7)	②	橙色	良	小孔3
第46図23	—	C16 包含層	高坏	脚部	外)脚部:摩滅不明 内)脚部:ナデ	(14.0)	(5.7)	②	にぶい黄褐色	良	小孔3
第46図24	—	C11 包含層	器台	受部	内外面ともに摩滅不明	(8.3)	(2.5)	③④	橙色	良	
第46図25	—	C16 包含層	器台	受部～脚部	外)受部:ナデ 脚部:ミガキ 内)受～脚部:摩滅不明	(7.6)	6.3	②	橙色	良	小孔3
第46図26	—	C16 包含層	器台	受部～脚部	外)受～脚部:摩滅不明 内)受部:摩滅不明 脚部:ハケ	10.0	8.0	①	にぶい橙色	良	小孔3
第46図27	—	D11・12 包含層	高坏	脚部	外)脚部:摩滅不明 内)坏底部:ナデ 脚部:摩滅不明	(15.1)	(8.4)	①④	橙色	良	小孔3
第46図28	—	C13 包含層	壺	口縁部	外)口縁部:ヨコナデのちヘラ描波状文 内)摩滅不明	—	(3.6)	②③	灰黄色	良	
第46図29	—	C11 包含層	壺?	口縁部	外)口縁部:摩滅著しいがハケ状風のヘラ沈線 内)口縁部:摩滅不明	—	(3.2)	②	にぶい黄褐色	良	
第46図30	—	D11 包含層	壺	口縁部	外)口縁部:摩滅著しいが櫛描波状文 内)摩滅不明	—	(2.9)	③④	橙色	良	
第46図31	—	D13 包含層	?	脚部	外)摩滅著しいが2段のS字状スタンプ文 内)摩滅不明	—	(4.6)	①	にぶい橙色	良	
第46図32	—	C11 包含層	?	脚部	外)脚部:タテミガキ+ヨコミガキ 内)ハケ	12.4	(4.5)	②	にぶい橙色	良	
第46図33	—	B10 包含層	?	脚部	外)脚部:ミガキ 内)底部:摩滅不明 脚部:ナデか	(8.5)	(3.3)	①	淡黄褐色	良	
第46図34	—	表土	器台	脚部	外)摩滅不明 内)ナデ	—	(10.0)	④	にぶい橙色	良	
第46図35	—	C13 包含層	高坏	脚部	内外面ともに摩滅不明	(17.7)	(8.0)	①③	にぶい橙色	良	小孔3
第46図36	—	D13 包含層	壺	略完形	外)天井部:ナデか 鈕部:摩滅不明 口縁部:ミガキ 内)天井～口縁部:摩滅不明	(3.5)	1.5	③	にぶい黄褐色	良	
第46図37	—	C13 包含層	器台	受部～脚部	外)受～脚部:摩滅不明 内)受部:摩滅不明 脚部:ナデ	—	(7.0)	①	にぶい橙色	良	小孔2対3
第46図38	—	B14 包含層	高坏	坏部～脚部	外)坏部:ハケのちナデ 脚部:タテナデ 脚部:ヨコナデ 内)坏部:ナデ 脚部:ハケ	(10.6)	(9.4)	②	にぶい橙色	良	
第46図39	—	D13 包含層	?	脚部	外)脚部:タテミガキ 脚部端部:ヨコナデ 内)底部:ナデ 脚部:ナデ	6.8	(4.5)	③	淡橙褐色	良	
第46図40	—	B11 包含層	高坏	脚部	外)脚部:ナデ+ミガキ 内)坏底部:摩滅不明 脚部:ナデか	12.0	(8.9)	②	橙色	良	
第46図41	—	C11 包含層	器台	受部～脚部	外)受部:ヨコミガキ 脚部:タテミガキ 脚部端部:ヨコミガキ 内)受部:ミガキか 脚部:ナデ	(13.2)	(13.0)	②	橙色	良	小孔3

第5章 下層の遺構と遺物

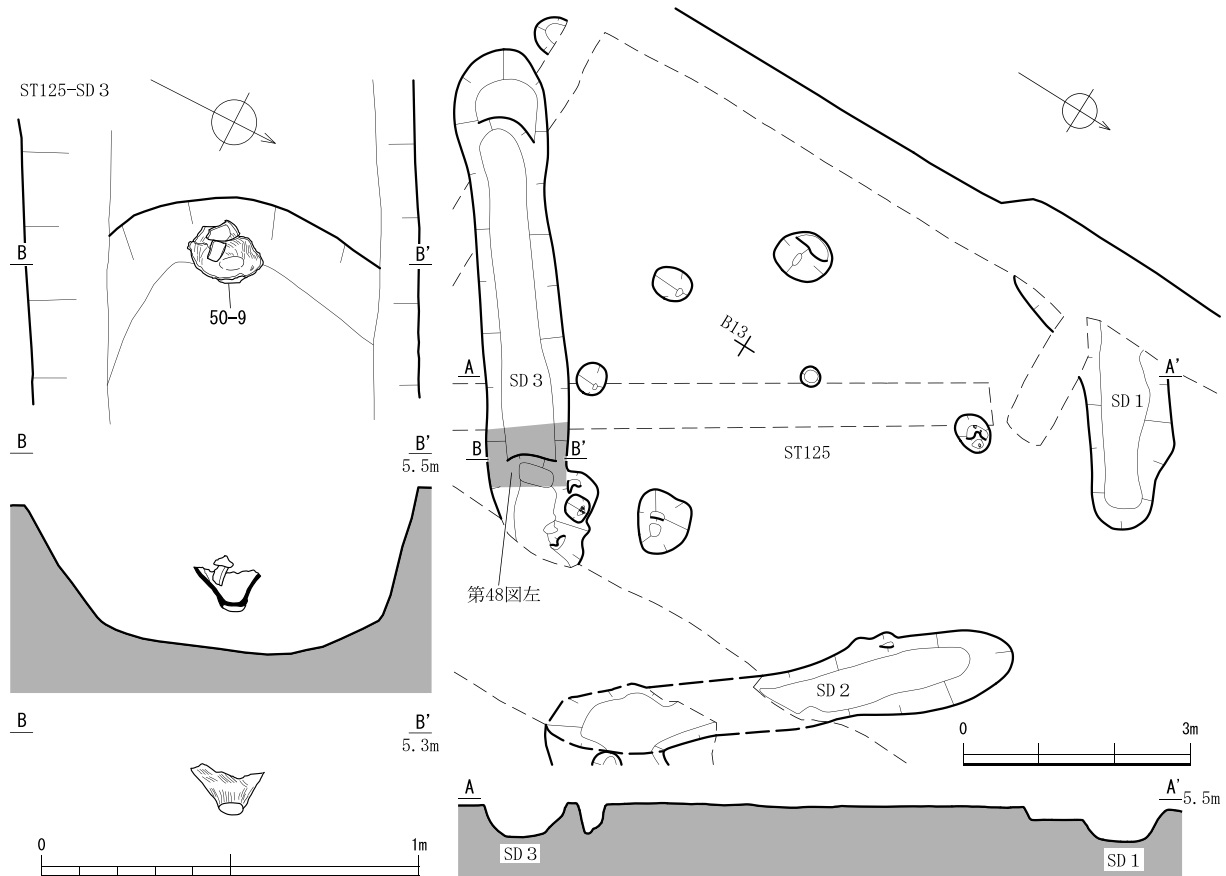
下層の主たる縄文時代晩期の遺構は南調査区を中心に広がっている。調査区の東側に広がるようにピットが2つの群になって確認され、その周辺に埋設土器、もしくは埋設土器が若干移動したと考えられる土器群がある。また一部重なるように弥生時代中期の方形周溝墓と土坑が検出された。北調査区でも調査区の西端にかかるように方形周溝墓が確認され、その周辺において遺構に伴わない土器がまとめて出土している。

第1節 弥生時代中期の遺構と遺物

この時期の遺構は、方形周溝墓2基ST124・125と土坑1基SK084および、遺構に伴わない土器群SXである。2基の方形周溝墓は北調査区と南調査区とで約50m離れて検出された。今回の調査では弥生時代中期の明確な遺構は他にはないため、集落域ではなく方形周溝墓が点在する墓域であったと判断した。北調査区のST124は北東の隅がかかるように2条の溝が検出された（第47図）。南調査区のST125と

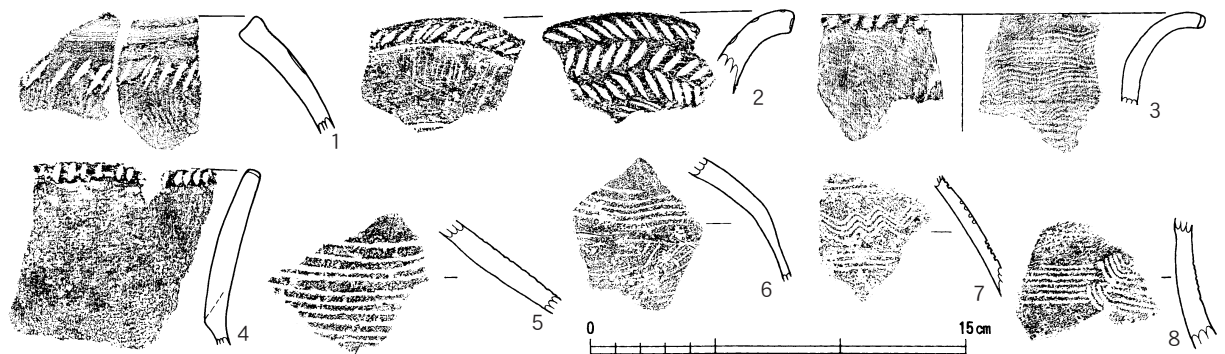


第47図 ST124 遺構実測図（平面図 縮尺1/100・断面図 縮尺1/40）、ST124-SD 2 遺物出土状況図（縮尺1/20）

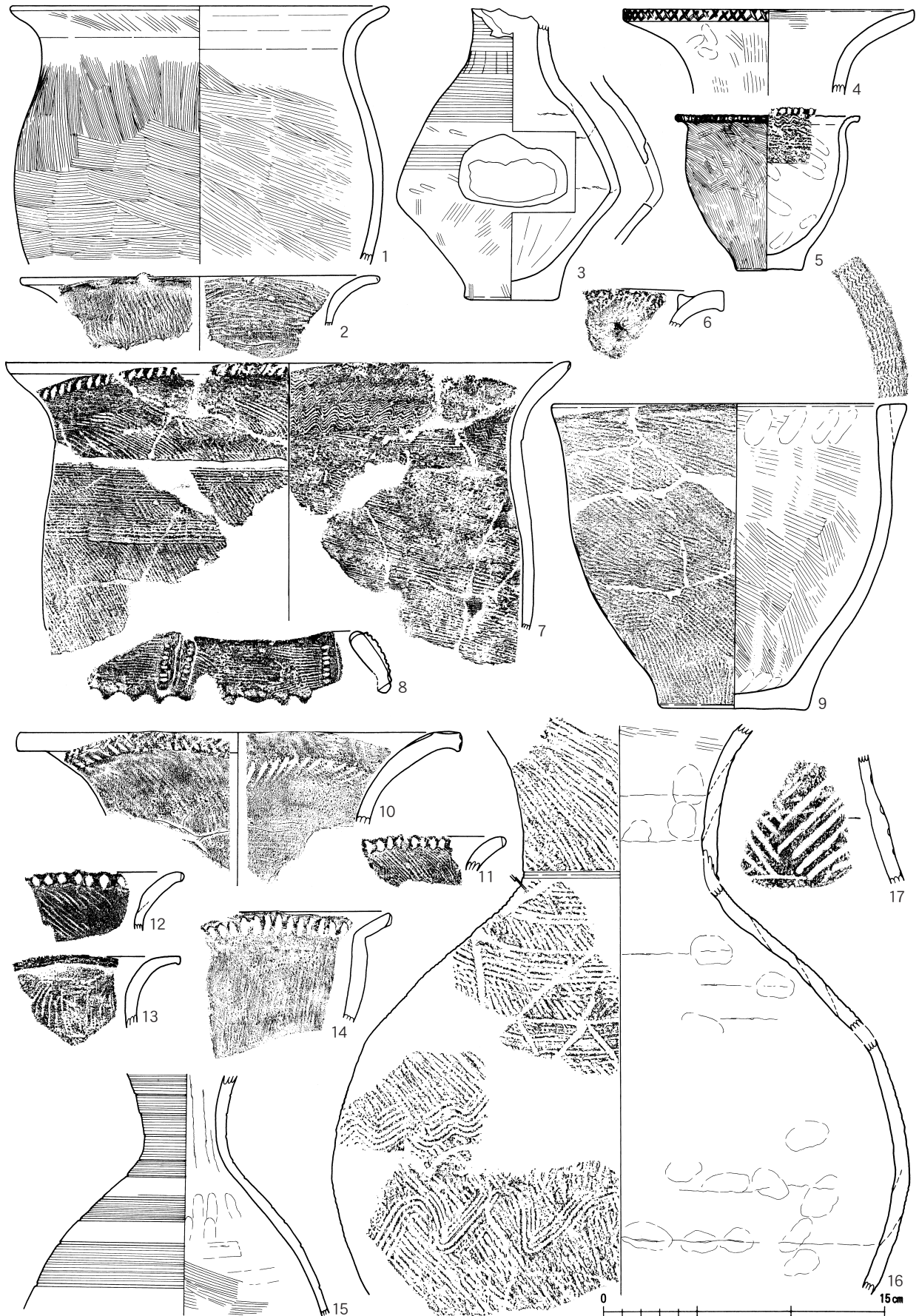


第48図 ST125 遺構実測図（縮尺 1/100）、ST125-SD3 遺物出土状況図（縮尺 1/20）

墳丘の中心軸が同じ北東－南西方向になる。大きく復元できた甕（第50図1）が1点のみではあるが、南東溝SD 2から出土し、供献土器と認定した。ST124は上層の遺構検出の段階で確認された。墳丘など多くの部分は調査区の西へ広がる。南調査区のST125は四隅が切れて4条の溝で構成されるタイプの周溝墓と考えられるが、溝は3条のみが検出され、西溝は調査区外にあるものと考えられる（第48図）。それぞれの溝のプランが不明瞭であったため、確かな溝から順に底を確認しながら掘り上げた。供献土器と判断された鉢（第50図9）は完形で南西の溝から出土した。鉢の口縁部に櫛描波状文が巡る。これら2基に伴う供献土器は中期でも後半の畿内4様式に併行するものと考えられる。なお、ST125は、溝の立ち上がりがやや急で幅の狭い溝で囲われ、深い溝で区画された方形と表現でき、墳丘の高まりはすでになかった。一方のST124は、溝の幅も広く、底からの立ち上がりもゆるく、地山よりやや盛り上がるように検出され、墳丘が残されていそうな状況である。土坑はSK084の1基であるが、立ち上がりが不明瞭



第49図 下層出土弥生土器(中期)実測図(1)（縮尺 1/3）



第50図 下層出土弥生土器(中期)実測図(2)(縮尺1/3)

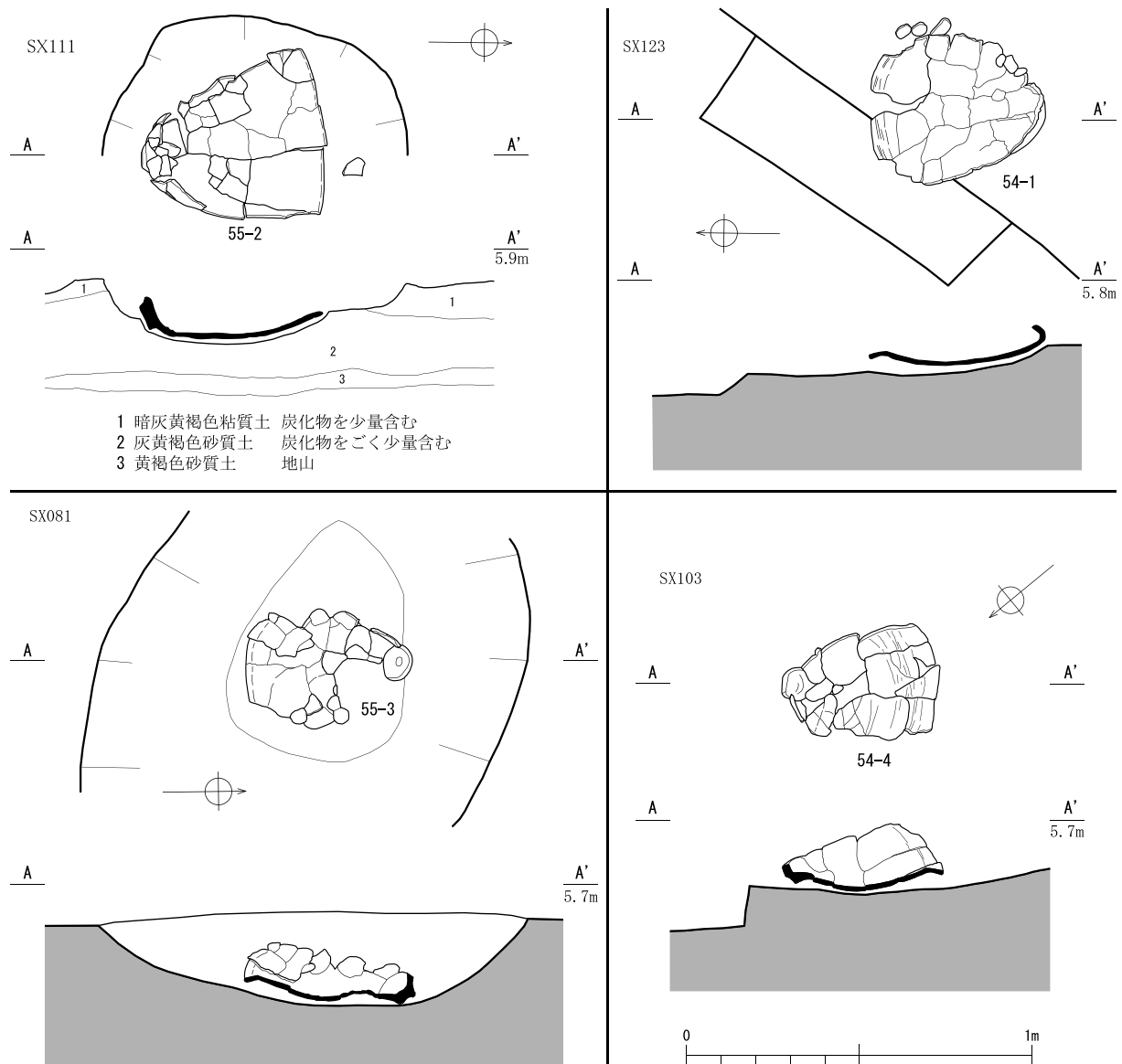
で、縄文土器も伴っていることから、弥生時代のものであるか不確定である。SX040は弥生時代中期の土器のまとまりで、明確な遺構に伴わないものである。口縁部のみ欠く壺(第50図3)が略完形で出土し、その胴部に打ち欠きによる穴があることから、供献土器であることも考えられる。その他はいずれも壺で胴部上半の櫛描文(第50図15)と、条痕文の壺(第50図16)である。方形周溝墓で出土した土器は中期後半のものが大半であるのに、この胴部を打ち欠く壺やSK084の甕口縁(第50図7)などはここまで下るものではない。SX040の壺などは中期でも中葉(畿内3様式に併行)の範疇で納まるもので、方形周溝墓よりさらに遡る時期の遺構が近辺にあるものと考えられる。弥生時代中期と考えられる土器や石器を出土する遺構は、この2基の方形周溝墓の間に全てあるが、土器の量も遺構の密度も大きくない。つまり今回の調査区は方形周溝墓がまばらに点在する墓域の周縁部で、付近に方形周溝墓よりやや古い時期の集落があると想定される。

第4表 弥生土器(中期)観察表

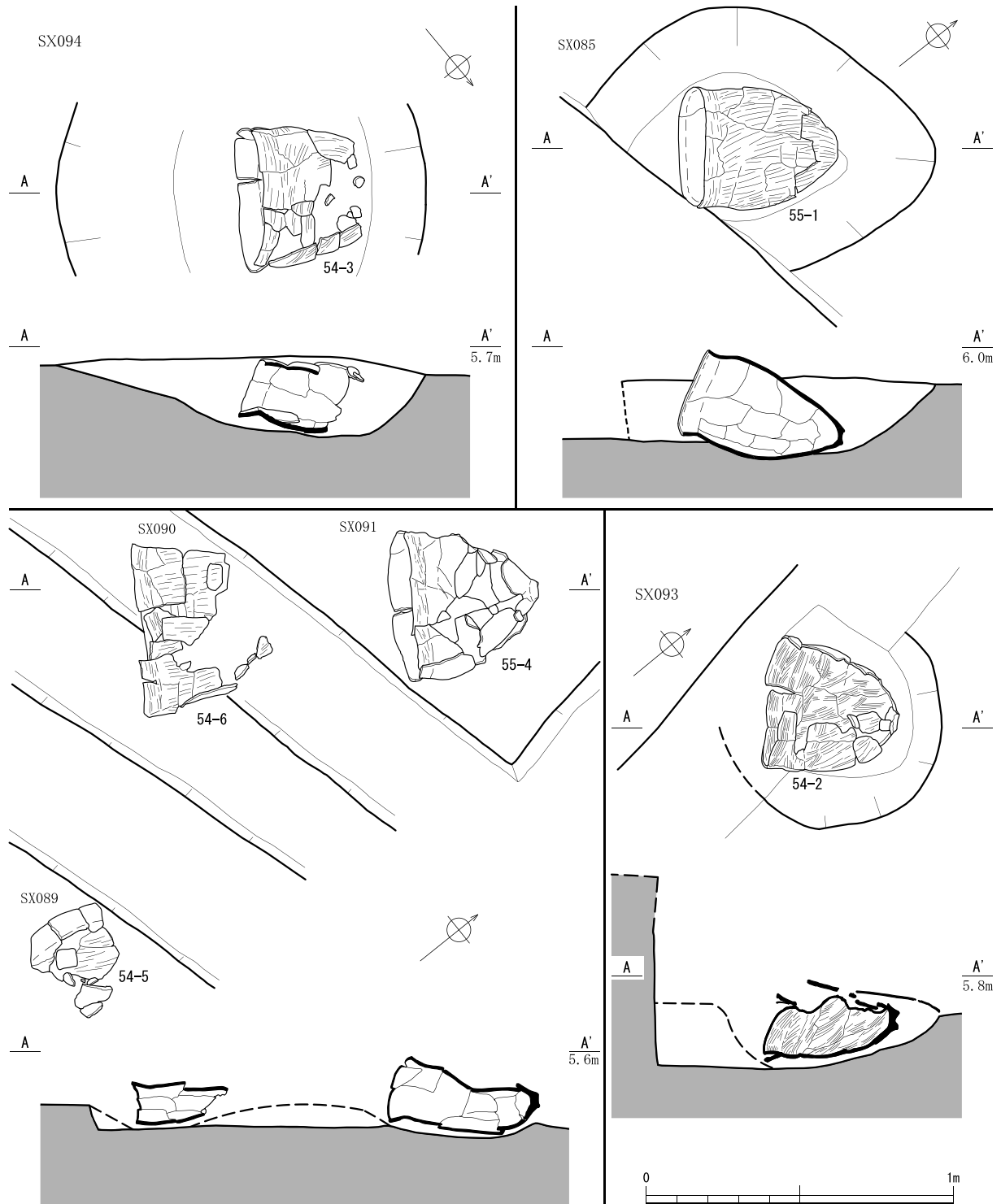
挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	部位	調整・技法・文様など	口径・底径 (cm)	残存高 (cm)	胎土	色調	焼成	備考
第49図1	—	SD028・029	壺	口縁	外)口縁:ナデ 頸部:6条の凹線文か 体部:ナデのちヘラ刺突列点文 内)口縁:ヨコナデ 頸~体部:ケズリ	—	(4.6)	③	灰色	良	外面煤付着(体部)
第49図2	—	D4 包含層	壺	口縁	外)口縁端部:ヘラ刺突 口縁:タテハケの下に沈線1条 内)口縁:羽状刺突の下にヨコハケ	—	(3.3)	②	にぶい黄橙色	良	
第49図3	—	SE013	甕	口縁	外)口縁端部:ヘラ押圧 頸部:ヨコハケ 内)口縁~頸部:ヨコハケのち2段の櫛描波状文	—	(3.6)	②	浅黄褐色	良	
第49図4	—	SI001-SD11 SI001-SD13	甕	口縁	外)口縁端部:ヘラ刻み 口縁~体部:ナデ 内)口縁~頸部:ナデ 頸部:ケズリ	—	(6.9)	③	灰黄色	良	
第49図5	—	SD028 SD029	壺	体部?	外)摩滅著しいが凹線文10条以上 内)摩滅不明	—	(3.5)	③④	灰白色	良	
第49図6	—	SD018	壺	体部?	外)体部:櫛描直線文6条とハケ 内)ケズリ	—	(5.0)	②	黄灰色	良	
第49図7	—	D11 包含層	壺	体部?	外)体部:2条と4条の直線文で区画して櫛描波状文4条 内)摩滅不明	—	(4.9)	③	浅黄褐色	やや不良	
第49図8	—	SD018	壺	頸部?	外)摩滅著しいが14条?の櫛描直線文 内)摩滅不明	—	(5.2)	③	にぶい黄褐色	やや不良	
第50図1	図版第19	ST124-SD 2	甕	口縁~体部	外)口縁部:ナナメハケ 頸部~体部上半:細いタテハケ 下半:粗いヨコハケ 内)口縁~頸部:ヨコナデ 体部:粗いヨコハケ	(16.0)	(13.8)	③	にぶい黄褐色	良	
第50図2	—	F10 包含層	甕	口縁	外)口縁~頸部:タテハケ 内)口縁~頸部:ヨコハケのち端部に1部ヘラ押圧	—	(3.7)	③	橙色	良	
第50図3	図版第19	SX040	壺	頸部~底部	外)頸部:櫛描直線文8条+櫛描麁状文8条 体部上半:3列の直線文8条+ハケのちミガキ 下半:ハケ 底部:ナデ 内)頸部~底部:ナデ	5.0	(15.6)	④	灰白色	良	焼成後、体部中央に横長い穿孔1
第50図4	—	SX044	壺	口縁	外)口縁端部:櫛描斜行文 口縁部:指押え+ハケ 内)口縁部:ヨコハケ+ヨコナデ	(15.3)	(4.5)	③④	灰白色	良	
第50図5	図版第19	B・C8 包含層	鉢	略完形	外)口縁端部:刻み目 体部:ナナメ・タテハケ 内)口縁:波状文4条+はっきりしたヨコハケ 体部~底部:指ナデ	8.3	9.8	①	黒褐色	良	外面煤付着(口縁~底部)
第50図6	—	C12 包含層	壺	口縁	外)口縁端部:羽状刺突? 口縁部:摩滅不明 内)口縁部:刺突列点文の下にコブ状突起	—	(2.0)	③	浅黄褐色	やや不良	
第50図7	—	SK084	甕	口縁~体部	外)口縁端部:ヘラ押圧 頸部:ハケのちヨコナデ 体部上半:ナナメハケのち櫛描直線文 下半:ナナメハケ 内)口縁部:櫛描波状文3条 頸~体部:ヨコハケ	(30.0)	(14.3)	②	にぶい黄褐色	良	外面煤付着(口縁~頸部)
第50図8	—	—	壺	口縁	外)口縁部:2対の刻み棒状浮文 波状突起 内)口縁部:ナデ	—	(3.4)	②	褐灰色	良	
第50図9	図版第19	ST125-SD 3	鉢	略完形	外)口縁~体部:ヨコハケ 底部:タテハケ 内)口縁端部:櫛描波状文 口縁:ヨコハケのち指頭圧痕 体部:ハケのちユビナデ 底部:指押え	18.8	16.3	③	にぶい黄褐色	良	外面煤付着(体部~底部)
第50図10	—	C11 包含層	壺	口縁	外)口縁端部:羽状ヘラ押圧 頸部:タテハケ 内)口縁部:羽状ヘラ押圧 頸部ヨコハケ	—	(4.8)	③	灰白色	良	
第50図11	—	SI002-SD 3	甕	口縁	外)口縁端部:ヘラ刻み 口縁部:ハケ 内)摩滅不明	—	(1.8)	③	褐灰色	良	外面煤付着(口縁)
第50図12	—	—	甕	口縁	外)口縁端部:ヘラ刻み 口縁部:ナナメハケ 内)摩滅不明	—	(3.1)	④	にぶい黄褐色	良	
第50図13	—	—	甕	口縁	外)口縁部:微かにタテハケ 内)摩滅不明	—	(3.8)	③	灰黄褐色	良	
第50図14	—	SX087	甕	口縁	外)口縁端部:ヘラ押圧 頸部:タテハケ 内)口縁~頸部:ヨコハケ	—	(5.9)	②	灰黄褐色	良	
第50図15	図版第19	SX040	壺	頸部~体部	外)頸部~体部:櫛描直線文6~7条×8段 間に沈線9条 内)体部上半:指ナデ 体部下半:板ナデ+ハケ	—	(12.8)	③④	にぶい橙色	良	
第50図16	—	SX040	壺	頸部~体部	外)頸部:明瞭なナナメハケ+沈線1条 頸部~体部上半:沈線7条のち山形文 斜線文 沈線1条 沈線7条+斜線文+沈線1条+2条のち山形文 沈線3条+斜線文のち不鮮明山形文 体部下半~底部:明瞭なナナメハケ低い波状文7条 ナナメハケのち明瞭な波状文1条 高い波状文7条 明瞭なナナメハケ 内)頸部:ナナメハケ 頸部下半~底部:指押え	—	(30.5)	③	灰白色	良	
第50図17	—	SD020	壺	?	外)頸部:摩滅著しいが山斜文状沈線の下に沈線1条 内)摩滅不明	—	(6.4)	②	灰白色	やや不良	

第2節 縄文時代の遺構（第51～53図）

縄文時代と考えられる遺構は南調査区の東側を中心に検出されたピット群と、その周辺の埋設土器、およびその可能性のあった土器である。包含層の出土と判断した土器の多くも、ピット群の周辺で出土している。ピットについては明確な平面形を把握できたものは少なく、配置についても規則性などを示すことは出来なかった。埋設土器については、その掘り込みを明確に指摘できるものがほとんどない。埋設土器の可能性のあるものについては、当初は16基を想定し、出土状況図作成と写真撮影を行った。その後土器の復元状況と合わせて、地表面との位置関係で耕作などの影響を考慮して、一部の欠失はあるものの、原位置を保っていると考えられたのが第5表に示した10基である。調査区の最も北で土器がまとまって出土したのがSX038であるが、無文土器の破片で図化できなかった。図化できたのはSX038から約30 m南のSX049で、これより南側からは縄文土器が多く出土している。埋設土器ではSX049よりさらに南に位置するSX085が最も北に位置し、最も南に位置するのがSX123である。SX123の南側は落ち込みとなっていて縄文土器が多く廃棄されていたことから、この埋設土器が縄文時代の遺構分布範囲＝生活域の南端を示しているものと考えたい。いずれの埋設土器も明確ではないが、

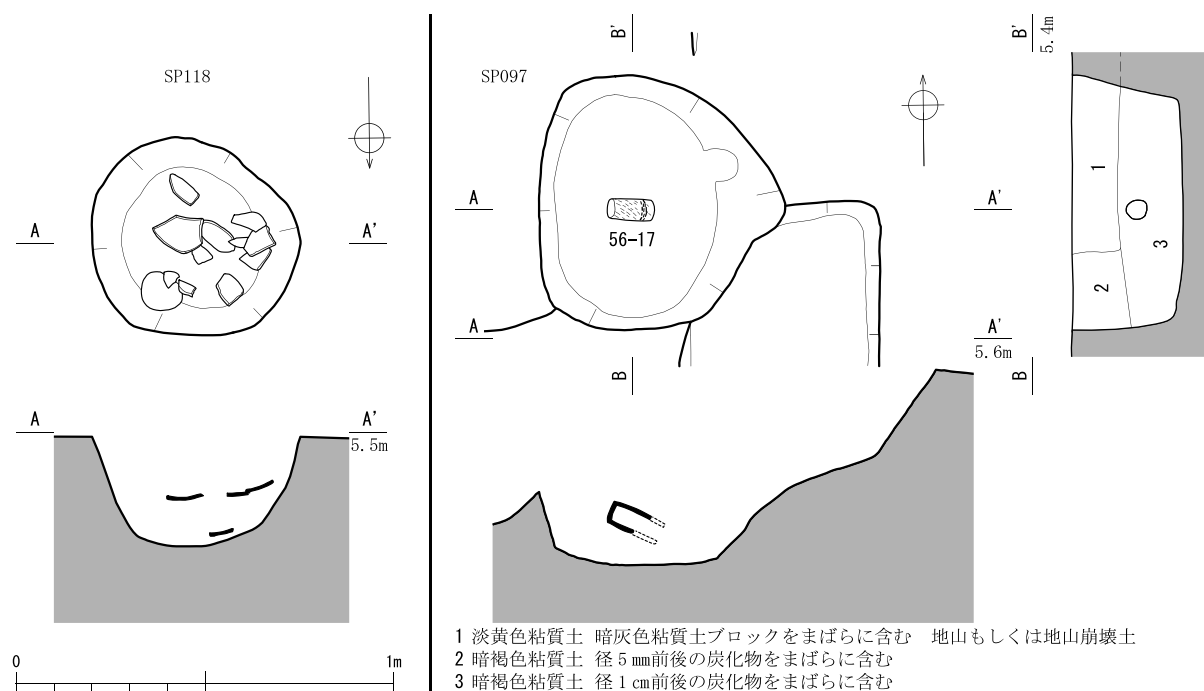


第51図 SX081・103・111・123 埋設土器出土状況図（縮尺1/20）



第52図 SX085・089・090・091・093・094 埋設土器出土状況図（縮尺 1/20）

地山をやや掘り窪めたところに横位に置かれていた。遺構集中範囲（C・D11～14グリッド）より北側に位置するSX081・085・090・091・093・094の6基がほぼ南方に、南側にあるSX111・123の2基はほぼ北方に、すなわち縄文時代と考えられる下層で検出されたピット群が集中する範囲に向けて、土器の口が開放していたことになる。下層のピット群から出土した土器で図化できるほど大きな破片はなく、ピット内から大きな破片が出土しても、そのほとんどが無文で、しかも接合して時期が比定できるようなものではない。SP118でも底から土器は出土しているものの（第53図左）、無文土器の破片で接合し



第53図 SP097・118 遺物出土状況図（縮尺1/20）

なかったため図化しなかった。筒形土器は、地震の影響が最も大きい場所に位置するSP097から単体で出土した（第53図右）。このようなピットから出土した土器と、原位置を移動していないと判断した埋設土器の範囲から想定すると、下層で確認された遺構の中心はC11グリッドから南、C14グリッドから北の南北50mほどの範囲にあると考えられ、東西は、調査区の西側にはあまり広がらず、むしろ調査区の東側に広がると考えられる。またピットもD12グリッドとD14グリッドの2箇所を中心に展開し、縄文時代と考えられる石器もこの範囲のピットから出土している。今回の調査では縄文集落の西側の一部を調査したものと考えられる。

第5表 縄文時代埋設土器一覧表

遺構番号	旧番号	出土状況図	出土状況	口縁開口方向	土器下面の絶対高	掘り方	土器実測図
SX 081	SX 229	第51図	横位の土器胴部半分が残。耕作で上半分を欠失？	南西	5.36 m	浅い土坑	第55図3
SX 085	SX 232	第52図	土器全体がほぼ残存。	ほぼ南	5.64 m	浅い土坑	第55図1
SX 089	SX 206	第52図	2次的に移動した土器の一部？	—	— m	—	第54図5
SX 090	SX 207	第52図	胴下半から底部を欠失。	南西	5.36 m	浅い土坑？	第54図6
SX 091	SX 208	第52図	土器全体がほぼ残存。	南西	5.34 m	浅い土坑？	第55図4
SX 093	SX 205	第52図	土器全体がほぼ残存。	南西	5.54 m	浅い土坑	第54図2
SX 094	SX 204	第52図	胴下半から底部を欠失。	南東	5.44 m	ほぼ地山直上	第54図3
SX 103	SX 200	第51図	横位の土器胴部半分が残。耕作で上半分を欠失？	南西	5.50 m	浅い土坑？	第54図4
SX 111	SX 22	第51図	横位の土器胴部半分が残。耕作で上半分を欠失？	ほぼ北	5.64 m	浅い土坑	第55図2
SX 123	SX 220	第51図	横位の土器胴部半分が残。耕作で上半分を欠失？	ほぼ北	5.56 m	ほぼ地山直上	第54図1

第3節 縄文時代の土器

コンテナバット約30箱分出土した。中期・後期に属するものを数点含むが、晩期中葉～後葉にかけての比較的短い時間幅を有し、主体は晩期中葉となる。ここでは、埋設土器などの遺構出土および包含層出土の土器を一括して扱い、分類を行い説明する。

1 有文土器

出土量は無文土器に比べ極めて少ない。器種には深鉢・鉢・浅鉢・壺・蓋がある。深鉢・鉢がやや多く、全体的に小型品が多い。破片資料を主体とするが、主要なものについては、ほぼ図化掲載した。

第1群土器（第62図1）

口縁部に渦巻文を中心とする文様を配し、地文に縦位撚糸文を施すキャリパー器形の深鉢。

第2群土器（第62図2）

口縁部直下に小波状文を配す深鉢。

第3群土器（第62図3）

口縁部に突起を有し、末端に円形刺突を伴う複数の横走沈線と磨消縄文で文様を描出する深鉢。

第4群土器（第56図1～10・13・19、第57図1、第62図4～28・30～62）

外反を基本とする口縁部に縄文や条痕、くびれる頸部に横位沈線・列点、胴部に沈線や磨消縄文等による文様を施す土器。器種には深鉢・壺があるが、明確に分別できない個体もある。

1類（第56図3・4・8・9、第57図1、第62図17）頸部がくびれ、胴部の張りが弱い深鉢。口径が胴径以上となる。口縁部形態には、「く」字状に屈折（第56図4）、外反（第56図3・8・9、第62図17）、やや直立（第57図1）がある。第56図9は列点文により区画した胴部文様帯内を縦位列点文により分断し、長短交互に配す区画内部に短沈線を充填する。文様構成は同図5と類似する。第62図17は口縁部・胴部にヘラ状工具による縦位沈線をまばらに施す。縦位条痕の置き換えと考えられる。頸部直下に狭い無文帯を有す。第57図1は胴部上半に沈線区画の無文帯を有す。

2類（第56図5・6・10・13、第62図21）頸部が強くくびれ、胴部の張りがやや強い深鉢。口径が胴部最大径より狭い。口縁部形態には、外屈（第56図5・13）、直立（第56図10）、外反（第56図6、第62図21）がある。第56図5は胴部文様帯内に刻目状の列点による縦位3列からなる列点文帯を間隔をあけて配す。口縁部はナデ調整で、端部に沈線を配す。同図10は胴部上半の列点文帯以上を研磨し、口縁部を無文帯とする。胴部下半の横位条痕は原体が草木（繊維）結束と考えられる。

3類（第62図25～27）口縁部が短く外反し、胴部の張りがやや弱い深鉢。鉢の可能性もある。25は半裁竹管状工具による断面逆「U」字状となる沈線で文様を描出する。外面全域に縄文を施し、無文帯等の磨消部をもたない。26・27は縄文を施さない。

4類（第62図28）口縁部が直立し、口唇部に文様を有す土器。28の外面調整は縦位条痕である。

5類（第56図1・7・19、第62図23・24）本群に属す壺を一括する。器形には、胴部が球胴状（第56図1・7）、胴部上半で強く内屈（同図19）、口頸部が内傾（第62図23・24）などがある。第56図1は指ナデ状の浅く太い沈線により文様を描出する。文様帯は頸部以下2分帯し、内部に区画線と連結する鍵の手状などの曲線文を配す。口縁部にはケズリ後ナデを施す。同図19は頸部直下の文様帯を4分帯し、内部に条痕および縄文施文後、上位から対向弧文・短沈線文・対向弧文・短沈線文を施す。上位の対向弧文は上下で位置が対応せず、下位の対向弧文は上下で位置が対応し、2連ごとに間隔をもつ。

6類（第56図2、第62図4～16・18～20・22）本群に属す口縁部片を一括する。口縁部形態には、

「く」字状に屈折（第62図4・6～9）、外反（同図5・10～16・22）、上方でやや内湾・直立（同図18・19）、ゆるやかに外反（第56図2、第62図20）がある。第62図13は外面を向く口縁端部に鋸歯状の文様を配す。同図8・9は第57図7に類似した壺口縁部、内面が肥厚し段をもつ口縁部が短く外屈する同図6は小型壺の口縁部である可能性が高い。

7類（第62図30～62）本群に属す頸胴部片を一括する。器種は深鉢・壺以外に鉢も含まれる可能性がある（45・58・61）。器形には頸胴部境に段を有すもの（52・60）がある。胴部の張りが強いもの（30～32・39）は2類（深鉢）・5類（壺）に属すものと考えられる。磨消縄文には、文様帯内（40～42・44・45・55）、文様区画内（32～35・49）、および無文帯描出（37・38・56）があり、磨消条痕には文様帯内（31・46）がある。地文状の条痕（53・62）も認められる。同一個体である37・38は文様帯境に研磨による器面の段をもつ。文様は列点文以外には、鍵の手文（41・49）、C字文（50）、平行沈線文（43・58・59）、方形区画状文（46・60）、鋸歯状文（34・37・45）、弧文・半円文（32・33）などがある。列点文描出法には、押し引き・押圧の他に、刻目（47・54）、短沈線（32・40・49・56）がある。列点文には、2条沈線間施文を主体とし、沈線内（34）、単独（54・56）があり、その他、文様帯区画線内側付随で多列（45・53・57）や2条沈線間内施文で多列（30・36・39）も認められる。

第5群土器（第62図29）

口縁端部を貼付文と細密なキザミで加飾する深鉢。口縁部・頸部は文様を施さない。

第6群土器（第62図63）

体部に隆帯と側縁沈線による逆「U」字状文を施す壺あるいは鉢。63は摩滅が顕著である。

第7群土器（第63図1～6）

鉢を一括する。器形は逆「ハ」字状を主体とする。口辺部形態には、ゆるやかに内湾（1）、直立外反（2・3）がある。口辺部文様帯には、幅狭（1・3）、幅広（2・4～6）がある。2はゆるやかな波状口縁を呈し、体部に沈線と半肉彫り手法によるやや大振りな曲線文を配す。5は多条の細沈線により文様を描出する。6は文様帯区画線を有さない。体部に「コ」字状文と逆「コ」字状文を交互に配す。

第8群土器（第56図11・12・14～16・18・20、第63図7～40）

浅鉢。文様により細分する。

1類（第56図11・15・18、第63図7～22）沈線および磨消縄文による曲線的・直線的な文様を描出するもの。口縁部形態には、内湾・内屈（第63図7・8）、ゆるやかに内湾（第56図11・15・18）、直に開く（第63図9～22）があり、口縁端部が短く内屈（同図19・20・22）もある。文様には雲形文（第63図9・14・15）の他、磨消縄文が幅狭で横位に伸びる文様（第56図15、第63図10・11・16など）が認められる。半肉彫状の手法を用いるもの（第63図7～9・14・15）もある。第56図15は体部に補修孔を有す。口縁端部に3山の小突起を有す。口唇部に狭い縄文帯、体部に横位区画帯を配す。区画帯内部には両端がすばまる長楕円状文を上下2段で配す。横位区画帯と長楕円文内は縄文を磨り消し、縄文施文部は工字文状となる。第63図10・11、12・13、14・15はそれぞれ同一個体である。

2類（第63図23～28）沈線や刻目などにより文様を描出し、縄文を施さないもの。口縁部が内屈するものが多い。27は口縁部に円孔を有し、「F」字状文を配す。23・25は体部上端の屈曲部に刻目を施す。23は体部に太い沈線による半肉彫状の工字状文を配した後、丁寧なナデを施す。刻目は指押圧によるやや大振りなものであり、眼鏡状付帯文との関連が考えられる。24は口縁部に多条の縦位細沈線を単位的に配し、体部にも沈線による文様を配す。25・26には沈線内に押し引

き文を施す。

3類（第56図12・14、第63図29～36）横位沈線などの単純な文様のみを配し、縄文を施さないもの。器形は逆「ハ」字状を主体とし、口縁部が直立・内湾ぎみのもの（第63図32～34）もある。第63図32は口縁内面に上下側縁に細沈線が付随する突帯状の貼付文の剥離が認められる。

4類（第63図37・38）口縁内面に沈線を配すもの。器形は逆「ハ」字状を呈す。38はナデ状の浅い凹線を配す。

5類（第56図16・20、第63図39・40）口縁端部に単位的な1山の小突起と沈線を配すもの。口縁部が直線的に開いて立ち上がり、頸部がくびれ、肩部を有す器形のもの（第56図16・20）がある。第56図20は肩部位を縄文部、同下位を研磨による無文部とする。

第9群土器（第62図64～68）

蓋。5点のみの出土である。64は5単位の突起を有すつまみ部で、側面に円形刺突文が認められる。成形・調整は丁寧ではない。65は縄文地文で2条沈線間に列点文を施す。66・67は同一個体である。

第10群土器（第56図17、第63図41～49）

小形土器を一括する。器形には円筒形（第56図17）、体部が内湾する鉢形（第63図41・43～45）、深鉢形・壺形（同図42・46～48）、浅鉢形（同図49）などがある。第63図49は口縁端部に刻目を施し、体部に円形刺突による列点文を2列配す。他と比べ、成形・文様配置等が粗雑である。

2 無文土器

出土量の大半を占め、器形復元個体も多い。器種には深鉢・浅鉢・壺があり、深鉢を主体とする。器形復元個体および口縁部片を中心に抽出し、図化掲載した。

第11群土器（第57図2、第66図22、第67図10、第68図19）

縄文を施す深鉢を一括する。個体数は極めて少ない。器形は有文土器および無文土器第12群と共通する。無文帯を有すものが2例あり、第57図2が深鉢胴部上半、第68図19が深鉢胴部上端と下方2箇所配置する。第66図22は深鉢口辺部に縦位縄文を施す。

第12群土器（第54図、第55図、第57図、第58図、第59図1～14、第60図1～5、第61図2～7・10～12・15・22、第64図、第65図、第66図1～21、第67図1～9・11～24、第68図1～18）

外面調整に条痕・ケズリ・ナデ・ミガキを施す深鉢。口縁端部に刻目を施すものが大半を占める。調整は総じて不均整であり、かつ強弱がある。条痕原体は二枚貝およびこれに類似するものが主体を占め、板状・櫛状工具や巻貝と考えられるものもある。ナデ・ミガキには器面の凹みが顕著で条痕状となるものや、強いナデにはケズリとの分別が困難なものもある。外面調整には一次調整のみと、口頸部を中心に二次調整を行うものがあり、後者が多い。一次調整ではナデ、二次調整では条痕後ナデが最も多い。ただし、器形復元個体の口頸部には二次調整が全域に及ばず、一次調整のみ確認できる箇所も多く、破片資料では正確に分別できない可能性がある。調整方向は異方向と単一方向があり、異方向が大半を占める。異方向では口頸部が横位、胴部が縦斜位が多い。単一方向には縦斜位があり、条痕のみとなる。なお、外面全域で横位条痕のものは確認できなかった。以下、器形を中心に大別を行ったが、口縁部の長短、胴部の張りの強弱等により、さらに細分は可能である。

1類（第54図1～5、第55図1・4、第57図3～12、第58図1～3・5・6、第61図2～6、第64図）口縁部が外反し、頸部がくびれ、内面が段状となる深鉢。口縁部が「く」字状に屈折するもの（第64図1など）は少ない。口縁部が内湾しながら立ち上がるもの（第57図10）もある。胴部形



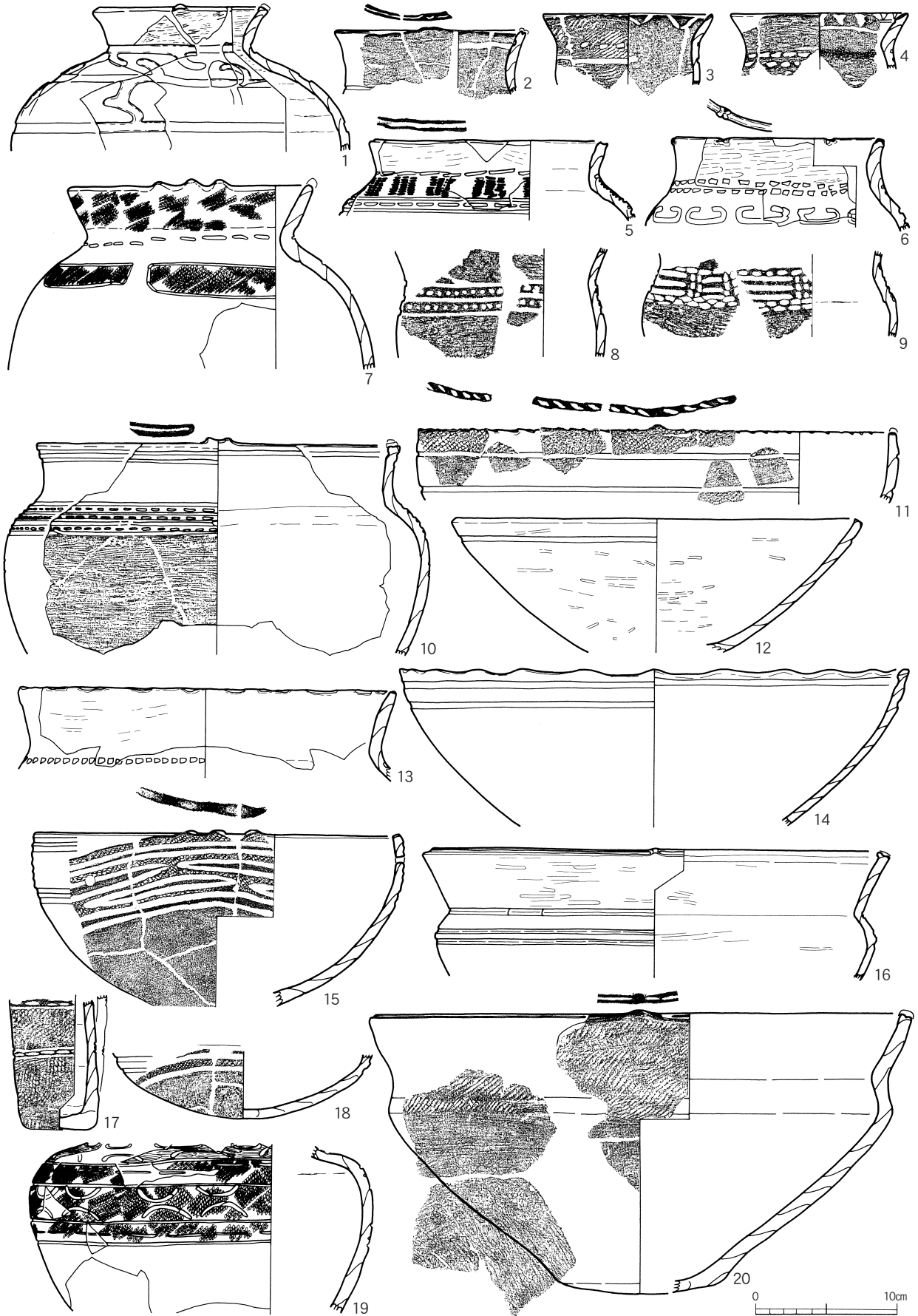
第54図 埋設土器実測図 (1) (縮尺 1/5)



第55図 埋設土器実測図(2)(縮尺1/5)

態には、張りが強く、胴部上半が内傾するもの（第54図2など）と張りが弱いもの（第55図4）がある。胴部が直線的になるものには、内面に段を残すもの（第64図26・27）がある。小型深鉢には胴部最大径がやや下方にある器形（第61図3・5）が認められる。口縁内面の施文には、刻目（第57図10・第64図19など）、「ハ」字状文（第64図1）、半円文（同図18）、沈線（同図19）がある。

2類（第54図6、第58図7～9・12、第59図1・2・4・7、第61図5・11、第65図30）口縁部がやや外反し、頸部がくびれる深鉢。1類より器形変化がゆるやかで、内面には明確な段を有さない。



第56図 縄文土器実測図 (1) (縮尺 1/4)

胴部の張り出しが弱く、胴部上半は強く内傾しない。

3類 (第55図2・3、第58図10、第59図3・5、第61図12、第65図1～28) 口頸部が外反・外湾する深鉢。内面には明確な段を有さない。口径は胴径以上を基本とする。胴部の張りには強(第65図1・2など)弱(同図11・26など)があり、強いものは1類と、弱いものは2類と類似する。口縁部が強く外湾するもの(同図10)がある。

4類 (第59図6、第61図7) 口縁部が直線的に開き、頸部でくびれ、胴部上端に段を有す深鉢。胴部の張りには、強(第59図6)、弱(第61図7)がある。いずれも口縁端面を有す。

5類 (第61図10、第65図29) 口頸部が強く外反し、胴部との境に段や稜を有す深鉢。いずれも口縁端面を有し、第65図29は刻目を施す。

6類 (第58図11、第59図8～10・14、第66図1～17) 口頸部が直立ぎみ、あるいはゆるやかに外反し、胴部上半が内傾する深鉢。口径は胴最大径以下を基本とする。胴部上半の内傾には、強(第59図10など)弱(第59図8など)がある。第66図11・12は口頸部と胴部の境に稜を有すが明瞭ではない。同図14は口頸部に端面を有し、内面にえぐり状の沈線を配す。口頸部下方は器壁が薄くなる。

7類 (第60図1、第67図19～23) 口縁部が内湾する深鉢。第60図1は縦位条痕を胴部から口縁部に向けて施す。単位間隔は密ではない。条痕原体は櫛状工具と考えられる。

8類 (第60図2～5、第61図22、第66図18～21、第67図1～9・11～18・24) 口辺部が胴部から直線的に立ち上がる深鉢。口辺端部には、明確に面を有すもの(第60図5、第67図14など)とすばまるもの(第60図4、第66図18～21、第67図3・17など)があり、すばまるものが多い。第60図3の内面には1類(第64図26・27)と同様に接合時の段を残す。第67図15は小型深鉢である。

9類 (第59図11～13、第61図15、第68図1～18) 頸胴部が内傾する深鉢あるいは壺。口縁部形態には、「く」字状に屈折(第59図12、第61図15、第68図1・2)、外湾(第59図11・13、第68図3・5・7)、直立ぎみ(第68図4・6・8～16・18)、内傾(第69図17)がある。

第13群土器 (第69図1～30)

口縁部に刻目突帯を配す土器。すべて破片資料である。第14群も含め主要なものは図化掲載した。器種には深鉢・鉢が存在すると考えられるが、明確には分別できなかった。口縁部形態は外反(3など)と直立(4など)に2大別できる。口縁端面を有し、突帯と同様な刻目を施すものが大半を占める。刻目原体は二枚貝を主体とし、ヘラ・指などが若干ある。突帯下端に刺突を施すもの(26)もある。突帯形状には、幅が狭扁平で低い(3・17)、幅が狭く断面三角形で比較的高い(1・2・4～16・18・20～24・26・27)、幅が広く扁平でやや低い(25・28～30)、幅が広く断面三角形で高い(19)がある。突帯貼付位置は口唇部を中心とするが、口縁端部と一体化するもの(29)もある。口縁内面にえぐり状沈線(3)や細沈線(13・23)を配すものがある。口頸部の調整はナデを主体とし、二枚貝条痕が残るもの(27～30)は少ない。3は頸胴部境の段に上面から二枚貝による押し引き沈線を配す。調整は口頸部に二枚貝条痕後ナデ、胴部に輪積痕が残る弱いナデを施す。

第14群土器 (第61図19～21、第69図31～36)

口縁部に刻目を施さない突帯を配す土器。第13群と比べ、量的に少なく、突帯も幅が細く、高さもやや低い。第61図20の突帯は極めて低く、ナデ成形の可能性がある。器種には外反口縁の深鉢あるいは鉢(第69図31～35)、小型鉢(第61図19・20)、壺(第69図36)、小型壺(第61図21)がある。外面調整は深鉢あるいは鉢が丁寧なナデ、小型鉢・壺がミガキとなる。後者は器壁も薄く、精緻なつくりで

ある。口縁端部には、面を有すもの（第69図31）と、すぼまるもの（同図34）、丸みを帯びるもの（第61図19～21、第69図32・33・35）があるが、すべて刻目を施さない。口縁内面に細沈線を配すもの（第69図34）がある。第61図21は頸胴部境に段を有し、強いナデによる面を有す。第61図19・20、第69図36は口縁端部と突帯が一体となり、間にナデ状の浅い沈線を施す。

第15群土器（第69図41）

口縁部内外面に突帯を配す土器。突帯は無施文である。41は壺口縁部の可能性がある。口縁端部はすぼまり、明確な面は有さない。口縁端部と突帯間にナデ状の浅い沈線を内外面ともに施す。

第16群土器（第69図37～40）

突帯を基本として有し、第13～15群に関連すると考えられる小形土器を一括する。37～39は壺、40は小型の鉢あるいは壺である。38は2条の突帯間にナデ状の沈線を施す。37・39は突帯のみである。37の断面三角形を呈す突帯には剥離か刻目が判断できない浅い凹みが残る。40は器壁が薄い。頸胴部境にヘラ状工具による細沈線を器面に対し水平に施す。

第17群土器（第59図15・16）

口縁端部と頸胴部に刻目を施す深鉢。刻目原体は二枚貝である。口縁端部の刻目位置には側面（15）、上面（16）がある。いずれも外面調整はナデである。

第18群土器（第60図7・8、第61図1・13・14、第68図20～30・33～35）

縦斜位条痕を施文後、口頸部に横位ナデを施し条痕をナデ消す土器。条痕は原体が不明であるが、第12群と比べ、器面に密で深く施す。以下、器形により細分する。

1類（第61図1・13、第68図23）口縁部が外反する深鉢。頸部内面に段を有す。第61図1は口縁部が「く」字状に強く屈折するが、胴部の張りが弱い。口縁部に粘土貼付による2個一対の突起を有す。

2類（第60図8、第61図14、第68図20～22・24）口縁部がゆるやかに外反、もしくは直立し、頸部がすぼまる深鉢。口径が胴最大径以下となる。第68図24は口縁端部に押圧を施す低い突起を単位的に有す。条痕は同図30と同様で他の個体と比べ浅い。

3類（第60図7、第68図25～27・30）口辺部が胴部から直縁的に立ち上がる深鉢。第60図7は底部に向かい強くすぼまる器形を呈す。第68図27は口辺部下位に接合時の凹部を残し、強いナデを施す。

4類（第68図28）口縁部が内湾する深鉢。

5類（第68図29）口頸部が内傾する壺。29はナデが弱く、口頸部に条痕が残る。

6類（第68図33～35）口縁部が短く外屈する壺。外面を向く口縁端部に刻目を施す。口縁部が粘土貼付により肥厚するもの（33）がある。口縁部形態には、内傾（33・34）と直立ぎみ（35）がある。

第19群土器（第60図6、第68図31・32）

縦位条痕のみを施し、口頸部に横位ナデを施さない深鉢。条痕は第18群土器と同様である。口縁部形態には、直立（第60図6、第68図32）、内湾（第68図31）がある。第68図32は口唇部に条痕原体による断面逆「U」字状の横位沈線を施す。

第20群土器（第68図37）

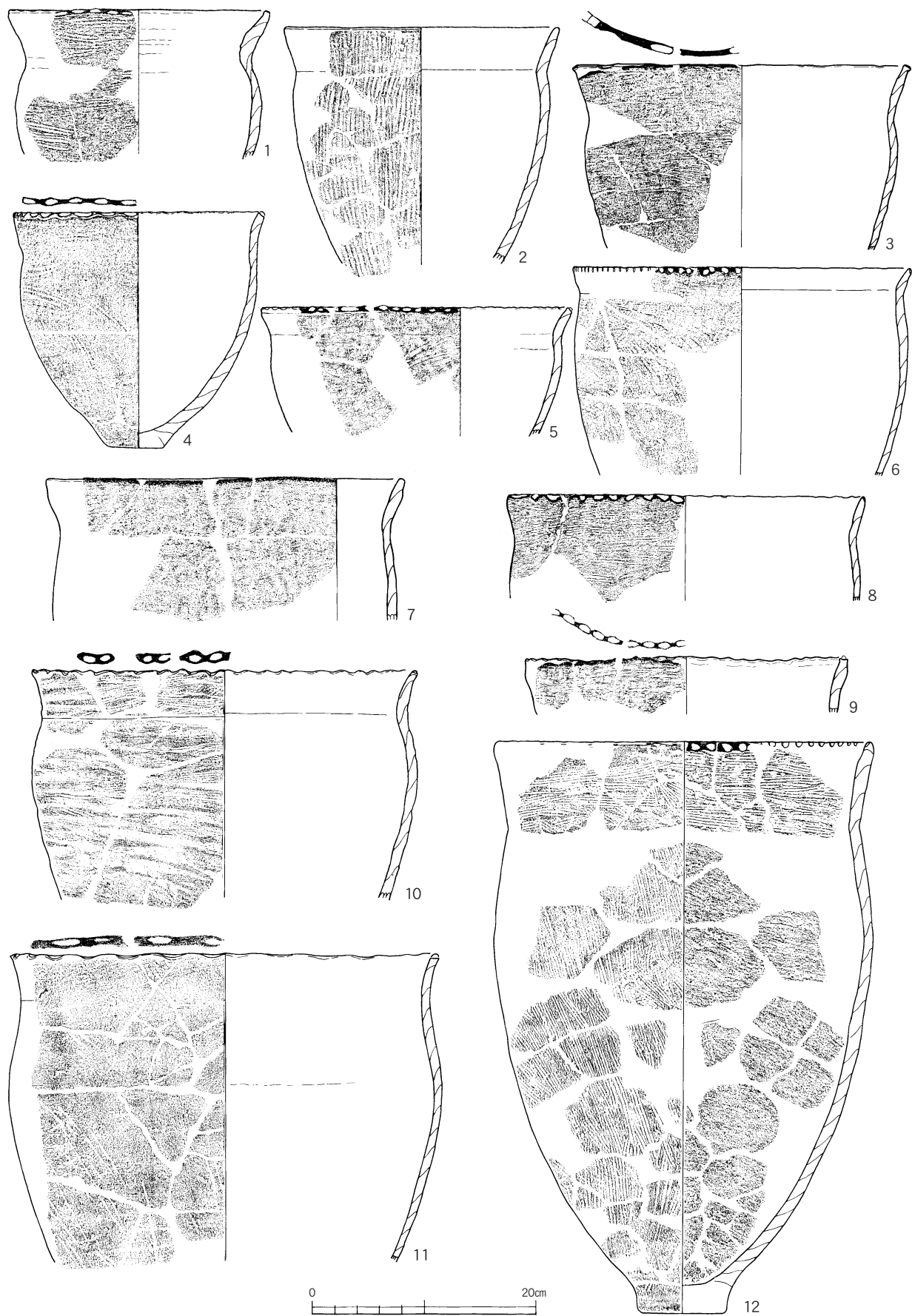
口縁部に縦位条痕後、横位条痕を施す深鉢。37は口縁部が直立する。条痕が浅く、やや条線が細い。胎土・色調は第19・20群土器と同様である。

第21群土器（第61図16・17）

粘土貼付により肥厚する口縁端部に刻目を施す壺。口縁部が逆「L」字状を呈す。刻目は16が指押圧、



第57図 縄文土器実測図(2)(縮尺1/5)



第58図 縄文土器実測図 (3) (縮尺 1/5)



第59図 縄文土器実測図（4）（縮尺 1/5）



第60図 縄文土器実測図 (5) (縮尺 1/5)

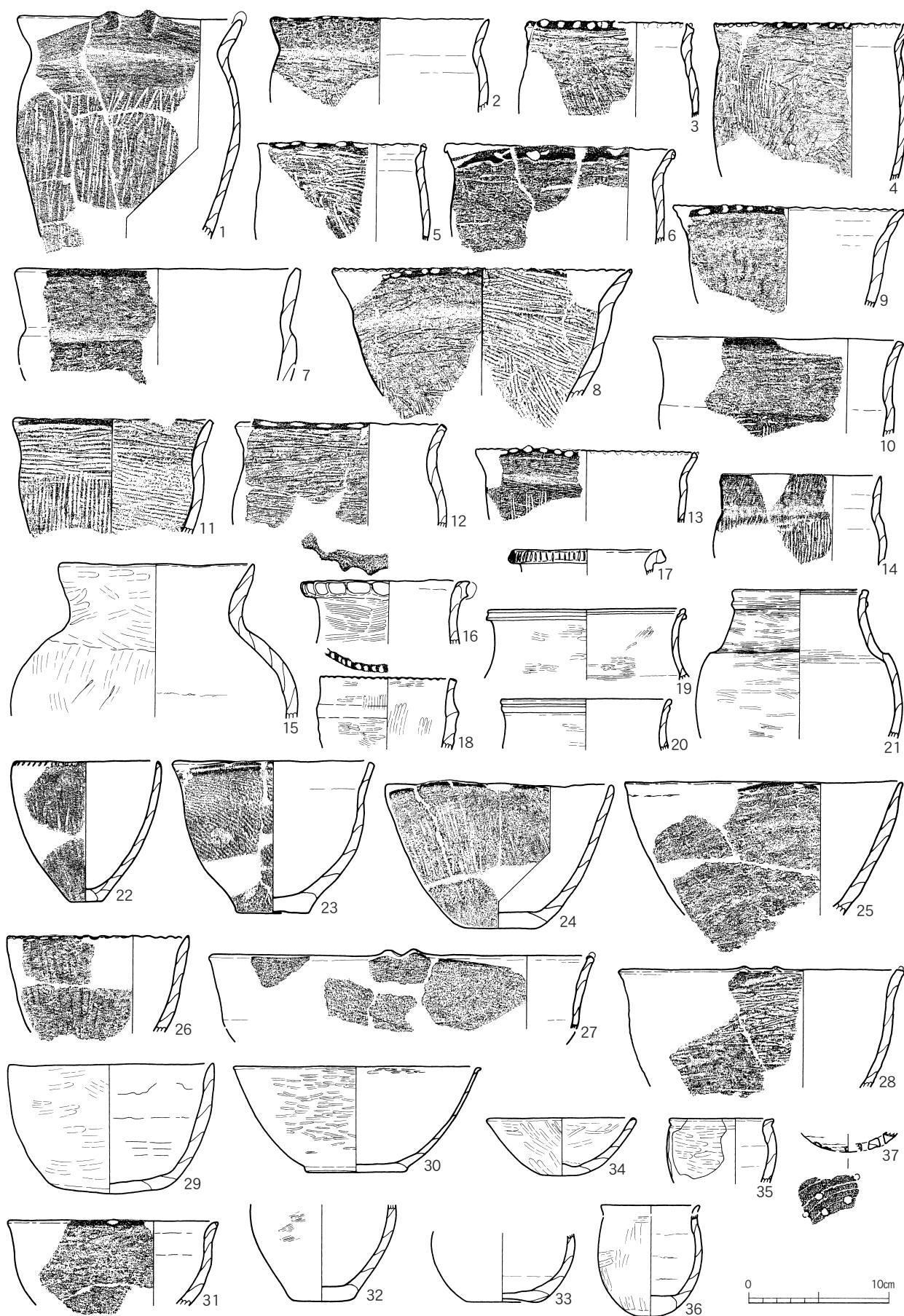
17がへら状工具キザミによる。口頸部の調整は16が二枚貝条痕、17がナデである。

第22群土器 (第68図36)

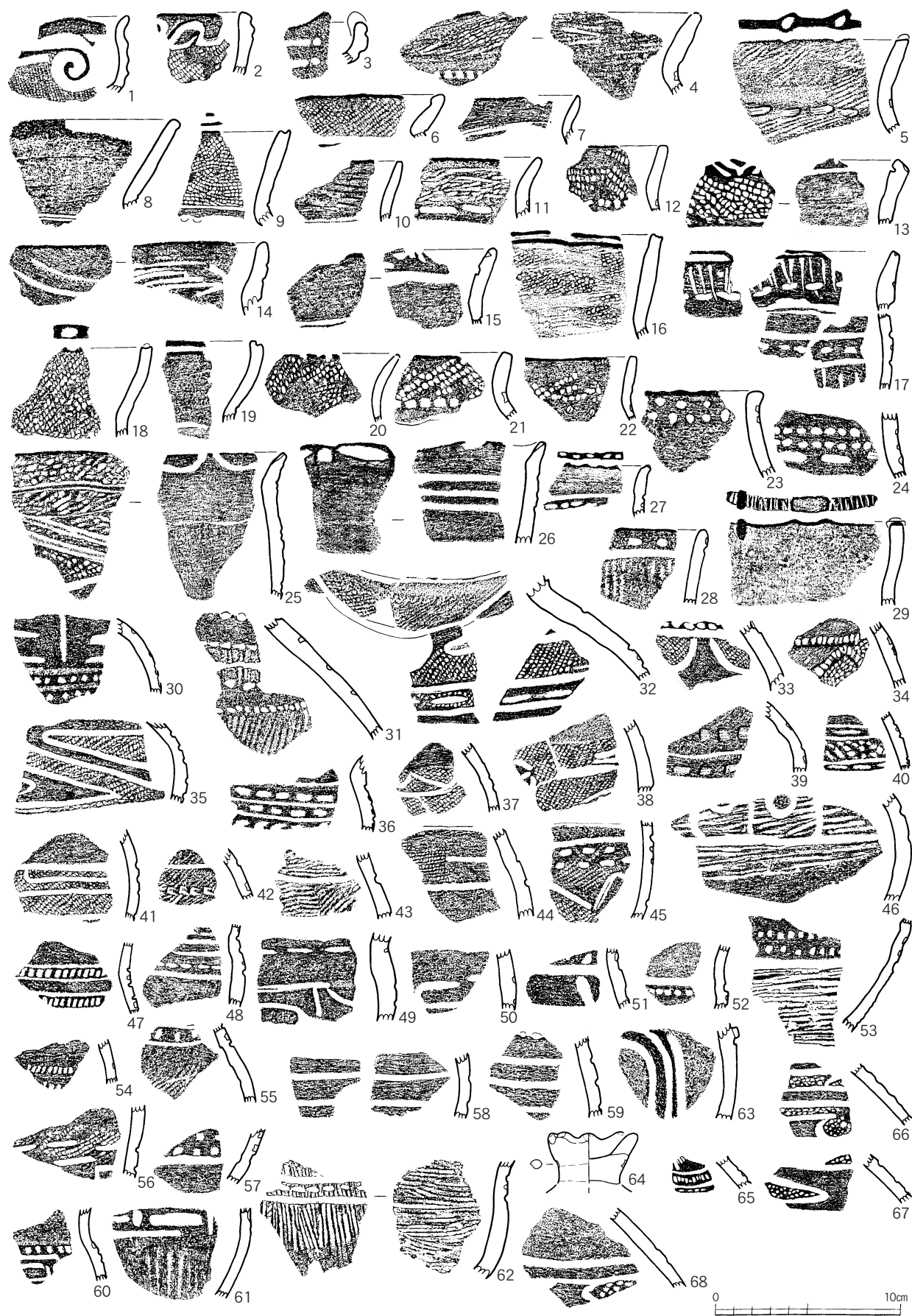
粘土貼付により突帯状に肥厚する口唇部が短く外反し、口縁端部・口唇部に上下2段にキザミを施す壺。36は口唇部下方に棒状工具による深い縦位刻目を施す。その後、肥厚部中央にさらに粘土紐を貼付し、口縁端部に斜位刻目を浅く施す。

第23群土器 (第61図8・9・18・23～26・29)

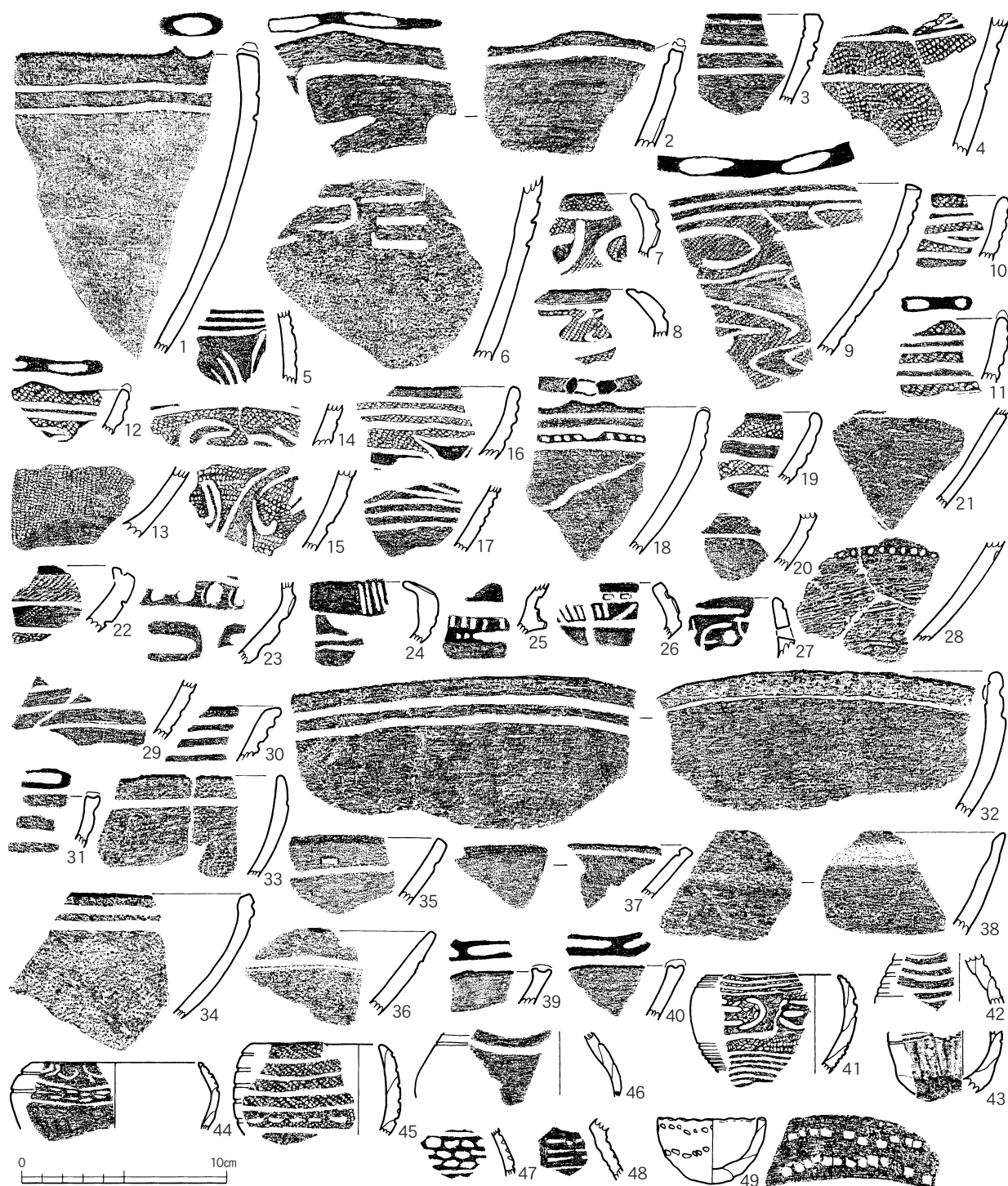
鉢を一括する。第12群と同様な調整を主体とする。器形には、口縁部が外反し、頸部がわずかにくびれる(8・9・23)、逆「ハ」字状(24～26)、短筒状(18・29)がある。8の内面には段が認められる。18は口辺端部に二枚貝による浅い刻目を施し、口縁部下方に微突帯状の段を有す。外面調整はミガキである。23は口縁端部に浅い沈線を配す。



第61図 縄文土器実測図(6)(縮尺1/4)



第62図 縄文土器実測図 (7) (縮尺 1/3)

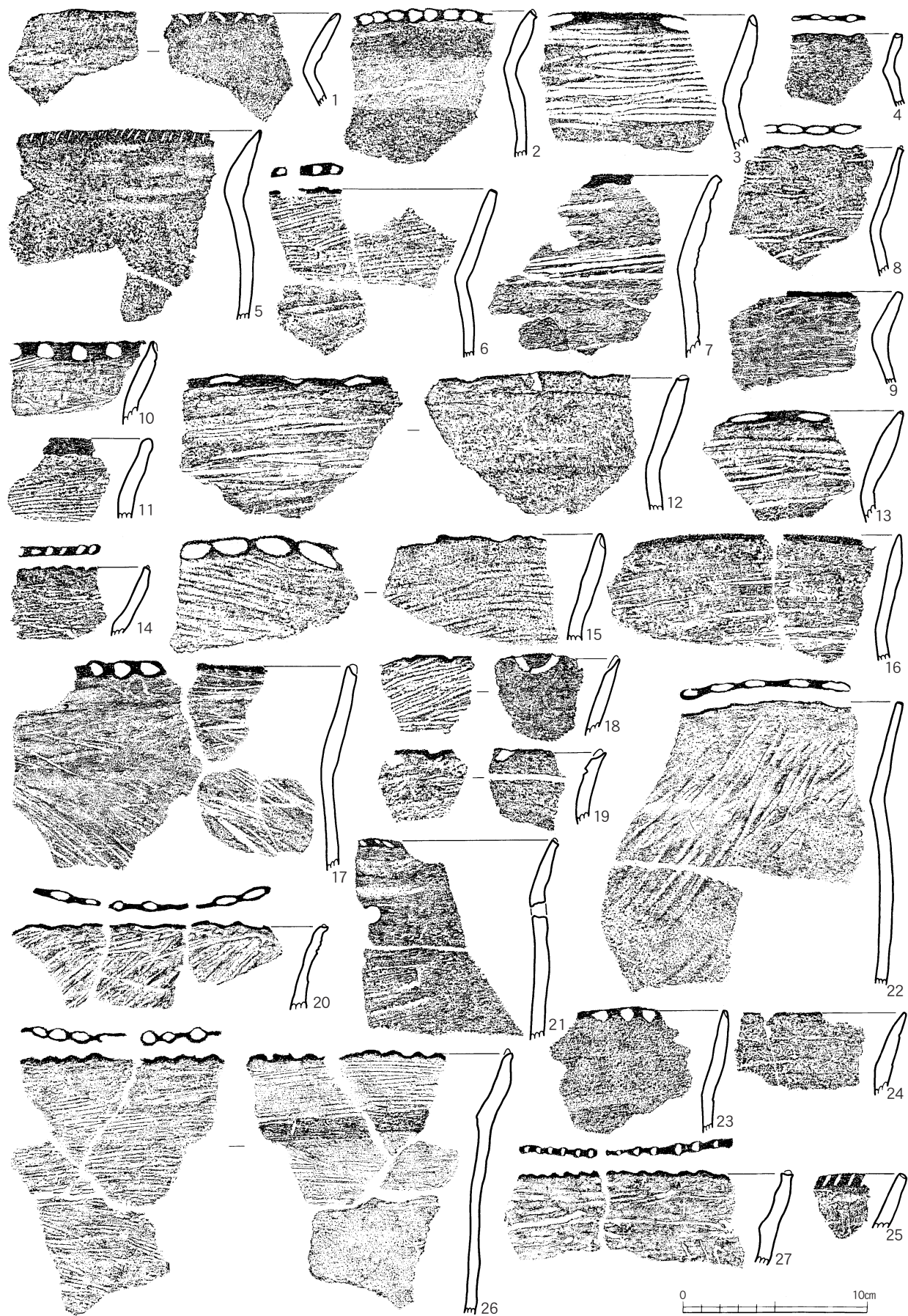


第63図 縄文土器実測図(8)(縮尺1/3)

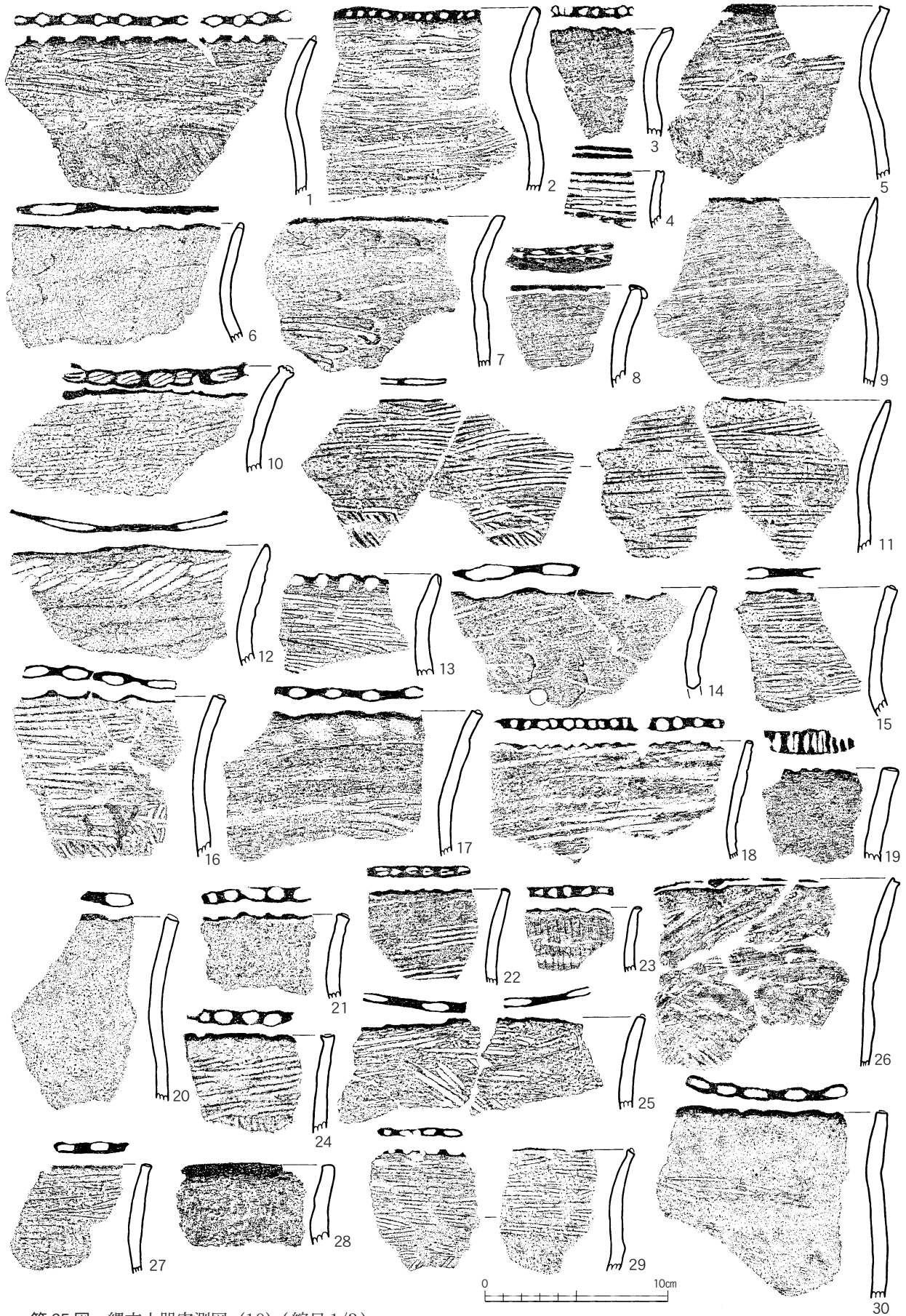
第24群土器(第61図27・28・30・31、第69図42～54)

浅鉢を一括する。器形には、内湾口縁で端部が短く外屈(第69図46・47)、外反口縁で頸部がくびれる(第61図28、第69図45)、頸体部境に段・稜をもつ(第61図27、第69図42～44)、逆「ハ」字状(第61図30、第69図48～52・54)、口縁部が内湾する(第69図53)がある。第61図30は黒色磨研系、第69図44はいわゆる「逆くの字浅鉢」である。同図52は荒いナデを施す。胎土・色調が第18群に近似する。同図54は口縁端部に沈線を配し、体部から口縁部に向かい強いナデを施す。

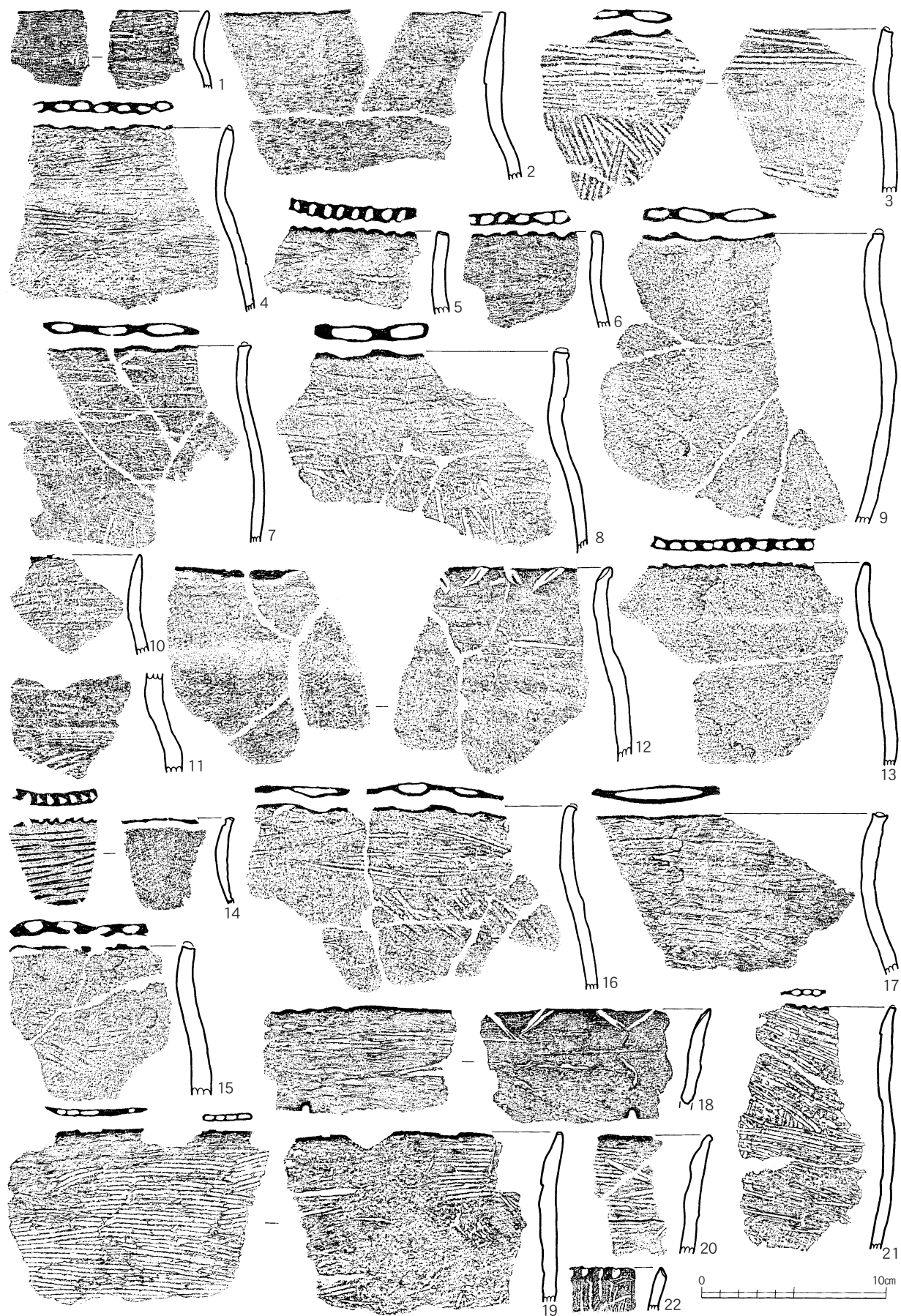
第25群土器(第61図32～36)



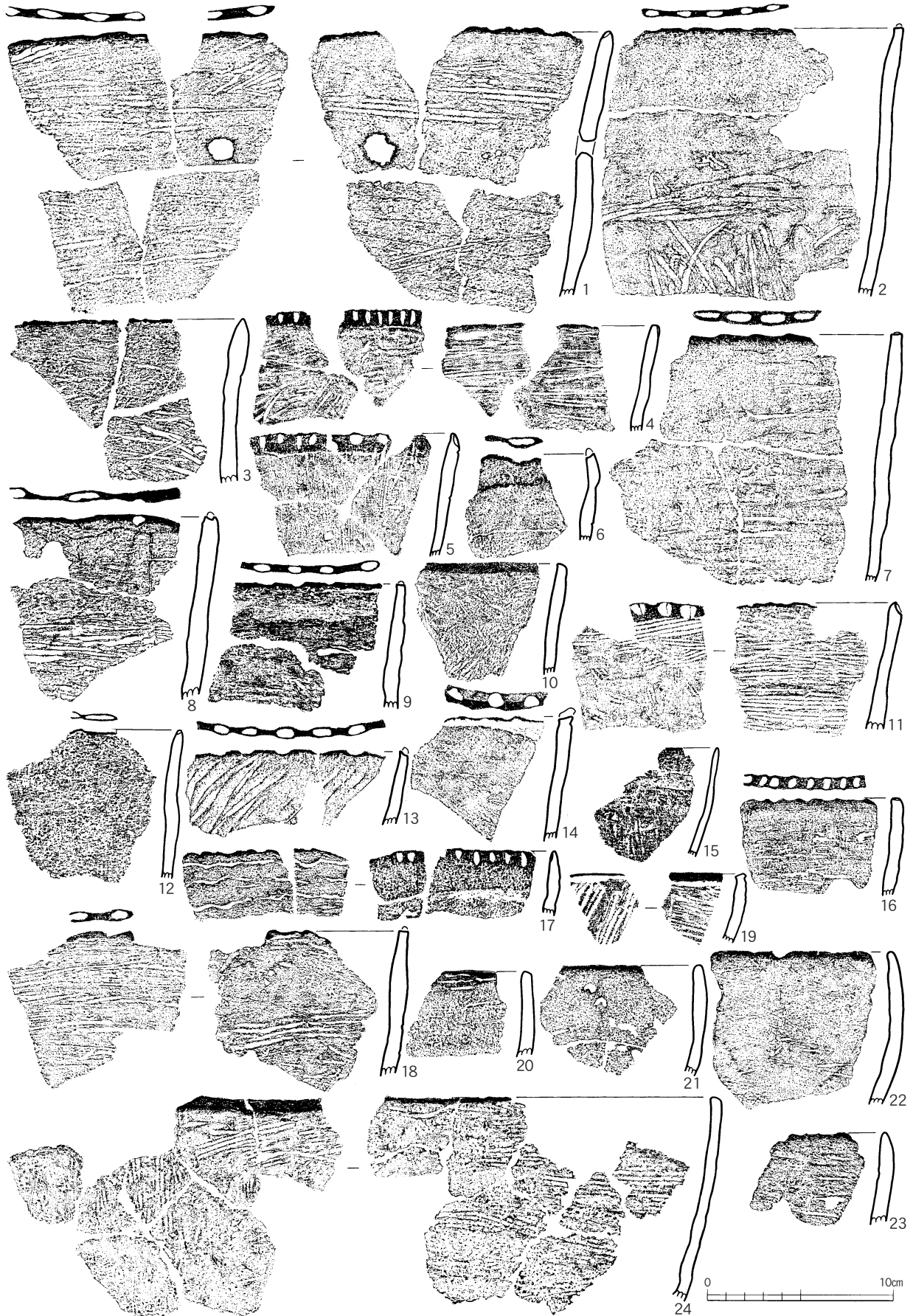
第64図 縄文土器実測図 (9) (縮尺 1/3)



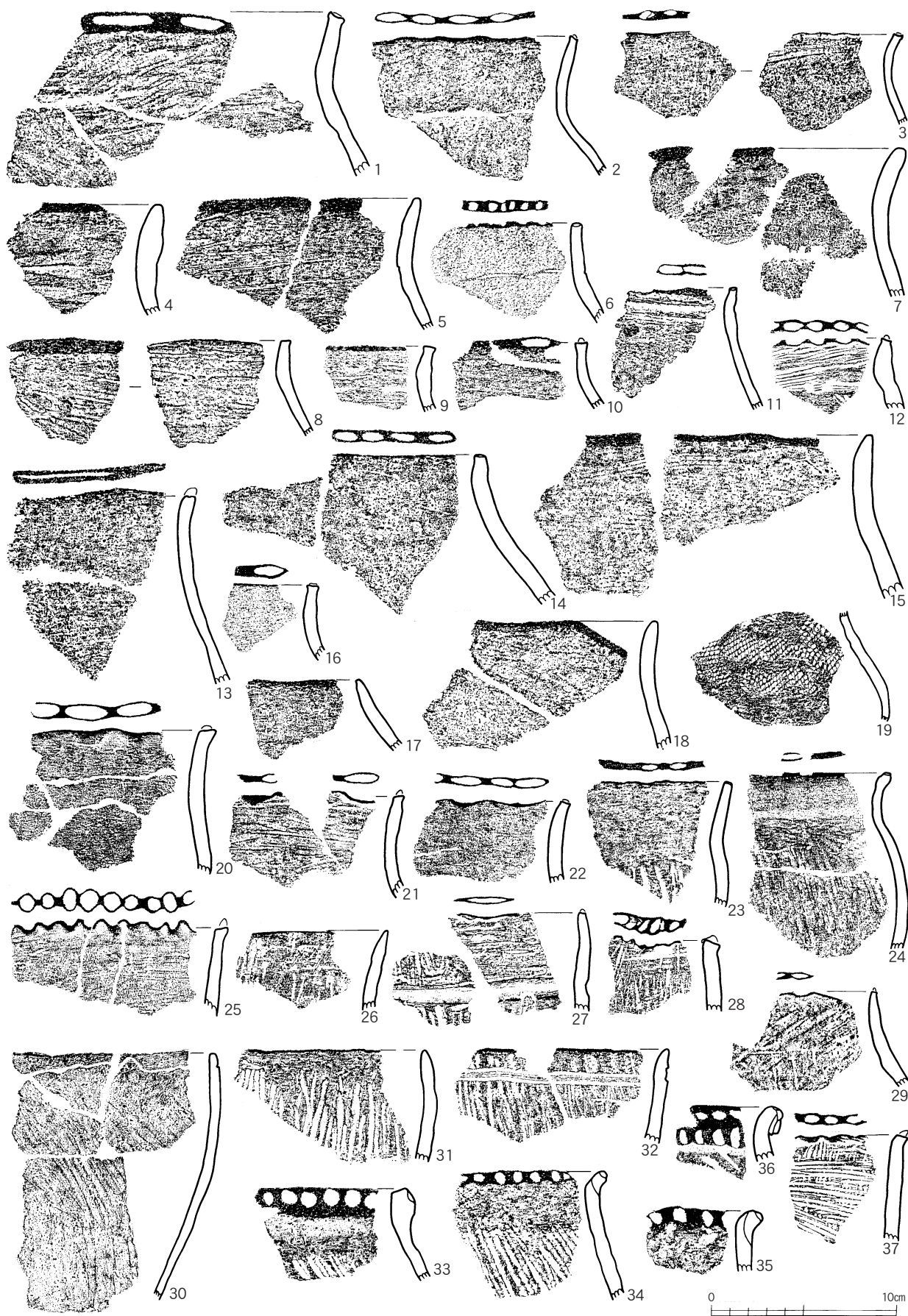
第65図 縄文土器実測図 (10) (縮尺1/3)



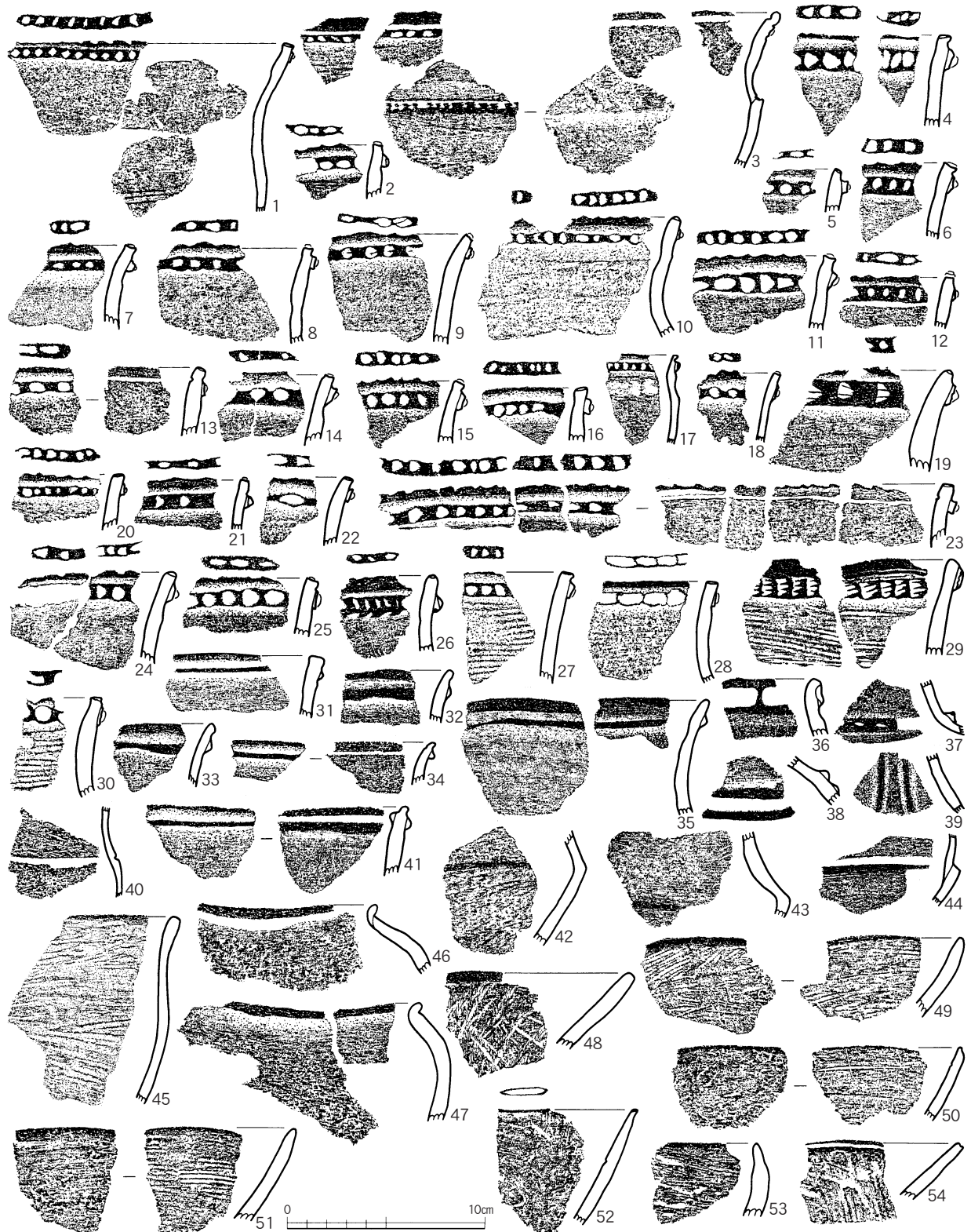
第66図 縄文土器実測図 (11) (縮尺 1/3)



第67図 縄文土器実測図 (12) (縮尺 1/3)



第68図 縄文土器実測図 (13) (縮尺 1/3)



第69図 縄文土器実測図(14) (縮尺1/3)

小形土器を一括する。器形には深鉢形・壺形(32・33・35・36)、浅鉢形(34)がある。

第26群土器(第70図)

底部。分類可能な底部片は総計132点出土した。無文土器深鉢を主体とするが、浅鉢(10)もある。有文土器と考えられるものには、深鉢あるいは鉢(1)、浅鉢(2)がある。以下、断面形態により大別し、底面形態により細分を行う。細分項目は中央部が平坦(a種)、周縁部より上がる(b種)、上げ底状

(c 種) とし、帰属個体数と図化番号もあわせて記載する。

1 類 平底で側面にくびれがないもの。a 種 23 点 (1・2・8・22・25)、b 種 12 点、c 種 7 点 (21・24)

2 類 やや厚い平底で側面にくびれがないもの。a 種 4 点 (13)、b 種 2 点 (19)

3 類 やや厚い平底で側面が直線となるもの。a 種 10 点 (12)、b 種 4 点 (3・7)、c 種 1 点

4 類 平底で側端部をナデにより丸めるもの。a 種 6 点 (4・11・18)、b 種 5 点 (5・17)、c 種 4 点 (6・23)

5 類 平底で側面下端が突出するもの。a 種 9 点 (8)、b 種 18 点 (9・10)、

6 類 厚い平底で側面下端が突出するもの。a 種 (3 点)

7 類 丸底のもの。a 種 8 点 (14・20・26)、b 種 4 点、c 種 1 点 (16)

8 類 厚い丸底。b 種 5 点

9 類 尖底。a 種 2 点 (27)

10 類 底径が小さく尖底ぎみの平底。a 種 2 点、c 種 1 点

11 類 尖底ぎみで厚い平底。b 種 1 点 (15)

以上のように、底部形態には多様性が認められるが、主体は平底の 1・3・5 類となる。底面形態は少ない c 種を除けば、a・b 種では数値的な偏りは認められない。底部圧痕には、スタレ状圧痕 (22)、木葉痕 (11) が各 1 点認められる。b・c 種で確認できる底面周縁に粘土帯を貼付するものには、粘土帯内側に棒状工具による押圧痕が環状に認められるもの (5・6・18) が多い。

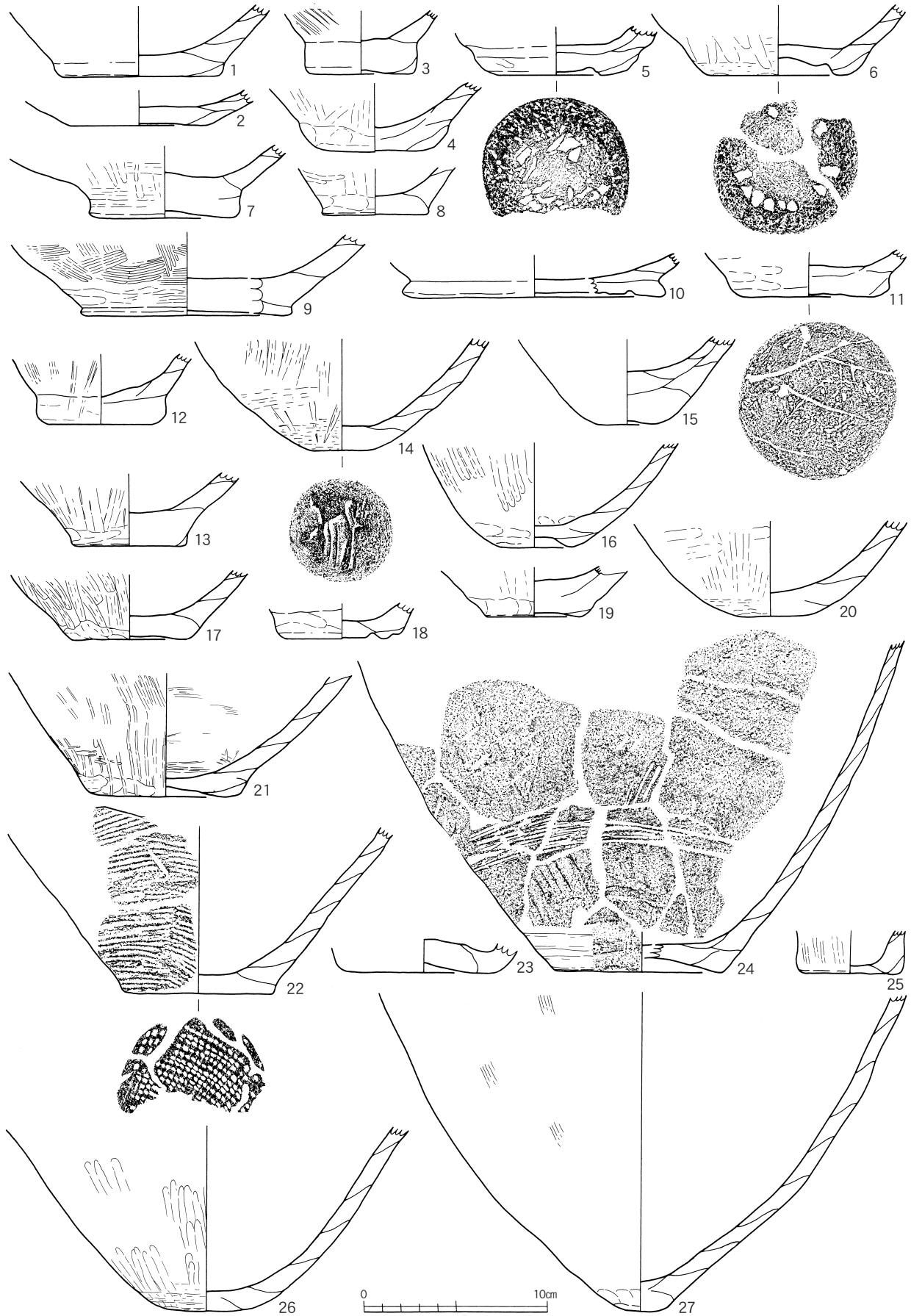
第 27 群土器 (第 61 図 37)

多孔底土器。1 点のみの出土である。37 は丸底状の底部に 5 箇所の円孔を施す。円孔の配置には規則性は認められない。円孔は内面からの穿孔で、外面には工具刺突時の粘土隆起が顕著に残る。調整は外面がナデで輪積痕が残り、内面は丁寧なナデで輪積痕を消している。

3 位置づけ

本遺跡出土土器は該期の調査例の少ない県内において、まとまった資料となった。しかし、調査において層位的あるいは遺構一括的な出土状況は確認できなかった。また、地域的枠組における土器編年は十分に一般化されていない。このため、ここでは概略的な位置づけを述べるに止める。

前項で説明した主要な土器群について、対比し得る、あるいは併行すると考える土器型式を列挙する。第 1 群が東海系咲畑式、第 2 群が中期後半に属す土器、第 3 群が在地系加曽利 B 式併行土器となる。第 4 群以降が晩期中葉以降に属す。有文土器のうち、第 4・7～10 群が中屋式および下野式である。各型式にそれぞれ対比し得る個体もある。無文土器のうち、第 11 群が中屋式、第 12 群が中屋式・下野式および東海系西之山式、第 13・14 群が東海系五貫森式、第 17 群が下野式、第 18・19 群が在地系「糞置式」となる。出土量の主体を占める第 12 群については、器形分類を主眼としたため、複数の系統および時期差を含んでいる。北陸系とした土器には、調整が条痕のみで有文土器と同様な器形を有す 1 類および 2 類を中心に想定したが、出土量の大半を占めるものではない。東海系西之山式とした土器は 3・6 類のうち、口縁端部の強い面取り、および二枚貝による刻目 (第 65 図 8・10・22 など)、口縁内面のえぐり状沈線 (第 66 図 14) などの形態的特徴をもつ土器とし、器形分類では明確に弁別できなかったが、個々には抽出可能である。出土量は時間的に後続する五貫森式 (第 13・14 群) も含め少ない。これら東海系土器、特に五貫森式土器は近年県内の周辺遺跡においても確認例が増加



第70図 縄文土器実測図 (15) (縮尺 1/3)

しており⁽¹⁾、該期土器群を構成する系統土器のひとつとなる可能性が高い。第12群で出土量が多い土器は、外面条痕施文後口頸部横位ナデといった二次調整土器、および施文方向が二次調整と同じとなる一次調整がナデのみの土器である。これに一定量存在するケズリ・巻貝条痕あるいはミガキ調整の土器を含めて、条痕主体となる北陸地方中央部とは様相が異なる点から、近畿あるいは東海地方の影響を受けた土器群とすることも可能である。しかし、独立した一つの系統土器である在地系として抽出するためには、本遺跡資料のみでは問題も多い。別途、型式論的差異とともに、有文土器を含めた時空間的な検討を必要とする。ただし、第12群と在地系「糞置式」とした第18・19群との対比では、器種・器形、および二次調整手法において近似性が認められる。これらの点からは、第12群から第18・19群への時間的連続性を想定しやすく、系譜を求め得る可能性がある。

註

(1) 以下の遺跡による。

中川佳三 他 2005 『坂井兵庫地区遺跡群Ⅱ（遺物編）』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

富山正明 他 2009 『林・藤島遺跡泉田地区』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

第6表 縄文土器一覧表

凡例 位置のみの記載は包含層出土土器とし、出土箇所が包含層と遺構で分かれる場合は、+で表記する。

煤は炭化物も含むものとする。

胎土分類は右の項目とし、①は微量、②～④は顕著に含むものとする。 ①海綿骨針 ②赤色粒子 ③黒色鉱物 ④白色粒子

調整分類は右の項目とし、調整順序は→で示す。

①二枚貝条痕もしくは類似条痕 ②その他の条痕 ③ケズリ ④ナデ ⑤ミガキ

第70図1～27の底部片については、観察項目の内容を右のとおり変更する。

調整の項目 口頸部→底面、胴部→底側部～胴部

持図	出土位置・遺構	赤彩	胎土	煤	縄文	調整 口頸部 胴部
54	1 SX123		内外		②→④	②
	2 SX093		外		①	①→④
	3 SX094		②	内	④	①
	4 SX103			内外	②	②
	5 SX089		②		④	③→④
	6 SX090			外	②→④	②
55	1 SX085		②		④	②
	2 SX111			内	④	①
	3 SK081		②	内	④	④
	4 SX091		②	内	④	④
56	1 C11D11				③→④	
	2 D12		①		①→④	
	3 C・D15		外	LR	縄→④	
	4 D11				①	
	5 C14			外	④	
	6 D11				④	
	7 SK082				LR	
	8 C13			外	④	④
	9 C・D15					③
	10 C16	内外	内外		文→⑤	②
	11 B10, C11, D11, C・D15	外	④		LR	
	12 D11	外	①②			⑤
	13 D15	外		外	④	
	14 SP121	内外	②	外	摩滅	⑤?
	15 D11	外				④
	16 D15	外			⑤	⑤
	17 D12, SP097	内外	④		底：縄→④	
	18 C10C11	外				
	19 C・D15			内外		④
	20 D11D12		②		LR	⑤
57	1 D16	外	②	外	LR	縄→④
	2 SK102		②	外	LR	縄→④
	3 D15				③→④	④
	4 D15		②④	外	①	①
	5 D15			外	②→④	②
	6 SD019 + D11				①→④	①→④
	7 C・D15				④	
	8 D15				③→④	④
	9 D11		②	外	③	③
	10 D15		②			
	11 C15			外	④	
	12 D15		②④	外	③	①
58	1 D13				③	①
	2 D14		②	外	①	①
	3 SK082			外	④	④
	4 D16			内外	③	③
	5 D15			外	②→④	④
	6 D11					
	7 D15			外	④	④
	8 D15		②④	内外	①→④	①→④
	9 D11			外	②・④	
58	10 C・D15			外	①	①→④
	11 D15				③	③→④
	12 B15		②④	内	①	①
59	1 SX086				④	④→②
	2 SX110		②④		②→④	②
	3 SD018 + D11				①→④	①
	4 C14			外	②→④	②
	5 C11		②		④	
	6 C16			外	④	④
	7 D13			外	④	②
	8 C11			外	②→④	
	9 D13		②		①→④	①
	10 C12		②④		LR	②→④
	11 D14				①	
	12 D15			外	④	④
	13 C13			外	④	
	14 C・D15			外	LR	④
	15 D10		③		④	
	16 D11・D12				④	
60	1 SX049		②	外	②	②→④
	2 C・D15				LR	④
	3 D15		②		④	
	4 SD028			外	①→④	①→④
	5 D15			外	④	④
	6 C10			外	②	
	7 C16			外	②→④	②
	8 SX083			内	②→④	②
61	1 SP099			外	②→④	②
	2 D15				④	②
	3 SD029				LR	②→④
	4 D15			外	LR	②→④
	5 C・D15			外	LR	③→④
	6 C・D15			外	④	④
	7 B13			外	①	①
	8 D15				④	④
	9 142			外	④	④
	10 D13		内外		②→④	②
	11 D14			外	②→④	②
	12 SX104			外	①→④	①→④
	13 C・D15			外	②→④	②
	14 D16		③		②→④	②
	15 B・C14			外	④	④
	16 C16				①	
	17 SD028, 029				④	
	18 SX104			内外	⑤	
	19 D11		内	内外	④	④
	20 D15				⑤	
	21 D14		①		⑤	
	22 D13		②		②→④	②→④
	23 D10, SK084		②	外	①→④	①→④
	24 C・D15			外	①→④	①→④
61	25 D11		内		内外	④
	26 C・D15, D16				外	①→④
	27 D13				外	④
	28 C14				外	①→④
	29 D15		①		外	④
	30 C16					⑤
	31 C13					外面被熱剥離
	32 D15					⑤
	33 C13					摩滅
	34 C12					⑤
	35 D15					⑤
	36 D16					③→④
	37 C・D15					④
62	1			②④	撫余 r	
	2 D13				LR	
	3 SK095				LR	
	4 B11		外		LR	縄→⑤
	5 D13				LR	
	6 C15		内外		LR	
	7 C16					③
	8 SK095					④
	9 B10			④		LR
	10 D11		内外			⑤
	11 C15				LR	縄→④
	12 B14			①②	RL	
	13 C16		外		RL	
	14 C10		②			摩滅
	15 C・D15		内		外	④
	16 SK095		②④		LR	縄→④
	17 C11・C12					①?→文様
	18 C・D15				外	LR
	19 D13			②④		④
	20 C・D15					LR
	21 D15				外	LR
	22 C16		外	④		LR
	23 D14			②		④
	24 C・D15			④		④
	25 C16				内外	LR
	26 D14		内		外	④
	27 C12					④
	28 D10				外	①?
	29 C13			③	内外	④
	30 D10			①		
	31 B13			①②		①→④
	32 C10		外	③		I
	33 D11		外			LR
	34 D13		内外			LR・LL?
	35 C11				内	LR
	36 C15		外			摩滅
	37 C10		③		LR	
	38 C10					

第5章 下層の遺構と遺物

探図	出土位置・遺構	赤彩	胎土	煤	縄文	調整 口頭部 胴部
62	39 C16				RL	④
	40 C・D15	外			LR	
	41 C13				LR	
	42 SK082				LR	
	43 SK082	外			LR	
	44 SK095		②	外	LR	
	45 C・D15			外	LR	
	46 C・D15					①→④
	47 C・D15					④ ④
	48 SD029			外		④ ④
	49 D14	外	②		LR	
	50 D13					④
	51 SK095				摩滅	
	52 表土				④	④
	53 C12					②
	54 D12		③			④
	55 C10				LR	縄→④
	56 D12				LR	
	57 D13		③	内		④
	58 SK082			外		⑤
	59 SK082			外		⑤
	60 D13					⑤
	61 C・D15					②→④
	62 C13			外	① ①	
	63 C11-13 道				摩滅、部分的⑤	
	64 SP106		④		摩滅	
	65 D14	外			LR	
	66 B14	外			LR	
	67 D13					
	68 C10	外			LR	
63	1 D11		②		④	
	2 D13	外	③	外	文様→⑤	
	3 C11			外	⑤	
	4 D11				LR	
	5 表土			内		④
	6 D13			外	摩滅	
	7 C11		①		LR	
	8 C16	外	① ④		LR	
	9 C・D15	外			LR	
	10 ST125-SD2	外	④		LR	
	11 C13	外	④		LR	
	12 C14			外	LR	
	13 C15					
	14 C10	外	③		LR	
	15 B10					
	16 C13	外	③		LR	
	17 C・D15	外			LR	
	18 C15	外		外	LR	
	19 C12	内外	②		LR	
	20 D13	外			LR	
	21 SK095					⑤
	22 1230			外	LR	
	23 C・D15				文様→⑤	
	24 表土				摩滅	
	25 C12	外			④	
	26 B14					
	27 C・D15				LR	摩滅
	28 D11	外				②
	29 SK088	外	①	外		⑤
	30 D13	外			④	
	31 C12				④	
	32 C11-13 道	内外		外	⑤	
	33 1232	外	① ④	外	④	
	34 表土	内外	③		摩滅	
	35 SK082	外			④	
	36 C13	外			⑤	
	37 SP131				⑤	
	38 D14	外			⑤	
	39 C10	内外	④		⑤	
	40 B14	外			⑤	
	41 C11	内外			LR	
	42 D14	外			摩滅	
	43 SP132				文様→⑤	
	44				④	
	45 D15	外	②		RL	
	46 C13				⑤	
	47 C14				文様→④	
	48 SD018				文様→④	
	49 C12				摩滅	
64	1 D16				③→④	④
	2 D15				④	④
	3 D10		②		①→④	④
	4 C13		④		④	④
	5 B13		②		④	④
	6 D11		③		① ④	④
	7 C11				① ④	④
	8 D12				②→④	②
	9 D12			内外	①→⑤	
	10 C・D15				①→④	
	11 D12				①	
	12 C11				②巻貝	④
	13 781			外	①→④	④
	14 SK088		② ③		③→④	
	15 D15				①→④	
	16 D15				②→④	
	17 SX110		②	外	②→④	②
	18 C・D15		④	外	①→④	
	19 D11				③→④	
	20 B13			外	②	
	21 SX054				④	④
64	22 D11		② ③		②→④	②→④
	23 D16				④	④
	24 2278				④	④
	25 SK084		③		④	
	26 D13		④		① ①	
	27 D15		② ④		②→④	④
65	1 D16				②巻貝	②巻貝
	2 C16		④	外	②巻貝	②巻貝
	3 D14				④	④
	4 D10				①	
	5 D16				①→④	④
	6 D15				④	④
	7 D16			外	④	④
	8 D12				④	④
	9 D12		②		④	④
	10 D13			外	①→④	
	11 D13				①→④	①→④
	12 D15				②	④
	13 C・D15				①→④	①→④
	14 C・D15		②		③→④	④
	15 D10		②		①→④	
	16 C11				① ①→④	
	17 D11			外	①→④	①→④
	18 C13			外	②→④	
	19 D13		②		④	
	20 B15				④	④
	21 SP130		③	外	④	
	22 D14			外	①→④	
	23 D11				①→④	
	24 D14		③		①→④	①→④
	25 D10			外	②巻貝	
	26 D15			外	②	②→④
	27 D13		②		①→④	①→④
	28 D14			外	①→④	
	29 D15			外	④	
	30 D11		②		④	④
66	1 排土				④	④
	2 D14			外	④	④
	3 D13			外	①→④	①→④
	4 D15			外	①→④	④
	5 C12		③		④	
	6 D12				④	④
	7 D11			外	①→②	②
	8 C13			外	②→④	④
	9 SX110				④	④
	10 D15		内		④	
	11 D11				④	①→④
	12 D16				④	④
	13 C11		②		④	④
	14 C11～13 道				①	
	15 D15			外	①→④	④
	16 D15			外	①→④	④
	17 D16			外	④	④
	18 C15		②		④	
	19 D11		②		LR	
	20 C11				①	①
	21 D11				①	④
	22 D12			外	①	①
67	1 D15				①→④	①→④
	2 C12		②	外	④	④
	3 C・D15				④	②
	4 C11				④	④
	5 D11				②	②
	6 B10				④	
	7 C13			外	④	②→④
	8 D15				④	②巻貝
	9 SK095		②		④	
	10 排土				LR	
	11 C16		②		①→④	④
	12 C・D15			外	④	④
	13 D11			外	②→④	
	14 C12			外	④	④
	15 SP112				④	④
	16 C13		① ④		③→④	
	17 B10			外	④	
	18 D11			外	②	
	19 D15			外	①	④
	20 SK082				③→④	
	21 C12		②		④	
	22 ST125-SD 3		② ③		④	
	23 SK215				④	
	24 SK215			外	①→④	①→④
68	1 D11				②巻貝	④
	2 C14			外	④	④
	3 D12				④	④
	4 SB011-SP 1				③→④	
	5 D15				④	④
	6 D16				④	④
	7 C・D15		②		④	④
	8 B13				④	
	9 D15				④	
	10 表土			内	④	
	11 C・D15			外	②	④
	12 D13			内	①	①→④
	13 C・D15				④	④
	14 D12		②		④	④
	15 D13				①→④	④
	16 SK082			外	④	
	17 C・D15				①→④	
	18 C12		②	外	④	④
68	19 D16	内			LR	縄→④
	20 C16				④	
	21 SK095			外	②→④	
	22 C14		③	外	②→④	
	23 D14			外	②→④	②
	24 D15				②→④	②
	25 D11				④	
	26 D13			外	②→④	
	27 D10		③		②→④	②
	28 D13		②	外	②→④	
	29 C10		② ③		②→④	
	30 D11			外	②→④	②
	31 SK095			外	②	②
	32 D10				②	②
	33 C・D15				②→④	②
	34 B16				②→④	②
	35 B12		外		④	
	36 D14		②			②
	37 SK088	内外		外	②	②
69	1 143			外	④	①
	2 D13				④	
	3 C・D15				①→④	
	4 B16・C16	内外		外	④	
	5 D13				①→④	
	6 C13				④	
	7 SD025	外	③		④	
	8 C13				④	
	9 C・D15	内			④	
	10 C12			外	④	
	11 B13				④	
	12 D13				④	
	13 D14				④	
	14 C14				④	
	15 B11		③		④	
	16 D13・14	外	③	外	④	
	17 SK081			外	④	①→④
	18 D15				④	
	19 D13		② ③	外	④	
	20 C13	内			④	
	21 D14		③		④	
	22 SK096				④	
	23 SP113				④	
	24 C14				④	
	25 C14		③		④	
	26 D16	外	③		④	
	27 C16	外	②		①→④	
	28 C14	内外			①→④	
	29 C16				①	
	30 C15	外			①→④	
	31 C14		②		④	
	32 C・D15				④	
	33 C・D15				④	
	34 B13				④	
	35 C・D15, SD029				④	
	36 B16		①		④	
	37 D13				④	
	38 B・C14				④	
	39 D13				④	
	40 C・D15				③→④	③→④
	41 D14					

第4節 縄文時代の土製品

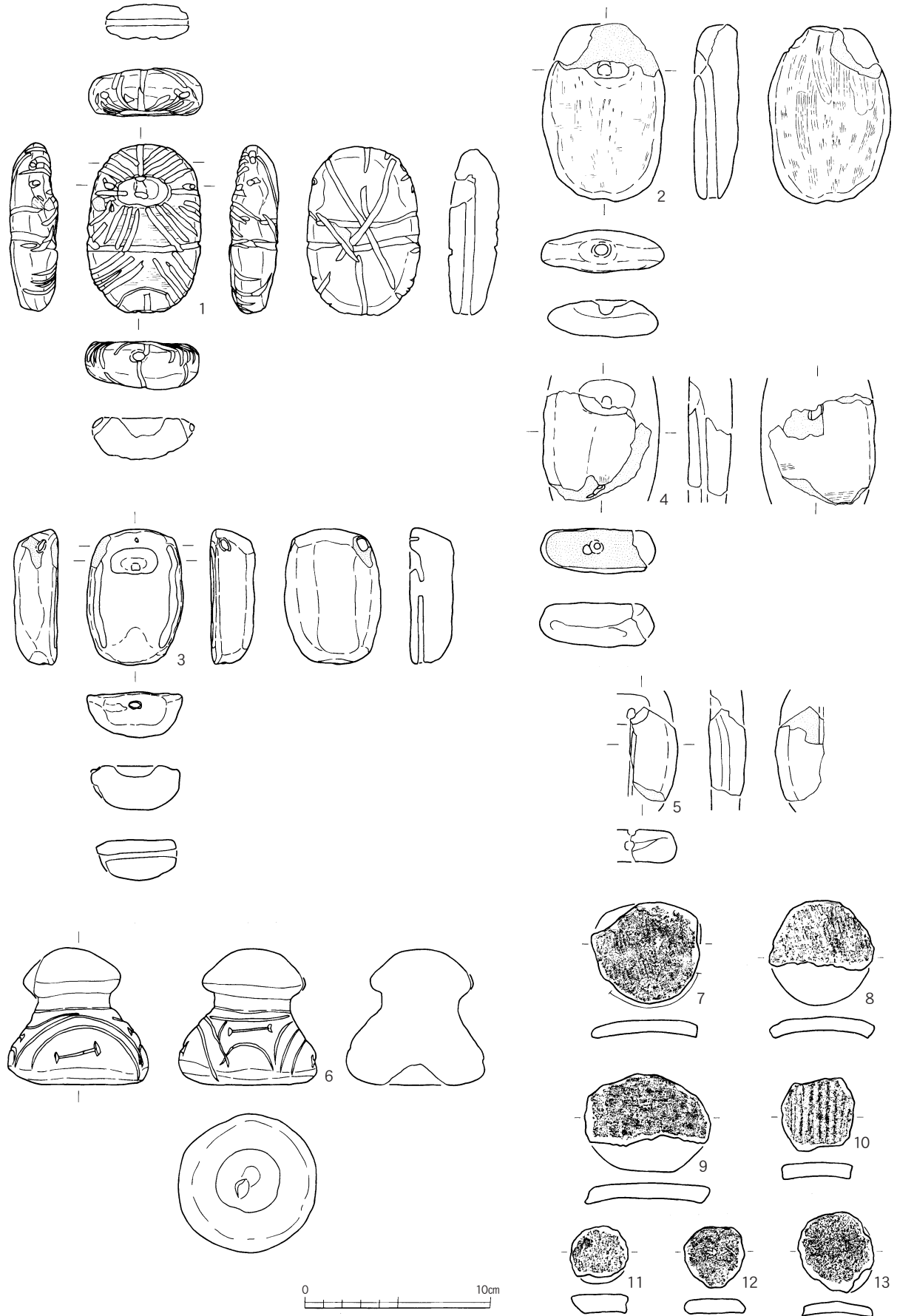
土版・土冠・土製円盤がある。特徴的な出土状況も認められないため、個別の時期確定は困難であるが、出土土器の主体となる晩期中葉～後葉に属するものと考えられる。以下、種別ごとに説明を行う。

1 土版（第71図1～5、第7表）

5点出土した。いずれも形態が平面楕円形でやや扁平な板状を呈す。各計測値には大きな数値幅は認められない。構造では表面上部中央に楕円形の穴（以下、盲孔とする）を有す点、器体内部中心に下端面から穿孔し、盲孔と連結する円孔（以下、中心孔とする）を有す点で共通する。これらの点から、本遺跡出土の土版には文様の有無はあるものの、一定の規格性がうかがえる。また、破損面の観察から、粘土板を使用し、器体短軸方向に折り込んで成形（2・4・6）する点、ナデやケズリなどの器面調整を行う点で、土器と共通する成形・調整手法を用いている。以下、各個に説明を行う。

1は完形品である。裏面には凹凸が認められ、平滑ではない。器体全面に浅い沈線による文様を施す。表面は中央やや下方の横位線文を境として上・下部で文様構成が異なる。上部は盲孔を中心とし、縦・横位線文、および放射状にのびる4、5条の対向斜行文を配す。下部は3、4条の「ハ」字状斜行文、および下端部に半円文とその内側に縦位短線文を配す。両側面には表裏面から延長する文様線のみ認められ、単独の文様はない。裏面には表面から延長する文様の他に、表面文様分割線となる横位線文の延長線とこれに並行する横位線文、およびこれらと交差する「×」状文を配す。表面と比べ文様線が少なく、文様配置や描線が雑である。盲孔両外側には側面と斜位に貫通する左右一対の小孔（以下、斜位孔とする）と、側面上端部付近には器体を横位に貫通する孔（以下、横位孔とする）を有す。なお、盲孔の上側面には中心孔穿孔時の棒状工具痕が残り、盲孔と中心孔が断面「L」字状に直交することから、中心孔は下端面からの片側穿孔であることがわかる。表面にはナデ状の浅い条痕が残る。色調は橙褐色を呈し、焼成は良好である。2は表面の盲孔より上方を欠失する。両側面が丸みをもつ。裏面には凹凸が認められ、平滑ではない。中心孔は盲孔との交差角度が鈍角であることから、盲孔と下端面からの両側穿孔と考えられる。表裏面にはケズリ痕が顕著に残る。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好で硬く焼きしまる。3はほぼ完形品である。表面が平坦で裏面がやや丸みをもつ。表面両側端部にナデ状の浅い凹線を器体側縁に沿って施す。横位貫通孔の他に盲孔上位の器体中心に小穴を有す。中心孔は盲孔と下端面からの両側穿孔であるが、器体中央部で途切れ貫通していない。盲孔との交差角度は鈍角である。器体全面に丁寧なナデを施す。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。4は器体中央右辺部片である。盲孔と中心孔が確認できる。表面中央には工具痕様の細線が認められる。破損面の観察から中心孔は両側穿孔である。下端側の破損面には中心孔に近接する棒状工具による刺突が認められる。調整は丁寧なナデの他に、浅い条痕が部分的に残る。色調は橙褐色を呈し、焼成は良好である。5は器体中央左辺部片である。盲孔と中心孔が確認できる。破損面の観察から中心孔は両側穿孔である。表面中央には中心孔と並行し盲孔から垂下する正中線状の縦位線文を施す。調整はナデである。色調は橙褐色を呈し、焼成は良好である。

本遺跡の土版には前述のとおり一定の規格性がうかがえるが、平断面形態において、1類－平面が隅丸長方形で断面が逆隅丸台形のもの（3）、2類－平面が楕円形で側面が幅をもつ隅丸長方形に近いもの（1・4・5）、3類－平面が楕円形で側面が明瞭ではなく長楕円形のもの（2）、のような若干の差異が認められる。これらの形態的差異が時間的・系統的差異を示すものか、現状においては明確ではない。



第71図 縄文時代土製品実測図(縮尺 1/3)

県内外において類似品の多量検出例は少なく、県内では成仏木原町遺跡で出土した無文の2例のみである（天井 1994）。遺跡時期は本遺跡と併行する晩期後半であるが、主体は後葉となる。類似例は材質が異なるが、晩期に属す岩版において多く確認でき（大野 2007）、東北地方出土品を中心として形態や盲孔、文様に類似性が顕著に認められる。ただし、中心孔に類するものは確認できない。中心孔に類似するものは、石川県御経塚遺跡（高堀 1983）や大阪府更良岡山遺跡・奈良県橿原遺跡（片岡 1983）などで出土した晩期に属す土偶に確認できる。特に橿原遺跡の土偶には、腕・脚部や乳房の他に本遺跡資料と極めて近似する、口とされる盲孔、消化管とされる中心孔とともに、盲孔両側面に斜位孔も確認できる。この点から類推すれば、影響方向の検討が別途必要となるが、本遺跡の土版は単に岩版の材質変更品ではなく、土偶と類似する特徴も有すと考えられる。

2 土冠（第71図6、第7表）

ほぼ完形品が1点出土した。形態はいわゆる「球頭状石冠」状を呈す。基底部の横断面がほぼ円形を呈し、基底部径は頭部径よりわずかに広い。底面にはすり鉢状の凹部を有す。基底部側面に細沈線による文様を配す。文様の描線や配置は雑である。文様は4単位配置で、交互に異なる文様を2単位で施す。頸部直下に部分的に途切れる横位沈線、以下に大小交互に弧文を施し、弧文の上下に横位「I」字状文を施す。重量から中実品であり、頭部破損面および基底部内面中央の接合痕から、頭部と基底下半部は粘土の巻き付けにより成形している。器面は摩滅が顕著である。焼成はやや良で、色調は淡橙褐色を呈す。基底部には、一次か二次か判断できないが、被熱赤色化が部分的に認められる。

3 土製円板（第71図7～13、第7表）

10点出土し、7点図化した。土器片を加工して成形したものである。部分的な欠損も含めると、完形品は2点と少ない。平面形が略楕円形や略円形を主体とするが、多角形（10）も認められる。周縁には明確な研磨は認められないが、部分的に摩滅が認められるもの（7）がある。すべて無文土器片を転用しており、土器の所属時期は晩期中葉を主体とする。

参考文献

天井康昭 1994 『金合丸・成仏・木原町遺跡』 永平寺町教育委員会

磯前順一・斉藤和子 1999 「遺物研究 岩版・土版」『縄文時代10』第4分冊 縄文時代文化研究会

大野純也 2007 「北陸地方における岩版類について―桜町遺跡出土品を中心として―」『富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書 縄文時代総括編』 小矢部市教育委員会

片岡肇 1983 「近畿地方の土偶について」『古代学叢論 角田文衛博士古希記念』 角田文衛先生古希記念事業会

高堀勝喜 1983 『野々市町御経塚遺跡』 野々市町教育委員会

第7表 土製品観察一覧表

[単位はcmおよびg]

図版番号	種類	出土区	遺構	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺存状況	調整	断面形態	備考	
第71図	1	土版	D14		10.0	5.0	2.6	141.7	完形	条痕後ナデ	隅丸長方形	裏面調整は粗雑。
	2	土版	D12		9.5	6.5	2.3	133.9	上部欠損	ケズリ・ナデ	長楕円形	焼成は良好で硬く焼きしめる。
	3	土版	C13	中央落ち込み	7.3	5.2	2.4	94.4	完形	丁寧なナデ	隅丸逆台形	
	4	土版	C13		6.9	5.7	2.4	70.0	破片	条痕・ナデ	隅丸長方形	
	5	土版		SK095	5.0	2.6	1.7	22.2	破片	ナデ	隅丸長方形	
	6	土冠	C13		8.5	7.3	7.3	273.0	頭部一部欠損	摩滅顕著	—	基底部が部分的に被熱赤色化。
	7	土製円盤	表土		5.7	5.2	0.8	25.2	破片	二枚貝条痕後ナデ	—	周縁部が部分的に摩滅。
	8	土製円盤	C・D15		5.6	3.5	0.8	17.0	破片	二枚貝条痕	—	
	9	土製円盤	D16		6.7	4.0	0.9	25.2	破片	ナデ	—	
	10	土製円盤	C11		4.0	4.0	0.8	13.5	完形	二枚貝条痕後ナデ	—	胎土に海綿骨針を微量含む。
	11	土製円盤		SP106	3.1	2.8	1.0	8.8	破片	ナデ	—	
	12	土製円盤		SK082	3.3	3.2	0.8	7.0	完形	ナデ	—	
	13	土製円盤	D13		4.3	4.1	0.6	10.0	破片	丁寧なナデ	—	

第6章 石器・玉作関連遺物

第1節 石器

1 構成と分布

第8表 石器組成表

石質	石鏃	石鏃未	石錐	石匙	PS	削器	剥片	石庖丁	打斧	磨斧	砥石	石錘	石皿	蔽石	凹石	磨石	石刀	石棒	石冠	計
安山岩	56	12	6	2	5	4	199	1	112	2		1		2	18	36				456
チャート	9				1		14													24
砂岩								1		2	4		1		9	10	2	1	2	32
蛇紋岩										9										9
片岩																	2	1		3
計	65	12	6	2	6	4	213	2	112	13	4	1	1	2	27	46	4	2	2	524

石器の構成を第8表に示す。狩猟具・工具・土掘具・調理具等、さらに祭祀具もあり、豊富で多様な道具類からなる。特に石鏃や石刀等の祭祀具が多く特徴的であり、打製石斧や凹石・磨石等も多く出土した。また、石庖丁が僅かにあり、砥石は玉作関連遺物とも考えられる。

石質は、安山岩が9割弱でチャートや砂岩、僅かに蛇紋岩や片岩もある。器種別では、石鏃等の剥片石器は緻密な安山岩が主体で、チャートも少量用いられる。打製石斧は安山岩、凹石・磨石等は安山岩と砂岩が用いられる。磨製石斧は蛇紋岩が多く特徴的で、石刀等の祭祀具は砂岩と片岩が用いられる。

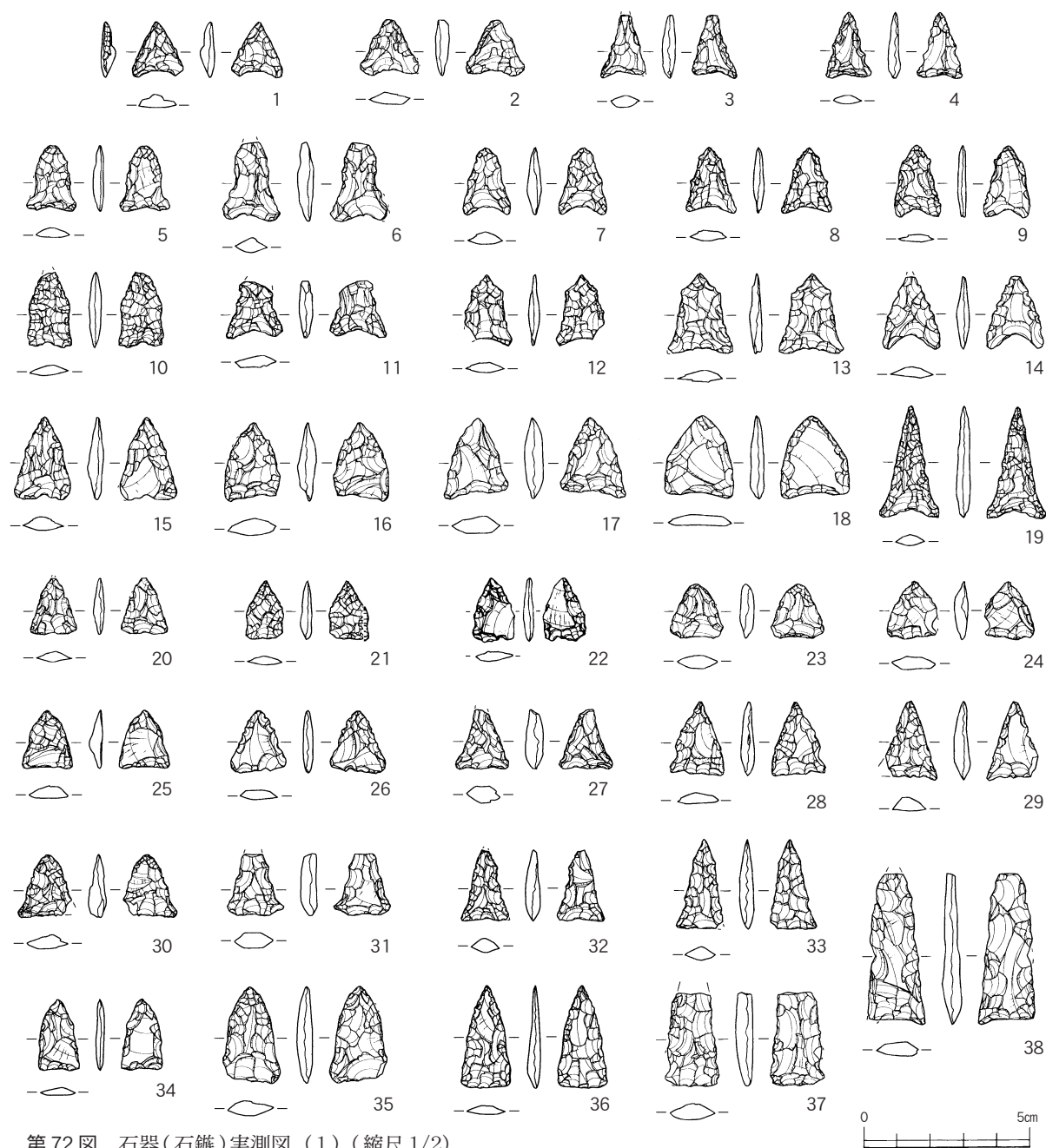
石器は、B～D10～16グリッドにかけて分布し、大半が包含層や遺構覆土から出土した。特にC・D11～15グリッドで8割程が出土して集中し、他では散在する。器種別や石質別に分布が偏る状況はみられなかった。

2 石器の形態

石鏃（第72図1～38、第73図1～21） 多くは両面中心に調整される。基部や全体の形状から以下のように類別した。

1類（第72図1～19） 凹基無茎鏃。基部に挾入が作出され、三角形状を呈す。1～4は、小形の一群。1と2は幅広で、正三角形状を呈す。1は、白色のチャート製で、表面中央が厚手となっている。2は、基端にやや丸みをもち、先端の作出が不十分である。3と4は細身で、3は基端の突出が左右で異なる。5と6は、側縁上半が緩く湾曲する。また、基端に丸みをもつ。6は、器体中央が厚手となっている。7～13は、側縁上位に段をもち、五角形状を呈す。7と8は、左側縁中程にも段をもつ。また8と9は薄手で、側縁が鋸歯状となる。10は、赤色のチャート製で、段が緩く作出される。11～13は、段の作出が明瞭である。12と13は厚手で、13はやや大形である。14～19は、大形の一群。14と15は側縁が直線的で、14は基部が大きく挾入する。16～18は、側縁が湾曲し、幅広でずんぐりした形状を呈す。また、基部の挾入が僅かである。18は、周縁に調整され、左側縁下半で屈曲する。19はチャート製。細身で、先端が尖鋭に作出される。また、側縁下半で内湾し、基端が突出する。

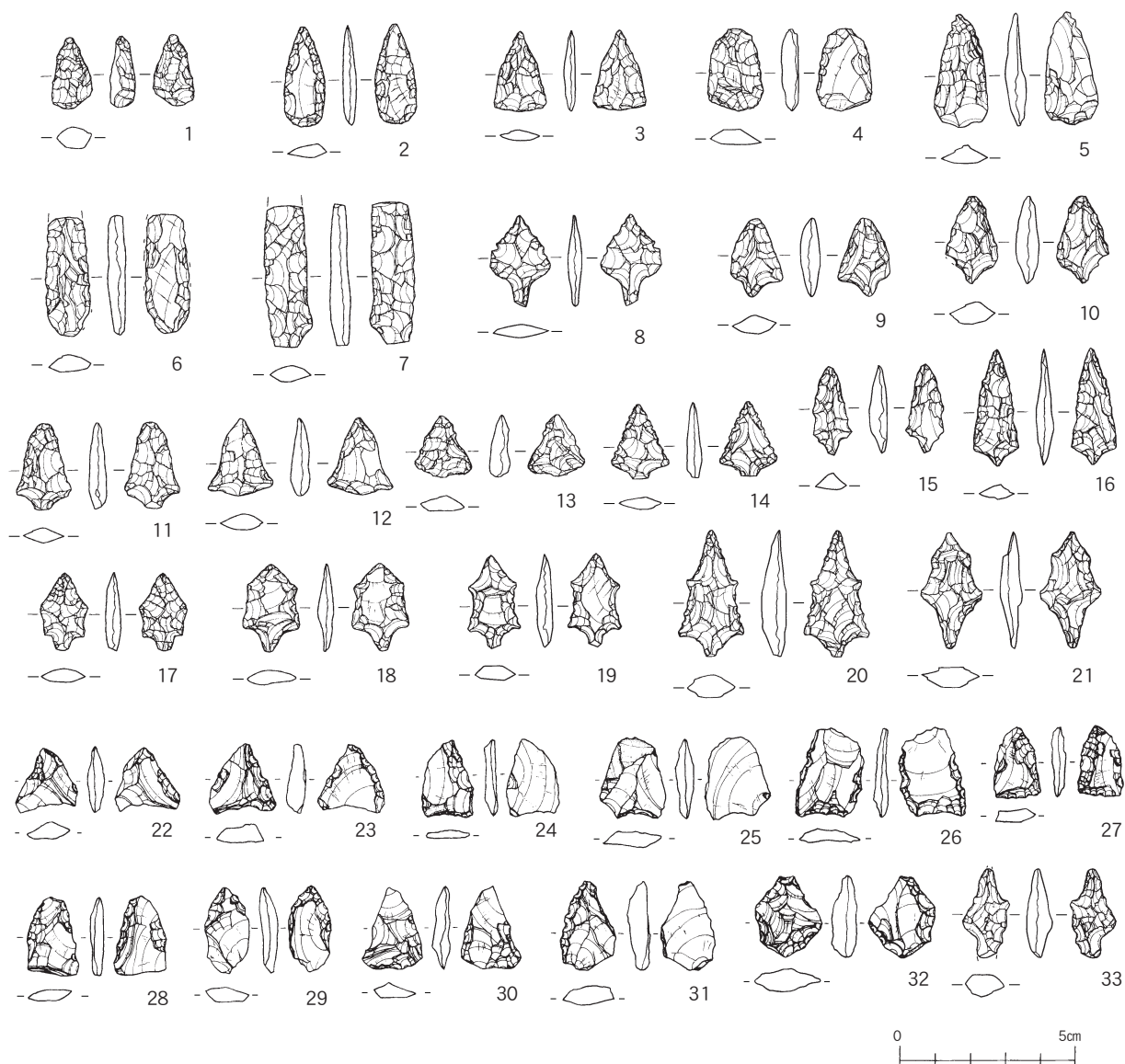
2類（第72図20～38） 平基無茎鏃で、基部が平らに作出される。20～27は、小形の一群。21はチャート製。側縁中程に緩く段をもち、五角形状を呈す。22は薄手で、周縁に調整される。23～27は幅広で、正三角形状を呈す。23～25は、側縁が緩く湾曲する。23は先端、24は右側縁下半の作出が不十分である。25は、器体中央が厚手である。26は、側縁が直線的で、鋸歯状となっている。27は厚手で、左側縁が僅かに内湾する。28と29は、やや大形の一群。30～33は、側縁上位に緩く段をもち、基端が突出する。30はチャート製で、器体下半が厚手である。31は、基部左端に丸みをもつ。32と33はやや細身で、33は両面とも器体中軸が鎚状となる。34～38は大形の一群で、長三角形状を呈す。34と35は、



側縁が緩く湾曲する。また、34は薄手で、周縁中心に調整される。36～38は、側縁が直線的で長身である。36は薄手、37は両面とも器体中軸が鎗状となる。38は、基部右端が短く突出する。

3類 (第73図1～7) 尖・円基鏃で、基部が丸みをもつ。1はチャート製で、基端や側縁が急斜に調整される。厚手で、断面が台形状を呈す。石錐等が再加工されたとも考えられる。2は、周縁中心に調整される。薄手で、側縁が緩く湾曲する。3～5は、やや幅広である。3は、側縁中程に緩く段をもち、基部境が最大幅となる。4は、先端の作出が不十分で、基端に折断面を残す。5は、器体中央がやや厚手となる。6と7は、大形の長身で柳葉形を呈す。基部は丸みをもって突出する。6は表面、7は両面とも器体中軸が鎗状となる。また7は、基端が平らに作出され、右側縁下位に明瞭な段をもつ。

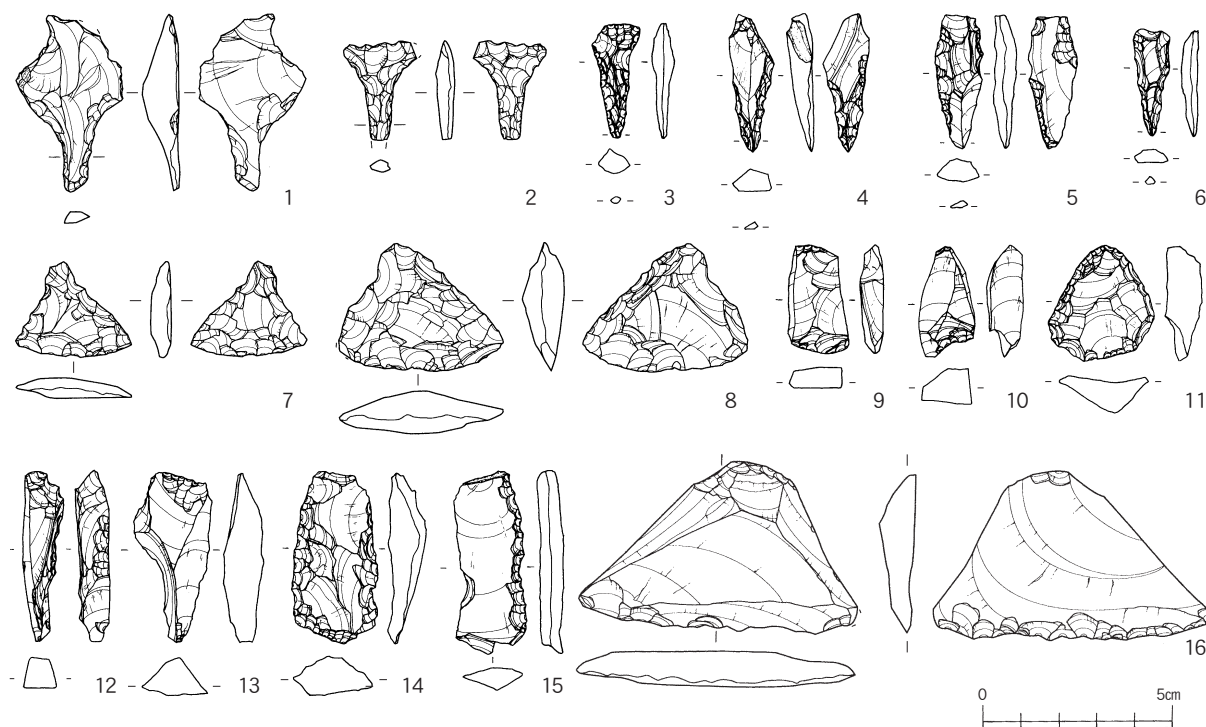
4類 (第73図8～21) 有茎鏃。8は、側縁下半で大きく湾曲し、基部が突出する。また幅広で、側縁が鋸歯状となる。9と10はやや厚手で、側縁が緩く湾曲する。11と12は、側縁下半で内湾し、基部



第73図 石器(石鏃)実測図(2)(縮尺1/2)

境が突出する。また12は、茎部が僅かに作出される。13と14は側縁が直線的で、14は鋸歯状となる。13はチャート製で、小形だが器体下半が厚手である。また、茎部が僅かに作出される。15と16は細身で、長三角形状を呈す。15は、表面中央が厚手となる。17～21は、側縁が緩く内湾し、上位に明瞭な段をもつ。所謂、飛行機鏃である。17は、緑色のチャート製である。20はやや大形で、側縁が鋸歯状となっている。また、先端が尖鋭に作出される。21は、茎部が大きく突出する。

石鏃未製品 (第73図22～33) 周縁に調整されるが器体に素材面を多く残し、屈曲や凹凸をもつ不整な形状である。22～26は、凹基無茎鏃の未製品と考えられる。22と23は、小形の幅広で正三角形を呈す。22は、左側縁中心に調整され、器体が緩く反る。23は、基部が急斜に調整され、先端の作出が不十分である。24は、裏面が未調整である。25と26は、素材の縁辺を多く残しており、調整段階のより前半の一群と考えられる。25は、基部の表面側に調整される。26は、基部と左側縁が作出されるが、器体右半は不整である。27～32は、平基無茎鏃か尖・円基鏃の未製品と考えられる。27は、基部と右側縁に調整される。28は、左側縁が不整である。29は、先端中心に調整される。30は、基部と側縁下半に調整される。31は器体上半、32は基部が厚手で、共に側縁中程で屈曲する。33は、有茎鏃の未製品と



第74図 石器実測図(3)(縮尺1/2)

考えられる。大きく突出する茎部が作出されるが、先端と側縁が不整である。また、上下逆とも考えられる。

石錐(第74図1～6) いずれも細長い刃部をもつ。1～3は、側縁が大きく内湾する。1は、大形の基部をもつ。周縁中心に調整されるが、刃部の作出が不十分である。2と3は、両面に調整される。4と5は、基部境で緩く屈曲する。6は、基部と刃部の境が不明瞭である。4～6は、周縁に調整される。

石匙(第74図7、8) 共に横形で、平面が三角形状を呈す。両面の周辺に調整され、左上方につまみ状の基部が作出される。

楔形石器(第74図9～13) いずれも両極打法により作出される。多くが上下にバルブをもつ両極剥離はみられないが、表裏に対向する複数の剥離面がある。9～11は扁平な方形で、上下端に線状の潰れが形成される。9は、右側面が裏面側から折断される。10はやや厚手で、右側面に両極剥離がみられる。12と13は縦長で、上端に線状、下端に点状の潰れが形成される。石錐未製品とも考えられる。12は、右側縁中程と表面の稜下端に調整される。13はチャート製で、左側縁が内湾する。

削器(第74図14～16) 14と15は、縦長の一群。14は、表面の周辺中心に調整される。15は、素材裏面を石器の表面とし、右側縁に調整される。16は、やや大形の横長剥片が素材で、裏面下端中心に調整される。緩く外湾する刃部が作出され、上端は屈曲して扇形を呈す。形状が石庖丁と共通する。

打製石斧(第75図1～10) 多くは板状剥片が素材で、周辺中心に調整される。以下、形状から類別した。

1類(第75図1、2) 基部から刃部がほぼ同じ幅で、短冊形を呈す。1と2は、両側辺が僅かに内湾する。1は、やや大形の厚手で、基部がすばまる。裏面は器体中央まで調整される。

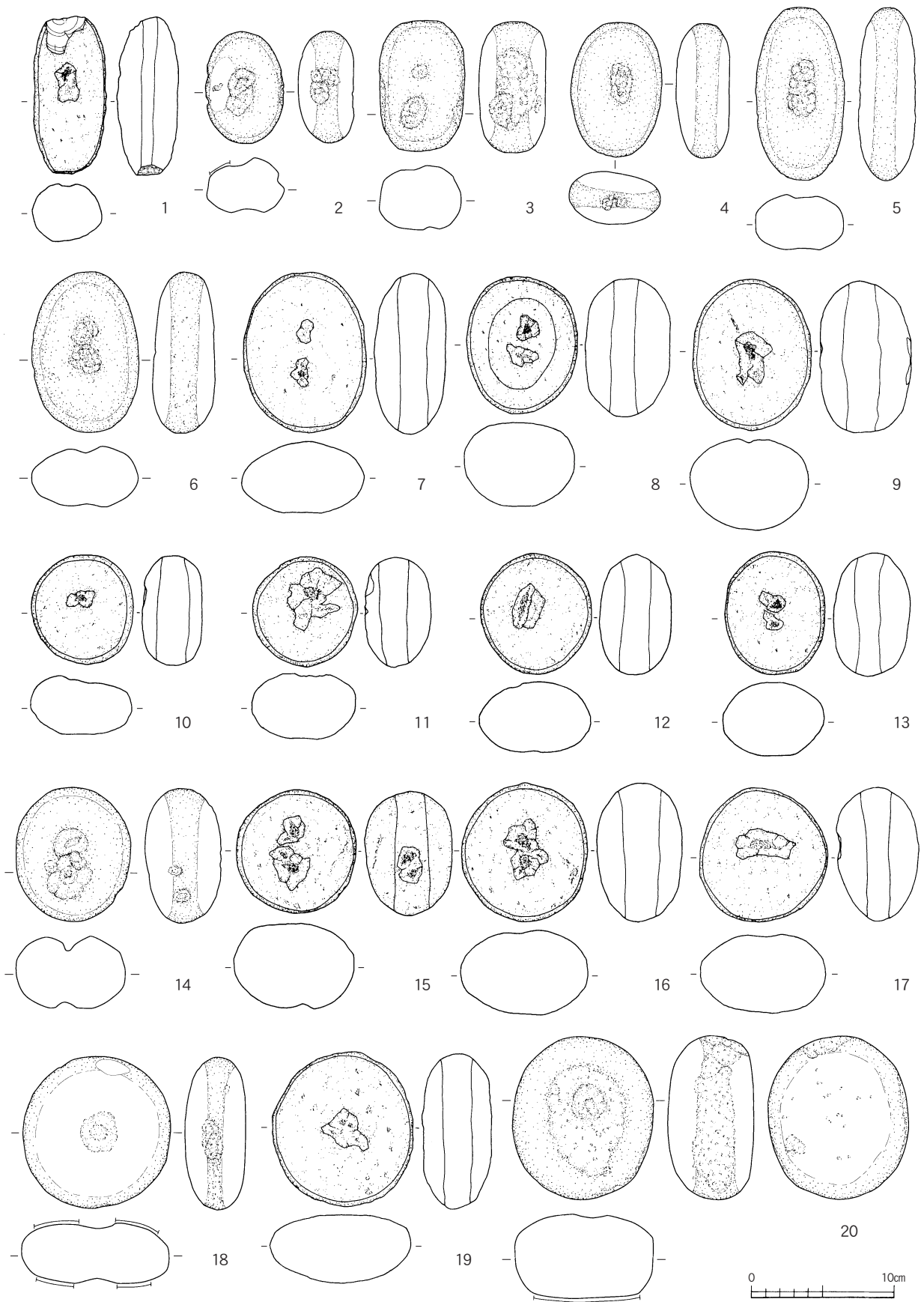
2類(第75図3～6) 基部から刃部へ側辺が緩く内湾して開き、撥形を呈す。4と5は刃部境が屈曲し、幅広の刃部をもつ。また4は、基部がすばまる。6は、板状礫が素材である。



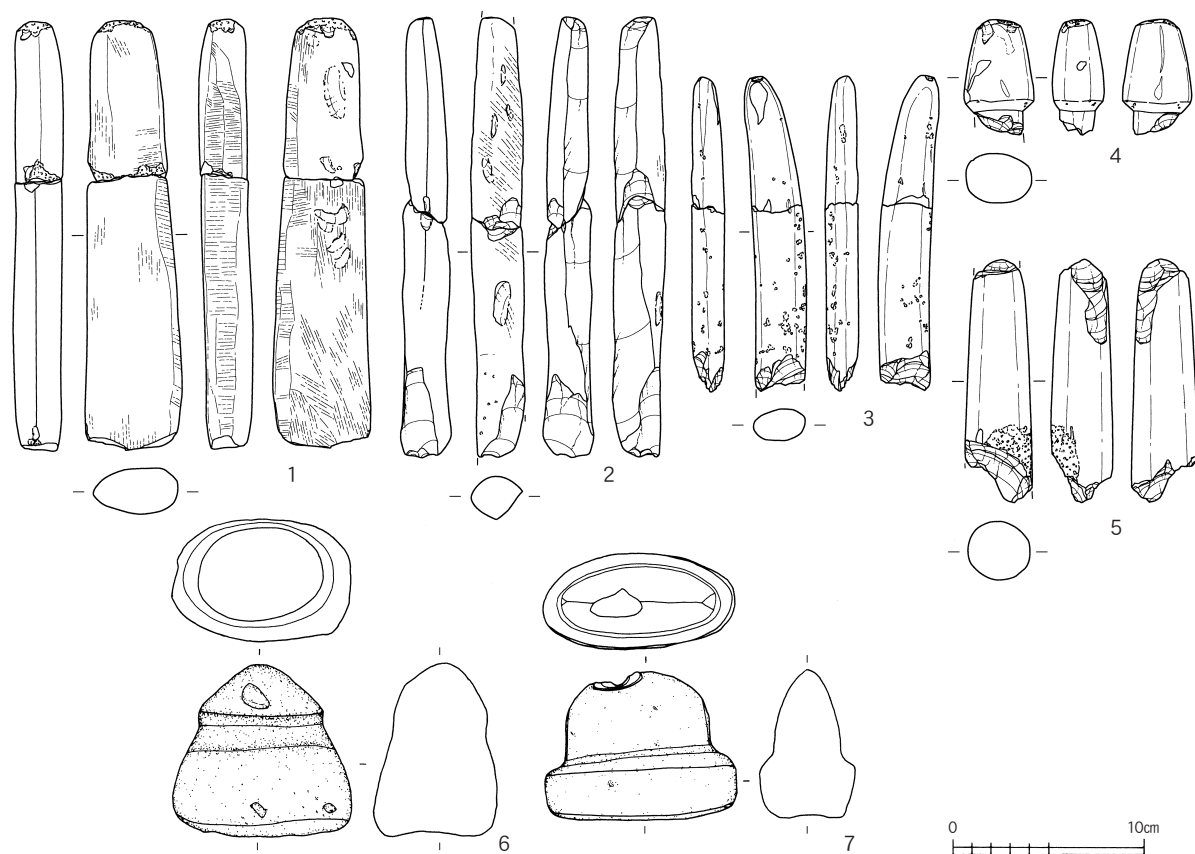
第75図 石器実測図(4) (縮尺 1/4)

3類 (第75図7～10) 側辺中程のやや上位に挾入をもち、分銅形を呈す。いずれも左右の側辺で湾曲の程度が異なり、挾入部位が若干ずれる。7と8は、基部から刃部へ側辺が緩く開く。7は小形で、刃部の作出が不十分である。8は、両側辺の刃部境が屈曲する。9と10は、側辺下半で湾曲して開き、幅広の刃部をもつ。9は、基端が内湾する。10は、基部が平らで刃部は丸みをもつ。

磨製石斧 (第75図11～20) 11と12は、側辺がほぼ平行する。11は、平らな基部をもち、断面が厚手で楕円形を呈す。太型蛤刃石斧と考えられる。12は細身で、基部がややすぼまる。基端は敲打され、側辺に面が作出される。13～19は、蛇紋岩製の一群。細くすぼまる基部をもち、平面が長三角形を呈す。側辺や基端に面が作出され、断面が扁平な方形となる。定角式磨製石斧と考えられる。14は、幅広の刃部をもつ。16は、刃部が偏る。18と19は小形で、18は基部の稜上も研磨される。19は、側辺の面が不



第76図 石器実測図（5）（縮尺1/4）



第77図 石器(祭祀具)実測図(6)(縮尺1/4)

明瞭で、断面が丸みをもつ。20も小形で、丸い刃部をもつ。

石庖丁(第75図21、22) 薄手の板状剥片が素材。21は、紐孔をもたず扇形を呈す。両面下端に研磨され、外湾する刃部をもつ。22は、相對する紐孔をもち、平面が楕円形を呈す。両面の上下端から体部にかけて研磨され、外湾する背部と刃部が作出される。体部に斜行、刃部に横方向の擦痕がある。

砥石(第75図23、24) 玉作用工具とも考えられる。砂岩製で中砥とみられ、扁平な板状を呈す。23は上下端と左側面、24は下端以外が砥面である。23は表面下端と右側面、24は表面と左側面に長軸方向で筋状の擦痕がある。また24は、右側面が帯状に凹む。

石錘(第75図25) 打欠石錘で、扁平な楕円礫が素材。表裏の上下端に数回調整される。

敲石(第76図1) 棒状礫が素材で、下端と表面上半に敲打痕をもつ。

凹石(第76図2～20) いずれも表裏に磨面をもち、中央に敲打痕があつて凹む。2～9は、扁平な楕円礫が素材。4以外、裏面中央にも敲打痕をもつ。8と9は、やや厚手である。10～20は、扁平な円礫が素材。16と17、19と20以外は裏面中央にも敲打痕をもつ。10～13は、やや小形の一群。14と15は、表裏中央が明瞭に凹む。17はやや幅広、18と19は薄手である。20は、敲打により周辺に面が作出される。また、裏面が平坦となる。

石刀(第77図1～3) いずれも左側縁に刃部、右側縁に背部が作出され、断面が楔形を呈す。1は扁平で幅広の器体をもつ。刃部が明瞭に作出され、背部はやや平坦である。先端に敲打痕がある。2は厚手で、刃部がやや不明瞭である。頭部との境は、側縁下位を緩く屈曲させている。3は細身で、刃部が内反りとなる。器体下半に敲打痕を残す。また、2と3は全体的に被熱している。

石棒(第77図4、5) 4は、亀頭状の頭部で先端に敲打痕がある。断面がやや扁平な楕円形を呈し、

石剣や石刀とも考えられる。5は、頭部へ向け細くなり、断面が円形を呈す。表面下部に敲打痕を残し、全体的に被熱している。

石冠（第77図6、7）共に底面に凹みをもつ。6は、亀頭状の頭部をもつが、石棒状ではなく山形に近い形状を呈す。器体中程で幅広の凹帯をめぐらせてくびれを作出し、頭部と基部を区別させる。7は、斧形の頭部をもつ。全体的に扁平で、頭部が裏面側へやや傾く。底面に横方向の擦痕がある。

3 小結

舟寄福島通遺跡の石器群は、太型蛤刃石斧や紐孔をもつ石庖丁など弥生時代の資料が少量混在するが、縄文時代晩期が主体である。以下、石器の形態や組成の特徴から遺跡の性格について小結する。

1 石器の形態

石鏃は、尖・円基鏃もあるが凹基・平基無茎鏃や有茎鏃が多く、各類で大形は少量である。多様な形態組成だが、側縁上位に段をもつ五角形状や所謂飛行機鏃が目立ち特徴的である。石鏃など剥片石器の石質は、緻密な安山岩が主体で少量のチャートからなる。該期では、林遺跡⁽¹⁾（福井市）や坂井兵庫地区遺跡群⁽²⁾（坂井市）、藤巻館遺跡⁽³⁾（永平寺町）など九頭竜川水系の遺跡で同様な状況がみられる。

磨製石斧は、蛇紋岩製で定角式の一群が主体である。坂井兵庫地区遺跡群や藤巻館遺跡は、安山岩や砂岩製で、側辺に不明瞭な面が作出され断面が丸みをもつ形態からなり、蛇紋岩製品がみられない。法土寺遺跡⁽⁴⁾（福井市）や四方谷岩伏遺跡⁽⁵⁾（鯖江市）、下糸生脇遺跡⁽⁶⁾（越前町）等は、安山岩や砂岩製の一群に蛇紋岩製品が少量組合わさる。本遺跡は、蛇紋岩製の定角式磨製石斧が多く特異と考えられる。

石棒は、小形で断面が扁平化しており、石刀との種別が不明瞭である。石刀や石棒は、嶺北では類例がややあり⁽⁷⁾、林遺跡や四方谷岩伏遺跡等で表採を含めまとまって出土している。石冠は、亀頭状や斧形の頭部をもつ形態では類例が少ないが、福井市片山新光寺や上野遺跡（勝山市）で表採され⁽⁸⁾、土冠だが金剛丸・成仏・木原町遺跡⁽⁹⁾（永平寺町）で出土している。

2 遺跡における石器の製作と組成

石器群は、組成の形成過程から二分される。石鏃等の剥片石器は未製品があり、剥片もややまとまって出土した。剥片は5 cm以下の小形が多く、表面に礫面が殆どない。礫面の多い原石でなく、大形剥片や石核で調査地に搬入され、小規模だが剥片剥離や調整作業が行われたと考えられる。また該期では、林遺跡を除く大半の遺跡で石鏃の出土量は数点から10数点程だが、本遺跡は多量かつ各類があり特徴的である。他の器種は全て単独個体であり、調査地で石器は製作されていない。他所から搬入され、周辺で使用し廃棄されている。

舟寄福島通遺跡は豊富で多様な道具類があり、縄文時代晩期の坂井平野における拠点的な集落の一つと推察される。また、蛇紋岩製の定角式磨製石斧は北陸東部、石刀等の祭祀具は飛騨との関連が窺われ、地域的な交流が考えられる。

参考文献

- | | |
|--------------|-----------------------------------------------------|
| (1) 藤井利章 | 1990 「林遺跡」『福井市史 資料編1 考古』福井市 |
| (2) 中村佳三 他 | 2005 『坂井兵庫地区遺跡群Ⅱ（遺物編）』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター |
| (3) 月輪泰 他 | 2007 『藤巻館遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター |
| (4) 月輪泰 他 | 2003 『法土寺遺跡Ⅱ』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター |
| (5) 山本孝一 他 | 2003 『四方谷岩伏遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター |
| (6) 赤澤徳明 他 | 1999 『下糸生脇遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター |
| (7)・(8) 仁科 章 | 1998 「福井県における縄文時代の祭祀遺物資料集成（上）」『福井県立博物館紀要第7号』福井県立博物館 |
| (9) 天井康昭 | 1994 『金剛丸・成仏・木原町遺跡』永平寺町教育委員会 |

第9表 石器観察表

(単位はcm)

挿図番号	図版番号	器種	出土地	形態	石質	器長	器幅	器厚
第72図1	図版第23	石鐮	B14 No.1290	1類。	チャート	1.7	1.5	0.5
第72図2	図版第23	石鐮	D14 No.893	1類。裏面中央に素材面を残す。	安山岩	1.7	1.8	0.4
第72図3	図版第23	石鐮	D7 No.2023	1類。裏面中央に素材面を残す。先端欠。	安山岩	1.9	1.3	0.4
第72図4	図版第23	石鐮	D14 No.1006	1類。表裏面中央に素材面を残す。	安山岩	2.0	1.4	0.4
第72図5	図版第23	石鐮	C12 No.1110	1類。裏面中央に素材面を残す。一部欠。	安山岩	2.0	1.5	0.3
第72図6	図版第23	石鐮	C11 No.1094	1類。先端と一部欠。	安山岩	2.4	1.7	0.5
第72図7	図版第23	石鐮	C11 No.1093	1類。	安山岩	2.1	1.5	0.4
第72図8	図版第23	石鐮	D11 No.1069	1類。裏面中央上半に素材面を残す。	安山岩	2.1	1.5	0.3
第72図9	図版第23	石鐮	D11 No.1199	1類。表裏面中央に素材面を残す。	安山岩	2.2	1.4	0.3
第72図10	図版第23	石鐮	C6	1類。先端欠。	チャート	2.3	1.4	0.4
第72図11	図版第23	石鐮	D12	1類。先端欠。	チャート	1.7	1.7	0.4
第72図12	図版第23	石鐮	D12 No.1126	1類。基部左端欠。	安山岩	2.2	1.5	0.3
第72図13	図版第23	石鐮	C11 No.809	1類。裏面中央に素材面を残す。一部欠。	安山岩	2.5	2.0	0.4
第72図14	図版第23	石鐮	D11 No.815	1類。裏面中央に素材面を残す。先端欠。	安山岩	2.2	1.8	0.4
第72図15	図版第23	石鐮	C12 No.1098	1類。裏面中央下半に素材面を残す。一部欠。	安山岩	2.5	1.7	0.5
第72図16	図版第23	石鐮	B16	1類。一部欠。	安山岩	2.4	1.7	0.6
第72図17	図版第23	石鐮	C13 No.1237	1類。表裏面中央に素材面を残す。やや磨減。	安山岩	2.5	2.0	0.6
第72図18	図版第23	石鐮	SK034	1類。表裏面中央に素材面を残す。やや磨減。	安山岩	2.6	2.1	0.5
第72図19	図版第24	石鐮	D14 SP129	1類。裏面中央に素材面を残す。	チャート	3.4	1.8	0.4
第72図20	図版第23	石鐮	D12 No.1101	2類。先端と一部欠。	安山岩	1.7	1.4	0.3
第72図21	図版第23	石鐮	C13 No.1226	2類。	チャート	1.8	1.2	0.3
第72図22	図版第23	石鐮	B11 No.1123	2類。表裏に素材面を多く残す。	安山岩	1.9	1.3	0.3
第72図23	図版第23	石鐮	南側落込み下層	2類。表裏面中央に素材面を残す。	安山岩	1.7	1.6	0.4
第72図24	図版第23	石鐮	C11 No.1205	2類。表裏面中央に素材面を残す。基部右端欠。	安山岩	1.8	1.5	0.4
第72図25	図版第23	石鐮	C11 No.202B	2類。裏面中央に素材面を残す。	安山岩	1.8	1.5	0.4
第72図26	図版第23	石鐮	表採	2類。表面中央に素材面を残す。	安山岩	1.9	1.7	0.3
第72図27	図版第23	石鐮	C11 No.202A	2類。先端欠。	安山岩	1.8	1.6	0.5
第72図28	図版第23	石鐮	D10 No.1203	2類。表面一部に礫面、裏面中央に素材面を残す。	安山岩	2.3	1.7	0.4
第72図29	図版第23	石鐮	C12 SK095	2類。表裏面中央に素材面を残す。基部左端欠。	安山岩	2.4	1.6	0.5
第72図30	図版第23	石鐮	C12 No.1159	2類。裏面左半に素材面を残す。基部右端欠。	チャート	1.9	1.6	0.6
第72図31	図版第23	石鐮	D14 下層包含層	2類。表裏面中央に素材面を残す。先端欠。	安山岩	1.9	1.7	0.5
第72図32	図版第23	石鐮	C13 No.1270	2類。裏面中央上半に素材面を残す。先端欠。	安山岩	2.2	1.5	0.4
第72図33	図版第23	石鐮	No.852	2類。基部右端欠。	安山岩	3.3	1.4	0.4
第72図34	図版第23	石鐮	D11 No.1360	2類。表裏面中央に素材面を残す。	安山岩	2.2	1.3	0.3
第72図35	図版第23	石鐮	C12 ST125-SD 2	2類。表面中央に素材面を残す。	安山岩	3.0	1.7	0.5
第72図36	図版第23	石鐮	B7 No.2229	2類。表裏面中央上半に素材面を残す。	安山岩	3.2	1.5	0.4
第72図37	図版第23	石鐮	C7	2類。上半と一部欠。	安山岩	2.9	1.6	0.5
第72図38	図版第24	石鐮	D11 下層包含層	2類。先端と一部欠。	安山岩	4.6	1.8	0.6
第73図1	図版第24	石鐮	D12 No.1181	3類。表裏に素材面を残す。	チャート	2.1	1.2	0.7
第73図2	図版第24	石鐮	D5 No.2170	3類。表裏面中央に素材面を残す。	安山岩	2.9	1.2	0.4
第73図3	図版第24	石鐮	C12 No.1154	3類。薄手。裏面中央に素材面を残す。	安山岩	2.3	1.5	0.3
第73図4	図版第24	石鐮	C12	3類。裏面に礫面と素材面を残す。	安山岩	2.4	1.6	0.5
第73図5	図版第24	石鐮	SK084	3類。裏面上半に素材面を残す。	安山岩	3.3	1.6	0.6
第73図6	図版第24	石鐮	D6 包含層	3類。裏面中央に素材面を残す。上半と一部欠。	安山岩	3.5	1.3	0.6
第73図7	図版第24	石鐮	D16 No.5	3類。上半欠。	安山岩	4.1	1.4	0.6
第73図8	図版第24	石鐮	C12 No.1354	4類。薄手。	安山岩	2.7	1.8	0.4
第73図9	図版第24	石鐮	D14 No.7	4類。表面中央下半に素材面を残す。磨減。	安山岩	2.3	1.5	0.6
第73図10	図版第24	石鐮	道路西側表土	4類。裏面中央下半に素材面を残す。一部欠。	安山岩	2.5	1.5	0.7
第73図11	図版第24	石鐮	B14 No.1240	4類。	安山岩	2.5	1.6	0.5
第73図12	図版第24	石鐮	D16 No.3	4類。裏面中央に素材面を残す。磨減。	安山岩	2.2	1.9	0.6
第73図13	図版第24	石鐮	I2 SK095	4類。裏面右半に素材面を残す。	チャート	1.8	1.6	0.6
第73図14	図版第24	石鐮	C11 No.1129	4類。	安山岩	2.2	1.6	0.4
第73図15	図版第24	石鐮	D14 No.1300	4類。裏面下半に素材面を残す。	安山岩	2.6	1.1	0.5
第73図16	図版第24	石鐮	B7 No.2228	4類。やや薄手。	安山岩	3.4	1.3	0.5
第73図17	図版第24	石鐮	D15 No.1	4類。	チャート	2.3	1.4	0.4
第73図18	図版第24	石鐮	D11 No.1125	4類。やや薄手。表裏面中央に素材面を残す。	安山岩	2.5	1.6	0.5
第73図19	図版第24	石鐮	表採	4類。表裏面中央に素材面を残す。	安山岩	2.7	1.6	0.5
第73図20	図版第24	石鐮	D14 No.1005	4類。裏面中央下半に素材面を残す。	安山岩	3.6	1.9	0.7
第73図21	図版第24	石鐮	D13 SK108	4類。裏面中央に素材面を残す。	安山岩	3.4	1.8	0.7
第73図22	図版第24	石鐮未製品	D11	基端に素材の縁辺を残す。	安山岩	1.9	1.8	0.5
第73図23	図版第24	石鐮未製品	B13		安山岩	2.0	1.9	0.6
第73図24	図版第24	石鐮未製品	D13 SP127	左側縁に折断面を残す。	安山岩	2.2	1.4	0.3
第73図25	図版第24	石鐮未製品	C12 南北トレンチ	表面上半に礫面を残す。	安山岩	2.3	1.8	0.5
第73図26	図版第24	石鐮未製品	C14 No.480	やや磨減。	安山岩	2.6	1.9	0.4
第73図27	図版第24	石鐮未製品	SK082	左側縁に折断面を残す。	安山岩	2.0	1.3	0.5
第73図28	図版第24	石鐮未製品	C12	基端に折断面を残す。	安山岩	2.3	1.5	0.4
第73図29	図版第24	石鐮未製品	D12 SK064	右側縁下半に折断面を残す。	安山岩	2.5	1.3	0.5
第73図30	図版第24	石鐮未製品	C11 SD019	左側縁上半に折断面を残す。	安山岩	2.4	1.7	0.5
第73図31	図版第24	石鐮未製品	D13	基端に素材の打面を残す。	安山岩	2.6	1.6	0.8
第73図32	図版第24	石鐮未製品	B13	基端に素材の打面、右側縁に素材の縁辺を残す。	安山岩	2.4	1.9	0.7
第73図33	図版第24	石鐮未製品	D13 SK108	裏面中央に素材面を残す。	安山岩	2.6	1.3	0.8
第74図1	図版第25	石錐	C14 No.1029	右側縁上半に素材の縁辺を残す。	安山岩	4.7	2.8	1.0
第74図2	図版第25	石錐	C11 No.1353	刃部欠。	安山岩	2.9	1.9	0.5
第74図3	図版第25	石錐	D12		安山岩	3.0	1.3	0.6

第1節 石器

(単位はcm)

挿図番号	図版番号	器種	出土地	形態	石質	器長	器幅	器厚
第74図4	図版第25	石錐	SE013 脇 No.1463	右側縁上半に礫面を残す。	安山岩	3.6	1.2	0.7
第74図5	図版第25	石錐	道路東側中央落込	基端に折断面を残す。	安山岩	3.5	1.3	0.6
第74図6	図版第25	石錐	B14 No.141	磨減が著しい。	安山岩	2.8	1.0	0.5
第74図7	図版第25	石匙	SE013 脇 No.1463	表裏面中央に素材面を残す。	安山岩	2.7	3.1	0.6
第74図8	図版第25	石匙	C11 No.1127	表裏面中央に素材面を残す。	安山岩	3.4	4.3	1.1
第74図9	図版第25	楔形石器	C14		安山岩	2.8	1.6	0.6
第74図10	図版第25	楔形石器	B10 下層包含層	裏面上端に礫面を残す。	安山岩	2.9	1.5	0.9
第74図11	図版第25	楔形石器	C11 SD019	やや磨減。	安山岩	3.1	2.8	0.9
第74図12	図版第25	楔形石器	D14		安山岩	4.5	1.1	0.9
第74図13	図版第25	楔形石器	D11 No.1155		チャート	4.4	2.0	1.1
第74図14	図版第25	削器	B9		安山岩	4.5	2.3	1.1
第74図15	図版第25	削器	D11 下層包含層	上端に素材の打面を残す。一部欠。	安山岩	4.8	1.9	0.7
第74図16	図版第25	削器	D11 SD020		安山岩	4.2	7.3	1.0
第75図1	—	打製石斧	No.851	1類。右側辺上位に潰れ。刃部磨減。	安山岩	18.0	7.6	3.7
第75図2	図版第25	打製石斧	C11～13 道	1類。刃部左半磨減。	安山岩	13.3	6.6	1.8
第75図3	図版第25	打製石斧	D11	2類。左側辺に素材面を残す。	安山岩	10.0	6.0	1.5
第75図4	図版第25	打製石斧	D12	2類。基端に素材面を残す。	安山岩	10.8	6.4	1.6
第75図5	図版第25	打製石斧	C9 No.2277	2類。基端に素材面を僅かに残す。	安山岩	11.5	7.5	1.3
第75図6	図版第25	打製石斧	D11 No.820	2類。右側辺に素材面を残す。表面の刃部磨減。	安山岩	13.6	7.0	2.1
第75図7	図版第25	打製石斧	D11 No.818	3類。右側辺中程に潰れ。	安山岩	8.4	5.0	1.7
第75図8	図版第25	打製石斧	D13 No.1035	3類。左側辺に素材面を残す。右側辺上位に潰れ。	安山岩	11.3	6.3	2.4
第75図9	図版第25	打製石斧	D12 No.1183	3類。両側辺上位に潰れ。	安山岩	15.2	10.0	2.8
第75図10	図版第25	打製石斧	C12 No.1184	3類。両側辺上位に潰れ。	安山岩	13.3	11.4	3.4
第75図11	図版第26	磨製石斧	D14 No.1007	基端周辺と裏面中軸に敲打痕を残す。	安山岩	8.8	4.8	3.6
第75図12	図版第26	磨製石斧	D6 No.2233 + D6 No.2237	表面に長軸方向、裏面中央に短軸方向の擦痕。刃部欠。	砂岩	12.4	3.9	2.5
第75図13	図版第26	磨製石斧	D12 No.1175	刃部に長軸方向の擦痕。刃部に潰れ。	蛇紋岩	8.6	5.0	2.2
第75図14	図版第26	磨製石斧	D10 No.1138	刃部に長軸方向の擦痕。刃部に潰れ。	蛇紋岩	7.4	5.4	1.8
第75図15	図版第26	磨製石斧	C16 No.140	表裏面の側端に斜行する擦痕。下半欠。	蛇紋岩	7.3	4.9	2.7
第75図16	図版第26	磨製石斧	B7 No.2021	刃部に潰れ。上半欠。	蛇紋岩	5.8	5.1	2.2
第75図17	図版第26	磨製石斧	D11 No.1191	刃部に長軸方向の擦痕。上半欠。	蛇紋岩	4.1	4.6	1.8
第75図18	図版第26	磨製石斧	C15 No.136	表裏面上半に長軸方向、下半に斜行する擦痕。	蛇紋岩	5.7	3.3	1.2
第75図19	図版第26	磨製石斧	C14 No.465	裏面上半に斜行する擦痕。刃部右半欠。	蛇紋岩	4.9	2.5	1.1
第75図20	図版第26	磨製石斧	C13 No.892	上半欠。	砂岩	3.2	3.0	1.1
第75図21	図版第25	石庖丁	C13	器体中央に素材面を残す。	安山岩	6.2	9.1	1.0
第75図22	図版第25	石庖丁	D13 No.1266	両側面に素材面を残す。	砂岩	4.9	12.2	1.0
第75図23	図版第26	砥石	B12 SK051 No.582	表裏面に不定方向の擦痕。	砂岩	15.4	7.3	3.0
第75図24	図版第26	砥石	SD029	表裏面に斜行する擦痕。やや磨減。	砂岩	13.8	8.8	3.2
第75図25	図版第26	石鏟	D11	打欠石鏟。磨減が著しい。	安山岩	8.7	5.8	2.1
第76図1	図版第26	敲石	D7 No.2207C		安山岩	11.2	5.0	4.3
第76図2	図版第26	凹石	D13 No.1043	両側面中程にも敲打痕をもつ。	安山岩	7.9	5.5	3.9
第76図3	図版第26	凹石	D12 No.1124	やや厚手。両側面中程にも敲打痕をもつ。	安山岩	9.3	6.1	4.7
第76図4	図版第26	凹石	C13 中央落込	上端にも敲打痕をもつ。	安山岩	9.5	6.4	3.7
第76図5	図版第26	凹石	C11 包含層	細身。下端にも敲打痕をもつ。	安山岩	12.2	6.3	4.0
第76図6	図版第26	凹石	D12 包含層	やや磨減。	安山岩	11.3	7.6	4.4
第76図7	図版第26	凹石	D13 No.1010		砂岩	11.3	8.6	5.0
第76図8	図版第26	凹石	表採	表面中央が平坦。	安山岩	9.7	7.7	5.9
第76図9	図版第26	凹石	C13 SP128		安山岩	10.7	8.3	6.4
第76図10	図版第26	凹石	D10 No.1388	上端にも敲打痕をもつ。	砂岩	7.7	7.2	4.2
第76図11	図版第26	凹石	B13 No.1276		砂岩	7.7	7.4	4.6
第76図12	図版第26	凹石	B12 No.1408		砂岩	8.5	7.8	5.0
第76図13	図版第27	凹石	C14 SX110 土器群中B	やや厚手。	安山岩	8.7	7.0	5.2
第76図14	図版第27	凹石	D13 No.1011	両側面中程にも敲打痕をもつ。	安山岩	9.5	8.1	5.4
第76図15	図版第27	凹石	C13 No.889	両側面中程にも敲打痕をもつ。やや磨減。	安山岩	8.8	8.4	6.1
第76図16	図版第27	凹石	D12 No.1169		砂岩	9.8	8.9	6.0
第76図17	図版第27	凹石	D12 下層包含層B	やや磨減。	安山岩	9.5	9.0	5.8
第76図18	図版第27	凹石	C11～13 道	右側辺中程にも敲打痕をもつ。一部欠。	砂岩	10.7	10.4	4.3
第76図19	図版第27	凹石	C15		安山岩	10.9	9.9	4.9
第76図20	図版第27	凹石	D14 No.1217		安山岩	11.6	9.9	6.0
第77図1	図版第27	石刀	D14 No.782 + D14 No.1332	表裏面に長軸・斜行、背部に短軸方向の研磨痕。	砂岩	22.7	5.2	2.8
第77図2	図版第27	石刀	C12 No.1185 + D10 No.1409	表面に斜行する研磨痕。やや磨減。右半欠。	砂岩	23.3	2.9	2.7
第77図3	図版第27	石刀	C10 No.1397 + C15 No.114	表面上半と背部に長軸方向の研磨痕。頭部欠。	片岩	16.6	3.2	1.7
第77図4	図版第27	石棒	C15 No.138	表裏面に長軸方向と斜行する研磨痕。下半欠。	片岩	6.1	3.7	2.7
第77図5	図版第27	石棒	D15 No.214	器体に長軸方向の研磨痕。頭部と下半欠。	砂岩	12.9	3.5	3.3
第77図6	図版第27	石冠	D14 No.1235	研磨により円滑に仕上げられる。	砂岩	9.1	9.4	6.5
第77図7	図版第27	石冠	D13 No.858	表面の基部に敲打痕を残す。一部欠。	砂岩	7.8	10.1	5.0

第2節 玉作関連遺物

1 構成と分布

第10表 玉作関連遺物組成表

荒割	形割			調整		研磨	穿孔	管玉	剥片	碎片	勾玉	小玉	玉鋸	計
	1類	2類	3類	1類	2類									
4	9	7	3	4	3	4	1	3	40	47	2	3	1	131

玉作関連遺物の構成を第10表に示す。剥片と碎片

以外では形割が多く、荒割や調整・研磨等も少量ある。

未貫通や破損した穿孔失敗品がなく、管玉製作工程の

後半に生じる資料は僅かである。製品に管玉や勾玉・小玉、工具には玉鋸がある。石質は緑色凝灰岩が大半だが、各製品では多様である。管玉は緑色凝灰岩の他に滑石があり特異である。勾玉は翡翠と蛇紋岩、小玉はガラス、玉鋸は紅簾片岩である。

C・D 2グリッドの住居に伴う周溝東半の覆土から主に碎片がまとまって出土したが、他は遺構の内外から1～数点出土する程度で散在する。器種別に分布が偏る状況等もみられなかった。

2 玉作関連遺物の形態

荒割（第78図1～4） 遺跡に搬入された原石が擦切施溝や剥片剥離等により分割され、不整ながら表裏や上下左右に面が作出される段階である。1は、大形厚手の角形を呈す。裏面上端と左側面上位に短軸方向の施溝痕をもち、上端から分割される。また、裏面から剥離され両側面が作出される。2～4は、形割より大形の角形で、3と4は断面が三角形状を呈す。2は、側辺がほぼ平行するが、上面が傾く。2は両側面、3は上面と右側面、4は上下面に表裏と直交する面をもつ。また2は右端、3は左端、4は上端から分割される。

形割（第78図5～14、第79図1、2） 荒割が長軸・短軸方向に分割され、表裏と上下左右に面が作出される段階である。各面が平行・直交するよう分割され、角柱形に成形される。以下のように類別した。

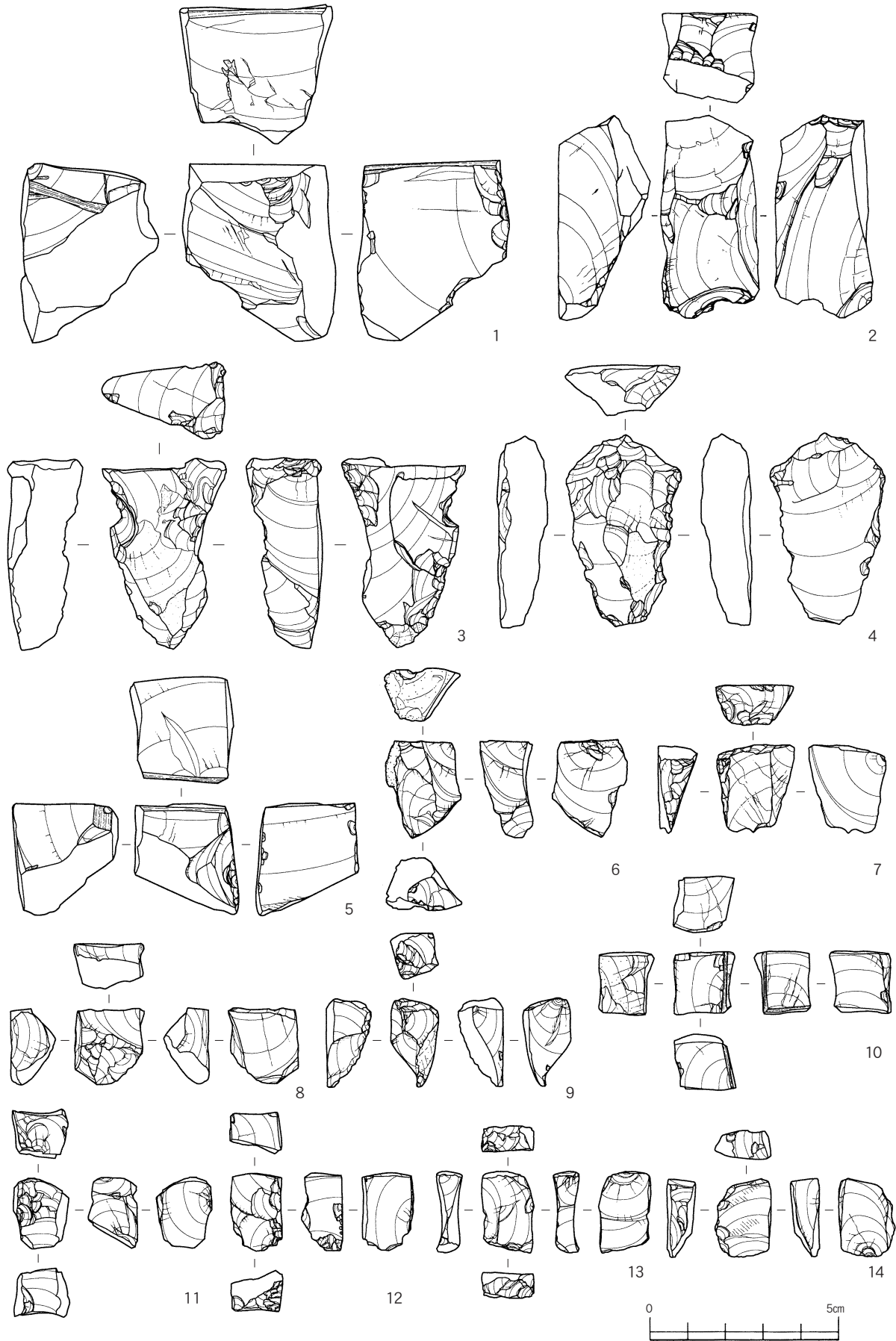
形割1類（第78図5～9） 5は、やや大形で幅広の角柱形を呈す。表面の上端に短軸方向、左端上位に長軸方向の施溝痕をもち、表面から分割される。上方から剥離され、裏面と右側面が作出される。6～9は、縦長の角柱状を呈し、断面が台形状となる。5などが長軸・短軸方向に分割された一群とも考えられる。6は、下端から分割される。下面が傾き、右側面は未作出である。7と8は左端から分割され、7は裏面に打点と対向する小剥離面がある。9は、上端から分割され、上面が調整される。また7～9は、上面と左右側面がほぼ平行・直交するが、下面が未作出である。

形割2類（第78図10～14） 側辺や表裏がほぼ平行・直交し、縦長の角柱形を呈す。10と11は厚手である。10は、右端から分割され、表面が作出される。表面右端に長軸方向、右側面下端に短軸方向の施溝痕をもつ。11は、左端から分割され、裏面に打点と対向するバルブがある。下面が大きく傾く。12～14は、断面が扁平な台形や長方形を呈す。12は、左端から分割される。裏面右端に長軸方向の施溝痕をもつ。また、僅かに下面をもつ。13は上端、14は下端から分割される。14は、下面が未作出で、左側面が屈曲する。また、表面一部に研磨痕がみられる。

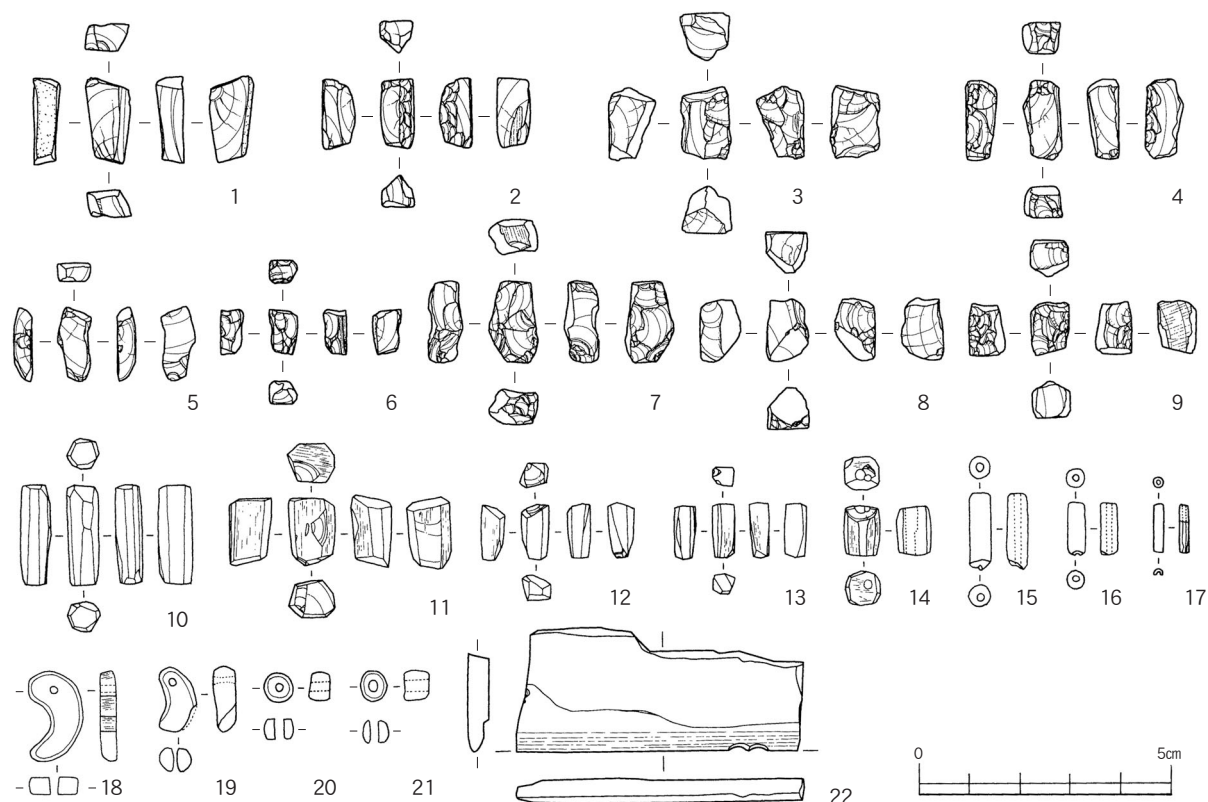
形割3類（第79図1、2） 表裏と上下左右の各面がほぼ平行・直交し、細長の角柱形を呈す。1は、右端から分割される。上下面とも緩く傾く。2は、表面に稜をもち、断面がやや厚手の台形を呈す。

調整（第79図3～9） 形割3類の各面が平行・直交するよう調整され、整った角柱形に作出される段階である。また、研磨も施されはじめる。

調整1類（第79図3～6） 多くは細身で各面がほぼ平行・直交するが、器体に凹凸や反りがある。3は、やや幅広で器体上半に厚みをもち、表面に稜がある。4と5は、左側辺が屈曲し、上面が傾く。



第78図 玉作関連遺物実測図（1）（縮尺2/3）



第79図 玉作関連遺物実測図(2)(縮尺2/3)

また5は、下面が未作出である。6は、右端から分割される。裏面左端に長軸方向の施溝痕をもつ。

調整2類(第79図7～9) 製作工程で調整1類の次に位置し、調整段階の後半にあたる。研磨後も剥離調整されており、併用して調整されたと考えられる。7は細身で、各面がほぼ平行・直交する。下端から分割され、右側面が作出される。8と9は小形で、やや幅広の角柱形を呈す。8は、左端から分割される。表面に稜があり、器体上半に厚みをもつ。9は、裏面を研磨後に両側面が調整される。表面と側面の稜が研磨により円滑となっている。

研磨(第79図10～13) 表裏左右の各面は長軸方向、上下面は短軸方向に研磨され、多角柱形に作出される。10はやや大形で、側辺や各面の稜線がほぼ平行するが、断面は扁平である。11は、厚手で幅広の形状を呈す。表裏は平行せず、上下面とも傾く。12と13は小形の一類。12は、表裏や側辺が平行せず、下端が細くなる。また、各面の稜も研磨され円滑となっている。13は、側辺や各面の稜線がほぼ平行するが、断面はやや不整な形状を呈す。下面に丸みをもつ。

穿孔(第79図14) 多角柱形の上下面から両方向に穿孔されて貫通する。上面は2回、下面は中心からずれて穿孔される。表裏左右の各面で、右側面下半は表裏方向、他は長軸方向に研磨される。また、上下面は短軸方向に研磨される。各面の稜も研磨され円滑となるが、仕上げはされていない。小形の幅広で、11などが穿孔されたと考えられる。

管玉(第79図15～17) いずれも円滑に仕上げられ、整った円柱形を呈す。15は滑石製で、やや大形である。16は中形、17は細身である。また17は、孔断面が直線状である。

勾玉(第79図18、19) 共に平面がD字形を呈す。腹部は明瞭に凹み、断面は扁平である。また、片側から一方向に穿孔される。18は、大形の蛇紋岩製。表裏は平坦で、断面が薄手の板状となる。頭部から背部にかけて稜を残し、表裏方向の研磨痕がある。19はやや粗悪な翡翠製で、裏面から穿孔される。

小玉（第79図20、21）共にガラス製。20は良質で透明な紺色、21は水色を帯びる。20は、表裏の孔周辺に面が作出される。21は、やや厚手で平面が楕円形を呈し、表裏に凹凸や反りをもつ。

玉鋸（第79図22） やや厚手で、下端に刃部をもつ。

3 小結

玉作関連遺物は、主に形割や剥片・碎片からなる。散在する分布状況だが、形割や調整等の作業が僅かに行われたとも考えられる。また、管玉や勾玉・小玉、玉鋸は製品として搬入されている。

荒割や形割・剥片等に施溝痕をもつ例があり、工具に玉鋸がある。少量で不明確だが施溝分割により製作されており、近在する高柳下安田遺跡西地区のSI51出土資料⁽¹⁾より時期的に先行すると考えられる。また、研磨や穿孔は細身で整った多角柱形ではなく、幅広で不整な形状を呈すことも特徴である。

参考文献

(1) 赤澤徳明 他 2010 『高柳・下安田遺跡』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

第11表 玉作関連遺物観察表

[単位はcm]

挿図番号	図版番号	器種	出土地	形態	石質	器長	器幅	器厚
第78図1	図版第28	荒割	D3 No.2001	表裏が平行せず、僅かに下面をもつ。	緑色凝灰岩	4.6	4.0	3.6
第78図2	図版第28	荒割	D6 No.2235	下端に素材の縁辺を残す。	緑色凝灰岩	5.3	2.6	2.4
第78図3	図版第28	荒割	B5 中近世の溝	左側辺に素材の縁辺、表面下半に礫面を残す。	緑色凝灰岩	5.0	3.3	2.0
第78図4	図版第28	荒割	B13 No.11	両側辺に素材の縁辺を残す。	緑色凝灰岩	5.0	3.0	1.3
第78図5	図版第28	形割1類	C・D6 SX037 No.2239	表面右半と左側面に凹凸や反り。	緑色凝灰岩	2.9	2.7	2.8
第78図6	図版第28	形割1類	D6 No.2026	両側辺に素材の縁辺、左側面に礫面を残す。	緑色凝灰岩	2.6	2.0	1.4
第78図7	図版第28	形割1類	中央落ち込み	下端と右側辺に素材の縁辺を残す。	緑色凝灰岩	2.3	2.1	1.1
第78図8	図版第28	形割1類	C12 No.4	表面に凹凸や反り。	緑色凝灰岩	2.0	1.9	1.2
第78図9	図版第28	形割1類	D12 SK064 No.814	表面下半に節理面を残す。	緑色凝灰岩	2.3	1.3	1.2
第78図10	図版第28	形割2類	C11 No.810	左側面に凹凸や反り。	緑色凝灰岩	1.7	1.6	1.5
第78図11	図版第28	形割2類	C5 No.2029	器体に凹凸や反り。	緑色凝灰岩	1.9	1.5	1.3
第78図12	図版第28	形割2類	B10 No.1430	表面と下面に凹凸や反り。	緑色凝灰岩	2.1	1.4	1.1
第78図13	図版第28	形割2類	B12 SK051 No.568	表裏と下面に凹凸や反り。	緑色凝灰岩	2.2	1.4	0.7
第78図14	図版第28	形割2類	D11 No.144	左側面に凹凸や反り。	緑色凝灰岩	2.1	1.5	0.8
第79図1	図版第28	形割3類	C13 No.386	裏面に凹凸や反り。	緑色凝灰岩	1.7	0.9	0.5
第79図2	図版第28	形割3類	D12 No.151	表面に凹凸や反り。やや磨滅。	緑色凝灰岩	1.4	0.7	0.7
第79図3	図版第28	調整1類	B2 SI001-SD 6 No.2048	裏面に調整。下面に凹凸や反り。	緑色凝灰岩	1.4	1.0	0.9
第79図4	図版第28	調整1類	C1 No.2005	表面と右側面以外に調整。左側面に凹凸や反り。	緑色凝灰岩	1.6	0.8	0.6
第79図5	図版第28	調整1類	B14 No.104	両側面に調整。両側面に凹凸や反り。	緑色凝灰岩	1.5	0.7	0.4
第79図6	図版第28	調整1類	D10 No.67	上面と左側面に調整。	緑色凝灰岩	0.9	0.6	0.5
第79図7	図版第28	調整2類	B12 SK051 No.592	表裏面と左側面に調整。上面に表裏方向の研磨痕。	緑色凝灰岩	1.6	1.0	0.7
第79図8	図版第28	調整2類	B2 SI001-SD 6 No.2051	上下面と右側面に調整。表面に研磨痕。	緑色凝灰岩	1.2	0.8	0.8
第79図9	図版第28	調整2類	C8 SK045 No.2020	下面以外に調整。裏面に研磨痕。	緑色凝灰岩	1.1	0.8	0.7
第79図10	図版第28	研磨	中央落ち込み	表面に剥離面を残す。磨滅が著しい。	緑色凝灰岩	2.0	0.6	0.6
第79図11	図版第28	研磨	B14 No.118	表裏と下面に剥離面を残す。	緑色凝灰岩	1.3	0.9	0.8
第79図12	図版第28	研磨	C11 No.153	表裏と上面に剥離面を残す。	緑色凝灰岩	1.1	0.6	0.5
第79図13	図版第28	研磨	SI001-SD11	裏面と上面に僅かに剥離面を残す。	緑色凝灰岩	1.1	0.4	0.4
第79図14	図版第28	穿孔	C8 No.2249	貫通。表面上端欠。	緑色凝灰岩	1.0	0.7	0.7
第79図15	図版第28	管玉	B12 SK051 No.579	下端欠。	滑石	1.5	0.4	0.4
第79図16	図版第28	管玉	D4 No.2016	やや磨滅。下端欠。	緑色凝灰岩	1.0	0.4	0.4
第79図17	図版第28	管玉	SI001-SD11	裏面下半欠。	緑色凝灰岩	0.9	0.2	0.2
第79図18	図版第28	勾玉	SI001-SD11	表裏と尾部は円滑に仕上げられる。	蛇紋岩	1.8	1.1	0.3
第79図19	図版第28	勾玉	D4 No.2003	背部下半欠。	翡翠	1.3	0.8	0.5
第79図20	図版第28	小玉	D5 No.2206		ガラス	0.6	0.6	0.4
第79図21	図版第28	小玉	B14 No.119	粗粒を含む。	ガラス	0.6	0.5	0.5
第79図22	図版第28	玉鋸	D6	上半と両側端欠。	紅簾片岩	2.5	5.7	0.5

第7章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の概要

今回の舟寄福島通遺跡の調査では自然科学分析の対象となる試料を多く得ることができた。ここでは各分析の成果を掲載する。なお第6節のボーリングは、当初舟寄福島通遺跡の調査区で実施したところ、地表下3mで砂層に達し、分析の対象となる試料を得ることができなかった。そこで農政局の承諾を得て、同時期に調査していた若宮遺跡の調査区内で実施して得られた試料を分析の対象としたことを断っておく。

第2節 放射性炭素年代測定

1 はじめに

丸岡町に所在する舟寄福島通遺跡より検出された土器付着物および炭化種実について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

測定試料の情報、調整データは第12表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第12表 測定資料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-5765	位置：D14G 遺構：包含層 遺物：深鉢（第61図11）	試料の種類：土器外面煤類 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 0.1N, 塩酸 1.2N）
PLD-5799	位置：D14G 遺構：包含層（花粉分析等採取層準） 層位：21層	試料の種類：炭化種実（ムクロジ） 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N）

3 結果

第13表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、第80図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。以下の分析の手法については第112集の高柳・下安田遺跡に同じである。

第13表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-5765	-25.20 \pm 0.12	2652 \pm 23	2650 \pm 25	825BC(68.2%)795BC	890BC(1.0%)880BC 840BC(94.4%)790BC
PLD-5799	-26.45 \pm 0.17	2704 \pm 23	2705 \pm 25	895BC(25.0%)870BC 850BC(43.2%)815BC	900BC(95.4%)805BC

4 考察

以下、小林謙一（2008）と山本直人（2007）を参照して、暦年較正結果と考古学編年との対応関係について整理する。

包含層から出土した深鉢（第61図11）の外面付着煤類（PLD-5765）は、2 σ 暦年代範囲において890-880 calBC(1.0%)および840-790 calBC(94.4%)であった。確率の高い範囲において紀元前9世紀中頃～8世紀初頭であり、縄文時代晩期に相当する。包含層21層から出土した炭化種実（PLD-5799）は、2 σ 暦年代

範囲において 900-805 calBC(95.4%)であった。これは紀元前 10 世紀初頭～9 世紀末であり、縄文時代晩期に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.

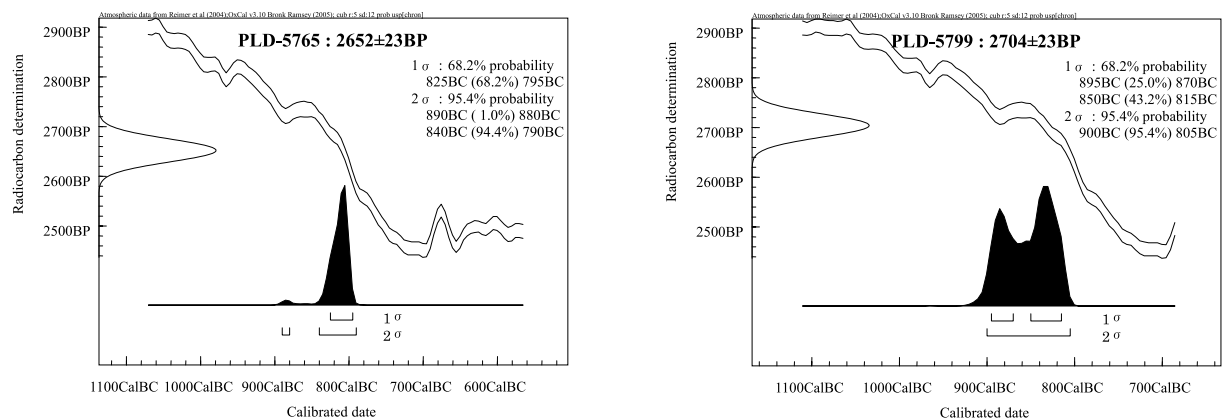
Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 縄文時代の考古学 2- 歴史のものさし, 257-269, 同成社.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, 3-20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

山本直人 (2007) 東海・北陸における弥生時代の開始年代. 新弥生時代のはじまり第 2 巻 縄文時代から弥生時代へ, 35-44, 雄山閣.



第 80 図 暦年校正結果

第 3 節 珪藻化石群集

1 はじめに

珪藻は淡水から海水に至るほとんどすべての水域に生息し、水域生態系の一次生産者として重要な位置を占めている。微小 (0.01 ～ 0.5mm 程度) ながら珪酸体からなる殻を形成するため、化石として地層中によく保存される。また種類ごとに様々な水域に適応し生息するため古環境の指標としてもよく利用されている。

ここでは福井県坂井市丸岡町の舟寄福島通遺跡より採取された試料を用いて珪藻化石群集を調べ、その堆積環境について検討する。

2 試料及び分析方法

分析には採取された堆積物の B12 グリッドから採取された試料⑤・⑪・⑳・㉑の 4 試料と、B16 グリッドから採取された試料①～④の 4 試料、C11 グリッドの井戸遺構 SE013 最下層、B11 グリッドの井戸遺構 SE014 最下層の計 10 試料を用いて、以下の珪藻分析をおこなった。

- ① 試料を湿潤重量で約 1 g 程度取り出し、秤量した後にツールビーカーに移し、30% 過酸化水素

水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。

- ② 反応終了後、水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業は上澄み液が透明になるまで7回以上繰り返し行った。
- ③ ビーカーに残った残渣は遠心管に回収した。
- ④ マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し、乾燥した。乾燥後にマウントメディア（封入剤）で封入し、プレパラートを作成した。
- ⑤ 各プレパラートを光学顕微鏡下400～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数を行った。なお、珪藻化石が少ない試料に関してはプレパラート全面について精査した。

3 珪藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群は、主に安藤（1990）により設定された環境指標種群に基づいた。安藤（1990）は淡水域における環境指標種群を設定した。なお環境指標種群以外の珪藻種については、広布種として扱った。また、破片であるため属レベルで同定した分類群は不明種として扱った。以下に安藤（1990）において設定された環境指標種群の概要を記す。

上流性河川指標種群（J） 河川上流の渓谷部に集中して出現する種群。

中～下流性河川指標種群（K） 中～下流域、すなわち河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群。

最下流性河川指標種群（L） 最下流域の三角州の部分に集中して出現する種群。

湖沼浮遊性指標種群（M） 水深1.5m以上で、水生植物が水底には生息していない湖沼に生息する種群。

湖沼沼沢湿地指標種群（N） 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群。

沼沢湿地付着生指標種群（O） 水深が1m内外で、植物が一面に繁茂しているところおよび湿地において付着状態で優勢な出現が見られる種群。

高層湿原指標種群（P） ミズゴケを主とした植物群落および泥炭の発達が見られる場所に出現する種群。

陸域指標種群（Q） 前述の水域に対して、陸域を生息域として生活している種群（陸生珪藻）。

4 珪藻化石群集の特徴と堆積環境（第83図、第14表）

本研究において検出された珪藻化石は、50分類群23属37種2亜種である。これらの珪藻種から設定された環境指標種群は、広布種を含め4種群である。以下に地点ごとにこれら種群の出現状況の特徴と堆積環境について述べる。

B12グリッド（第81図）

【I帯（試料⑤、⑳、㉑）】

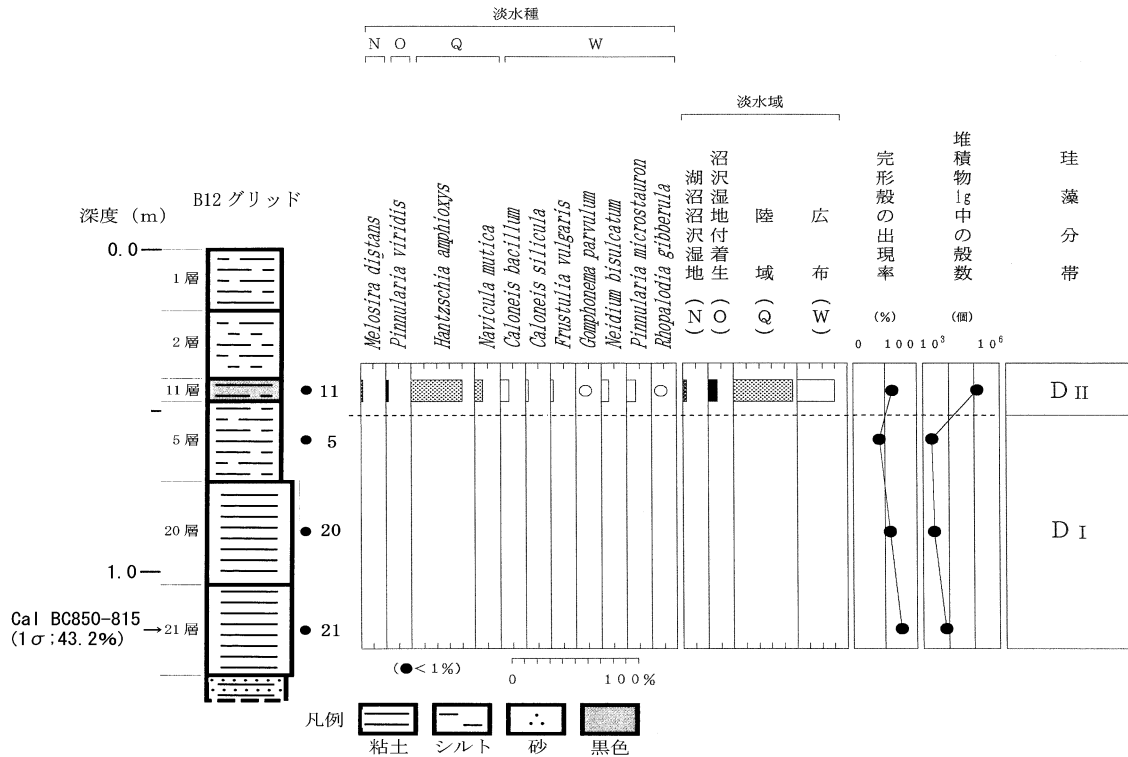
堆積物1g中の珪藻殻数は $2.18 \sim 7.64 \times 10^3$ 個と非常に低い。そのため珪藻化石より堆積環境を推定することは難しいが、下位の試料㉑については少ないながらも陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* が検出されていることから陸域環境と考えられる。

【II帯（試料㉒）】

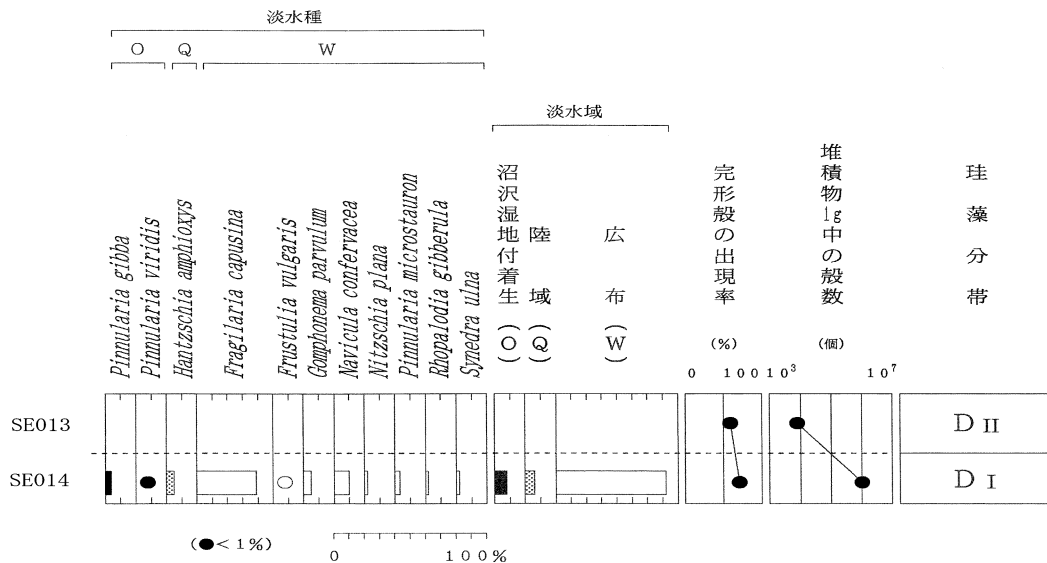
堆積物1g中の珪藻殻数は 1.32×10^5 個、完形殻の出現率は約61%となる。この試料からは陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* が特徴的に検出されている。このことから堆積環境は、ジメジメとした陸域環境と推定される。

第14表 珪藻化石産出表（種群は安藤（1990）に基づく）

分 類 群	種群	B12 グリッド				B16 グリッド				SE013	SE014
		11	5	20	21	1	2	3	4		
<i>Achnanthes crenulata</i>	W	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-
<i>Caloneis bacillum</i>	W	15	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. silicula</i>	W	5	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>C. spp.</i>	?	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i>	W	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Cyclotella spp.</i>	?	1	1	2	3	2	2	4	3	2	-
<i>Cymbella minuta</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Diploneis finnica</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>D. ovalis</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>D. yatukaensis</i>	W	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Epithemia turgida</i>	W	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia bilunaris</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>E. pectinalis var. minor</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>E. praerupta var. bidens</i>	O	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>E. spp.</i>	?	2	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Fragilaria capusina</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	82
<i>Frustulia vulgaris</i>	W	4	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Gomphonema acuminatum</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>G. gracile</i>	O	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>G. parvulum</i>	W	3	-	-	-	-	-	-	-	-	10
<i>G. spp.</i>	?	1	-	-	-	-	-	-	-	-	8
<i>Gyrosigma acuminatum</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	81	-	-	6	-	-	-	-	1	11
<i>Melosira ambigua</i>	N	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>M. distans</i>	N	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>M. roeseana</i>	Q	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
<i>M. spp.</i>	?	4	1	3	2	-	3	4	4	5	3
<i>Navicula confervacea</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	21
<i>N. cuspidata</i>	W	2	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>N. mutica</i>	Q	13	-	-	1	-	-	-	1	-	-
<i>N. spp.</i>	?	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium bisulcatum</i>	W	13	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. iridis</i>	O	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>N. spp.</i>	?	2	-	-	2	-	-	-	-	-	1
<i>Nitzschia plana</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
<i>N. spp.</i>	?	2	-	-	-	-	-	-	-	-	10
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>	O	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>P. borealis</i>	Q	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>P. gibba</i>	O	1	-	-	-	-	-	-	-	-	8
<i>P. interrupta</i>	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>P. microstauron</i>	W	14	-	-	3	-	-	-	-	1	7
<i>P. viridis</i>	O	5	-	1	-	-	-	-	-	-	2
<i>P. spp.</i>	?	3	-	-	2	-	-	1	-	-	2
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Rhopalodia gibberula</i>	W	3	-	-	-	-	-	-	-	-	5
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	O	2	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>S. spp.</i>	?	4	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Surirella angusta</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>S. spp.</i>	?	3	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Synedra ulna</i>	W	-	-	-	-	2	-	-	-	-	4
Unknown	?	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2
湖沼沼沢湿地 (N)		6	-	-	-	-	-	-	-	-	1
沼沢湿地付着生 (O)		14	-	1	-	-	-	-	-	2	16
陸 域 (Q)		95	-	1	8	-	-	-	1	1	12
広 布 種 (W)		61	3	-	3	2	-	1	3	2	152
不 明 (?)		27	2	5	9	4	5	9	7	7	30
珪 藻 殻 数		203	5	7	20	6	5	10	11	12	211



第81図 B12 グリッドにおける珪藻化石分布図 (2%以上の分類群を表示)



第82図 井戸 (SE013・014) 最下層における珪藻化石分布図 (2%以上の分類群を表示)

D16グリッド 堆積物1g中の珪藻殻数は $2.38 \sim 5.09 \times 10^3$ 個と非常に低い。そのため珪藻化石より堆積環境を推定することはできない

SE013 (C11グリッド) 最下層(第82図) 堆積物1g中の珪藻殻数は 7.52×10^3 個と低い。そのため珪藻化石より堆積環境を推定することはできない

SE014 (B11グリッド) 最下層(第82図) 堆積物1g中の珪藻殻数は 1.01×10^6 個と高く、完形殻の出現率も約70%と高くなる。この試料からは広布種が多いものの、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* と沼沢湿地付着生指標種群の *Pinnularia gibberula* が比較的多く検出されている。

このことから堆積環境は湿地環境もしくはジメジメとした陸域環境であると推定される。

5 考察

舟寄福島通遺跡より採取した堆積物試料を用いて珪藻分析を行った結果について考察する。

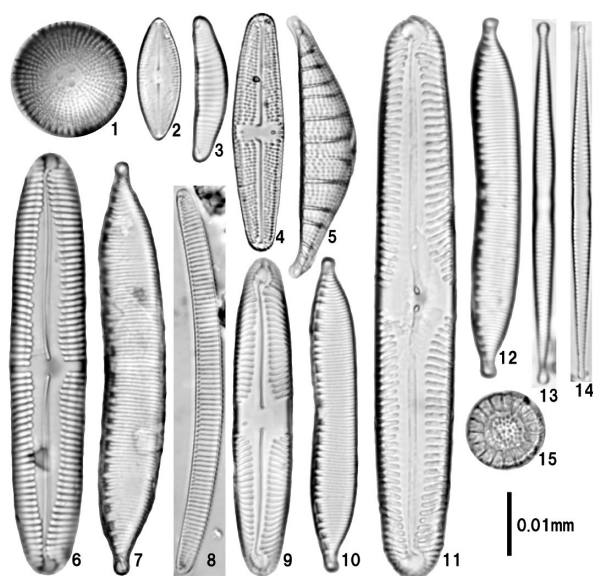
2 試料を除く今回分析した 8 試料からは珪藻化石が希薄であった。D16 グリッドにおいては分析した 4 試料すべてにおいて、B12 グリッドでは最上位の試料①を除く 3 試料において珪藻化石が希薄であった。珪藻は水生植物であるため、水分のない環境には生育できない。よって今回分析した試料から珪藻化石が検出されなかった理由として、乾燥した陸域環境であったことが考えられる。また同一の試料を用いた花粉分析においてもその検出は少ないことが示されている。花粉化石は乾燥した環境下では保存されにくく、珪藻化石の結果と矛盾がない。これらの試料は縄文晩期以前の堆積層であることから縄文晩期以前の堆積環境は乾燥した陸域環境と考えられる。古墳時代初頭（3 世紀後半）の堆積層である B12 グリッドの 11 層（試料⑩）においてその堆積環境はジメジメとした陸域環境であることが推定され、乾燥した環境から湿り気のある環境下へ変化したことが示された。

SE013（C11 グリッド）と SE014（B11 グリッド）の 2 つの井戸遺構の堆積物については SE014 においては堆積環境を推定するのに十分な珪藻殻が得られたものの、SE013 については希薄であった。前述しているように珪藻は水分のない環境下では生育できない。また植物であるため光のない環境下でも生育できない。SE013 は井戸であるため、蓋などにより遮光されていた可能性も考えられる。それ以外に珪藻殻が堆積後溶解した可能性も考えられる。Murakami (1996) において珪藻殻が湿地で溶解することが報告されているが、その原因が明らかにされていないので可能性の示唆にとどめるが、後に述べる SE014 については多量の珪藻殻が検出されていることを考慮すると、可能性は低いと考えられる。SE014 については珪藻殻数が非常に高くなり、少ないながらも沼沢湿地やジメジメとした陸域環境を示す珪藻種が得られている。このことから SE014 には浸る程度ではあるが水の存在が確認された。

6 おわりに

舟寄福島通遺跡から採取された堆積物試料中の珪藻化石を検討した結果、縄文晩期以前の堆積環境は乾燥した陸域環境と考えられる。また古墳時代初頭（3 世紀後半）にあたる B12 グリッドの 11 層の堆積環境はジメジメとした陸域環境であると推定され、乾燥した環境から湿り気のある環境下へ変化した。

SE014 には、浸る程度ではあるが水が存在し、SE013 では乾燥した状態もしくは蓋などで遮光して使



1. *Melosira roeseana* (B12 グリッド ②)
2. *Navicula confervacea* (SE014)
3. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (SE014)
4. *Navicula mutica* (B12 グリッド ⑩)
5. *Rhopalodia gibberula* (SE014)
6. *Pinnularia viridis* (SE014)
7. *Hantzschia amphioxys* (B12 グリッド ⑩)
8. *Eunotia bilunaris* (SE014)
9. *Pinnularia microstauron* (SE014)
10. *Hantzschia amphioxys* (SE014)
11. *Pinnularia gibba* (SE014)
12. *Hantzschia amphioxys* (SE014)
- 13, 14. *Fragilaria capusina* (SE014)
15. *Cyclotella* sp. (B12 グリッド ②)

第 83 図 堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真

用していた状態と考えられる。

引用文献

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.

Murakami, T. (1996) Silicious Remains Dissolution at Sphagnum-bog of Nagano-yama Wetland in Aichi Prefecture, Central Japan. The Quaternary Research, 35, 17-23.

第4節 花粉化石群集

1 はじめに

ここでは採取された試料から、縄文時代の古植生を明らかにする一端として花粉化石群集の検討を行った。

2 試料

花粉化石群集の検討は、B11、B12、C11、D16グリッドの4地点より採取された合計10試料について行った。以下に、各試料の記載を示す。

B11グリッド(1試料;SE014) SE014は、古墳時代(4世紀末～5世紀)の井戸であり、試料は埋土最下層より採取された。オリーブ黒色粘土と灰色粘土が混在しており、木本・草本遺体を含む。

B12グリッド(4試料;11～21層) 本地点は上位より、1層(現耕土)、2層(現耕土の攪乱)、11層、5層、20層、21層の順に堆積し、20、21層は溝状(自然の落ち込み)埋土と考えられている。各土層の時期は、11層が古墳時代初頭(3世紀後半)、5層が縄文時代晩期、20層が縄文時代中期～後期?である。また、21層は、放射性炭素年代測定(AMS法)を行った結果、1 σ 歴年代範囲においてcal BC850-815年(43.2%)、2 σ 歴年代範囲においてcal BC900-805年(95.4%)と測定され、弥生時代早期の年代であった。試料は、11～21層より採取された。11層はオリーブ黒色シルト質粘土で褐鉄鉱が散在する。5層は灰色シルト質粘土で炭化物片を少し含み、褐鉄鉱が散在する。20層は灰オリーブ色粘土(粘性高い)、21層は暗灰黄色粘土(粘性高い)である。

C11グリッド(1試料;SE013) SE013は、古墳時代(4世紀末～5世紀)の井戸であり、試料は埋土最下層より採取された。オリーブ黒色粘土と灰色粘土が混在しており、木本・草本遺体、炭化物片を含む。

D16グリッド(4試料;試料1～4) 上位より試料1～4が採取された。各試料の時期は、試料1が縄文時代晩期で上部は一部古墳時代の土層を含む可能性がある。試料2は縄文時代晩期、試料3は縄文時代晩期以前である。試料1は灰黄色粘土で炭化物片を含む。試料2は黄灰色粘土で炭化物片、土器を含む。試料3は暗灰黄色砂質粘土、試料4は暗灰黄色シルト質細砂である。

3 方法

花粉化石の抽出は、試料約2～3gを10%水酸化カリウム処理(湯煎約15分)による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理(氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分)の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離(臭化亜鉛を比重2.1に調整)による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート1～3枚の全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、

クワ科、バラ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

4 花粉化石群集の記載(第85図、第15表)

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉 25、草本花粉 20、形態分類で示したシダ植物孢子 2 である。以下に、各試料の花粉化石群集を記載する。なお、B11 グリッド(SE014)、C11 グリッド(SE013)以外の 8 試料は、十分な花粉化石が産出しなかったため、花粉化石分布図として示すことができなかった。

B11 グリッド(1 試料;SE014) 樹木花粉の占める割合は 30% 強と低率である。その中で、スギ属が約 24% で最も高率であり、次いでアカガシ亜属が約 11% である。比較的に目立つのは、コナラ亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科・ブナ属・ニレ属-ケヤキ属、カバノキ属・トチノキ属、サワグルミ属-クルミ属の順で 5~8% 程度を占める。草本花粉は、イネ科が約 19% で最も高率であり、次いでヨモギ属が約 17% である。若干目立つのは、クワ科、アブラナ科、カヤツリグサ科、ツリフネソウ属の順で 2~4% 程度である。他は、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属などが 1% 未満で出現する。シダ植物孢子は約 17% を占め、単条型孢子が約 12% で目立つ。

B12 グリッド(4 試料;11~21 層) 5 層からシダ植物の単条型孢子、21 層から草本のアカザ科-ヒユ科、単条型孢子が僅かに産出したのみであり、11、20 層からは花粉・孢子化石が全く産出しなかった。

C11 グリッド(1 試料;SE013) 樹木花粉の占める割合は 60% 弱である。その中で、アカガシ亜属が約 20% で最も高率であり、次いでアカメガシワ属が約 18% である。比較的に目立つのは、スギ属・クマシデ属-アサダ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科・コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、ブナ属の順で 6~10% 程度である。草本花粉は、イネ科が約 23% で最も高率あり、ヨモギ属が約 6% で若干目立つ。他は、1% 未満~2% 程度の低率であり、カヤツリグサ科、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ツリフネソウ属、オオバコ属などが出現する。

D16 グリッド(4 試料;試料 1~4) 試料 1 は木本のスギ属、ハンノキ属、コナラ亜属、クリ属、トチノキ属が僅かに産出し、トチノキ属が若干目立った。草本はアカザ科-ヒユ科、ヨモギ属が僅かに産出し、シダ植物孢子も僅かに産出した。試料 2 は草本のイネ科のみが僅かに産出した。試料 3 は木本のクリ属、草本のアカザ科-ヒユ科が僅かに産出した。試料 4 は花粉・孢子化石を全く産出しなかった。

5 考察(第84図)

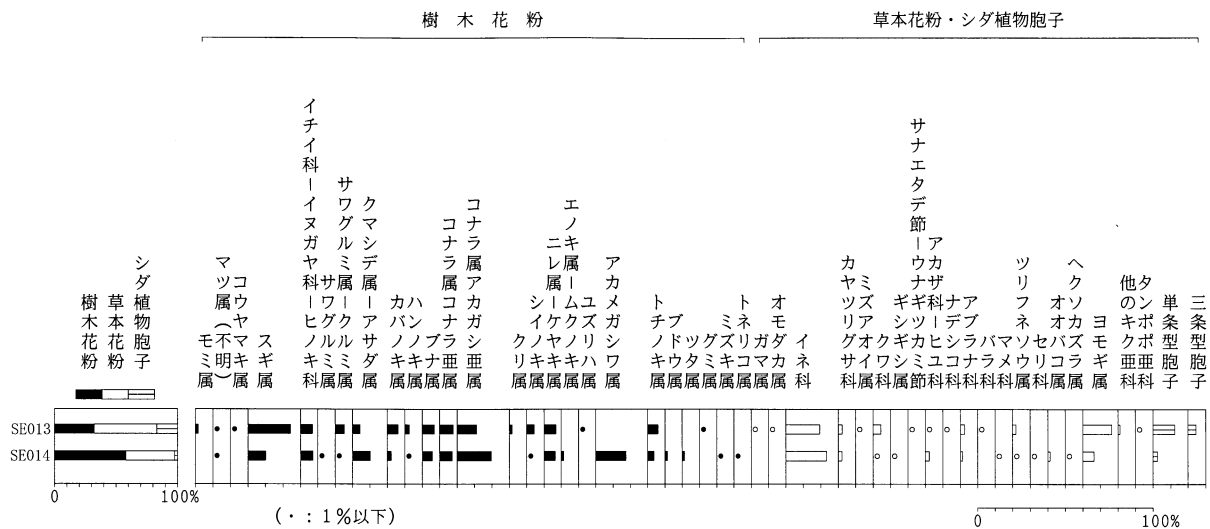
古墳時代(4 世紀末~5 世紀)の井戸(SE013、SE014)最下層を除く縄文時代などの試料は、花粉化石の保存状況が悪く、古植生について推定することはできなかった。ここでは、古墳時代の古植生について述べる。

当時、遺跡周辺にはスギ属を主体にイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が混じる針葉樹林、アカガシ亜属を主体とした照葉樹林、コナラ亜属を主体にサワグルミ属-クルミ属、クマシデ属-アサダ属、カバノキ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属、アカメガシワ属、トチノキ属などを含む落葉広葉樹林が成立していたと推定される。SE014 では二次林要素のアカメガシワ属が突出しており、付近の開けた場所に生育していたと推定される。このことから、付近の森林が部分的にはあっても人間による強い干渉を受けていた可能性が考えられる。福井県坂井町に所在する坂井兵庫地区遺跡群(上兵庫 M 地区)では、主に河川跡の堆積物を試料とし、弥生時代終末~古墳時代前期以降から律令期以降の花粉化石群集が検討されている(新山、2005)。それによると、スギ林を主体にコナラ亜属、アカガシ亜属、シイノキ属などから

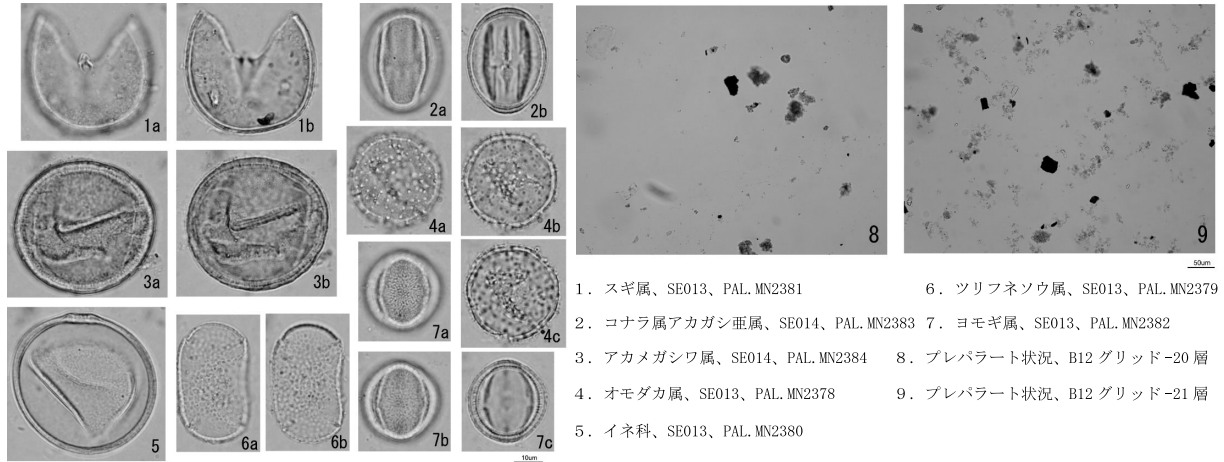
第15表 花粉化石産出一覧表

和名	学名	B12 グリッド					D16 グリッド				
		SE013	SE014	11	5	20	21	1	2	3	4
樹木											
モミ属	Abies	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属 (不明)	Pinus (Unknown)	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
コウヤマキ属	Sciadopitys	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スギ属	Cryptomeria	28	14	-	-	-	-	1	-	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	8	10	-	-	-	-	-	-	-	-
サウグルミ属	Pterocarya	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
サウグルミ属-クルミ属	Pterocarya-Juglans	6	1	-	-	-	-	-	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	Carpinus - Ostrya	5	14	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	Betula	7	3	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	Alnus	3	1	-	-	-	-	1	-	-	-
ブナ属	Fagus	8	8	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	Quercus subgen. Lepidobalanus	9	10	-	-	-	-	1	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	13	27	-	-	-	-	-	-	-	-
クリ属	Castanea	2	-	-	-	-	-	2	-	1	-
シイノキ属	Castanopsis	5	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	Ulmus - Zelkova	8	9	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	Celtis-Aphananthe	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
ユズリハ属	Daphniphyllum	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	Mallotus	-	24	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	Aesculus	7	5	-	-	-	-	5	-	-	-
ブドウ属	Vitis	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
ツタ属	Parthenocissus	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
グミ属	Elaeagnus	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズキ属	Cornus	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	Fraxinus	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
草本											
ガマ属	Typha	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	Sagittaria	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	69	55	-	-	-	-	1	-	-	-
カヤツリグサ科	Cyperaceae	8	5	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	Monochoria	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	16	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ギンギン属	Rumex	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	Polygonum sect. Persicaria-Echinocaulon	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	5	-	-	-	1	1	-	1	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	9	3	-	-	-	-	-	-	-	-
バラ科	Rosaceae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ツリフネソウ属	Impatiens	7	1	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
オオバコ属	Plantago	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-
ヘクソカズラ属	Paederia	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	Artemisia	59	15	-	-	-	-	1	-	-	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シダ植物											
単条型胞子	Monolete spore	44	6	-	2	-	1	5	-	-	-
三条型胞子	Trilete spore	16	-	-	-	-	-	1	-	-	-
樹木花粉											
樹木花粉	Arboreal pollen	115	137	0	0	0	0	10	0	1	0
草本花粉	Nonarboreal pollen	181	93	0	0	0	1	2	1	1	0
シダ植物胞子	Spores	60	6	0	2	0	1	6	0	0	0
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	356	236	0	2	0	2	18	1	2	0
不明花粉											
不明花粉	Unknown pollen	21	17	0	0	0	0	5	2	0	0

T.-C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す



第84図 井戸 (SE013・014) 最下層の花粉化石分布図



第85図 産出した花粉化石 (scale bar 10 μ m:1 ~ 7 50 μ m:8,9)

成る森林が成立しており、古墳時代前期以降の一時期にはイチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科も主要素であったことが推定されている。本遺跡と比較すると、概ね同様な景観が示されており、スギ属、アカガシ垂属、コナラ垂属などを主要素とした森林がこの地域に広く成立していた可能性が示唆される。一方、草本花粉の組成を見ると、SE013 付近にはイネ科、ヨモギ属、シダ植物を主体にカヤツリグサ科、クワ科、アブラナ科などが繁茂していたと推定される。また、水位の低い湿地ないし水溜りが存在し、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属、ツリフネソウ属などが生育していたであろう。オモダカ属、ミズアオイ属は水田にしばしば雑草として生育する分類群であり、水田が存在していた可能性もあるが、それにしてはイネ科の出現率は低いように思われる。SE014 付近には、イネ科を主体にヨモギ属などが繁茂していたと推定される。ツリフネソウ属などが生育する水湿地も見られたようであるが、SE013 に比べ、ギシギシ属、アカザ科ーヒユ科、オオバコ属などの幾分乾き気味のところ(路傍や畑地など)に生育する分類群が目立つようである。

なお、SE013、SE014 を除く試料は花粉化石の保存状況が悪かった。花粉化石は水成堆積物であれば、良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では化学的風化により、分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。このことから、試料とした堆積物は水成堆積物の可能性は低く、少なくとも安定した滞水環境で堆積したものとは考え難い。堆積環境の詳細については、珪藻分析を参照されたいが、花粉分析から判断する限りでは、溝状(自然の落ち込み)埋土の B12 グリッド・20、21 層などは、乾燥した環境下で堆積したか、一時的に水が溜まることがあっても頻繁に乾燥を繰り返すような環境であったと予想される。

6 おわりに

井戸の埋土を検討した結果、次のようなことが推定された。古墳時代(4世紀末~5世紀)の遺跡周辺には、スギ属、アカガシ垂属、コナラ垂属などを主体とした森林が成立していた。SE013 付近には、イネ科、ヨモギ属、シダ植物を主体とした草本類が繁茂し、オモダカ属、ミズアオイ属などが生育する水位の低い湿地的環境が存在していた。SE014 付近には、イネ科が卓越し、ツリフネソウ属が生育する水湿地のほか、ギシギシ属、アカザ科ーヒユ科、オオバコ属が生育する乾いた環境も存在していた。井戸埋土以外の縄文時代などの堆積物は、安定した滞水環境で堆積したものではないと考えられた。

引用文献

新山雅広(2005) 上兵庫 M 地区 SD-04・05 の花粉化石群集. 福井県埋蔵文化財調査報告 第82集, 坂井兵庫地区遺跡群

Ⅲ（自然科学・図版編）―県営担い手育成基盤整備事業に伴う調査―，1-6，福井県教育庁埋蔵文化財調査センター．

第5節 プラント・オパール

1 はじめに

イネ科植物は別名珪酸植物ともいわれ根より大量の珪酸分を吸収し葉や茎の細胞内に沈積させることが知られている。こうして形成されたものを植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）といい、植物が枯れるなどしてこの植物珪酸体が土壤中に混入して土粒子となったものをプラント・オパールと呼んでいる。また機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。

舟寄福島通遺跡において行われた発掘調査で縄文時代中期から古墳時代の遺物や遺構が検出され、これらの時期の古環境を復元する目的で土壌試料が採取された。以下にこの土壌試料について行ったプラント・オパール分析の結果・考察を示す。

2 試料と分析方法

試料はB12グリッドより採取された4試料（試料番号⑤～⑧）とD16グリッドの4試料（試料番号①～④）の計8試料である。各試料について、B12グリッドの試料⑤（11層）はややシルト質の黒褐色粘土、⑥（5層）は黒褐色の粘土塊を含む灰褐色粘土、⑦（20層）は褐灰色の砂質粘土、⑧（21層）は赤褐色の酸化鉄集積が塊状に認められる黒褐色粘土である。そのうち出土遺物などから試料⑤（11層）が古墳時代初頭（3世紀後半）、⑥（5層）が縄文時代晩期、⑦（20層）と⑧（21層）が縄文時代中期～後期？と考えられている。D16グリッドの試料①は赤褐色の酸化鉄集積が細根状にみられる淡褐色粘土～シルト、②は同じく酸化鉄集積が小塊状に少し認められる青灰色粘土～シルト、③は青灰色の砂質粘土～シルト、④は青灰色の砂質シルト～シルト質砂で、細砂が多く混入している。時期としては、試料②の層準より縄文時代晩期の土器が出土している。これら8試料について以下に示した手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40 μ m）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

3 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（第16表）、それらの分布を第86図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

B12グリッド 検鏡の結果、圧倒的に多く検出されたのはクマザサ属型で、全試料20,000個以上を示し、試料⑧では100,000個を越えている。このクマザサ属型以外で10,000個を越える分類群は無く、そのなかの試料⑤からイネのプラント・オパールが若干検出されている。また同試料のみからヨシ属やシバ属、キビ属が産出しており、その他ネザサ節型やウシクサ属などが若干観察されている。

D16グリッド 本地点ではネザサ節型とクマザサ属型のみ産出で、やはりクマザサ属型が圧倒的に多く、個数的には約17,000個～約47,000個を示している。一方ネザサ節型は1,000個～2,000個と少

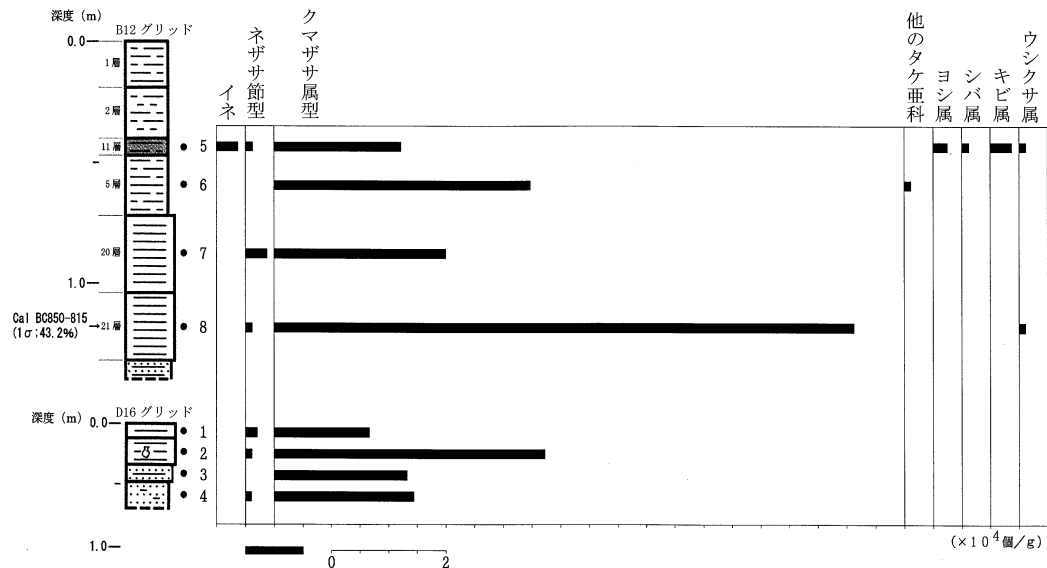
なく、試料③からは検出されていない。

第16表 試料1 g当たりのプラント・オパール個数

グリッド・層位	試料番号	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ属 (個/g)	ウシクサ属 (個/g)	不明 (個/g)
B12 11層	⑤	3,700	1,200	22,200	0	2,500	1,200	3,700	1,200	9,900
5層	⑥	0	0	44,800	1,100	0	0	0	0	2,300
20層	⑦	0	3,800	30,000	0	0	0	0	0	1,300
21層	⑧	0	1,200	101,300	0	0	0	0	1,200	9,300
D16	①	0	2,100	16,600	0	0	0	0	0	1,000
	②	0	1,200	47,200	0	0	0	0	0	3,500
	③	0	0	23,200	0	0	0	0	0	3,300
	④	0	1,100	24,400	0	0	0	0	0	2,100

4 稲作について(第87図)

上記したように、B12グリッドの試料⑤(11層:3世紀後半)よりイネのプラント・オパールが若干検出された。ここで検出個数の目安を示すと、イネのプラント・オパールが試料1 g当り5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている(藤原 1984)。このことから稲作の検証としてこの5,000個を目安に遺構の状況をふまえて判断されている。B12グリッドの試料⑤においては3,700個と上記5,000個にはやや少なく、検出個数のみからは11層準において稲作が行われていた可能性は低いと判断される。しかしながらこれは検出個数のみからの判断であり、検出遺構・遺物すなわち水田遺構や稲作に係わる遺物の有無、花粉分析結果など多方面からの検討の上判断されるのが望ましいであろう。なお、11層直上の2層は現耕土の攪乱層であることから、こうした影響が11層にも及び若干のイネのプラント・オパールが検出されたことも考えられ、先に記したように稲作については十分な検討が必要であろう。

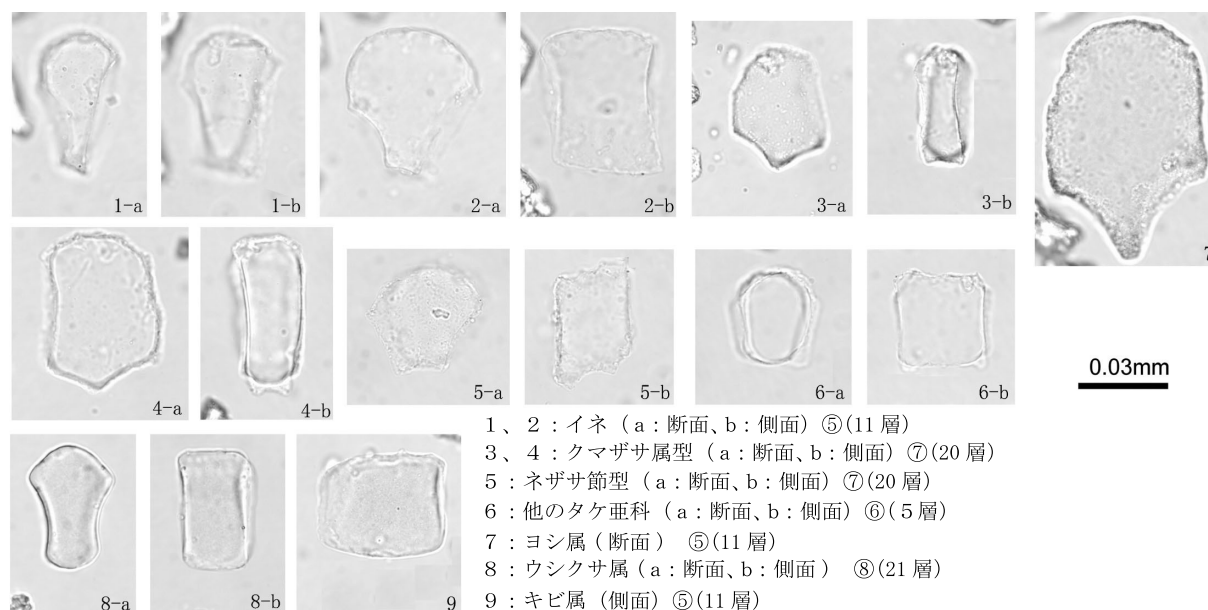


第86図 プラント・オパール分布図

5 遺跡周辺のイネ科植物

クマザサ属型が非常に多く検出されており、遺跡周辺にはクマザサ属型のササ類、すなわちチシマザサやチマキザサといったササ類が分布を広げていたとみられる。これらクマザサ属型のササ類は主に森林の下草的存在での生育が推測され、遺跡周辺に成立していたであろう森林の林下に群落を形成していたものと思われる。

一方、ケネザサなどのネザサ節型のササ類やススキ、チガヤなどのウシクサ属は日のあたる開けたと



第87図 B12 グリッドのプラント・オパール

ころでの生育が考えられ、遺跡周辺の空き地や森林の林縁部などに分布していたとみられる。

キビ属が試料⑤から得られているが、このキビ属についてはその形態からアワ・ヒエ・キビといった栽培種であるのかイヌビエ・エノコログサなどの雑草類であるのか分類が難しいのが現状である。また同試料からはヨシ属やシバ属も検出されており、同層準において先に記したように稲作が行われていたとすると、ヨシ属は稲作地周辺の水路などに、またシバ属は畦などに生育していたことが考えられ、上記キビ属も稲作にともなう雑草類、たとえば現在の水田内に普通に認められるタイヌビエなどが推測されよう。

引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－。

考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－。考古学ジャーナル, 227, p.2-7.

藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－。考古学と自然科学, 11, p.9-20.

第6節 ボーリング調査および堆積物記載と放射性炭素年代測定

1 はじめに

舟寄福島通遺跡において、福井平野の環境変遷および遺跡の立地環境を検討するために、ボーリング調査を行い、年代測定、花粉化石群集および珪藻化石群集の検討を行った。

2 方法と調査位置

ボーリング調査は、パイプを地中に打ち込み、1 m毎に連続的な堆積物を採取するボーリング機械を使用した。使用機械は、電動ドロップヒッターを用いたオールコアボーリング装置である。堆積物は、直径4 mm、長さ1 mの透明のポリカーボネイト製チューブに連続的に採取した。

調査地点は、丸岡町舟寄地内(No.1地点)と500mほど北の坂井町若宮地内(No.2地点)の2カ所である。

なお、No.2地点において得られた試料を用いて、環境および植生変遷を調べるために、AMS法による放射性炭素年代測定、花粉分析、珪藻分析を実施した。

3 ボーリング試料の概要

No.1地点では、深度3 mまでの堆積物が得られたが、3 m以深では淘汰の良い粗砂であったため採取できなかった。

深度0.62mまでは、黄褐色の粘土およびシルト質粘土、深度1.06mまではシルト質細砂、深度1.16mまでは暗オリーブ色粘土、深度1.83mまではオリーブ黒色の細砂、深度1.97mまでは薄い粘土層を挟む灰色シルト質粘土、深度3.00mまでは青灰色の粗砂であった(第88図右)。

No.2地点では、深度6 mまでの堆積物が得られたが、6 m以深では淘汰の良い粗砂であったため採取できなかった。

深度0.14mまでは褐色細砂、深度0.29mまでは灰褐色粘土、深度0.37mまではにぶい黄褐色の砂質シルト、深度0.40mまではオリーブ褐色粘土、深度0.59mまでは黄褐色～暗灰黄色砂質シルト、深度1.46 mまでは灰色砂質シルト～オリーブ黒色砂混じり有機質粘土、深度2.16mまでは灰オリーブ色シルト質細砂、深度2.27mまでは灰オリーブ色砂質シルト、深度2.93mまでは暗オリーブ色の細砂(2.69-2.71mに灰色粘土)、深度4.00mまでは暗オリーブ色の砂質泥炭～黒褐色砂混じり泥炭、深度4.46mまでは灰色細砂、深度4.61mまでは黒褐色有機質・砂質粘土、深度4.92mまでは灰色シルト質細砂、深度4.96mまでは灰色～暗オリーブ色細砂、深度6.00mまでは灰色粗砂であった(第88図右)。

4 放射性炭素年代測定

ボーリング試料の堆積年代を調べるためにAMS法による放射性炭素年代測定を行った。

a. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第17表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第17表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-8370	試料No.:ボーリングNo.2 遺物No.:S1 深度:2.94-2.95m	試料の種類:木材 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-8371	試料No.:ボーリングNo.2 遺物No.:S2 深度:3.97-3.98m	試料の種類:植物遺体 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-8372	試料No.:ボーリングNo.2 遺物No.:S3 深度:4.50-4.51m	試料の種類:植物遺体 状態:dry	超音波洗浄 サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.1N,塩酸:1.2N)

b. 結果

第18表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、第88図左に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の実験的誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示すものである。

第18表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-8370 試料 No.: ポーリングNo.2 遺物 No.: S1	-30.34 ± 0.34	2512 ± 22	2510 ± 20	770BC(13.3%)740BC 690BC(14.2%)660BC 650BC(34.3%)590BC 580BC(6.5%)560BC	790BC(22.1%)720BC 700BC(73.3%)540BC
PLD-8371 試料 No.: ポーリングNo.2 遺物 No.: S2	-30.87 ± 0.48	2437 ± 26	2435 ± 25	730BC(12.8%)690BC 540BC(55.4%)410BC	750BC(21.1%)680BC 670BC(6.1%)640BC 600BC(68.1%)400BC
PLD-8372 試料 No.: ポーリングNo.2 遺物 No.: S3	-29.23 ± 0.11	2523 ± 18	2525 ± 20	780BC(21.8%)740BC 690BC(18.4%)660BC 640BC(28.0%)590BC	790BC(27.6%)740BC 690BC(21.3%)660BC 650BC(46.5%)540BC

c. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

試料は、深度 2.94-2.95 m (AMS S1:PLD-8370)、3.97-3.98 m (AMS S2:PLD-8371)、4.50-4.51 m (AMS S3:PLD-8372) の3層準において測定した。その結果、2 σ 暦年代範囲において、S1(PLD-8370) は 2650-2490cal BP (73.3%)、S2(PLD-8371) が 2550-2350cal BP (68.1%)、S3 (PLD-8372) が 2600-2490cal BP (46.5%) であった。年代値に逆転が見られるが、いずれも接近した年代値であることから、比較的短期間に堆積した堆積物である。

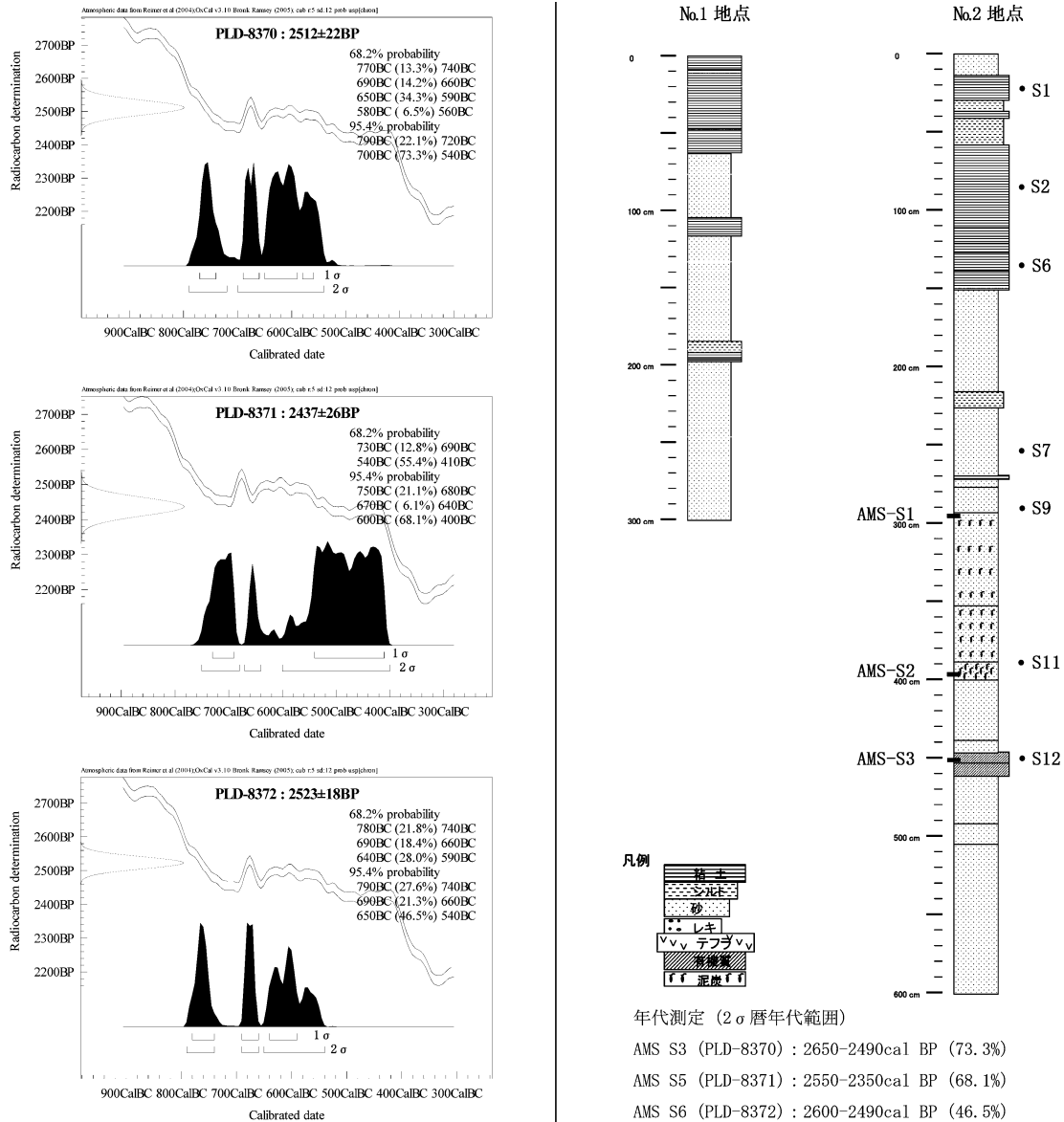
参考文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代. 3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.



第88図 暦年校正図(左図)、ボーリング柱状図(右図)(SNo.は花粉・珪藻分析層準)

第7節 ボーリング堆積物中の珪藻化石群集

1 はじめに

珪藻は、10～500 μ m ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている(小杉、1988; 安藤、1990)。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種(陸生珪藻)も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、No.2 地点ボーリング試料について珪藻化石群集を調べ、堆積物の堆積環境について検討した。

2 試料の処理方法

試料は、No.2 地点ボーリングの7 試料である。これらの試料は、以下の方法で処理し、珪藻用プレパラートを作成した。

(1) 湿潤重量約 1 g 程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し 30% 過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え 1 時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を 7 回ほど繰り返した。(3) 残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥した。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作成した。

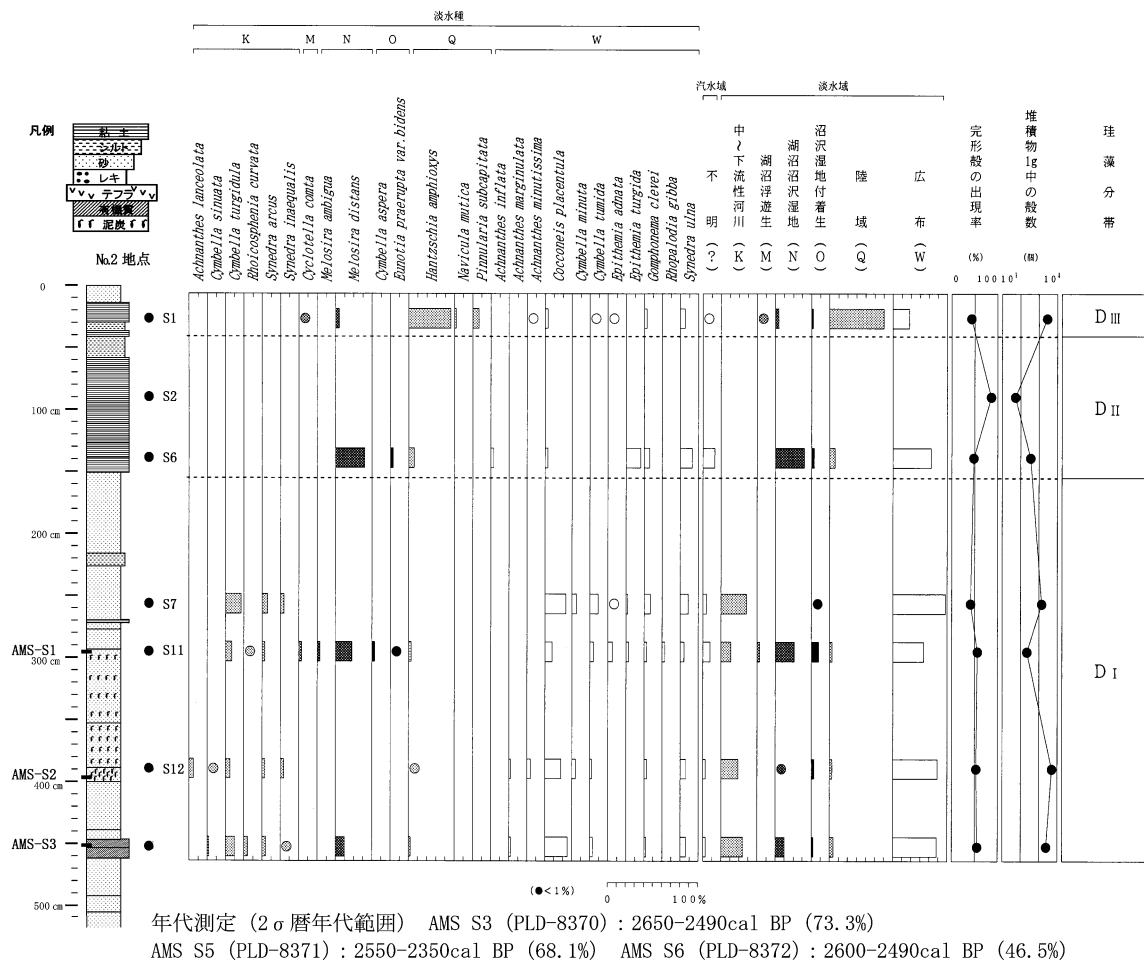
作成したプレパラートは顕微鏡下 1000 倍で観察し、珪藻化石 200 個体以上について同定・計数した。なお、珪藻化石が少ない試料は、プレパラート全面について精査した。

3 珪藻化石の環境指標種群

以下の環境指標種群の概要は 本章第3 節3 に同じであるので、ここでは省略した。

4 珪藻化石の特徴とその堆積環境

全試料から検出された珪藻化石は、85 分類群 28 属 66 種 5 亜種検出され、汽水種が 1 分類群 1 属 1 種、淡水種が 84 分類群 28 属 65 種 5 亜種それぞれ検出された。これらの珪藻化石は、淡水種が 5 環境指標種群に分類された (第 19 表、第 89 図)。これらの珪藻化石の主な環境指標種群の出現傾向から、2 地点のボーリング試料は 3 珪藻帯が設定された。



第 89 図 No.2 地点ボーリング試料の珪藻化石分布図 (1.5% 以上の分類群を表示)

第19表 No.2 地点ボーリング試料の珪藻化石産出表（種群は、主に安藤（1980）に従う）

分 類 群	種 群	S1	S2	S6	S7	S9	S11	S12
<i>Achnanthes brevipes</i>	?	1	1	4	9	6	6	6
<i>A. inflata</i>	W	-	-	1	-	-	-	-
<i>A. lanceolata</i>	K	-	-	-	-	-	11	1
<i>A. marginulata</i>	W	-	-	-	1	-	4	5
<i>A. minutissima</i>	W	1	-	-	-	-	9	-
<i>A. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	2	-
<i>Actinella brasiliensis</i>	O	-	-	-	-	1	-	-
<i>Amphora montana</i>	Q	1	-	-	-	-	1	-
<i>A. ovalis</i>	W	1	-	-	-	1	1	-
<i>Anomoeoneis spharerothra</i>	W	1	-	-	-	-	-	-
<i>A. vitrea</i>	W	-	-	-	-	-	1	-
<i>Caloneis bacillum</i>	W	-	-	-	-	-	-	1
<i>C. silicula</i>	W	1	-	-	-	-	1	-
<i>C. spp.</i>	?	2	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i>	W	4	1	1	47	6	39	52
<i>Cyclotella comta</i>	M	1	-	-	1	2	1	-
<i>C. spp.</i>	?	1	-	1	-	-	-	-
<i>Cymbella aspera</i>	O	-	-	-	-	2	-	1
<i>C. cuspidata</i>	W	-	-	-	-	-	-	1
<i>C. minuta</i>	W	-	-	-	10	-	9	1
<i>C. sinuata</i>	K	-	-	-	-	-	2	5
<i>C. tumida</i>	W	1	2	-	18	3	5	7
<i>C. turgidula</i>	K	-	4	-	34	5	11	21
<i>C. spp.</i>	?	2	-	-	1	1	3	-
<i>Diatoma hiemale</i> var. <i>quadratum</i>	K	-	-	-	-	-	1	2
<i>Diploneis elliptica</i>	W	-	-	-	-	1	-	1
<i>D. ovalis</i>	W	-	-	-	-	-	2	2
<i>D. subovalis</i>	W	-	-	-	-	-	1	-
<i>Epithemia adnata</i>	W	1	2	-	2	4	1	1
<i>E. turgida</i>	W	-	1	5	5	2	1	1
<i>E. spp.</i>	?	-	-	-	-	1	-	-
<i>Eunotia lunaris</i>	W	1	-	-	-	-	-	-
<i>E. monodon</i>	W	-	-	-	-	-	2	-
<i>E. pectinalis</i> var. <i>minor</i>	O	-	-	-	-	1	1	-
<i>E. pectinalis</i> var. <i>undulata</i>	O	-	-	-	-	1	1	-
<i>E. praerupta</i>	W	1	-	-	-	-	3	2
<i>E. praerupta</i> var. <i>bidens</i>	O	-	-	1	1	1	-	-
<i>E. spp.</i>	?	2	-	-	1	3	11	3
<i>Fragilaria pinnata</i>	N	-	-	-	-	-	1	-
<i>Frustulia rhomboides</i>	W	1	1	-	-	-	2	-
<i>F. vulgaris</i>	W	-	-	-	-	-	1	1
<i>Gomphonema acuminatum</i>	O	-	-	-	1	-	-	-
<i>G. clevei</i>	W	4	-	2	14	2	7	5
<i>G. constrictum</i>	W	-	-	-	-	1	-	-
<i>G. gracile</i>	O	-	-	-	-	-	-	1
<i>G. parvulum</i>	W	-	-	-	1	-	1	2
<i>G. sphaerophorum</i>	W	-	-	-	-	-	-	1
<i>G. spp.</i>	?	-	-	-	4	1	8	7
<i>Gyrosigma</i> spp.	?	-	-	-	1	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	74	1	2	-	2	2	5
<i>Melosira ambigua</i>	N	-	-	-	-	2	-	-
<i>M. distans</i>	N	6	-	10	-	13	1	20
<i>M. roeseana</i>	Q	2	-	-	-	-	1	2
<i>M. varians</i>	K	-	-	-	-	-	1	2
<i>M. spp.</i>	?	4	-	-	1	1	-	-
<i>Meridion circulare</i> var. <i>constrictum</i>	K	-	-	-	-	-	1	-
<i>Navicula bacillum</i>	W	-	-	-	-	-	1	1
<i>N. contenta</i>	Q	-	-	-	-	-	3	1
<i>N. cuspidata</i>	W	1	-	-	-	-	-	-
<i>N. mutica</i>	Q	3	-	-	-	-	-	-
<i>N. radiosa</i>	W	-	-	-	-	-	-	1
<i>N. viridula</i>	W	-	-	-	-	-	-	1
<i>N. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	4	1
<i>Neidium alpinum</i>	Q	1	-	-	-	-	-	-
<i>N. hitchcockii</i>	W	1	-	-	-	-	-	-
<i>N. iridis</i>	O	-	-	-	-	-	2	1
<i>N. spp.</i>	?	1	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	?	2	-	-	-	-	2	1
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>	O	1	-	-	-	-	-	-
<i>P. borealis</i>	Q	2	-	-	-	-	-	1
<i>P. gibba</i>	O	2	-	-	-	-	1	-
<i>P. microstauron</i>	W	-	-	-	-	-	1	-
<i>P. subcapitata</i>	Q	11	-	-	-	-	-	-
<i>P. spp.</i>	?	7	-	-	-	1	2	2
<i>Rhoicosphenia curvata</i>	K	-	-	-	1	1	-	9
<i>Rhopalodia gibba</i>	W	-	-	-	-	2	-	-
<i>R. gibberula</i>	W	-	-	-	-	-	1	1
<i>Stauroneis borrichii</i>	Q	2	-	-	-	-	-	-
<i>S. phoenicenteron</i>	O	-	-	-	-	-	1	2
<i>Surirella angusta</i>	W	2	-	-	-	-	-	-
<i>S. tenera</i>	W	-	-	-	-	-	1	-
<i>Synedra arcus</i>	K	-	-	-	13	2	7	8
<i>S. inaequalis</i>	K	-	-	-	9	-	8	2
<i>S. ulna</i>	W	8	-	4	18	3	13	12
<i>S. spp.</i>	?	-	-	-	2	-	-	-
Unknown	?	3	1	-	6	1	18	5
汽水不定・不明種（？）		1	1	4	9	6	6	6
中～下流性河川（K）		-	4	-	57	8	42	50
湖沼浮遊生（M）		1	-	-	1	2	1	-
湖沼沼沢湿地（N）		6	-	10	-	15	2	20
沼沢湿地付着生（O）		3	-	1	2	6	6	5
陸域（Q）		96	1	2	-	2	7	9
広布（W）		29	7	13	116	25	108	99
淡水不定・不明種（？）		24	1	1	16	9	50	19
珪藻殻数		160	14	31	201	73	222	208

D I 帯 (No.S7 ~ S12 ; 4 試料) 全体的に中～下流性河川指標種群の *Cymbella turgidula* や *Synedra arcus* などが特徴的に出現している。また、湖沼沼沢湿地指標種群の *Melosira distans* も随伴する。

こうしたことから、湖沼沼沢湿地を伴う中～下流性河川環境が推定される。

D II 帯 (No.S2・S6) いずれの試料も砂質堆積物であるため珪藻化石は少ない。検出された珪藻化石は、広布種が多く、試料 S6 では湖沼沼沢湿地指標種群の *Melosira distans* が出現した。

珪藻化石は少ないが、沼沢湿地的環境などの淡水成環境である。

D III 帯 (No.S1) 陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* や *Pinnularia subcapitata* などが特徴的に多く出現する。

こうしたことから、ジメジメとした陸域環境が推定される。

5 考察(第90図)

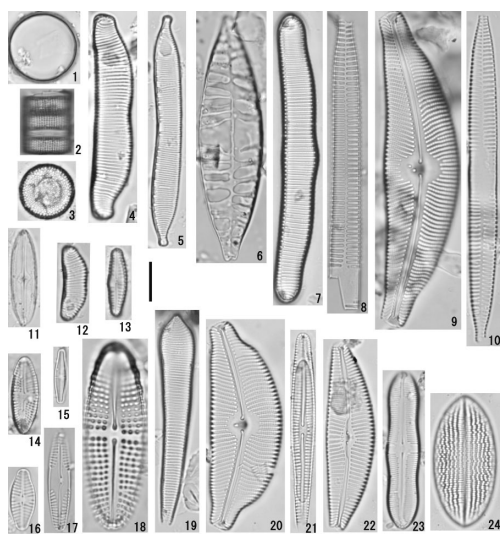
No.2 地点におけるボーリング試料の珪藻化石群集を検討した結果、大きく3珪藻帯に分帯された。深度1.5m以深のI帯では中～下流性河川環境が推定された。この堆積時期は、植物遺体のAMS法による年代測定では、2650-2350calBCであり、弥生時代初頭以降である。その後のII帯では、珪藻化石が少ないが沼沢湿地的環境などの淡水域であり、I帯ではジメジメとした陸域環境であった。

なお、少なくともIII帯までは、海水の進入の痕跡は認められなかった。

引用文献

安藤一男(1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.

小杉正人(1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.



第90図 No.2 地点ボーリング試料中の珪藻化石 (スケール:10 μ m)

1. *Melosira varians* (S12) 2. *Melosira distans* (S6)
3. *Melosira distans* (S1) 4. *Eunotia praerupta* var. *bidens* (S7)
5. *Hantzschia amphioxys* (S1) 6. *Navicula cuspidata* (S1)
7. *Eunotia pectinalis* var. *undulata* (S9) 8. *Synedra ulna* (S6)
9. *Cymbella tumida* (S2) 10. *Synedra inaequalis* (S7)
11. *Neidium alpinum* (S1) 12. *Eunotia praerupta* (S1)
13. *Cymbella sinuata* (S11) 14. *Navicula mutica* (S1)
15. *Achnanthes minutissima* (S1) 16. *Achnanthes lanceolata* (S11)
17. *Pinnularia subcapitata* (S1) 18. *Achnanthes brevipes* (S7)
19. *Actinella brasiliensis* (S9) 20. *Cymbella tumida* (S7)
21. *Rhoicosphenia curvata* (S7) 22. *Cymbella turgidula* (S7)
23. *Caloneis silicula* (S1) 24. *Cocconeis placentula* (S1)

第8節 No.2 地点ボーリングの花粉化石

1 はじめに

ボーリング調査が行われたNo.2 地点より6 mにおよぶ堆積物を採取した。以下には、このNo.2 地点ボーリング試料を用いて行った花粉分析の結果を示し、舟寄福島通遺跡周辺の古植生について検討した。

2 試料

花粉分析用試料は6 mのNo. 2 地点ボーリング試料から採取した7 試料である。各試料の土層は、おおむね試料S1（深度0.21～0.22 m）、試料S2（0.81～0.82 m）、試料S6（1.33～1.34 m）は粘土、試料S7（2.54～2.55 m）は粘土質砂、試料S9（2.84～2.85 m）は泥炭質の砂、試料S11（3.90～3.91 m）は砂質泥炭、試料S12（4.50～4.51 m）は砂を多く含む有機質土である。

放射性炭素年代測定では、深度2.84-2.85 m（AMS S1:PLD-8370）、3.97-3.98 m（AMS S2:PLD-8371）、4.50-4.51 m（AMS S3:PLD-8372）の3層準において測定した。その結果、2σ暦年代範囲において、S1(PLD-8370)は2650-2490cal BP（73.3%）、S2（PLD-8371）が2550-2350cal BP（68.1%）、S3（PLD-8372）が2600-2490cal BP（46.5%）であった。年代値に逆転が見られるが、いずれも接近した年代値であることから、比較的短期間に堆積した堆積物であることが理解される。

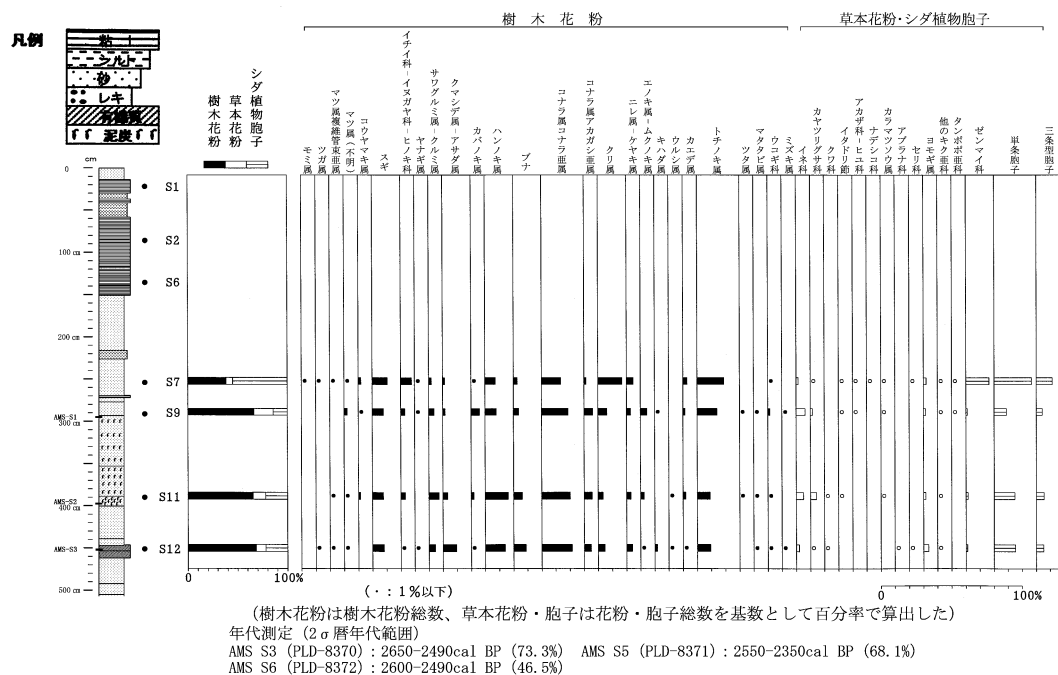
3 分析方法

上記した7 試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約3～5 g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

4 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉40、草本花粉18、形態分類を含むシダ植物胞子4の総計62である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を第20表に、また主要な花粉・シダ植物胞子の分布を第91図に示した。なお、分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を、また草本花粉、シダ植物胞子は全花



第91図 No.2 地点ボーリングの主要花粉化石分布図

第20表 No.2 地点ボーリング試料の産出花粉化石一覧表

和名	学名	S1	S2	S6	S7	S9	S11	S12
樹木								
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	1	-	-	-
モミ属	<i>Abies</i>	-	-	-	1	-	-	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	-	-	2	-	-	1
カラマツ属	<i>Larix</i>	-	-	-	-	1	1	-
マツ属複雑維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	-	-	-	1	-	1	1
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	-	1	2	3	1	1
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	1	2	-	4	1	3	-
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	1	-	-	22	10	16	18
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.- C.	-	-	-	16	4	7	2
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	-	2	1	-	1
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	1	-	-	4	5	15	10
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	-	-	-	3	2	7	21
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	-	-	-	-	-	-	1
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	-	-	2	8	4	2
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	-	-	15	10	34	31
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	-	-	1	6	5	13	19
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	2	2	-	28	24	42	47
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	-	-	3	8	12	11
クリ属	<i>Castanea</i>	-	-	-	35	8	7	10
シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis - Pasania</i>	-	-	-	-	-	-	2
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	-	-	10	4	7	9
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	-	-	-	6	5	1
カツラ属	<i>Cercidiphyllum</i>	-	-	-	-	-	1	-
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	2	-	1	-
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	-	-	-	-	1	-	4
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	-	-	-	-	1	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	-	-	-	-	1	1
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	1	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	6	2	4	2
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	-	39	18	19	21
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	-	-	-	1	-
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	-	-	-	-	1	1	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	-	-	-	-	-	1	-
マタタビ属	<i>Actinidia</i>	-	-	-	-	1	1	1
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	1	2	1	2
ミズキ属	<i>Cornus</i>	-	-	-	-	1	-	1
ツツジ科	Ericaceae	-	-	-	-	-	1	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	-	-	-	1	-
ニワトコ属近似種	cf. <i>Sambucus</i>	-	-	-	-	1	-	-
タニウツギ属	<i>Weigela</i>	-	-	-	-	1	-	-
草本								
イネ科	Gramineae	21	16	4	8	12	16	7
カヤツリグサ科	Cyperaceae	-	-	-	5	3	14	1
クワ科	Moraceae	-	-	-	-	-	1	3
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	-	-	-	9	-	-
イタドリ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	-	-	1	1	1	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	3	-	1	1	1	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	1	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	-	-	4	1	1	-
アブラナ科	Cruciferae	1	-	-	-	-	-	1
ユキノシタ科近似種	cf. Saxifragaceae	-	-	-	-	3	-	1
マメ科	Leguminosae	-	-	-	-	-	-	2
トウダイグサ科	Euphorbiaceae	-	-	-	1	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	1	-	-	1
ナス属	<i>Solanum</i>	-	-	-	-	-	1	-
ゴキツル属-アマチャヅル属	<i>Actinostemma - Gynostemma</i>	-	-	-	-	2	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	15	7	1	10	3	5	12
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	-	1	1	2	3
タンポポ亜科	Liguliflorae	-	-	-	1	1	-	-
シダ植物								
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	-	1	-	1	-	-	-
ゼンマイ科	Osmundaceae	-	1	-	87	2	5	4
単条型孢子	Monolete spore	72	28	29	142	17	47	49
三条型孢子	Trilete spore	26	11	5	61	8	18	17
樹木花粉	Arboreal pollen	6	4	2	206	128	209	220
草本花粉	Nonarboreal pollen	40	23	6	34	37	41	31
シダ植物孢子	Spores	98	41	34	291	27	70	70
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	144	68	42	531	192	320	321
不明花粉	Unknown pollen	6	4	0	23	14	10	16

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

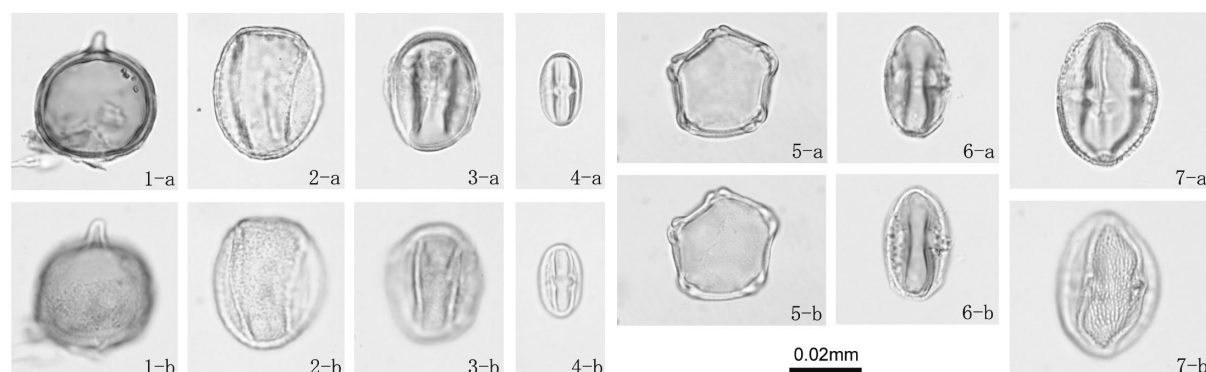
粉・孢子総数を基数とした百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・ユキノシタ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、S1,S2,S6の上位3試料については得られた花粉化石数が少なく、分布図として示すことが出来なかった。S7,S9,S11,S12の下位4試料についてみると、コナラ属コナラ亜属が最も多く検出されているが、上位に向かいやや減少する傾向がみられる。同様の傾向がクマシデ属ーアサダ属やブナに認められ、ハンノキ属は上位2試料で半減している。サワグルミ属ークルミ属も上位2試料で減少しており、アカガシ亜属は最上位試料S7において出現率を下げている。反対にクリ属やトチノキ属は上位に向かい増加する傾向が認められ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）は最上位試料7において出現率を上げている。草本類の占める割合は低く、10%を越える分類群は無い。その中イネ科とヨモギ属が全試料1%以上を示している。その他カヤツリグサ科、イタドリ節、カラムツソウ属、ヨモギ属を除く他のキク亜科などが検出されている。また試料S7においてシダ植物が多産している。

5 舟寄福島通遺跡周辺の古植生(第92図)

放射性炭素年代測定の結果から分布図で示した4試料の時期としては縄文時代晩期から弥生時代初め頃と推測される。この時期の舟寄福島通遺跡周辺丘陵部では斜面部を中心にコナラ亜属やクマシデ属ーアサダ属、クリ属、トチノキ属などの落葉広葉樹林が成立していたとみられ、ブナ林の存在も推察される。またスギやヒノキ類といった針葉樹類も生育していたと推測される。さらに尾根部にはアカガシ属やシイノキ属ーマテバシイ属などの常緑広葉樹類も成育していたとみられる。そうした中、試料S7においてクリ属やトチノキ属が出現率を上げており、この時期になると遺跡周辺丘陵部ではコナラ亜属に代わりクリ属やトチノキ属が目立つ森林植生へと変化したことが推察される。

一方低地部にはハンノキ属を中心にサワグルミ属ークルミ属、ヤナギ属を含めた湿地林や河畔林が成立していたと推測される。またこれらの周辺にイネ科やカヤツリグサ科、イタドリ節、アカザ科ーヒユ科、カラムツソウ属、ヨモギ属、他のキク亜科などの草本類やシダ植物が生育していたとみられる。しかしながらハンノキ属やサワグルミ属ークルミ属は上位試料で減少する傾向が認められる。一方試料S7においてシダ植物胞子が多産している。一般にシダ植物胞子の増加は土地的に不安定になったこと示していると考えられている。土相は砂層が卓越していることから河川の影響が強くなり、土地的に不安定になったことが推察され、それによりハンノキ属やサワグルミ属ークルミ属は生育地を狭められたことが考えられよう。



1 : スギ (PLC.SS 4350 S11) 2 : コナラ属コナラ亜属 (PLC.SS 4349 S11)
 3 : コナラ属アカガシ亜属 (PLC.SS 4352 S11) 4 : クリ属 (PLC.SS 4348 S11)
 5 : ハンノキ属 (PLC.SS 4353 S11) 6 : トチノキ属 (PLC.SS 4354 S11)
 7 : ウルシ属 (PLC.SS 4351 S11)

第92図 No.2地点ボーリング試料中の花粉化石

第8章 調査のまとめ

2ヵ年度にわたった今回の調査で、上層は弥生時代後期と古墳時代の、下層では弥生時代中期と縄文時代晩期の遺構と遺物が確認された。縄文時代については南調査区を中心に晩期の集落、弥生時代中期は南北両調査区にまたがり、散漫ながら方形周溝墓が2基と、周辺からさらに遡る時期の土器群が確認された。沖積地としては珍しく、周辺では縄文時代の遺跡が隣接するように確認されている。南の舟寄遺跡では縄文時代でも中期の集落を確認し、沖布目遺跡では工事立会によってであるが後期の土器が多数出土し、北の若宮遺跡でも条痕文を主体とする晩期の土器が出土している。これまでほとんどが表採資料に頼っていた縄文時代の状況がより具体的な資料で判明しつつある。弥生時代中期については方形周溝墓2基が検出され、墓域の一部と考えられる。しかし、50m以上も離れて検出されており、全体の概要は全く不明である。上層の遺構は南調査区で古墳時代の、北調査区で弥生時代後期の集落が確認され、後者を中心に玉作関連の遺物が出土している。それらの遺物には片岩の玉鋸や明確に施溝分割を残す玉材などがあり、中期である可能性がないわけでもない。しかし、ほとんどが後期の遺構が広がる北調査区での出土で、その出土地点などから弥生時代後期の遺構に伴うものと考えられる。玉作に関しては、中期的な技法が後期のこの時期まで残っていたものと考えるのが妥当である。各時代ともに遺構の疎密や遺物の多寡、所在の偏りなどあるが、遺構では古墳時代中期の井戸、遺物では当時まだ坂井平野では珍しかったであろう古墳時代の須恵器(第31図7)の出土を最後として、古代・中世の遺構・遺物は出土していない。もちろん攪乱や後世の水路などからそれらの時期の須恵器や中近世の陶磁器が全く出土していないわけではない。しかし、その数は極端に少なく、確認された破片(特に須恵器)のいずれも割れ口が磨滅しているもので、後世に付近の別の土地から運び込まれたことが間違いないであろう。このような破片の多くは溝から出土し、北調査区の東側に沿って伸びる幅広の溝などは中近世以降の水田に関する用水等の溝と考えられ、集落に伴うものではない。つまり、人の居住の痕跡が古墳時代以降になくなったことが、今回の発掘調査で明らかになった。また、この古墳時代の須恵器も1点だけであるが、大阪の陶邑から在地へ須恵器生産が広がる以前と考えられる時期のもので、その意義は大きな問題である。

調査で確認された時代は縄文時代晩期と弥生時代中期・後期、古墳時代初頭から前期にやや時期をあけて、古墳時代でも中期の5つの時期の遺構・遺物である。縄文時代晩期と弥生時代中期は一部に重複するが、同じ弥生時代でも中期と後期の遺構とは重複することがない。つまり、弥生時代として同じように区分される中期と後期とでは、集落の立地を微妙に違えている。若宮遺跡でもこのような状況が確認されており、やはり後期の集落に重複しないように南側に隣接して中期の方形周溝墓が確認されている。このように弥生時代中期の土器は縄文時代晩期の土器に隣接して出土することが多いものの、微妙に出土地点が重ならないことが福井平野の特徴となっている。

最後に遺跡名となった舟寄福島通遺跡の「福島通」は、調査区を中心とする水田に残された小字の「上福島」「下福島」にちなむものである。学問的検証はまだ不十分ではあるが、舟寄集落から西の福島集落の間に広がり、この2つの集落を結ぶ道の側溝らしき痕跡が確認された高まりに広がる遺跡として、「舟寄福島通」の名称はふさわしいものであろう。